
妖怪ピオトープ管理士 圓野あおい2「人魚ピオトープ」

はくたく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪ビオトープ管理士 圓野あおい2「人魚ビオトープ」

【Nコード】

N5477W

【作者名】

はくたく

【あらすじ】

小学校ビオトープでのメダカの変死事件から、あおい達は、町に潜む強大な妖怪と戦う事になっていく。

次々に倒れる社員達。あおいの会社、トープスが存続の危機を迎える中、あおいの取った決断とは。

妖怪ビオトープ管理士の第2話。

*1話を読まなくても、まあまあ楽しめると思います。

*書き進むにつれて、伝奇系の話になりつつあります。相変わらず、

生物うんちくがウザイかも知れませんが、そういうのを読み飛ばせば、フツの妖怪伝奇モノです。
ライトノベルっぽい文章はどうしても書けないので、そういうのを期待している方はごめんなさい。

§ プロローグ 葉子VS妖少女（前書き）

妖怪ビオトープ管理士 圓野あおいの第2話です。
文体や書き方を見直してみました。

§プロローグ 葉子VS妖少女

§プロローグ 葉子VS妖少女

「これだけ言っても……ダメなのかい？」

稲成葉子は、目の前に立つ、白装束の少女に、鋭い視線を向けた。
夜。

池の畔である。

その小さな池の周りに、大きな岩が積まれている。
少し大げさな、ロックガーデンといった風情だ。

大きな木はなく、池の縁にはセキショウが、陸地には背の低いサツキとカエデが植わっている。

いわゆる「ビオトープ」と、呼ばれるものと似ているが、どこか
おかしい。

植物も、石も、水辺も、微妙に自然のものとは違う。

配置や構造、材質に、人工的な匂いが漂っているのだ。
ずっと下の方から、車の走る音が響いている。

気づけば、遠くの夜景も、かなり下の方で光っていた。

どうやらここは屋上に、それも高層ビルの上に、庭園として作られた空間であるらしい。

「流れて行きなよ。」

なにも、そうまでして、ここにこだわる必要はないんじゃないの？
」

葉子は重ねて少女に問いかけた。

長い黒髪が、ほつれて汗で頬にへばりつき、肩を押さえる手から

血が滴る。

少女は答えない。

十歳前後のように見えるその少女は、無言のまま、小さな池の縁に立ち、無表情に葉子を見つめているだけだ。

よく見るとほんの少し燐光を放ち、宙に浮いているように見えた。

「うあつ！」

突然、苦痛の叫びが漏れ、葉子は片膝をついてしゃがんだ。

少女の手から青白い光が走り、葉子の左足を貫いたのだ。

紺のタイトスカートをはいた太もみに、どす黒い血の染みが滲む^{にじ}。その様子を見た少女の口元に笑みが浮かんだ。あどけない表情だが、その目は何も映していないかのようにうつろである。

『おまえ、きつねのくせに、どうして、にんげんのみかたをする？』

唇が動いたとも見えぬのに、少女の声が響く。

幼いが、まるで、地の底から響いてくるような、暗い声だ。

「……悪いねえ。」

あたしはたしかに妖狐だけど、人間でもあるんだ。それに……」

葉子は、ゆっくりと立ち上がった。

「それに？」

少女は、笑みを仮面のように張り付けたまま、首をかしげる。

「あたしが、こうしなかったらアイツは、きつとまた無茶をする。それだけは、やらせたくないんだよ」

言いながら葉子は胸の前で掌を向かい合わせ、そこに青白い炎を現出させた。

それと同時に、全身が光り輝き、妖狐の正体を現した。

5本の尻尾を生やし、真っ白な長い髪は腰まで届いている。

毛に覆われた長い耳。

長く伸びた犬歯。

しかし、妖怪の本性を現し、肩と足に赤い血の跡をにじませながら……敵にまっすぐ立ち向かう葉子の姿は、それでも美しかった。

「ケンカする気は、なかったんだけどね……」

「わたしもだ」

葉子の炎は、手を離れると見る見るうちに大きくなり、少女を包み込む。

少女の髪が燃え上がった……と見えた次の瞬間。

「ぎゃああああー!!」

悲鳴を上げて、吹き飛んだのは葉子だった。

少女の燃える髪が、いくつもの火の玉になって葉子を襲ったのだ。

しかも、すべての火球が、正確に葉子の胸をとらえていた。

転がり、燃え上がる葉子は、次第に小さくなっていく。

葉子から立ち上る青白い炎が、少女に吸収されていき……後に残ったのは、一抱えほどの丸い石だけだった。

「ちからのほどもわきまえずに、いどむからだ」

少女は特に感慨もなさげに呟くと、空に溶け込むように、ふいつ
と足元から消えた。

§ プロローグ 葉子VS妖少女（後書き）

前は、すべて書き上がったから上げていたが、今回はまだ、途中までしか書いていません。

続きを書くにしても、もう少し、ゆっくり書こうと思っていたのですが……

頭の中であおい達が暴れ出し、止まらなくなっていました。

§ 1 ビオトープ管理士

§ 1 ビオトープ管理士

受話器から聞こえてきたのは、子供の声だった。

「あのう……ビオトープ管理士の人は、いらっしゃいますか？」

「えーと……一応、私がそうなんですけど……どうかしましたか？」

「ぼくたちのメダカを、助けてもらえませんか？」

ああいは、またか、と思った。

どうも最近、生き物の飼い方や、病気の対処などに関する質問の電話が多いのだ。

数週間前に学校ビオトープの指導をした時、地元TV局の取材を受けたのが、まずかったらしい。

小学生達から、ビオトープとは全く関係のないカブトムシの捕まえ方だの、カエルの飼い方だの、金魚の病気の相談だの、の質問が飛び出した時、知らない、と答えておけばよかったのだ。

生き物好きだった祖父の影響からか、大河童から預かったアカハライモリのせいかな、ああいは、物心ついた時から、目に付くあらゆる生き物を飼った。

中学、高校では生物部、大学は動物生態学専攻。

25歳の今でも、水生生物を中心に、十数種類の生き物を飼育している。

ビオトープ管理士になったのも、技術士資格も持たないくせに、コンサルタント会社を立ち上げたのも、すべては生き物好きから発したことだ。

そんなあおいにとって、小学生の生物に関する疑問程度で答えられないものは、ない。

子供の疑問は、素朴すぎて難しい。

そう言う人もいる。

が、それは、知識の本質が分かっていないだけだ、と、あおいは思う。

子供や知識のない人に、分かりやすく説明できないようなら、それは、説明者自身が、その知識の本質を理解していないだけなのである。

結局、あらゆる質問に答える、ものすごいお姉さんということでは放送されてしまった。

ローカル局ながら、夕方5時からの高視聴率番組であったものだから、その翌日から電話だのメールだので、幾つも質問が寄せられて、いい加減、辟易していたところなのだ。

だがまあ、子供は嫌いではないし、頭の柔らかい子供の質問に答えるのは、楽だ。

厄介なのは大人で、頑固な上に基礎知識も無いので、一から説明すると、とんでもない時間が掛かる。

いや、基礎知識が無いならむしろマシな方で、間違った知識を前提とした質問は、更に厄介だ。

なんと言われようと、ヒキガエルは、水をヒタヒタにして飼ってはいけないのだし、ザリガニだろうとフナだろうと、ごはんつぶ

だけで飼える生き物はいないし、飛べない小鳥のヒナを見かけたら、放置するのが正しいのだ。

その程度のことであっても、ハンパな知識を持つ大人には、理解させるのが難しい。

まあ、そういった頭の固い大人に比べれば、子供は素直に聞いてくれる。

電話で済ませてしまえば、時間を取ることもないだろう。

あおいは、ため息をつきたくなるのをこらえ、電話に答えた。

「メダカって……水槽で飼っているの？それとも、池？」

「池です。学校にビオトープがあつて、そこにメダカがいるんですけど、なぜか次々に死んじゃうんです」

あおいは首をかしげた。

メダカは本来、非常にタフな生き物である。

北海道をのぞく日本全国に分布しているだけあつて、寒かろうと、暑かろうと、水が汚かろうと……乱暴な言い方をすれば、どんな環境でも平気で生息する。

事実、水温40度近い温泉や、海水域にまでも生息することがあるのだ。

絶滅危惧種になど指定されているから勘違いされることがよくあるが、そもそもメダカにとって、綺麗な水など必要ないのである。

たしかに水槽であれば、病気が蔓延して手の施しようがないことは、ある。

だが、池であれば、全滅に近いようなことは、起きにくい、といえた。

「そのメダカさ、もしかして、近所で捕まえてきたばっかしじゃない？」

非常にタフで環境適応性も強いメダカだが、物理的な衝撃や、網などに擦れるのには非常に弱い。

あおいは、メダカの死は、子供達が乱暴な捕獲の仕方をして、傷をつけたせいではないかと見当をつけたのだ。

「いいえ。」

あの……そのメダカは、教室の水槽でふえたメダカなんです」

ということは、教室内では繁殖するほど元気だったメダカが、池に移した途端に調子を崩す、ということになる。

そうなると、池そのものに何か問題がありそうだが、池の状態やメダカの症状を聞かないと、なんとも言えない。

「あの……メダカは、どんな感じで、死んじゃうのかな？」

「え……と……べつに、どこも悪くなさそうなんですけど、毎日、少しずつ死んで沈んでいるんです」

さあて、これは厄介である。

症状からすると感染症のようにも、毒物が原因のようにも思える。たいていの感染症は体表面に症状が出るのだが、小学生の観察力不足で、病気が発見できないだけかも知れない。

もしかすると、池に使われている資材から、毒性のある物質がじわじわと溶け出している可能性もある。

もちろん、天敵に襲われているということも考えられる。

しかも、死体があることからすると、食べるタイプではない水生

昆虫、つまり獲物の体液を吸う、ミズカマキリやタイコウチなどが、大量に住みついているということも、考えられなくはない。

淡水産のイソギンチャクの仲間の、ヒドラが大発生しているのかも知れない。

ヒドラの触手は強い毒を持ち、メダカなどを殺してしまうのだ。

「その池って、大きいの？ 使った水は、水道水かな？」

あと、作ってどれくらい経つのかな？」

「池は、去年出来たビオトープで、3 m四方くらいです。

水は、水道水でしたけど……ちゃんと、1日ほど時間をおいてからメダカを入れました。」

はきはきした返事である。

言葉の端々から、小学生の割に、そこそこの飼育経験と知識を持っている子であると思えた。

現場を見てみたい。と、あおいは思ったが、今は忙しい。

仕事の依頼でもないのに、昼間っからのこのこ出かけるわけにも行かない。

そう思いながら、しばらく考え込んでいると……

「あの……お金が必要ですか？ だったら僕、お小遣いを貯めてあります。」

二万円くらいしかないけど……足りませんか？」

コストについて考えていたのは事実だが、池の下見に行っただけで、小学生からお金を巻き上げるわけにはいかない。

「あ、ううん。大丈夫よ。お金のことは気にしないでいいから。名前と学校を教えてもらえるかな？」

おねえさん、時間を見つけて見に行ってみるわ」

「本当ですか？　ありがとうございます！」

電話の声は、喜びにはずんだ。

学校名を聞くと意外に近い。あおいの会社のあるF市の中心部からは、車で10分程度だ。もちろん、今は夏休みのはずだが……

電話を掛けてきた子の名前は、ふどう君と言った。

学年を聞き、担任の先生の名前を聞いて、電話を切った。

「行つてはダメですよ」

声を掛けられたあおいは、目の前に立つ真菰専務に初めて気づき、飛び上がるほど驚いた。

「今、どれだけ忙しいと、思っておられるのです？」

先日数ヶ月ぶりに落札した、広域農道の環境調査業務は、現地調査を終え、今まさにもっとも大変な、膨大なデータのまとめと、提出資料の作成段階に入っていた。

しかも今回は、仕事のボリュームの割に納期が短く、社員全員がこの案件にかかりきりの状態なのだ。

真菰専務は、座間と葉子を手伝わせ、昨夜から泊まり込みで作業中だった。

今は二人とも、ちょうど、着替えを取りに帰ったところである。

その上、広域農道の通過予定地が、冬期にはマガンやヒシクイの集団飛来地のど真ん中になることが

現地の聞き込み調査で分かってしまった。

これを報告するためには、毎年の飛来数を推定しなくてはならな

いため、地元の野鳥愛好家のデータを、もらいに行かねばならないことになった。

それで、いぶきが出かけている為、社内では新米の七海が、一人でCADを操っている。

また環境調査だけのはずであったが、マガンもヒシクイも絶滅危惧種であるため、工事計画に際して、それなりの代替案を構築しておく必要がある、と、あおい達は判断した。

代替案。専門用語で「ミティゲーション」。

つまり簡単に言えば、その場所の生態系保全のために、回避、最小化、低減、矯正、代償の5つの段階を踏んだ検討案が必要なのだ。5段階の検討は、保全生態学の視点からのものとなる。

しかし、トープスでは、専門に保全生態学を学んだ者はあおいだけである。

要するに、あおいでなくては、対外的に通用する検討案を作れないのだ。

真菰は、鋭い視線で、射抜くようにあおいを見つめている。

「でも……メダカさんが、次々死んじゃうって……」

「……………社長。」

あなたにとって、仕事の優先順位はどうなっているのですか？」

「……………」

「メダカたちは可哀想でしょう。」

しかし、今のまま成果物として資料を提出したら、ガンの集団飛来地はおそらく消滅します。ガンは可哀想ではないとでも？

いえ、なにより社長は、それでよろしいのですか？」

真菰の言うことはもつともである。

もちろん提案したところで、集団飛来地を無視して、工事を進められてしまう可能性は充分にある。

だが、あおいが低コストで効果の高い代替案を提示することができれば、飛来地を保全しつつ、工事を行おう、という話になる可能性が高い。

今は何かにつけ、環境、環境、とうるさい時代である。

行政側も環境を配慮した工事を選択したいし、やってしまった後で文句が出るくらいなら、最初から配慮しておいた方がいい。

もちろんトープスとしては業務範囲外として、飛来地保全の代替案を出さずに済ますこともできる。

しかし、もし設計段階になってから別のコンサルタントが、飛来地を無視するような設計を出してきたら、ヘタをすればそのまま工事が進められてしまう。

「ミティゲーション案。仕上げるまでは、一步も会社から出しません」

真菰専務の静かな、しかし厳しい声が飛ぶ。

その時。

「お嬢！！おられますかい？！」

乱暴にドアが開け放たれ、ドスのきいた声が響き渡った。

「あ、後藤さん。どうしたの？」

事務所の入り口に仁王立ちしている大男は、あおいにとっては、子供の頃から見慣れた顔だった。

トープスの親会社である圓野組の副社長、後藤 剛基^{（剛基）}である。同じ大男といっても、ひよる長い座間とは全くタイプが違う。

身長は同じくらいだが、鍛え上げられた上半身とそれを支える強靱な足腰には、プロレスラーのそれに匹敵するほどの分厚い筋肉の鎧がまわりついている。

年齢は50代前半と言ったところか。

きちんとネクタイを締めたワイシャツ姿だが、まるで似合っていない。

角刈りのごま塩頭が、いかにも工事業の棟梁らしい雰囲気を出していた。

「どうしたの、じゃあ、ありませんや。お嬢。

やっぱり、忘れてらしたんですね。親会社の役員会議をすっぱかしちゃあ、マズイでしょう」

「あ。」

あおいは口に手を当てて息を呑んだ。そうである。

今日は第二月曜。昼一番から、圓野組の役員会議の日であった。

ここ数日はまさに修羅場であつたから、すっかり忘れていたのだ。時計を見ると、午前11時30分。

今から出発すれば、道すがら昼食をとっても、十分に間に合う。トープスの社長と、圓野組の社外取締役を兼任しているあおいが、会議を忘れている可能性を見越して迎えに来てくれたのであつた。社外取締役とはいえ、あおいの実父の圓野明徳が経営する会社であるから、あおいが出席しないとすると、明徳の立場がない。

「ごめん。後藤さん。」

設計の仕事の方が忙しくて……毎月ある会議なんだから、今月は欠席させて？」

あおいは後藤のそばまで行くと、声を潜めてこそそと話した。しかし、後藤はそんなあおいの配慮などお構いなしで、大声を張り上げた。

「何言ってるんですかい！」

親会社が無くっちゃあ、こんな会社、一日だって持ちやしませんぜ？ 儲からない設計業なんかで時間とるくらいなら、こつちの会議の方がずっと大事ですぜ！」

「それは、聞き捨てなりませんな」

後藤の少々乱暴な物言いに、真菰専務が静かに……切れた。

「たしかに、月次決算は赤字でしたが……年度決算で親会社に迷惑をおかけしたことは、一度もない、と記憶していますか？」

「へっ！ウチの営業部隊の若い衆が、こつちに変更図面を依頼しているから、なんとか食えてんじゃねえか！」

真菰よう。その辺忘れてイキがっちゃあいけねえぜ？」

「それは、そちらに変更図面程度も、引き直す技術も無いからですよ。」

それを棚に上げて、よくもそんなことが言えますね。依頼をお断りして良ければ、次回から、そのようにさせてもらいますか？」

真菰の目が、メガネの奥で、銀色に光る。

相変わらず腕を組んで、姿勢良く立つ真菰の背後の空間が歪んだ。そこに、光を吸い込むかのような、漆黒の闇が現れ、渦を巻く。

明らかに普通ではない。

しかし、そんな真菰の様子を見ても、後藤は腕を組んで平然と眺めているだけだ。

「ケンカしようってんなら、いつでも買ってやらあ。
ただ、オレにとっちゃあ、今は本社の役員会の方が大事なんでね。
あんたと、じゃれ合ってるヒマは無えんだ」

そう言うの後藤は、目の前にいたあおいの首根っこをつかんで、まるで猫の子のように軽々と持ち上げた。

「あ、ちよっ……………」

言いかけたあおいに、

「舌、噛みまずぜ？」

言い様、後藤はあおいを、ドアの外に放り投げた。

「き、やああああ!!」

あおいの声が長く尾を引いて、階下へと消えていく。
ドアを出てすぐの階段へ向けて投げられたあおいは、そのまま階段の吹き抜けを3階分落下した。

落下の間は、すさまじく長く感じられ……………いよいよ地面に激突するか、とあおいが思った時。

ふわりと何者かに抱き留められた。

「お嬢。大丈夫ですか？…… ったく、副社長も乱暴だなあ」

「前田常務…… 来てたの？」

「はい。まあ、そうでなけりや、副社長もこんな無茶はしませんよ」

絵に描いたようなお姫様抱っこをしながら、あおいの顔をのぞき込んでいたのは、やはり圓野組の常務取締役である、前田 善樹よしきであつた。

爽やかに微笑む前田は、後藤とは正反対のしなやかな体躯の持ち主である。

成人女性を、ぬいぐるみか何かのように放り投げた後藤の腕力も異常だが、落下してきたあおいを空中で軽々と受け止め、ほとんど何の衝撃も感じさせないで抱きかかえた前田も、かなり人間離れしていると言える。

「おい。龍のヤツが来る。ずらかるぞ。」

後藤が軽く地響きを立てて、前田の隣に着地した。

あおいの後から、吹き抜けを飛び降りたらしい。

前田は、ビルの前に止めていた黒塗りのセルシオの後部座席にあおいを押し込むと、自分は運転席に乗り込んだ。

「早く出せ」

続けて助手席に乗り込んできた後藤の言葉にも、さほど慌てる様子もなく、しかし、速やかに車を発進させる。

すると発車とほぼ同時に、車のあった位置に何の前触れもなく落雷した。

「あつぶねえ。奴さん、本気で怒ってんな」

後藤は、後ろを見ながら呟いた。

その時、フロントウィンドウに、まるで投げつけたように大粒の水滴が当たる。

雨だ。

500mも行かないうちに、バケツをひっくり返したような大雨になった。

時ならぬ豪雨の中を、あおい達を乗せた車は、圓野組へ向けて走った。

「お嬢。飯食っていくでしょ？国道バイパスの、つる喜でいいですかい？」

のんきな口調であおいに聞く後藤は、真菰の怒りなど齒牙にも掛けていないようである。

「え、ええ。まあ、そりゃあ、べつにどこでも構わないけど……」

その時、あおいの携帯が鳴った。

『社長』

真菰の声だ。

静かな怒りが、電話越しでも伝わってくる。

こうなると、真菰は怖い。

「は、はい！」

あおいは、後部座席で、背筋を伸ばした。

『行ってしまったからには、仕方ありません。しかし、こうした重要なことは、今後は必ず、前もって私に連絡しておいて下さい。』

圓野組から、乱暴な連中が迎えに来ずとも、良いように』

「……はい」

『それと、圓野組の役員会は、いつも、4～5時間はかかります。その後は、会食があるはず。これでは、今日はお戻りになれないでしょう。』

書類の提出期限は一週間後の、8月17日。

今夜お戻りになられてからの徹夜はもちろんですが、お盆休みは無いものと覚悟しておいて下さい。』

「う……はい。」

電話を切ると、あおいは広々とした後部座席に、ぼったりと倒れ込んだ。

「お嬢。おやっさんが心配してますぜ？」

いつまでも、ビオトープごっこじゃないでしょう。そろそろ、妙な会社をたたんで、圓野組に戻ってきてくれませんか？」

後藤が心配げに言った。

トープスの仕事のことなど、端から問題にもしていない様子だ。

「じつこじゃないです!」

あおいは、さすがにカチンときて、言い返した。

「儲かりもしない仕事なんか、ごつことしか言えませんか。

圓野組は、今の社長になって年商50億の規模に拡大してんですぜ? トープスは、5人も社員を抱えてて、年商ナンボなんです?」

「……コンサル会社と土木会社じゃあ、財務も利益管理も違うもの……一概に比較は出来ないわよ」

「へえ。じゃあ、儲かってんですかい?」

「……………」

あおいは、返答に窮した。

たしかにトープスは儲かっていない。というか、赤字スレスレだ。同業者と比べて、給料も高くない。まともに考えれば、真菰や葉子、いぶきのような能力の高い有資格者がいてくれることだけでも、奇跡的と言えた。

「あつしは、なにも意地悪で、こんな話してるんじゃないんですぜ? 実は……今日の役員会の議題に、トープスへの支援打ち切りの話があるから言ってるんです」

「ええっ!?!」

あおいは、驚き、声を上げた。

真菰専務は、圓野組など関係ないようなことを言っていたが、実

はそうとも言い切れない。

そもそも、トープスの間借りしている事務所は、圓野組の持ちビルであるが、共益費以外の家賃は払っていない。

それ以外にも、人件費の一部、社有車のリース代、通信費、経理業務……トープスは、親会社の圓野組に頼っている部分が非常に多いのだ。

そして、後藤の言葉を聞いて納得もした。

今回の出迎えは、いくらなんでも、いささか強引に過ぎた。

ずばらなあおいを確実に出席させるためと、前もってあおいに、会議内容を知らせようとしてくれたのだろう。

「そりゃそうでしょう。

儲かってもいない子会社なんぞ、親会社にとっちゃあ、お荷物以外のなんでもないですからね」

「少なくとも……」

それまで、黙って運転していた前田が、口を開いた。

「お嬢が社長に、きちんと経営計画を提示できないようなら、支援打ち切りもやむを得ない、と、私も思います」

「で……でも……」

言葉に詰まるあおいに、前田は更に続けた。

「逆に言えば、きちんとした経営計画、収益計画を提示されるおつもりがあるなら、私も、後藤副社長も……おそらく他の役員も、お嬢を応援いたします」

急にそう言われても、あおいに提示可能な経営計画があるわけはなかった。

あおいがトープスを立ち上げて、すでに3年。たしかに普通に考えれば、中小企業が新事業に見切りをつけるだけの期間は、充分以上に経過している。

それに、公共事業の削減により、土木建設業者は大変な不況下にある。

親会社の圓野組も、ご多分に漏れず厳しい経営を強いられているのは、あおいにもよく分かっていた。

またたしかに、売上や利益よりも、生態系や生物の生命を尊重し、それに反する仕事には手を出さない、というあおいの経営方針では、今後も収益を大きくしていく、などということは出来ないことも。

本来、建設コンサルタントはボランティアではない。企業である以上は、自然保護家であってはいけないのだ。

企業運営上、圓野組の判断は正しいのかも知れない。

しかし、あおいにも一つの思いがあった。

「……前田さん、後藤さん……おっしゃることはよく分かります。今のトープスの状態は、すべて私の責任です。でも、圓野組は……今の、そのやり方でいいんですか？」

「むっ……」

後藤は唸った。前田も返答できないでいる。

圓野組も以前は、造園中心の、一般土木を業とする小さな会社であつた。

しかし、先代の正平が亡くなり、婿養子である明德の代になってから業務内容は大きく変わったのだ。

「たしかに以前は、年商10億以下。

下請け、孫請け中心の、小さな土木業者でした。でも、おじいちゃん……先代は、いつも仕事を選んでいたわ。決して、弱いものや、小さいものを踏みにじるような仕事はしなかった」

今の圓野組は、これまで手を出さなかった、マンション建設や大規模開発にも手を出し、事業規模を拡大している。

大不況の波が押し寄せ、仕事量が減少してくると、地元の小さな土建業者を押しつけるようにして、小規模工事を受注し、年間売り上げを確保した。

また、大規模なリストラも敢行した。

古参の幹部は、定年を前にして軒並み辞めさせられ、残っているのは、前田と後藤くらいのものだ。

設備、造園、左官といった下請け業者にも、大きな負担を強いていると聞く。

圓野組は、この不況下でも、健全経営、無借金経営を貫いているが、それは裏を返せば、なりふり構わない、利益追求主義の結果でもあったのだ。

「お嬢。先代の理念は立派でした。でも、いくらでも仕事のあった、公共事業全盛時とは違うんだ。

そんなこと言ったら、会社はつぶれちまう。

食えなきや理念もクソもねえ……今の社長の方針も、仕方ねえんじゃないですかい？」

「降ろして」

「……お嬢」

「役員会は、出ません。」

支援を打ち切りたのなら、そうして。

それでトープスが存続できないなら、私が、自分の責任で会社をたたみます。私は……私の会社が……トープスこそが、正統に圓野組の精神を受け継いでいる。と、そう思っている。

それが、答えよ」

「それでは、私達が、社長に叱られます。

せめて、役員会には出席して、直接社長にそうおっしゃって下さい」

「やめえ。前田ア……」

両手で顔を包むようにして、あおいの言葉を聞いていた後藤が、そのままの姿勢で、低い声で言った。

「お嬢に、社長に対してそんなこと言わせられるかい。
それじゃあ、俺たちが先代に、顔向けできねえだろうが……」

後藤は、信号待ちで停まった時、あおいに言った。

「どうぞ、降りてください。社長には、あたしからきちんと申し上げておきます」

あおいは軽く頭を下げると、車を降りた。

§ 2 学校ビオトープ

§ 2 学校ビオトープ

あおいは一人、歩道を早足で歩き始めた。

タクシーはたまに通ったが、一人で歩きたい気分であつたのだ。事務所まではかなりあるが……女の足でも、1時間以内に帰れるだろう。

それに、あおいは体力には、自信がある方だ。

いつの間にか、先ほどの激しい雨はやんでいる。

それどころか、強い日射しがアスファルトを焼き、すでに乾き始めてすらいる。

照り返しが、容赦なくあおいの肌を焼いた。

強い日射しに目を細め、そのまま目をつぶると、瞼の裏に祖父の顔が浮かんだ。

優しい祖父であつた。
いつでも。

それこそ死の間際まで自分に向けられていた、その笑顔を思い出し、あおいは涙がこぼれそうになった。

あおいは自分の右頬を、力一杯ひっぱたいた。泣きそうになると、いつもそうするのだ。

鈍い痛みが、感傷を吹き飛ばしてくれる。

涙は、女の武器だという。

女は、泣けば、何とかなると思っている。

あおいは、絶対にそんなふうに思われたくはなかった。だから泣かない。たとえ一人の時にも。

そう決めていたのだ。

「あれ？ここは……………」

気がつくとおおいは、右手にフェンスを見ながら、真っ直ぐな道を歩いていた。

フェンスの内側には、広々とした校庭と、真新しい校舎が見える。F市立貴田小学校。

先ほどの、子供から電話のあった小学校だ。

役員会をすっぱかしたことを、真菰専務に言わなくてはいけない。仕事があるのだから、もちろん会社にも、すぐに帰らなくてはいけないのだが……………

「すみません。私、株式会社トープスの、圓野あおいと申しますが」

あおいは、職員玄関のインターホンを押していた。

メダカのためでも、その子供のためでもなく……………今の気分のまま、真菰専務と……………いや、自分を知る誰とも話したくないと思ったからだ。

（イヤな事から逃げてるだけ……………かもなあ……………）

後藤に啖呵を切ってはみたものの、言い訳だと言われればぐうの音も出ないことも分かっていた。

親会社の支援打ち切りを知らず、今も必死で仕事をこなしている真菰達社員のことを思うと、あおいの胸が、ちくんと痛んだ。

「はい。どういったご用件でしょうか？」

くたびれたような、女性の声がインターホンから流れる。

「えー……と。トープスの圓野、と申しますが、こちらの生徒の方からビオトープについてご質問がありました」

「ああ、はいはい。お聞きしています。どうぞ。」

アポを取った記憶はないが……電話をくれた子が、話をしておいてくれたのだろうか？

急にトーンが変わった声と同時に、オートロックが開く。

十数秒後、サンダル音を響かせて玄関先まで出迎えに現れたのは、30代半ばと見える、男性教諭だった。

「あなたが、ビオトープ管理士の方ですか？

ウチの児童が、急にお電話を差し上げてしまったようで、申し訳ありません。私、6年生担任の佐倉井と申します」

学年だけでクラスを言わないところを見ると、この学校も一学年で一クラスしか無いのだろう。少子化と地方都市に付き物の人口減少のせいで、市内の小学校は軒並みそんな状態だと聞いている。

「トープスの、圓野あおいです。

早速ですが……メダカが池に入ると、死んでしまうとのことのお話でしたね？」

「ええ、まあ。たしかにそうなんですが……」

佐倉井は、何やら言いにくそうに、言葉を選んでいる。

「なにか不都合なことでも？」

「実は、ご相談をした児童なんですが……少々、問題のある子なん

です」

「問題？」

あおいは驚いた。電話の感じでは、少ししっかりし過ぎている、
くらいの印象を持っていたからだ。

「詳しい事情は、後でお話ししますが……今クラス内で、メダ力を
世話しているのは、彼だけなんです」

「他の生徒は、メダ力に興味がない、ということですか？」

「いや、まあ……最初から興味が無かったわけではありませんが……
とにかく、今、メダ力のことを心配しているのは彼だけなんです
よ」

あおいは、少しむっとした。

どうしてそれで問題児になってしまうのか？ 問題なのは、そう
いうものに興味を示さない他の生徒達であり、それをきちんと指導
できない、この佐倉井という担任教師ではないか、と思ったからだ。

「とにかく池を見せてもらえませんか？

誰が大事にしているようにいまいと、メダ力に罪はありませんから」

少し頭に来たあおいは、容赦なくトゲのある言い方をしたが、相
当鈍いのか、佐倉井の表情は変わらない。

「ええ、そうですね。ご案内いたします」

「あれ？こつちじゃないんですか？」

階段を上ろうとする佐倉井に、あおいは驚いて聞いた。中庭に出るなら、階段下の非常口だと思っていたからだ。

「ああ、いや実は、新しいビオトープは屋上なんです」

「なるほど、屋上緑化ですか」

この地域で、屋上緑化は珍しい。

都会では、屋上からの輻射熱を緩和し、冷暖房のコストを大幅に下げ、都会全体の温度上昇……いわゆるヒートアイランド現象も緩和する、ということで、導入されている建築物も多いと聞く。

しかし多雪地帯であり、建築物の強度に不安があるせいか、あおい達の住む地域では、公共施設であつても、滅多に屋上緑化は行われていなかった。

「そうなんです。エコスクール……って、ご存じですか？」

「ええ、存じています。」

そういえば、やっと県内にも補助が降りた、というニュースを何年前前に見ました」

「そうです。我が校は、その県内初のエコスクールに認定されたのです。」

2年前から施工にかかり、風力、太陽光発電も取り入れ、屋上ビオトープが出来たのは、去年でした……」

佐倉井は、階段を上りながら話し始めた。

「最初の指定校でしたから、当初は、盛り上がったんです。」

屋上緑化だけでなく、ビオトープも作りたいと言い出したのは、児童達でしてね」

本来であれば安全上、池のような重量のある施設を、屋上に配置するなど考えられない。

しかし、ちょうど建物の耐震強化工事もあったため、構造計算をやり直して、屋上緑化を施工したのだという。

「電話を差し上げた彼……富堂 亮君^{あきひ}も、張り切って、ビオトープに放すためのメダカの世話をしていたんです。でも………」

佐倉井は、言葉を切って、しばらく黙った。

「でも……昨年、一人の女子児童が、その屋上から飛び降りて亡くなってしまったんです」

その少女も、メダカをととても大切にしていた。だが、ふとしたことから、いじめが始まったのだそうだ。クラス全体から疎まれ、好きだったメダカの世話もさせてもらえなくなつた。

『お前がさわると、メダカが病気になるんだよ!』

佐倉井教諭が実際に聞いた、いじめっ子の言葉だという。

「子供って、どこまでも残酷になれるんだな、って痛感しました。つい先週まで、仲良く頭を寄せ合っていた子達が、まるで汚いモノでも見るように、その子をはじきだすんです。私も……力不足を痛感しました。

何とかしたいと努力したつもりですが……ダメでした。

自殺したその子の遺書に、私への感謝の言葉があったので、公的には何の処分もありませんでしたが……もう、教師を続けていく自信はありません。

今のクラスが卒業したら、責任を取って辞職するつもりです」

「その……富堂君の問題、っていうのは？」

「その子が亡くなってから、やはり、屋上にそういった施設を作ったことが、問題だということになったのです。

それで、屋上緑化はあくまで節電のための施設として、ビオトープは壊して普通の芝生に変える事にしました」

「……なるほど」

学校らしい、といえば、らしい対応である。

問題が起きれば、その根本を解決するよりも先に表面の原因を消そうとするのだ。

「でもね。本当言うと……みんな、メダ力を見るのもつらくなったとうこともあるんです。輝く目でメダ力を見ていたあの子を思い出すといたたまれなくなって……」

「お気持ちは、分かります」

「ところが、富堂君は、一人だけ大反対しましてね。」

どうしても、ビオトープにメダ力を泳がすと言って、聞かないのだという。

そういう事があったものだから、屋上には、常時カギをかけてある。しかし富堂君は、カギを開けずに、どうやってか屋上に侵入し、

秘かにビオトープにメダカを放しているのだという。

「子供のことでですから、どこか、我々の想像も付かない侵入経路を見つけたのだと思いますが……どうやっているのかは、頑として、言わないのです。」

危険ですし、何度も注意もしています。

しかし、その時は神妙に話を聞いているのですが、翌日にはまた、知らん顔で屋上に侵入して、メダカを見ているのです」

親御さん呼んで注意もしたらしい。

事故が起きても責任は持てない、と。そうこうするうちに、夏休みになった。

「子供ですから、夏休みが来れば忘れるんじゃないか……少なくとも、夏休みの間はあきらめてくれるんじゃないか……そう、思っていたんですけどね……。」

さあ、着きました。ここがそうです」

佐倉井教諭は屋上へのカギを開け、金属製の扉を開いた。開いた途端。ごうっ。

というような音とともに、高温の風が、激しい勢いで吹き込んできた。

熱風とっていい。

強い日射しに目が慣れるまで、数秒かった。

屋上ビオトープは、ささやかなものだった。

南側の隅に申し訳程度に作られた小さな池は、富堂君から3m四方と聞いてはいたが、その水深は10センチくらいしかない。

周囲はすべて芝生。

池の中には申し訳程度に植えられた水生植物が、根元から枯れ始

めている。

「……もう、原因は分かりました」

あおいは、池を見るなり、佐倉井教諭に言った。

「え？もう……ですか？」

最初に熱風が吹き込んできた時からまさか、とは思っていたが、この屋上緑化は機能を果たし切れていないのだ。

まず、予算の関係なのか何なのか、屋上緑化自体が、全面積の半分しか施工されていない。

これでは、緑化した部分にも、周囲から熱が伝わってきてしまう。池の周囲には木陰も無く、真夏の直射日光が容赦なく水温を上昇させている。

また、わずかでも日陰を作ろうとしたのだろうか、池の配置を南側の角に寄せるようにしてあるが、これがまたいけない。壁面を焼いた日光は、壁を伝導して池を熱するのだ。

「水温、計られた事があります？」

「あ、いや、どうせ解体する池だからと……」

「池に、手を入れてみて下さい」

怪訝そうな顔をしながら水に手を触れた佐倉井は、飛び上がった。

「う熱やつつ!!」

「表面水温は、たぶん…… 40度を超えていますね。これじゃあ、タフなメダカといえども、ひとたまりもないでしょう」

あおいも、池に手を入れながら言った。

この状態で、それでも即死しないでいたメダカに、拍手を送りたいくらいであつた。

「こ……こんな…… 屋上緑化って、屋上の温度を下げるんじゃないかな？ たんですね？」

「もちろん、芝生のある部分は、植物の蒸散作用がありますから、今の状況でも、無いよりはマシでしょう。でも、池は直接、太陽光が当たってしまいますから、温度上昇を防げません。

特に、この……」

あおいは、大人の膝くらいまである、屋上の縁取りをピタピタと叩いた。

「コンクリート構造物は、熱を貯めこみ、伝導します。この位置に池がある事も、水温上昇の原因の一つでしょうね」

「それじゃあ…… どうしたら……」

佐倉井教諭が言いかけた時、入り口の鉄扉が、ぎいっと鳴って開いた。

「あれえ？ 社長、なんでここに、いてはるんですかあ？」

聞き慣れた、気の抜けたような声である。男の子を一人伴って現れたのは社員の一人、座間くいまであつた。

あおいにとっては、これ以上ないくらい、気まずいタイミングである。

しかし、座間に会えて、妙に落ち着いた気分になったのも確かであった。

「え、あの、そりゃあ、ここの生徒さんから、メダカについて質問されたからよ」

あおいは耳まで真っ赤にして、しどろもどろになりながら答えた。

「おつかしいなあ。

社長は本社の役員会やかで、代わりにオレに行行って、真菰専務が言わはったんですけど……」

なるほど、それで来校した時に、既に聞いているような対応だったのだ。つまり、真菰専務がアポを取ってくれていたわけだ。

そういえば、学校名や連絡先を書いたメモを、自分の机の上に置きっぱなしであった。

「そ……そのことは、後で話すわよ。今は、メダカの事でしょ？……で、その子が、富堂君？」

「はい。貴田小6年の富堂 亮です」

「富堂君。メダカの死ぬ原因は、だいたい分かったわよ」

「本当ですか？」

利発そうな少年は、ぱあっと顔を輝かせた。よほど、メダカの事が心配だったのだろう。

「ええ。後は、対処するだけだけど……この池、撤去される予定だそうじゃない？」

「……………」

富堂君は、まるで悪い事を見つけられたかのように、無言で首をすくめた。

「ああ、勘違いしないで富堂君。

べつに怒ってやしないのよ。私が聞きたいのは、撤去されること
が分かっている、その池にメダ力を泳がせたいのかってことだけ」

「……………いいんですか？」

「いいわよ。

私達は、相談されたメダ力を、死なせないようにするだけだから。
それと……………どこから入り込んでいるのか知らないけど、メダ力が
元気に泳げるようになったら、ここに勝手に侵入するのはおやめな
さい」

「……………はい」

富堂君は、神妙な顔で答えた。

「ありがとうございます」

佐倉井教諭も、深々と頭を下げた。

「いえ、構いません。」

ところで、佐倉井先生。いま流行りのグリーンカーテン……でし
たっけ？ あれ、この学校にあります？」

「ええ、何力所か……エコスクールなんだからやらなきゃいかんっ
て、校長の一声で」

「ちょうど良いです。

何力所もあるって事は、毎日水やりとかで相当苦労なさってます
でしょう？」

「それはまあ、大変ですが……この話、何の関係があるんです？」

「簡単な話です。

あの池には日陰が必要なわけですから、そのグリーンカーテンを
ここに持つてきてしまえばいいんですよ」

「ええっ！？」

でも、そんな事をしたら、水やりとかの世話がかえって大変です
よ？」

「あの池の水深は、10センチ内外ですよね？」

それなら、池の中にグリーンカーテンのプランターを置いたら……
…どうなると思います？」

「……？」

佐倉井教諭は、まったく理解できない様子で、きょとした顔
をしている。あおいはさらに説明を続けた。

「ブロックとかで底上げして、ヒタヒタになる程度の水深にしてか

ら、グリーンカーテンのプランターを置くんです。そうすれば底から水を吸いますから、水やりは毎日必要ではなくなります。

そしてフェンスまでロープを張って、植物のツルを巻き付けさせば……」

「ああ！なるほど。池の上に日陰が出来ますね」

「ツルを外まで垂らせば、外壁の温度も軽減できるでしょう。水温も、今のような高温にはなくなると思います」

「それなら、手間も費用もかかりませんね」

「いえいえ。

費用はかかりまへんけど、手間は結構、掛かるんじゃないですかね。ほんなら、始めますか」

「ええっ！！今からですか？」

早速、腕まくりを始めた座間の様子を見て、佐倉井教諭も富堂君も、驚いている。

とにかく、座間はやる事が早いのだ。それを見て、あおいもひそひそと話しかける。

「座間君……いいの？」

仕事の方、終わってないんでしょ？ 今のアイデア、教師達にやらせようと思ってただけど……」

「ええんですよ。一日置いたら、その分また、メダカが死にますやる？」

お盆休みは、もう諦めました。その代わり、9月の連休は一週間

「いただきまつせ？」

座間の言った通り、グリーンカーテンの移動は、一苦勞だった。この季節になると、ゴーヤも朝顔も、10mかそれ以上まで伸びていて、隣のロープにまでツルを伸ばしているため、簡単には取り外せない。

「空でも飛べれば、楽なんですけどねえ」

「は？ええ、まあそうですねあ」

3階の窓から手を伸ばし、ツルを外しながら冗談をいう佐倉井教諭に、座間が曖昧な笑顔を返す。

自分が烏天狗であり、実際に飛べるなどとは、言えるはずもない。

「座間君、ブロック買ってきたわよ」

「了解。じゃあ先生、屋上まで持って行きまつせ？」

「うひゃあ」

軽めの種類のブロックを選んだとはいえ、コンクリートはコンクリートである。佐倉井教諭は、なんとか4個を持って階段を上っていく。

それでもなかなかの体力だが、座間はその先を、平然と8個ものブロックを抱えて上っていく。

「何か……スポーツでも……やって……おられるんですか……」

息をするのも疲れる、といった風情の佐倉井教諭が聞く。

「いやあ、何もしてまへんけど、まあ、ウチの社長につき合わされとつたら、イヤでもこのくらいの体力は付きますわ」

大人3人と、子供1人。

といつても、子供の力など知れているし、あおいは力仕事向きではないから、ほぼ座間と佐倉井教諭の二人で、あおいが提案した通りの状態を作り出すのに、結局4時間がかかった。

「やっと、できましたな」

「いやあ、さすがに疲れました」

佐倉井教諭と座間は、一仕事終えて、なにやら、男同士の友情が芽生えそうな雰囲気になっていた。

「……………座間君。紙とペン、ある？」

その時、あおいが佐倉井教諭達に気づかれないように、ひそひそと話しかけてきた。

「そりゃ、車に戻れば。……………何ですの？」

座間も、ひそひそ声で返しながら、怪訝そうに眉をひそめた。

「なんか、感じない？ここ……………」

「また、妖怪やとでも？」

まあ、学校はわりと良くない土地に建てられやすいもんですから、そういうのも多いでしょうけど……………」

座間は、屋上の床面に手を置き、目をつぶって何かを感じ取ろうとする。

「特に強力なモノは感じられまへんけど……たしかに、ここ、屋上だけに火気が集まりすぎている感じはありますな」

「でしょ？このままだと、また、水温が上がりかねないから、火気除けの呪符で結界でも作っておこうかと思って」

「そんなん、雨でも降ったら、すぐ剥がれてしまいますやろ？」

「いいのよ。秋には池を取り壊すそうだし、夏を過ぎれば日射しも緩むでしょ。それまで保てば」

「まあ、そうですね。じゃあ、紙とペン、取って来ますわ。」

座間は、なにやら理由をつけて車の方へ戻っていった。

佐倉井教諭は、池の上に影を作ってそよぐゴーヤを眺めながら、富堂君の肩に手を置いて話しかけている。

「富堂……これで、大丈夫だな。」

もう明日から、メダカは死なないんだそうだ。取り壊されるまでの短い間だけど、きっと元気に泳いでくれるよ」

「はい……………」

「もう、絶対ここに勝手に入っちゃダメだぞ」

富堂君は素直にうなずいた。

あおい達も、その様子を微笑ましく眺め、この件はこれで収まったかのように見えた。

§ 3 深夜の火事

§ 3 深夜の火事

「社長！どこに行っておられたのです？」

事務所に帰るなり、真菰専務が駆け寄ってきた。

「後藤副社長から、話はお聞きしましたよ。役員会には、ご出席されなかったそうですね？」

「……………ごめんなさい」

「私に謝る必要はありません。
しかし心配しましたよ。どこに行かれたのかと……………座間君も、一緒にいるなら連絡くらいしてください」

ああいはい、真菰専務からかなり説教される事を覚悟していた。しかし、言われたのはたったそれだけであつた。

「二人ともサボった分、今日は残業ですからね」

「ええっ！？オレは別にサボったわけじゃあ……………」

座間は真菰専務の命令で、小学校へ行ったのである。それを聞いた真菰専務は、じろつと座間を一睨みすると、

「たしかに、そうでしたね。」

では、座間君、君のやるはずだった仕事分、社長にやってもらい

ましょう」

そんなことを言われて、さっさと帰れる座間ではない。
ため息をつきかけたが、ぐっと堪えた。

「いえ。オレも残業します」

「座間君、無理しないで。」

今日は、全面的に私が悪いんだから」

「いえ。オレも残業します」

あおいの言葉にも、座間は同じ台詞を繰り返した。

夜の9時を回った頃。

「座間君。おべんと買ってきてよ」

ずっと、パソコンに向かっていた稲成葉子が、ふいに頭を上げて
言った。

言われてみて、初めてあおいは、自分の空腹に気がついた。そう
いえば、あおいも座間も、昼食を食べ損ねているのだった。その上、
小学校で重労働してすぐに仕事に戻り、今まで何も口にしていなか
った。

「買いに行くのはええんですけど……」

「何よ。何か条件でもつけようっての？」

面白そうに、葉子が聞き返す。

「いやあ、気づいてみたら、腹減って動けないんで、買い出しのエネルギー補給のために何か食わせて下さい。」

「相変わらずバツカねー。ホラ、これでも食べなさい」

葉子が放って寄越したのは、「油揚げスナック・きなこ味」という、聞いた事もないスナック菓子だった。袋を開けてポリポリとかじりながら

「うん……少し、元気出てきました。みなさん、ご注文は？」

それを聞いて、コピー機を操っていたいぶきが振り向いた。

「どうせ、アップルボックス行くんでしょ？ あたしは、特製ハムエッグと、たらこおにぎりの小でいいわ」

アップルボックスとは、F市ローカルのコンビニである。

店内調理の総菜モノが売りで、出来たての味とボリュウムは、大手コンビニなどとは比べものにならない。店舗が少なく少し遠いのが難点だが、トープスの買い出しは、毎回そこ決まっていた。

「すみません。あたしは、海鮮やきそばで。無かったらシャケ弁当でいいです。あ、ご飯は小盛りで」

伊園七海は、小食である。

「んじゃ、あたしは五目稲荷と冷やしきつね」

葉子は、油揚げから離れられないようだ。

「あたしは……いいわ座間君、一緒に行きましょう。こんな時くらい、あたしがお金出すわ」

あおいはパソコンから顔を上げて、社員達のやりとりを聞いていたが、自分の注文を言い掛けて、思い直したように同行を申し出た。それを聞いた七海が、しまった、といった顔をする。

七海の表情を見ていた葉子は、面白そうに含み笑いをして、またからかおうとしたが、七海を可愛がっている森いぶきがこちらを睨んでいるのに気づいて、知らん顔をした。

「あれ？専務は？」

気づくと、真菰専務の姿がない。

「さっき、いったん帰られましたよ。朝、またいらっしゃるそうです。」

「そう。じゃあ、行きましょ。」

座間とあおいはビッグホーンに乗り込み、買い出しに向かった。

あおいは、夜のコンビニは好きではない。

疲れた様子の人が多く、そういう人を見ていると自分まで疲れてきてしまうのだ。

それでも、何となく行くこうと思ったのは、座間と二人になりたかったからかも知れなかった。しかし、行きの車では、何となく気まぐさを感じたあおいは、一言も話さなかった。

そして帰りの車の中。

「ごめんね。座間君」

「はあ？なんですかの？いきなり」

座間は、きよんとしている。

「残業の事とか、買い出しの事とか、小学校のメダカの事とか……」

「そんな急に、社長が神妙になるやなんて、おかしいやないですか。社長は、もつと元氣出さんとあきまへん。」

「そうやないと、俺たちが調子出ませんやん」

「……………」

あおいは答えない。

どうしてだろう？自分で自分の気持ちの整理がつけられない。

自分のわがままに、座間たち社員も、圓野組も、父も……それどころか自分が大切に思っている、生き物たちさえも……身の回りの何もかもをつき合わせてしまっているような、そんな気持ちになっていたのだ。

「たんたんころりん様が、言うつつたつていう……社長が、物わかり良すぎるって意味、分かります？」

「ううん。分かんない」

「そうやろなあ」

「何よそれ？」

「いや、ええんですよ。社長はそれで。だから、俺たちは……」

そこまで言うと、座間は急に言葉を切った。

「何よ。最後まで言いなさいよ」

「ちやいます。社長。アレ、火事と違いますやろか」

夜のことで分かりづらいが、たしかに、前方の建物から煙が出ているようだ。

あれは……

「あれ！貴田小学校よ！！」

あおいは叫んだ。

「ええ、そうです。

貴田小学校から、煙が出ているんです。火災だと思います。早く来て下さい」

あおいは、すぐさま消防に電話した。

「私の通報が、一番最初みたい」

「そりゃまあ夜ですし、誰も見てまへんやろ」

「どうしよう。座間君。どうしよう？」

あおいはいつもの勢いを無くして、おろおろしている。

「どうもせんでええんやないですか？」

夜のことやし生徒も先生もおらへんですやる。ここは、プロの消防士に任せるべきで……あれ？あの人……」

小学校の近くへ来ると、一人の女性が、手を振りながら走ってくる。

「どうしはったんですか？」

火事の事やったら、もう通報しましたから、安心してください」

「ウチの子が……メダカを助けるって言って、校舎の中に……」

「まさか……富堂君？」

「え？ウチの子をご存じなんですか？」

「オレ、行きます」

言い様、座間はビッグホーンから飛び降り、職員玄関に向かって走り出した。

走りながら、腰のストラップホルダーに手を伸ばし、小さな葉団扇に気を送り込む。すると、葉団扇は銀色に光り輝きながら、大きくなっていった。

光が消え、新たに形を成したそれは、細長い木の葉を十数枚束ねて作ったように見えた。形こそうちわであるが、普通のうちわより二回り以上大きい。

玄関のガラスを蹴り破って侵入すると、座間はすぐに階段を探し

た。

だが、既に一階には煙が充満していて視界が効かない。

「消えろつつつー！」

叫ぶと同時に、周囲の土地から立ち上る土気を風に乗せて、葉団扇から繰り出した。

風とも波ともつかない目に見えない力が葉団扇から発せられ、一瞬にして一階に充満していた煙が吹き払われる。

座間のもつとも得意とする術の一つだ。

地表から立ち上る、土気を集めて、火気を吹き払う。ちょっとした火事ならば、今の一撃で、ほとんど鎮火するはずである。

たった今まで、1 m 先も見えなかった廊下が、きれいに見えるようになった。

「どこだ！？富堂君！！返事しろ！！」

返事はない。

座間は、声を土気の振動に変えて、校舎内すべてに送っていた。意識があれば、必ず反応があるはずだ。つまり、富堂君がいたとしても、意識を失っている可能性が高いということだ。

だが、すでに気を失っているのだとすれば、かえって好都合だ。烏天狗の本性を現しても驚かれる心配がないし、変化してしまえば人間体より機動力は格段に上がる。

座間は葉団扇をもう一降りして変化すると、翼をたたんだまま階段へ走った。

富堂君の居場所の見当はついている。

メダカを室内飼育している、彼の教室か、屋上の池だ。

もし力尽きているとしても、そこまでのルート上にいるはずであった。座間は、階段下から一気に翼を広げ、6年生の教室のある4

階まで飛んだ。

（屋上にいてくれれば……………）

昼間、あおいの張った火気封じの結界がある。

屋上緑化施設だけは、火も煙も来ないはずであった。
しかし。

「いた！」

富堂君は、教室から屋上に向かう途中の階段に倒れていた。
その腕には、しっかりとメダルの水槽が抱えられている。しかし、
いったん葉団扇で吹き払ったはずの黒煙が、階段をもうもうと吹き
上がってくる。

火事の際に上に逃げるな、というのは、こういう事があるからだ。
熱された空気は、上昇する。上昇する熱に乗って、煙が襲う。そ
こに含まれる一酸化炭素や、有機化合物の燃焼ガスが、容赦なく意
識を奪うのだ。

「富堂君！富堂君！！しっかりしな！！」

座間は変化を解いて、富堂君の顔を平手でたたく。

「う……………あ、座間さん……………」

富堂君を抱いて、階段を下りようとした座間は、踊り場で踏みと
どまった。

熱風が、黒煙を巻き上げながら階段室を上ってくる。

先ほどの葉団扇の一撃では、鎮火できないほどの大火事であるら
しい。渾身の一撃で効かないとなると、相当な火力である。こうな

つたら、結界のある屋上へ逃げるしかない。

「富堂君！屋上へ逃げるで。富堂君は、今までどうやって屋上へ上っていたんや？」

「足元の……換気窓……」

「ここやな？」

座間は、屋上階段室の床近くにある、明かり取りの窓を開けた。

「こ……こんな所から、出入りしとったんかい！」

その窓は、一見どう見ても……そう、子供であつても通り抜ける事は出来なさそうに見えた。

「腕から……出るんです」

なるほど、富堂君は片腕と頭を、狭い窓に通すと、そのまま、まるで蛇のようにクネクネと体をくねらせて、通り抜けた。細身だとは思っていたが、ここまで体が柔らかいとは、座間も思わなかった。たしかに、これでは誰も想像も付かないだろう。座間は舌を巻いた。

「よし。富堂君！外からカギを開けてくれや！」

屋上のカギは、外側からは開く構造になっている。屋上に出てしまえば、なんとか結界に逃げ込めるはずだ。富堂君がドアノブをガチャガチャと鳴らした。

「今……カギを開けます！」

「開けんなっつー!!」

座間は鋭い声で叫んだ。

「お前……何もんや？」

座間の目の前の階段下に、白装束の少女が立っていた。熱風渦巻く黒煙の中に、何事もないかのように、ふわりと立つ少女。

一瞬にして、座間はこの少女が人間ではない事を感じ取っていた。

「座間さん！どうしたんです？」

外の空気を吸って、元気を少し取り戻した富堂君が、鉄扉を開けた。しかし、内側から、黒煙が立ち上り、目を開けられず咳き込む。

「あ……開けんな言うたやろ……」

今度は、座間が煙を吸って、朦朧としているようだ。

しかし、その目はしっかりと、階段を上ってくる白装束の少女に注がれている。

「ま……牧村さん……」

富堂君が、少女の名らしきものをつぶやく。

「なんや富堂君……知り合いかい」

そう言いはしたものの、座間は少女を睨みつけたまま、一切警戒

を解かない。

「……自殺した、クラスメイトです」

「そうかあ……そやろとは、思ってたけど、な」

言いながら、座間は、じりじりと下がる。

背中には、富堂君をかばったままだ。

「久しぶりね。亮君。どうしたの？こんなところで」

「答えんな。アイツは、お前のクラスメイトなんかやない。」

「え……？でも、幽霊だとしたら……」

「その子の、幽霊でもない、言うところのや。単なる人間の幽霊が、こんな火い放ったり出来るかいな」

「じゃあ……これ……牧村さんが？」

「ひどい。ひどいわ。私、そんな事してない……」

白装束の少女は、顔を覆って泣き始めた。

その間にも、宙に浮くように、ふわふわと、二人に向かって近づいてくる。そして、こちらを向いて、ゆっくりと顔を上げた。

「そんな、ひどい事言う人は……」

ぐるんっ。

少女の目が、裏返るように上を向いた、と見えた瞬間。

その下から現れたのは、金色の瞳であった。
白目部分は、充血したように真っ赤であり、顔には、青黒い隈ま
で浮かんでいる。

「うわっ！うわーっ！！」

ついに恐怖に耐えられなくなり、富堂君が叫んだ。

だが、さすがに座間は、その程度では、声も出さない。

そして、急にスピードを上げた少女は、座間の目の前へ一瞬にし
てやって来ると、まるで、何かに弾かれたように、青い火花をあけ
て飛び退った。

「へっ。社長の火気封じの結界に、反応したやないか。お前が、火
気を操る妖物やいうことは、お見通しや」

『ふん。そのこどもも、とりこしてやろうとおもったのに、おま
え、じゃまだな』

少女の口調が、がらりと変わっている。
声も、地の底から響くような、不気味な響きを帯びていた。

「何い？『その子供も』 やて？ 昼間っから、ここに火気を集め
てたのも、お前やな？何のつもりや？」

「おまえが、しるひつようはない」

少女の全身から、青白い炎が立ち上る。

炎は、少女と同じ形を残像のように残しながら、結界の周りを走
り始めた。そして、次第に高さを増し、結界全体を覆い尽くす。

少女が起こす風に乗って、凄まじい熱が襲ってきた。まるで、見

えないドームのように、結界が炎を遮断していなければ、二人とも、とつくに灰になっていたかも知れない。

それでも、輻射熱は防げない。強い熱が、じりじりと二人の肌を焼く。

「あ、熱いよ。座間さん」

「我慢しいや。男の子やろ」

そうは言っても、そろそろ、普通の人間には、耐えられない熱さになってきていた。

「富堂君」

「は……はい」

「オレは、お前を助きたい。オレを、信じられるか？」

「……………」

「どんな姿になっても、オレはオレや。それを……………信じられるか？」

「?……は……はい」

「ほな……………行くで！」

次の瞬間、座間は、黒い翼を翻して、飛び上がった。一瞬にして、烏天狗の姿へと変化したのだ。

「う、おおおおお!!」

座間は、気を吹き込んだ葉団扇と降魔の剣を振りかざし、宙に浮かんでこちらを見つめる、白装束の少女の元へ飛んだ。

「な、何？」

座間は、驚愕の声を上げた。

突き出した降魔の剣に何の手応えもなく、少女の体を素通りしてしまったのだ。

「幻影…… かつ!？」

降魔の剣は、座間の持つ気が形づくった武器である。

相手がたとえ幽霊であろうとも、ダメージを加えられるはずであった。

「そう、おもつか？」

少女は、怪しい笑みを浮かべたまま、空に浮かんでいる。

「ぐはっ!!」

座間は、のけぞった。

火気封じの結界を破って、少女の手が伸び、座間の胸に触れたのだ。幻影では、攻撃される事はない。

「なんでや?…… っ…… の!!」

葉団扇に更に気を送り込み、座布団ほどの大きさに変えた座間は、

少女に向かって打ち振った。

ごうっ。

一瞬だけ、少女の姿がかき消え、再び姿を現す。まるで効いた様子がない。

「しもた。ここは、土気が少なすぎる!!」

座間は思わず叫んだ。

土気とは、すなわち大地から立ち上る気、大きくは鉱物の気である。

木・火・土・金・水

陰陽五行思想では、大自然の気は5つに分類されられている。

それぞれの気は、お互いに関係し合い、移り変わり、強弱、陰陽を持つ。

木克土。

火克金。

土克水。

金克木。

水克火。

相剋。それぞれの性質の気は、決まった性質の気に打ち克つ、という意味である。

また。

木生火。

火生土。

土生金。

金生水。

水生木。

相生。それぞれの気は、決まった性質の気を、増幅し、強力にする場合もある。

烏天狗である座間は、土気を操る。

相剋ではないものの、土で火は消せる。また、火生土、物を燃やした後の灰は土に還ることから、

火は、土気を強化する性質をも持つ。

本来であれば、座間は、こうした火の妖物は、もっとも与しやすい相手のはずだった。

しかし、ここはビルの屋上である。

土気を無限に立ち上らせる大地は、十数m下だ。しかもコンクリートの鉱物としての土気では、ここまで強く燃え上がった火気には、対抗しきれないのだ。

「く……くそっ!!」

池の畔に降り立った座間は、上空に浮かぶ少女を睨みつけた。

少女は、不気味な形相のまま、にたり、と笑った。

結界の周囲は、ますます温度を上げている。上空まで炎に覆われていては、今さら飛んで逃げる事も出来ない。このままでは火気封じの呪符も、燃え出すかも知れなかった。

いや、すでに見えない結界の境目が、揺らいできているのを、座間は感じていた。

「富堂君………あかんわ。今は、アイツに勝たれへん………」

「……………」

「しっかり、そのメダカの水槽、抱えとるんやで？」

「座間さん？」

勝てない。

たしかに、今そう言ったはずなのに、何をしようというのか？

富堂君の目は、そう言っていた。

しかし、座間は、その目には何も答えず、葉団扇を頭上に振りかざした。

「はー!!」

まるで空気を切り裂くような、鋭い気合いが、座間の口から発せられた。すると、葉団扇は銀色の光を放ちながら、さらに大きさを増した。

「勝てへんなら、防御するまでや!!」

葉団扇は、巨大な羽のように、二人を包み込んだ。すると次の瞬間、熱気も煙もまるで嘘のように遮断され、同時に外の様子も見えなくなった。

「ふう……よかった。座間さん、ありがとう……座間さん？」

富堂君は一息つくと、座間に話しかけようとして息を呑んだ。

烏天狗の顔。腕。体。

それは、すでに味方であると認識していたから、驚きはしない。

しかし座間はまだ、必死の形相で戦っていたのだ。

座禅を組むように座り込み、両手を頭上にかざしている。わずかな、コンクリートの土気。それを吸い上げ、葉団扇に送り込む。

座間の作った、小さな土気結界は、少しでも気を逸らせば、周囲の火気の圧力に押しつぶされてしまうのだ。

「心配……すなや。守る言ったら、守る」

苦しげに言う、座間の腕からは、一筋、二筋と、煙が立ち上って
いた。

§ 4 カラス

§ 4 カラス

5年前……座間典俱くらまのりともは某国立大学の工学系の2年生。
まだ、普通の人間だった。

「なあ、半田あ……アイツ、何やってんのやるな？」

「ああ……あの女？見たとこ、穴掘ってんのとちゃうかな」

「なんでや？」

「そんなこと、オレが知るか」

座間は、H棟の大教室で授業を受けている。

箕島治郎教授の生態学概論は、教養課程の中でも、人気の授業だ。
理由は、とにかく脱線が多く、余談に次ぐ余談。しかもその話が
非常に面白いからだ。

学内最大の大教室であるにも関わらず、立ち見まで出るほどのす
し詰め状態である。

「みなさん。私はその時、南極基地で初の釣りを試みました。

その時釣れたのが、この魚、私達がオングルダボハゼと命名し…

…」

授業は、開始からわずか20分ほどで脱線した。

南極基地の話になると、長い。今回の授業時間も、9割が脱線で
終わるだろう。だがこの話、前期にもした筈だが、忘れているのだ

ろうか？

たしかに箕島教授の話は面白いのだが、2回聞くほどではない。座間は早々に授業に興味を失い、大教室の窓から、ぼおつと外を眺めていたのだ。

原野を切り開いて作られたこの大学の、敷地は広い。

新しい棟の建設予定地のつもりなのか、まだそこかしこに空き地が点在しているのだが、H棟の向こうの一際広い空き地……通称『I棟予定地』には、なぜか十数本のクルミの木が植えられ、ちよつとした雑木林と化している。

そのクルミの一本の根元で、女子が一人穴を掘っているのだ。

「なんか、美味しいもんでも、埋まってるんじゃないの？」

「アホか。イヌと違うっちゅうの」

それに、その女子はスコップなどをまったく使わず、素手で、硬そうな土を掘り返している。

座間は、その姿に妙に気を引かれた。

「出席簿、書いたし、オレ、ちよつとフケるわ」

「あ、そう。じゃあ、また昼休みに、学食でな」

「おっ」

教室を抜け出した座間は、クルミの木の下へぶらぶらと歩いていた。

「なあ、おまえ……………」

「何？」

洗いざらしのジーパンに流行遅れのジージャン。金属縁のメガネをかけたその女子は、見た事のある顔だった。

たしか、隣の生物学系の2年生だ。周囲の学生達に呼ばれていた名前は……………そうだ。

「あ、おまえ、アカハラ？」

「ま、好きに呼びばいいけど……………何の用？」

アカハラの方は、あからさまに座間のことを拒否している。

「いやあ、……………何しとんのかな、思つて」

「あんたには、関係ない事よ」

「まあ、関係はあらへんけど……………おまえ、泣いてるやん!？」

アカハラは、汚れた袖であわてて顔をぬぐった。

おかげで黒い土が顔に付くが、それはあまり気にしていない様子で、きつと座間を睨みつけた。

「泣いてなんかいいわ。用がないなら、どっか行つてよ」

「いや……………用がないっていうか……………」

その時、アカハラが掘った穴の脇に、黒い羽が見えた。

「あ？おまえ、カラス……埋めとんの？」

カラス、といえばたしか、学芸棟の通り道の並木の一本にカラスが巣を作っていたはずだ。

最初は誰も気にしていなかったのだが、ヒナが孵ってから急に親鳥が神経質になり、通る人すべてに攻撃を仕掛けるので、大学が撤去すると聞いていたが……

「埋めちゃ悪いの？」

「いや、悪くは……ないんちゃうかな」

座間は、何となく立ち去りがたくなってアカハラの手元を眺めていた。

しかしアカハラは、そんな座間を振り向こうともせず、手早くカラスを自分が掘った穴に入れるとさっさと土をかけて立ち上がった。

「じゃね」

「ん……あ、まあ……」

座間は泥だらけの手のまま立ち去ろうとするアカハラの胸元に、何気なく目をやった。

「ぎゃあ」

座間は目を疑った。赤い口を開けた奇妙な生物が、アカハラのジーンズのボタンの合わせ目から顔を出していたのだ。

「いやいや、アカハラ、ちょい待ちいや。何なんそれ？」

「だから、あんたと関係ないって言ってんでしょ」

「それ……まさか、カラスのヒナか？」

「違うわ」

「いや、それ、どう見ても」

「ハシボソガラス。のヒナよ」

「ああ……まあ、ええけど。ソイツ、どうする気いなんや？」

「飼っちゃ悪いの？」

「いや、悪くは………いやいやいや、悪いんちゃうの！？ カラス
いうたら、害鳥やし………っ」

そこまで言った座間は、腹に強烈な一撃を食らって呻いた。
アカハラの前蹴りが、見事に鳩尾に入っただのだ。

「害鳥？！ そんなこと、誰が決めたの？」

生きているだけで罪な生き物なんて、あるわけないじゃない！！
カラスがいなきゃ、昆虫も鳥も殖えすぎるし、生き物の死体は腐
るまで放置よ！？ 木の実を食べて種子を運び、森を作るのも彼等
なのよ！

人間の通り道に、巣を作ったくらいで何よ！ 巣立つまで、通行
禁止にすりゃあいじゃない！！

なんで………なんで殺さなきゃならないわけ！？」

そう言われても、言い返そうにも声すら出せない。

体をくの字に折って呻きながら、しかし座間は理解していた。こいつ、アカハラは、駆除されたカラスをどうやってか盗んできたのだ。そして、親鳥は殺されていたが、ヒナは生きていた。

それを自分が育てる。そう言っているのだ。

「お……まえ……そんなことして……」

「良くないですねえ」

急に座間の後ろから、甲高い声が聞こえた。

「箕島先生！」

アカハラが、目を丸くして声の主を見る。

よれよれのスーツ姿。ひよろ長い手足に、常に笑ったような顔。

ちようど授業を終えた動物生態学の教授、箕島治郎が通りがかったのだ。

「あなたの主張は正しいが、行動は間違っている、と言わざるを得ません」

「……………」

「親鳥を失ったヒナを人間が育てれば、その人間を親、あるいは仲間と認識してしまいます。結果、群れにも加われず、人間にも受け入れられない、歪な存在になってしまいます。」

つまりあなたは、一生、そのカラスの面倒を見なくてはならなくなるのですよ？」

「覚悟は……あります」

「カラスはもとも大変頭が良い。ですから、人慣れし過ぎたカラスの悪戯は想像を絶します。

しかも鳥の寿命は意外に長い。大事に育てれば、20年は生きますよ？ ……20年後、あなたは何歳ですか？ その時何をしていいますかね……？」

「そ……それは……」

「ま……待ってえや、先生」

まだ痛む腹を押さえながら、座間が立ち上がる。

「何か？」

「先生ほどの偉い専門家なら、そのヒナを、ちゃんとカラスとして育てる方法もご存じなんと違いますか？」

「ふむ、なるほど……方法が無くはありません」

「どうすれば、ええんですか？」

「親ガラスの頭を使って、エサやり用の手袋を作るのです」

「うえっ！？ ほんまですか？」

「べつに他の素材を使っても構いませんが、一番手っ取り早いでしょう。その上で、人間の姿を一切見せずに育てます。録音した、子

育て時のカラスの鳴き声を聞かせながら、ね。

そうすれば、子ガラスは人間に育てられたことに気づかず、健全なカラスに育つ可能性はあります」

「分かりました。やります！」

アカハラは、すぐさま先ほどの死体を掘り起こし始めた。

「お、おいアカハラ……それでええんか？」

「……うん。ありがとう、ええつと……あなた名前は？」

「星座の座に間違って書いて、くらま、や。くらま のりとも」

「座間君ね。私の名前はね、あおいよ。圓野あおい」

「ええ?! アカハラちゃんか？」

「アカハラはあだ名よ。アカハライモリ、たくさん飼っているから」

「た……たくさんやて？」

「うん。百匹ほど」

それを聞いた座間は目を白黒させている。たしかにイモリ百匹と比べれば、カラス一羽を巣立つまで世話するなど、何でもないことのような気がした。

箕島教授は、既によく知った顔なのか驚きもしない。

「では、圓野君。カラスの鳴き声のCDが必要でしょう。私の研究

室へ寄りなさい」

「はい先生。

……じゃあね。座間君。蹴ったりしてゴメン。また……会えるといいね」

アカハラこと圓野あおいは、初めて見せる愛らしい笑顔を座間に向けて、そのまま教授の後について去っていった。

「また、会える………か」

だが、この大学の構内は広い。
それから、学部も違う座間とあおいは、再会を果たさないまま月日が過ぎた。

§ 5 山の神の日

§ 5 山の神の日

翌年の十二月二十六日。クリスマス。

座間は所属している登山サークルの、クリスマス会兼、忘年会コンパに出席していた。

登山サークルであるから、会場は山である。大学近くのT山のキャンプサイトに、酒や鍋料理を持ち込んでの宴会だ。

「座間センパイ。クリスマスおめでとうございま〜す」

後輩の女子達が、座間のジョッキに日本酒とビールを同時につぐ。登山サークルとはいっても、座間達は本格的な冬山登山などはしない。

トレッキングやハイキング中心であるため、女子部員も多いのだ。

「うわ、何しよんのこれ。ミックスはやめえ、言つとるやろ」

「え〜？座間センパイ、私達のお酒、飲んでくれないって言っんですかあ？」

「飲めるかい。しかもなんやこの量？」

「まあまあ、可愛い後輩の酒だろ？ そう言わずに飲んでやれよ」

同期の友人、竹内がにやにやしながら言う。

昼過ぎから準備を始めたものの、道具の調達やらなんやらで手間取ってしまい、結局夜も9時過ぎてから始まった宴会は、盛況のま

ま日付を越えようとしていた。

「あんた達、何してんの!？」

その時、座間達の背後の闇から鋭い声が掛けられた。

「ここ、シーズンオフは立ち入り禁止のハズよ？」

「いやいやすんまへん。勝手に使つてしもつて、すぐ片付けますよつて……つて、あ？ たしかお前……」

相手が管理人か誰かだと思って謝りかけた座間は、そこに見たことのある顔を見つけてきよとした。

「圓野あおいよ。たしか座間君……だったっけ？ ダメよここは。片付けなんかどうでもいい。全部このままにしておけばいいから、早く逃げて」

「逃げるて……ほんまの管理人でも来る言っんかい？ そりゃあ、勝手に施設を使ったのは悪かったし、怒られるかも知れへんけど……」

「違うのよ。」

「一から説明しているヒマはないけど、あなた達は絶対に来ちゃいけない日に、山に来ちゃったのよ」

「なあ座間。誰？ この子、知り合い？」

竹内がニヤニヤしながら聞く。

あおいは何故か山伏のような、和装の白装束である。たしかに変

わった格好ではあったが、この前の流行遅れのジーンズ姿よりも格段に似合っている。

もともと素材は悪くない、と座間も思っていたが、この凜とした姿はたしかに綺麗だ。何に緊張しているのか分からないが、切羽詰まった雰囲気がおお層あおいを美しく見せているようだ。

「あ？ まあ……な。

なあ、圓野？どうして、こんな夜中に逃げ出さなきゃならんのかな？」

「……………あなた達、ここに何人で来たか、覚えてる？」

「そりゃあ、十五人や。ちゃんと、昼間の買い出しから一緒やったからな」

「へえ、十五人？ それじゃあ、テーブルの上に、いくつコップがあるか数えてみて」

「えーと……………」

コップの数は、十八だった。

「そりゃまあ紙コップやから、いくつも使うヤツはおるやろ？」

「取り皿も、割り箸も十八よ？ついでに言えば、席数もね」

「何が言いたいんや？」

「妖怪の仕業なのよ」

あまりに唐突な答えに、座間は思わず吹き出しそうになった。それではネット上でたまに見る、出来の悪い怪談のようではないか。

「いつの間にか、オレらに三人も妖怪が混じって宴会しとった言うんか？」

「違うわ。いつの間にか、三人、存在を消されてしまった人がいるのよ」

「何アホな事、言つとんのや！この世に妖怪なんかおるかいな！！オレらは、昼からずっと十四人一緒に行動しとったんや。仲間のことを忘れるわけないやろ！！」

「何人……ですって？！」

「だから十四人……あれ？」

あおいも座間も……周囲の者達全員が、黙った。
もはや、違和感は隠しようもない。

「みんな、固まって！！」

あおいの声に、全員が一つのテーブルの周りに集まった。
あおいはそのテーブルの周囲の地面に、何か書いた紙を置き、テント用のペグで打ちつけていく。

「結界を張ったわ。

絶対にこの範囲から動かないで。こんなもんで、山神の使いを退けられるかは分らないけど……」

「や……やまがみ？ いったい、何なんや。オレらにも分かるように説明してくれ」

「これが神隠しよ」

「神隠し？」

「旧暦の十一月七日は、山の神の日。

人間は山へ入っちゃいけないのよ。入れば、神隠しに遭って帰れなくなる。それが、新暦で言えば十二月二十六日。つまり今日なのよ」

「な……なんで圓野は、そんな日にこんな所にいるんや？」

「修行してたのよ。日付が変わる前に、帰るつもりでね。そしたらここに人間がいるって、教えてくれたもんだから」

「教えてくれた？ 誰が？」

「私の師匠。

今はここにはいないけど………味方よ」

「存在を消される………って、どういう事なんですか？」

一年生の女子が、おずおずとあおいに質問する。

「もともといなかった事になるの。この世のどこにも。山神の使いは、人間の存在、つまりこの世との関わりを消してからその人間を食べるのよ」

その時

「おーい。座間あ、竹内い」

後ろの茂みからガサガサと音がすると、一人の学生らしき男が姿を見せた。

「おお？酒井やないか。

あれ？お前、今までどこ行っとったんや。っていうか……そもそも今まで、何でお前の事忘れとったんやろ？？」

座間は、とんちんかな自分自身の反応にとまどいつつ、酒井の顔を見た。たしかに、よく知るサークルメンバーの一人だ。

「んなこと、どうでもいいだろ。

お前らこそ、何やってんだ。そんなとこに固まってさあ？ こっち来いよ。俺達と飲み直そうぜ」

「行っちゃダメよ！！」

ふらっと立ち上がった座間を、あおいが両手で押しとどめた。

「喂よ。酒井さんっていうの？ あの人。

下の名前は？ 学年は？ 学部は？ どこ出身？」

「そりゃあ……」

言いかけた座間は、今の質問に何一つ答えられない事に気づいて愕然とした。

「山神の使いは、存在を消すだけじゃなく作り出す事も出来るわ。でも、細かいディテールまでは無理なの。」

このサークルに、最初から酒井なんて人はいなかったのよ」

「そやかて……………」

そう言われても、自分は友人として酒井を認識している。それは確かなことだ。その事が、逆にあおいへの疑いへと変わっていった。本当にこの女の言うことを聞くべきなのか？

「おい、座間あ、その子、何言ってるんだ？」

「あ、いや、なんて言ったらええんかな……………」

座間は、困ったような顔であおいを見た。あおいも座間の表情から、何を考えているか読み取ったようだ。

「分かったわ。今、証拠を見せてあげる」

そう言うと、あおいは振り向きざま、その酒井という男に向けて何か赤い物を投げつけた。

「うぎゃあああー!!」

酒井は、魂消る悲鳴をあげて飛び退った。

「な、何投げたんや？」

「熾火よ。山神の眷属は木気の妖だから、火気に弱いもの」

「いやいやそんな投げたら、普通の人間でも、そりゃあ逃げるる?」

「あれでも、そう言える?」

あおいの指さす先には、毛むくじらの巨大な獣が、火を怖がってまるで踊るように暴れていた。普通の人間より、あきらかに二回り以上でかい。しかも類人猿のような体に、顔だけは先ほどの酒井という男のままなのが、なおいつそう不気味に見える。

「うわあっ!!」

「きゃああああ!!」

「ば……バケモノっ!!」

半信半疑で座間達のやりとりを見ていた他のメンバー達も、ようやくあおいの言う事が本当だと理解できたようだ。

「あれが正体……山神の使いで、?って妖なのよ」

正体を見破られた?は、人間の顔のまま悔しそうにこちらを睨むと、現れた時のように一瞬にして藪の中へ飛び込んで消えた。

「じゃあ、なにかい……いなくなったっていう連中は、みんな、あの?……バケモノに……」

「言ったでしょ?存在を消されたのよ。今どうなっているのかは、私にも分からないわ。男は食われるらしいし、女の子は生かされていても……子供を産まされるって言われてるわ。あいつら、雄だけ

しかないから、自分達だけで繁殖できないのよ」

「いやあああ！！もうやめてえええ！！」

あおいの説明を聞いていた女子の一人が、緊張と恐怖に耐えきれず、頭を抱えて座り込み、悲鳴を上げた。
その途端。

「うほ。うほほ。うほっ！！」

「ぎゃあつ。ぎゃああつ」

女の悲鳴に反応したのか、頭上の枝を揺すって叫ぶ者がいる。
先ほどの？の仲間達に違いなかった。結界の周囲の茂みからも、足を踏みならす音がする。少なくとも10匹か、それ以上の気配が、彼等を取り囲んでいた。

「朝が来るまで、こうしているしかない……ってことか？」

「いいえ、朝は関係ないわ。今日っていう日がまずいのよ。今からだと、約23時間。日付が変わるまで、この結界から出ない事ね」

「明日の夜、バイト入れとったのになあ」

「ねえ！？トイレとかどうすんのよ！？」

「消えなくなったら、何もかも結界内で済ませる事ね」

あおいはにべもない。

「なあ、そんなことより………なんで、そない、警戒しとんの？」

座間の言う通り、あおいは、結界内は安全であるように言いながら、両手に呪符を持ち、まったく警戒を解いていないように見える。

「私は、修行中だつて言つたでしょ？」

この結界だつて、完全かどうか分らないのよ………もし壊れたら、ごめん」

「なんやて？」

じゃあ、ここにおつても、助かるかどうかは分からんって事か？」

「そうよ。でも、ここから出れば、確実に消されるわね」

「う………う………うひい………うひい………うひい………うひい………」

先ほどから、何も言わずにガクガク震えていた竹内が、突然走り出した。

「ダメ………止めないと………」

あおいが叫んだ時には、すでに竹内は結界を走り出していた。そして、そのまま土の山道を駆け降り、駐車場に停めてある、車へ向かっていく。車で自分一人逃げるつもりなのだ。

駐車場には外灯があり、全体を薄明るく照らしている。竹内が運転席のドアに手を掛けた、と見えた瞬間。

頭上の木々から、黒い影が、ひとつ、ふたつ、みつつ。

音も立てずに、飛びかかっていくのが見え………そのまま竹内も、その黒い影も背後の闇に溶け込むようにして、見えなくなった。消え去るまで悲鳴一つ聞こえない。

「た……た……」

座間は、竹内の名を呼ぼうとして、もう名前も顔も思い出せない事に気づき、愕然とした。

「消され……たのか？」

「……ええ」

あおいは、助けられなかったことを悔いているのか、自分の唇を血が出るほど強く噛みながら答えた。

§ 6 山の神々

§ 6 山の神々

座間達は、疲れ果てていた。

なにより、この寒空の中、焚き火が消えかかってしまっているのが問題だった。結界内に、薪が無いのだ。

残り13人になってしまってから、すでに4時間。いや、まだ、たった4時間と言うべきか。あおいの言う、「明日」までは、まだ18時間もある。

それなのに、体力も気力も、限界と言って良かった。

もちろん、座間一人であれば、耐えきる自信はある。しかし、あおい以外に、13人中、女子が5人もいるのだ。彼女たちの体力では、真冬の屋外で、焚き火なしというのは、無理だ。

食料と酒が、多少残っているのが、唯一の安心材料といえた。

「圓野……………」

「なによ？」

「さつきも聞いたか知れんのやけど、消されるって、どういうことなんや？　なんで、その？^{やま}とかってバケモノが、そんなすごい力を持ってるのや？」

「消すっていつても、物理的に消すワケじゃないわ。その人間と、周囲との関係性を、遮断する……………つまり存在の意味を消すのよ」

「イマイチ、分からへんな」

「私もそれ以上は説明できないわ。どうやってやるのか、とか聞かれても、もっと分からない。」

でも、どうしてそんな事が出来る妖なのかは分かるわ」

「そら、なんでや?。」

「山神は本来、山を守る神様よ。」

あなたも登山サークルなら、いくつか山を見ているでしょうけど、むき出しのガレ場や倒木、土砂崩れ………そうしたものって、すごく多い山と、そうでない山があるでしょ?。」

「そらそうやけど………そんなん、地質やら気候のせいと違うの?。」

「もちろんそれもあるけど、それだけじゃない。」

山神様はね、そういう、自分の山が荒れるような災害があると、それを消すのよ」

「消すって………山崩れとかを? もし大災害で、すでに写真撮られてたり、報道されてたりしたらどうなるんや?。」

「分かってないわね。」

災害を元通りに直すんじゃないくて、存在そのものを消すの。なかった事にするんだから、報道も記録もすべて消えるのよ」

「それじゃあつまり………山神様とか?と^{やま}かってのは、普段は人間を消すんじゃないくて、災害を消して、山を守っているって事か?。」

「ええ。そういうこと」

「じゃあ、なんで今は、俺達を狙うんや?！」

「さっきも言っただじゃない。日が悪いの。」

山神様も、その眷属の^{やまこ}も、いつでもうつろっているワケじゃないのよ。一年にたった一度、山の神の日にだけ山を見回って存在力を発揮するの。だからその日、山にいるものは、すべて生け贄になるのよ」

その時

「おい。おまえら何やってんだよ?」

いきなり、座間達のいるテントサイトの反対側から声が掛かった。のんびりした優しい声だ。見ると、こちらとそっくりなテーブル、焚き火があり、あちらにも数人の男女が、座っているのが見える。

『それでさあ、聞いてよ。あのセンセイったら、やんなっちゃうのよ』

『へー。そんな事あったんだー?ウケルー』

女子達の談笑している声まで、ハッキリと聞こえる。

こちらと違うのは、向こうはほのぼのとした雰囲気であり、焚き火もまだ赤々と燃えている点である。その中の一人が先ほど声を掛けてきたらしい。そして、その一人が砂利を踏みしめる音を響かせながら、こちらへ向かってきた。

「また、来たわよ。無視しなさい。」

あおいは、全員に鋭く命令した。

「おい、座間あ。お前ら、何やってんだ？ホラ、こっち来て語ろうぜ？」

「……………」

座間は答えない。

「分かったよ。じゃあ、女子だけでも来いよ。そんなことしたらつつつつつつつつつつつつつつつつつつc q凍死しちまうだろ？ほら、こっち来て火にあたれよ」

その言葉を聞いて、固まって震えていた女子達が顔を見合わせ、全員が、すつと立ち上がった。

「よせ！！やめえ！！」

座間の鋭い叱責が飛ぶ。

「でも…………でも…………もう私達…………限界なんです」

女子達の言うのも分かる。

修行中とやらのあおいはまだしも、普通の女子には、この状況も環境も耐えられる範囲を超えている。しかし。

「他のヤツらみたいに、消えたいんか？」

「消えるかどうか、分かんないじゃないですか。この人、どう見て

も田中先輩ですよ?。」

「さっき、圓野が言つたやろ?

その、田中先輩とやらの、学年は?専攻は?下の名前は?初めて会つたのはいつや?。」

「何バカな事言ってるんだ。君たち、さあおいで」

「田中先輩」が、手をさしのべる。

そこへ……ふらつと、一人の女子が手を伸ばした。
結界からわずかに指が出た。その指を、「田中先輩」が素早く鷲掴みにした。

「きゃあっ!!」

「紅谷さん!!」

座間が、その女子の名を叫び、飛び出した。

「ダメよ!!座間君!!」

ああい^{やまい}の声^{こゑ}が飛ぶ。

「田中」は紅谷さんの指先を握つたまま、走り出していた。

しかし数歩も進まないうちに正体を現し、真っ黒な毛を全身に生やした姿に変わっている。紅谷さんは、まるでマネキン人形のように軽々と引きずられ、声も出せない様子だ。

その後を、座間が追う。

?のダッシュはまさに野生の獣と言って良かった。しかし長身の座間は、飛び出す判断が早かったせいもあってか、なんと、走り出

して数十mで？に追いついたのだ。^{やまし}

こういう時は、上半身にタツクルしても、効果は薄い。ましてや、相手は重量級のバケモノだ。

座間は、怪物の膝あたりへ向けて、思い切りタツクルした。

「ほきやああつ！？」

やまこの声が響く。おそらく追いつかれるとは予想もしていなかったのだろう。しかも運良く座間は、両手で怪物の両膝に抱きつく事が出来た。無防備だった？はスピードを抑えきれずに前につんのめり、紅谷さんの手をつかんだままごろごろと転がった。

「い……痛い……」

？は、^{やまし}やつと紅谷さんの手を放したが、つかんだまま振りまわされた紅谷さんの腕は、おかしな方向へ曲がっている。引きずられたせいで、他に怪我もしているのだろう。

地面にぐったりと横たわったまま、呻いている紅谷さんを見て、さすがの座間も頭に血が上った。

「ぶっ殺す！」

座間は、タツクルの勢いを殺さないまま怪物に馬乗りになり、^{やまし}？の顔面にパンチを入れた。

ひとつ。ふたつ。みつつ。

恐怖よりも怒りが込み上げ、止まらない。どんな理由があろうと、仲間を消し、今また後輩の女子を傷つけたこの化け物を許せない気持ちだが、すべての感情を上回っていた。

「ダメよ！！離れて！！」

後ろからあおいの音がする。何がダメなんだ……と、思った次の瞬間、目の前にあおいの顔があった。

「な……」

ほんの一瞬、座間の手が止まる。

そのあおいが、にやっと笑うのが見えた途端、強烈な痛みが走り、座間の動きが止まった。

「か……かはっ……」

息が出来ずに、座間は呻いた。

やられた、と座間は思った。^{やまこ}？が得意の変身術で、顔だけをあおいに変えたのだ。

「座間君っ！！」

後ろから迫ってくるあおいの声は、悲痛な響きを帯びていた。

脇腹の感覚がない。

何をされたかは分からないが、^{やまこ}？の攻撃を受けた事は確かであった。それも怪我の程度は軽くないようだ。口の中に鉄臭い臭いが込み上げてきている。

終わりか。

と、座間は思った。

どうやら座間典俱、という人間はここまでのようだ。

で、あれば……

いや、で、あったとしても……それでも、おとなしく消されてやる理由などない。

「圓野……」

座間は、わずかに首だけを回して振り向き、後ろから自分を追つて、必死で駆けてくるあおいの姿を見た。遠い。女の足だからか、座間の元へたどり着くにはまだ数秒ありそうだった。

ほのかな思いが、胸を焼く。

だが、まだ恋というには、遠い思いだった。

それでも。

「圓野…… お前だけは……」

そう呟くと、全身に残された力を振り絞るようにして右拳を固めた。

「うおおおおお!!」

獣のように吼え、目の前の怪物に右拳をたたき込む。

その瞬間。

大地から立ち上る、何かを感じた。

自分の背後の、山々の存在を感じた。

土、石、岩、そういったもので、大地も山々も出来ている。

それらの重力を感じた。

それらの物質すべてが、その質量を存在力として、強く、強く、座間を引き寄せている。その力は、自分に使えるものだ。そう感じた。

拳の速度に、山々の重力が乗る。

拳の重力に、山々の存在力が乗る。

「ほきや………」

叫び声をあげかけた？の腹は、あっけなく座間の拳で貫かれていた。

「うぶあ」

怪物の口から吐き出された黒い血が、座間の顔にかかる。

そして怪物じみた？の姿は、背後の景色に溶けるように消えていき……目の前には、小さなサルの死体が転がっていた。

何が起こったのか自分でも理解できず、座間はふらっと立ち上がった。

「ぎゃあっ！！ぎゃあっ！！」

「ほあーっほっほっほー！」

周囲の木々から、怒りと恐怖の入り混じったような声が聞こえ、木の葉や枝が大量に降り注いできた。

それに混じって黒い影が次々に地面に降り立ち、座間に襲いかかる。影が触れると、腕が、足が、顔の半分が……体の部分が、ひとつ、またひとつと消されていく。

それらの攻撃を数瞬で受けた座間は、力を使い果たしたのか、まるで木偶人形のようにその場に倒れた。

そこへ、やっと追いついたあおいが、座間を守るようにして呪符を持って立ち上がった。

「大丈夫？え……っ……ダメ、思い出せない！！」

あおいは必死で座間の名を思い出そうとするが、どうしても思い出せない。

消されてしまったのは、体の部分だけではないようだ。

「おやめ！！おまえ達！！」

その時、聞いた事のない、女性の声が響いた。

いや、その声は、座間も、あおいも、結界内にいる生徒達も聞いた事はある。だが、その女性は、ここにいないはずがない人間だ。

「わらわが神事に出ている間、勝手なマネをしておくれだね？」

林の奥から姿を現したのは、白い和装の中年女性だった。

あおいの姿と違って山伏風ではなく、長い裾は地面近くまであり、薄紫の帯には、桐の花が描かれている。ちょうど、時代劇の奥方のような服装に見えた。

「わ……驚田センセイ？」

結界内にいる、女子の一人から声が上がる。

いつもの授業時間とは違って時代がかった口調ではあるものの、たしかに、目の前に現れたのは、植物生態学の驚田いずみ教授に見えた。だが、これまで知った顔だと思った人間は、ことごとく？のまやかしだったのだ。^{やまこ}

さすがに、誰からも安心の声は漏れない。

驚田教授が現れると同時に、急に周囲の木々は静まり返った。しかし、？達の気配……秘かな息づかいや、怯えているような小さな声は、隠しようもなくあおい達の耳に届いている。

「わらわの仕事は、知っておろう！！よくも、教え子達をその手に掛けておくれだね？！！」

鷲田教授が怒りの声を上げ、すつと右手を挙げると、頭上で怪物達の悲鳴が上がった。

「ぐぎゃっ!!」

「ぎゃふっ!!」

「うきーっ!!」

様々な悲鳴と逃げまどうような気配と共に、体にツル植物を巻き付かせた？^{やまじ}達が地面に次々と落ちてきた。

途中で引つかかって、宙づりになるものも、地面に激突してもがくものも、中には頭から地面にめり込んでしまい動かないものもある。

「和泉御前殿。

やまこ達は、御前の留守中、己の務めを果たしたまで。どうか、そのあたりで許してやってはもらえませんか？」

駐車場からの斜面を、普通に歩いて登ってきたのは……

「箕島先生!？」

また、結界内から声上がる。

今度は、あの生態学概論で有名な箕島治郎教授であった。

「みなさん、本当にお疲れ様でした。

ああ、そのままで結構です。私を私だと信じる必要はありません。何があったかは、大体承知していますから」

「師匠!!」

あおいだけが、満面の笑みで箕島教授を出迎える。

「圓野君、お疲れ様でした。遅くなって申し訳ありません。思いの外、和泉御前の行っておられる神事の場所が見つかりにくかったものでね」

座間は横たわったまま、なんとか状況を把握しようと努めていた。独特の甲高い声と、理屈っぽい言い回しは、たしかに箕島教授のものだが……座間は確認しようとしたが、立ち上がることはおろか首を回すことも出来ない。

「圓野君。修行中の身ながら、よくみなさんを守ってくれましたね。しかし、正直驚いたのはこの青年です。一体だけとはいえ、まさか人間の身でやまこを殺すとは……」

箕島教授は、座間に近寄ると上半身を抱き起こした。

「追い詰められて、潜在力を発揮したのでしょうか……あなた、お名前は？」

座間は、返事をしようとした。しかし、まったく声が出ない。

それどころか、自分の体すら、どこにあるのか分からない。

自分で動くこうとして初めて、味わった事のない不気味な感覚が襲ってきた。肉体だけでなく、思考もまとまらず、体も心も、自分のものなのかどうかあやふやである。

「ふむ……これはひどい。」

肉体や魂が、部分的に消されている。？達^{やま}は、仲間を殺されてよほど怒ったようですね。」

「この人……誰なんでしょう？」

その、あおいの言葉を聞いて、座間は大きくショックを受けた。自分の存在を、部分的に消されているせいだとはいえ……あおいとの関係だけは、消されなくなかった。いや、何があるうとも自分を覚えていて欲しかった。他の誰に忘れられようとも、あおいにだけは。

まとまらなかった思考が、そのショックのせいか、急激にクリアになっていく。

「み……しま……せんせい」

「ほう、この状態でしゃべれますか。それもまた大したものです。圓野君。この青年は私が見ましよう。あなたは驚田先生を手伝って、消された人達を助け出して来て下さい」

「え？みんな無事なんですか？」

「無事かどうかは分かりません。」

しかし一年に一度の獲物を、早々に食い尽くすほど？達^{やま}も愚かではないでしょう。生きてさえいてくれれば、驚田先生なら見つけ出せるはずです。怪我をしている人もいるでしょうから、手当の方も頼みますよ」

「分かりました」

箕島教授は、あおいが立ち去るのを待つて座間に話しかけた。

「あなたは、存在を部分的に消されました。これは、非常に厄介な状態なのです。」

教授の表情は悲しげだ。

「いいですか？

丸ごと消されたあなたの友人達は、おそらく存在を回復することができます。いえ、正確には後付けで関係性を上書き構築するだけなのですがね」

それを聞いて、動けない座間の顔にも安堵の表情が浮かぶ。

「消す。といつても、物質として存在する人間を物理的に消すなどという事は神にも出来ません。^{やまこ}？がやったのは、友人や家族、学生、人間として……など、その人間と周囲との関係性を、別の存在に対して向けてしまったのです。

すると、結果的に、無関係となった人間には認識できなくなる。これが？^{やまこ}の能力です」

「いったい……何に向けたんです？」

「さあ、そこが問題なのです。

彼等はその関係性を、森羅万象、あらゆるものに向ける事が出来ます。もし何に向けたか分からなければ、その内容も分かりません。つまり、上書きしようにも情報がない。しかし今回は、目的がハッキリしていますからね。

子供を産ませたり、生かしておいてたまに食ったりするためには、結局自分……つまり、？^{やまこ}達自身に関係性を向けるしかありません」

箕島教授の説明は、納得のいくものだった。

「もちろん、関係性の回復には和泉御前……鷺田先生に頼る必要がありますが、消された人達も含め、全員無事に帰れる可能性が高いでしょう。」

ただ、あなただけは、そうはいかない。」

「な……ぜ？」

「彼等は仲間を殺されて、よほど怒ったのでしょう。」

あなたの部分部分の関係性を自分達に向けず、でたらめに飛ばしてしまったようです。飛ばされた先が、その辺の石ころなのか、海の向こうの誰かなのか……もう分かりません。そしておそらく彼等自身にも分からないでしょう。

関係性が何に向いたか分からない限り、そのすべてを回復させるのは無理なのです」

「……………」

「あなたには、二つの選択肢があります。」

一つは、鷺田先生……山神たる和泉御前に一旦すべての関係性を消してもらい、その後に、完全に架空の関係性を後付けしてもらうこと。

もう一つは、今残っている関係性をそのままにしておき、その上に別の存在の関係性を上書きすることです」

「つまり……どちらにしても……オレは別人になるんですね」

「そう……なりますね。しかし、前者のやり方は正直お勧めしません。何故なら、完全に架空の関係性は、その詳細に必ずほころびが

出ます。

つまり、あなたは自分の存在に常に違和感を感じ続ける事になります。そのせいで、正気を保てなくなってしまった人間を、私は知っています」

「では……」

「後者のやり方の場合……あなたは、今起こったすべての記憶を残す事になります。他の方達は、圓野君を含め、記憶を消させてもらいますが、あなたの場合は、上書きする存在との関係性を共有するためにも、私との関係性を維持する必要があるからです」

「わかり……ました。

何も……覚えていない……より、別の存在になってしまっても……覚えていたい」

座間の脳裏に浮かんだったのは、あの時の笑顔……カラスの子を抱いたあおいの笑顔だった。

「もうひとつ。

死亡したばかりの人間でもいれば別ですが、残念ながら、今はこれしかないのです。人間でないものの存在を重ねられる……つまり、あなたは純粋な意味で人間ではなくなります」

箕島教授が懐から取り出したのは……カラスだった。

死体……かと思っただ、かすかに動いた。瀕死という事らしい。

「まったくの偶然ですが、ここに来る途中に見つけたのです。おそらく、もう助からない」

「オレは……カラス人間……になるんですか？」

「カラス人間ではありません。烏天狗。ですよ。ご心配なく、私は大天狗です。箕島岳を預かる者で、真の名を次郎坊といいます。あなたは、私の息子になるのです」

それを聞いて、座間は安心して目を閉じた。

「あなたは、天狗としての素質があります。こんな事故が無くても、スカウトに行っただかも知れません」

「天狗様って……もつと重々しくて、無口な方かと……想像していました」

目を閉じたまま、座間が呟く。

「もちろん。そういう天狗の方が多いですよ。

私は、口数が多く俗っぽいと、よく太郎坊に怒られます。しかし、仕事柄、こういう性格なのは仕方ないですよ。なにせ、私と和泉御前は山の環境を守るために、それぞれ植物と動物の生態を人間に教えることを……おや、いけない」

箕島教授はあわてて座間の首に手を当てて心臓の動きを確認した。いつの間にか、座間の呼吸が止まっていたのだ。

カラスだけでなく、座間自身も瀕死だったのだ。

「和泉御前！！ 和泉御前！！ 少し、こちらを急いでもらえませんか！？」

座間の意識は、暗闇を飛んでいた。

いつの間にか、背中に黒い羽がある。
自分は、すでにカラスなのだと理解した。

次の瞬間。目の前に座間自身が現れて、死ぬほど驚いた。声を出そうとすると「ぎゃあ」という声しか出ない。

そうこうするうち、目の前の自分が、前蹴りを食らって倒れる。箕島先生が現れ、あおいがカラスである座間の飼育を主張した。

（ああ、そうか……… オレは、あの時のカラスやったんやな）

それから、カラスである座間は、あおいの世話を受けて育った。あおいは、カラスの頭型の手袋を使って、必死で世話をしてくれる。姿を見せないように、ケージを紙で覆い、親ガラスの声をテープで流す。

だが、子ガラスの座間には、誰が自分の世話をしてくれているのか、誰が自分を救ってくれたのか、よく分かっていった。あおいは、ちらちらと心配そうに、覆い紙のすき間から顔を見せるのだ。

（ありがとう。君がそう願うなら、オレは山へ帰るよ）

巣立ちの日。

子ガラスは、一気に飛び立った。

出来るだけ、振り向かず。出来るだけ、元気よく。

あおいが心配しないように。

真っ直ぐに山の麓の林へと飛び込んだ。しかし、そっと戻って見ているのだ。寂しそうに籠を抱えて帰るあおいを。涙を我慢して、自分の頬を叩くあおいを。

野生の生活は厳しかったが、なんとか冬を生き延びた。

春。恋敵を蹴散らして、妻を手に入れた。妻は口うるさいが、美

しいカラスだ。子供達も無事に巣立った。その年は食料が豊富で、2回子育てが出来た。

秋が深まり、また冬が来る。できれば、来年もまた今の妻と巣作りがしたい。

そう思った。

空からふと、河川敷を見ると、きらりと光る物がある。光り物は大好きだ。妻へのプレゼントにもちょうど良い。だが、くわえて引っ張ってみると、透明な糸が付いていてなかなか外れない。

（なんだこれは……）

口の中に痛みが走り、鋭い何かが突き刺さったのを感じた。さらに透明な糸が絡まる。喉が閉まる。

（しまった。これは……）

それは、河原にうち捨てられていた釣り道具であった。カラスで ある座間は、捨てられたルアーを飲み込んでしまったのだ。

意識が遠のく中、枯れ草を踏みしだいて近付いてくる人影があった。その姿がかるうじて見える。

（箕島……先生……）

抱き上げられる感触があつて、座間はふたたび暗闇へと意識が落ちていくのを感じた。

「う……うつ」

目を覚ますと、真っ白い天井が座間の目に飛び込んできた。
目を覚ます？

座間はハッキリしない頭を軽く振った。目を覚ました以上は、それまで寝ていたということになる。自分は、たしか小学校の屋上で葉団扇で火気を防ぎ、富堂君を守っていたはずだ。

ここはどこなのだろうか？

「やっと目を覚ましたみたいね」

声を掛けられて、ようやく側にいる人物に気がついた。

笑みをたたえて座間の顔をのぞき込んでいたのは、葉子であった。あおいであることを、少し期待していた座間は軽いため息をついた。

「あらあら。」

社長じゃないからって、その態度はないでしょう？ あたし、ずうと側にいてあげたのに……」

「え……あ……そらあ、すんまへん」

すると、葉子はくすくす笑って

「バツカねーあんだ。」

私がずつといたなんて嘘よ嘘。ずつといた社長はね、ホラ、そこ。」

言われて、頭を巡らせると……いた。

ちょうど座間の腰のあたりに顔を埋めて、こちらを向いて眠っている。

ベッドの横に座ったまま、寝てしまったらしい。

「あ、オレ、弁当……っというか残業！！ 仕事は！？どうなったんですやろ？」

「仕事はね。納期を伸ばしてもらったのよ。

こんな事故があったことだし、あなたは人命救助の功績もあるから、発注者も理解を示してくれたのよ。といっても、1週間だけだけれどね」

たった1週間であっても、時間を稼げたのは大きい。

普通なら今回のような仕事で、納期の延長などあり得ないのだが、その点に関してだけ言えば、今回の火事は文字通り怪我の功名と言えた。

「ふう……よかった……」

「何馬鹿言ってるのよ。仕事なんかより、あんた死ぬところだったんだから」

「え？」

「それに、あんなに必死で守っていた、富堂君の事は聞かないのね？」

「あ！ そっぴやあ……どうなったんです？」

「彼は火傷一つ負ってないわ。メダカたちも無事」

「そっぴやあ……よかった……」

「助かったから、そんなのんきな事言えるけどね。あの炎……物理的な熱だけじゃなく、霊体まで焼き尽くす特性があったみたいなの。座間君は、肉体の火傷はさほどではないけど、妖としての本体を激しく損傷したわ。」

一時は本当に危なかったのよ」

「そうや、あの少女……火気を操っていた、あの少女は何もんなんです？」

「そのことだけど……社長達には、少し黙っていて欲しいのよ」

「それは……どういう意味です？」

「あの妖……ただの火妖じゃないわ。正体を知れば、社長はきっと放っておかない。」

でも、たぶん、アレには誰も太刀打ちできないのよ」

「なんでそれが……分かるんです？」

「あんたが寝ている間に、ちよつと記憶を見せてもらったの」

「はあっ!？」

それでようやく座間も気づいた。

5年も前のあおいとの出会いを、夢で延々と見続けたのは、葉子の術のせいだったのだ。

「ま、ちよつとだけ余計な記憶も見せてもらっちゃったけど……それで、あの火妖の正体もつかめたのよ。」

もちろん、私以外の誰もその事は知らない」

「せやけど……」

「黙っていないって言うなら、私もあんたの社長への思い、黙っていないけど？」

「稲成先輩……まさかそんなとこまで、見はったんですか？」

「えゝえ。しっかり見させてもらいました。

半分冗談でからかったただけ……まさか座間君の気持ちは本物だったなんてねえ……七海ちゃん、かわいそ。」

「絶対誰にも言わんといて下さい。社長にはあの時、オレと会った記憶すらないんですから」

「だーから。あんた次第だっって言ってるでしょ？」

「ぐ……」

「座間君は、ただ黙っていてくれればいいのよ。あの火妖については、あたしがケリをつけてくるわ」

「だって……誰も勝てないって……？」

「ケンカしにいくワケじゃないわ。話し合いよ。」

言いながら葉子は、すっと立ち上がった。

「稲成先輩……」

「なによ?」

「お気をつけて……………」

「誰に向かって言ってるのよ」

葉子は後ろ向きのまま手を振ると、さっさと病室を出て行った。

§ 7 よだれ

§ 7 よだれ

「ふう……………」

葉子を見送った座間は、自分の腹の上で寝こけているあおいに目を落とした。

よほど疲れていたのか、ぐっすりと眠っているようだ。

それにしても……………」

乱れた髪。化粧つきのない肌。斜めにズレて片方だけ鼻息で曇ったメガネ。極めつけは、半開きの口元から、透明なよだれが……………」。

その寝顔は無邪気きわまりなく、好感が持てるのだが、5年前に見た修行姿の凜とした風情はカケラも見あたらない。

（うわ！よだれが！）

すでに布団に、直径10センチほどのしみを作っている。

無邪気なあおいの寝顔を、もう少し眺めていたい気持ちもあったが、このまま放置するとさらに被害が広がる恐れがある。

座間は、そつとあおいの肩に手を掛け、丁寧に起こす事にした。

「あんたら、何やってんの？」

仕事を終え、帰宅途中に見舞いに訪れた森いぶきは、病室に入る

なり呆れたような声を出した。

あおいが座間の上に乗っかり、キャメルクラッチをかけていたのだ。

「座間君が元気になったのと、お二人、仲が良いのは見て分かるけど……ヒマなら、会社で仕事手伝って下さいよ」

「だって、森主任！！ 座間君ったら、私の寝顔じっくり観察した拳げ句……」

笑ったんですよ！」

あおいは少し涙声だ。

さすがに恥ずかしいのか、よだれについて指摘された事は言わない。

「だ……から、すんまへんって……言ってるや……ないです……かはっ！」

「黙れ、女の敵い！！」

あおいは、さらに力を入れて、座間の顎に添えた手を引き絞る。

「社長！！」

やめてください！座間さん、死んじやいますよ！？」

いぶきの後ろから、悲鳴に近い声を上げて病室に飛び込んできたのは、伊園七海であった。

「あら、七海ちゃん。来てくれたの？ 心配だったでしょ？ 座間君、やっと意識を取り戻したのよ」

あおいは、座間の顎に手をかけたまま、さらに後方に体重をかけつつ、にっこり笑う。

「それは見れば分かりますって！ もうやめて下さい！！」

「まーまー。痴話ゲン力はそのへんにして、こっちの話も聞いてくれます？」

いぶきは、ほとんど棒読みで、無関心そうに二人を仲裁した。

「話？」

「社長、まず手を放して。せつかく助かったのに、死にますよ？それ」

座間は、泡を吹いて失神寸前であった。

「私の叔母様はご存じでしたよね？」

あおいがとりあえず技を解き、座間が息を整えるのを待って、いぶきが話し始めた。

いぶきの叔母とは、すなわち山姫の上位に当たる山神のことである。

あおいと七海は丸椅子に座っているが、体の大きないぶきには病室の丸椅子は小さすぎるため、座間のベッドに腰かけている。

「鷺田先生？もちろん知ってるわ。植物生態学の授業も受けたし………そういえば、座間君にとってはお義父さんの同僚になるのね」

本当は、座間も同じ大学に通っていたのだが、その記憶はあおいにはない。

むろん、共にやまこと戦った、キャンプ場での記憶もだ。あくまで座間は、箕島岳の大天狗・次郎坊の眷属である烏天狗であり、名字は違うものの、箕島教授が身寄りのない血縁から引き取った、義理の息子ということになっている。

「ええ、知ってます。和泉御前様………鷺田山系の山神やつたはずですね？」

「そう。その和泉御前様が、こっち方面におかしな気の集まり方をしている場所があるって、おっしゃっているんです」

「おかしな気？」

「気の流れって、山上から見るとよく分かるんですよ。

土気、木気、水気が、川の流れに沿って山から市街地へ流れ込み、自動車などの機械や、人間の生活から出る火気、金気と相剋して海へ消える。

この流れが、どこか滞っているらしいんです」

基本的に、自然界には山から海へ向けて、大きな気の流れがある。それ以外に、大気の大気対流に会わせた気の流れ、月、太陽などの天

体の動きに合わせた気の流れ、これらが複雑に絡み合って、一日の変化や、季節を作っているのだ。

その気の質は、木、火、土、金、水に分けられるのだが、大自然には、本来は火気と金気が少なく、木気、土気、水気が中心となっている。

「御前のおわすのは、ここから数百？離れた場所ですから、どこがどう、とはいえないとおっしゃるんですが、どうも、こちらの気の流れが普通ではない……と」

「山神様のおっしゃる事だから、間違いはないんでしょうけど……その話だけじゃあ、どうにも動きようがないわね」

「ええ、でも、そこで気になるのが今回の火事です」

「火事？座間君の会った火妖が、何か関係があるかも知れないってこと？」

「ただの火妖なら、関係ないと思いますけど……」

本来火の気のない小学校に火気を溜めて、あれほどの大火事を起こすなんて、ちょっと普通では考えられないと思いませんか？」

「……………そういえば、土気を操り、火気を打ち消す術を得意とする座間君が、手も足も出なかったつても、変と言えば変ね」

二人は一瞬顔を見合わせると、じろり。と座間を睨んだ。
何か知っている事があるなら話せ、と言わんばかりの表情だ。しかし座間としても、黙っていると葉子に釘を刺されて、一時間も経たないうちにしゃべってしまうわけにもいかない。

座間は、わずかに何を言おうか戸惑って、口を開いた。

「……………ちょい待つて下さい。
オレかて、いっぺん戦っただけで、アイツが何者かなんて分かり
やしまへん。せやけどアレが何もんか、いう事より、ホンマにこの
土地の氣の流れがおかしいんか、いっぺん調べてみたらどうですや
ろ？」

「あら？何よ、その間は？」

座間君、あんた何か隠してない？」

座間の返事に不自然さを感じ取ったのか、あおいが目を見つめな
がら詰め寄った。

「そーね。今の反応は、ちょっと不自然かな？」

いぶきも、目を細くして座間の胸の裡を見透かすように見つめて
いる。

すると、座間の様子を見かねたのか、詰め寄るあおいと座間の間
に七海が無理矢理割り込んだ。

「なんですかお二人とも！　まるで座間さんを怪しむみたいに。

座間さんが何かご存じなら、こんな重傷を負う理由なんか無いは
ずじゃないですか！」

「七海ちゃん、だまされちゃダメよ！　この男、さっき確かに何か
隠している表情だったんだから！」

あおいが、ビシッと座間の顔に人差し指を突きつけながら言う。
座間はほんの一瞬迷っただけなのだが、あおいの観察力は超人的と
言えた。

「いやいやいや、いったい何を隠すいんですか
さっき言った通り、ヤツの正体なんかサッパリ分かりまへんて！」

それは嘘ではない。

ただ、葉子は座間の記憶を見て、火妖の正体が分かった、と言い、座間にはその記憶を黙っておけ、と言った。

つまりは、あの戦いの記憶の中に火妖の正体を見極める、大きなヒントが隠されているはずなのだ。ああい達には何も言わないまま、座間は秘かにそのことを考えていた。

（そついや、降魔の剣が効かへんかったんやったな……………その割に、葉団扇は多少効果があったんや。もう少し周りに土気があったら、いい勝負できていたかも……………）

それが、あの火妖の特徴と言えば、特徴であろう。

（それにしても、稲成先輩が誰も太刀打ちできへん……………って言わはったからには、相当強力な妖やってことや、いや……………どんだけ強力でも妖やったら、オレ達……………五尾の妖狐と山姫、烏天狗が力を合わせて勝てへん妖なんぞ……………）

「あー！」

「どうしたのよ。おっきな声出して？」

思わず大きな声を出した座間は、思わず口を押さえ、頭を回転させた。

何とか誤魔化さなければ……………

「いや、そういえば、

オレはあの火事の中から、どうやって助かったんですやるか？」

「あーそうそう。その事だけど、

座間君、七海ちゃんにお礼言いなさいな。後でケルピーにもね」

言いながら、いぶきが座間をじろりと睨む。

「ええ？」

「社長が、現場でおろしている間に、

ケルピーが一人で会社まで、私達を迎えに来てくれたのよ」

ケルピーとは、社有車のビッグホーンを依り代としている水妖である。つまり、無人のビッグホーンが、夜の市内を走っていぶき達を迎えに行った、という事らしい。

「アイツ……まさか、一人で走れるんですか？」

ケルピーが車に憑依してから2ヶ月ほど経つが、それまで、誰も運転しないで勝手に走るような事はなかった。

「そうみたいね。私もビックリしたけど。それで、全員でケルピーに乗って駆けつけたんだけど

むしろその後が、七海ちゃんとケルピーがすごかったのよ」

現場に着いても、七海は一人で車内に残ったのだ。

そして、燃える校内にそのまま突入。一階の消火栓をケルピーが確保し、水を霧状に変えて屋上まで走らせた。その水気の流れに乗って、七海が屋上までたどり着いたというのだ。

「……………なんて無茶を……………」

それを聞いて座間は絶句した。

七海もケルピーも水妖であるから、火とは相剋である。つまり、火を剋する代わりに、強すぎる火からは逆にダメージを受ける。ひとつ間違えば、七海もケルピーも死んでいたかも知れない。

二人の危険を冒しての、救出劇のおかげで、座間と富堂君は助かったのだ。

「七海ちゃんが屋上に着いた時、まだ火妖が土気結界の周りをうろついていたらしいからね……………七海ちゃんがケルピーから水気の補給を受けながら、ありったけの水気で攻撃して、ようやく逃げたらしいよ」

「二人がかりの水気？それで、逃げた……………だけなんですか？」

「どしたの？」

あおいが怪訝そうに座間を見る。

「あ、いえ……………伊園さん、助けてくれてほんまおおきに。せやけど、今後はあんまり無茶せんといてや？」

「いえ。私は、座間さんをお助けできただけで……………」

俯いて真っ赤になった七海は、語尾を濁らせ、もじもじとシャツのボタンをいじっている。

眼鏡を掛けたおとなしい文学系少女、といった雰囲気の彼女が、そんな激しい救出劇を演じて見せたとは、とても信じられない。

「ひゅーひゅー。座間君、いいわねー。私、七海ちゃんみたいな彼女が欲しいなー」

「しゃ……社長、私は座間さんの彼女ってわけじゃ………」

あおいがやし立て、七海はますます赤くなって下を向いた。しかし、その様子を見ながら座間は、また別の事を考えていた。

（普通の火妖が水気なんか食らうたら、一瞬で消されてまうやら……ましてや伊園さんの力に、ケルピーの水気がプラスされとったら……）

「なあに？座間君、難しい顔して……どっか痛むの？」

気づくと、三人とも心配そうな顔で座間を見つめている。

「いやいや、そうやないんですけどね……あの火妖の正体、何者なんやろ、思いました」

「いい加減なビオトープには、はぐれ妖怪が住み着く事がよくあるし、屋上で高温になったところが気に入って、火妖が居着いただけじゃない？」

「まあ、そういう妖怪でも、たまに強力なのがありますからね。座間君は、運が悪かったんでしょう」

直接火妖を見ていないあおいといぶきは、それぞれお気楽な推測を口にした。

「で、でも……………」

「なあに？七海ちゃん」

「あの火妖……………どこへ行ったんでしようか？
あれだけの力を持つ妖怪を……………野放しにしちゃって、よかった
んでしょうか？」

「まあ、良かあないでしょうけどね。

逃げちゃったもんは、どうしようもないんじゃないかしら？ 私
達は真つ当な営利企業であって、妖怪退治を生業にしているワケじ
ゃないし」

あおいは野良妖怪の行方にまでは、全く興味がないようだ。

（ほんまに……………逃げたんやろか……………）

その点においても、座間には引つかかるものがあつた。

「でも、社長……………和泉御前の仰っている、このあたりの気の流れ
の異常の原因がアイツやったら、放っておくワケにはいかんのやな
いですか？」

「それにしたって、私達が何とかしなくちゃいけない理由はないわ
よ。業務上、気をつけなくちゃいけない、とは思っけどね。

ま、難しい事は後にして、とにかく余計な心配しないで、座間君
は体を治してよ。

仕事の方も、納期が延びたおかげで間に合いそうだし」

あおいは、すでに一件落着といった表情である。

「はあ……まあ、とりあえずは養生させてもらいます」

「んーじゃ、そろそろ引き揚げよっか。」

あんまし長居して、座間君を疲れさせるといけないし」

それを聞いて、いぶきと七海は顔を見合わせ苦笑いした。

怪我人にプロレス技を掛けていた人間の言う言葉ではない。それに、ふらつと立ち寄ったように見せているつもりらしいが、そもそもあおいは、昨夜から泊まり込んで座間を看病していたのだ。

しかし、座間をゆつくり寝かせるべきなのは間違いない。

「ええ、それじゃ帰りましょう。社長、どつかでご飯、食べて行きます?」

「いーわねー。私、そういえばお腹減ってたんだったわ」

来た時以上に騒がしくあおい達が帰って行き、しんとした病室で、座間は自分の考えを整理していた。

（まず、アイツはおそらく火妖やない。『火を能く使う』だけで、火気そのものの化身である火妖とは違うんや）

そうでなければ、ケルピーと七海の水気を受けて、タダで済むわけはない。

火妖とされる妖怪には、鬼火やふらり火、つるべ火などが知られている。が、これらは陰界の存在が、現界の炎や熱、すなわち火気そのものを依り代としている場合が多く、生物や鉱物、道具や機械が依り代となった妖怪とは、少々趣が違うのだ。

（それと……俺達が束になっても敵わない存在いうたら……そもそも、妖怪やない可能性もあるわけや……）

ただ、仮に妖怪ではないとしても、いったい何者なのか？

さすがに、そこまでは座間にもよく分からない。これ以上考えてみても、座間に答えは出せそうになかった。

なにしろ、座間は烏天狗といえども実際には妖怪歴が数年間と浅いのだ。妖怪に関する知識は、大天狗・次郎坊から教わった事がほとんどである。

葉子がすぐに正体に気づいたということが、大きなヒントになりそうだったが、葉子は齢四百年の妖狐である。その経験や知識と、駆け出しの妖怪である座間の付け焼き刃的な知識では、まったく比較にもならない。

（ま、ええわ。稻成先輩は話し合いや言うてはったし。

少し心配やけど、なんかあってもあの人ならきつと大丈夫や。無事に帰って来はったら、こっそり説明してもらおか）

座間は考えるのをやめ、とりあえず眠る事にした。

§ 8 圓野組

§ 8 圓野組

座間が病室で眠りについたのと、ちょうど同じ頃……

圓野組の自社ビル、その最上階にある役員室には、まだ煌々と明かりが灯っていた。

豪壮な社長席の前にしつらえられた会議テーブルには、後藤副社長をはじめ、数人の幹部らしき人間が座り、その中には前田常務の顔も見える。

「大変な損害だな？」

肘掛け付の大きな椅子に座った圓野組の代表取締役社長、圓野明德は、後藤副社長の方へ不機嫌そうな顔を向けた。

明德は、年齢は50代後半といったところか。

身長はさほど高い方ではなく、体格も中肉中背。

薄い白髪混じりの頭髪を七三に分け、半袖のワイシャツにノーネクタイという格好である。

こう書くと、ぱっとしない中年男、といったイメージが浮かぶが、一つの会社を背負う責任感からか、全身から圧倒的な存在感が滲み出している。幹部連を見据える鋭い眼光は、獲物を狙う虎のそれに近い。

しかし後藤は、虎の眼光に臆する様子もなく、立ち上がった。

「は。消防署によると、おそらく放火ではないか、ということですが、完成検査前であることもあって、当社の管理責任は問われるでしょう」

後藤の表情は硬い。

「まだ、太陽光発電装置も風力発電も試運転前でしたから、発注者としては、当社での入れ替え対応を希望してくると思われます」

後藤に続いて、立ち上がって口を開いたのは、工務部の宮後部長だ。

「契約条項から言いまして、当社はそれに応じる義務があるものと思われます」

「火災保険を……掛けていなかったそうだな？」

「いえ、そんな事はございません。」

もちろん、建設工事保険は掛けておりましたが……別発注の発電施設については、機械器具組立保険の対象でありまして、そちらに実は、火災についての補償内容が無く……」

「もういい。」

何にせよ、お前達のミスで、当社が三千万の損失を被る事に変わりはないのだろう？」

宮後部長は、答える代わりにうなだれたまま座った。

施工途中の事故や災害対応は、施工業者の責任となる。こうした場合は、普通は現場保険でまかなわれる事が多いが、今回の場合、保険の掛け方に不備があつて、まかないきれない部分が数千万円、圓野組の負担となりそうなのである。

その時、役員室のドアが大きな音を立てて開いた。

「おやおやあ、我が社の親愛なる幹部のみなさん。夜遅くまでご苦勞様です。しかし、いけませんなあ。なにを揃って辛気くさい顔しておられるんですか？」

「遅いぞ志波あ！！貴様、幹部会議をなんと心得ておるか！！」

後藤副社長が、怒りの声を投げつける。

へらへら笑いながら入室してきたのは、第三営業課長の志波であった。黒縁のメガネに四角い顔。ストレートの髪が斜めに額に掛かっている。地味な色のズボンは、サラリーマンらしい服装といえたが、微妙に派手な色合いのボタンドアンのシャツは、いくらクールビズといえども、少々軽薄過ぎる印象を他人に与えていた。

「いやあ、副社長。そんな怒らないで下さいよ。」

今回の議題は例の火事でしよう？ 遅れてきた代わりに、すこおし後始末に有利な話をつかんできたんですから」

そう言つと志波は席にも着かず、会議テーブルに寄りかかったまま、社長席に向かって軽くウインクを飛ばした。

「聞かせてもらおうか？」

「なあに、簡単な話ですよ。」

当社の事情を教育委員会に率直に申し上げたんです。今回被害を受けた機材その他の代金を、こちらで持たせていただく代わりに、火災後の新校舎の建設の際に、入札情報を少おし流していただければ、話を付けてきたんです」

「な……なんだと！？」

その場の全員が息を呑んだ。

小学校の新築工事ともなれば、少なくとも十数億円単位の案件になる。

もし受注できれば、改装工事の火災対応など安いものだ。

「あんた、まさか役人に袖の下を渡したのか?!」

背の低い真面目そうな男性が立ち上がり、顔を真っ赤にして志波に食ってかかった。

「このご時世、万が一そんな事が公になったら、会社自体つぶれかねんぞ!? 極秘で経理処理するこっちの身にもなってみろ!」

「静かに話したまえ、塗倉経理部長。どこに耳があるか分からねだぞ?」

低くドスのきいた明德の声に、塗倉部長は思わず口を手を当てた。

「会社の利益のために、有効に金を使ったのならば、別にかまわん。新しい仕事が確保できそうなのも、喜ばしいと言っていい」

「さあすが社長!話が分かるなあ」

志波は、顔の前でぽんと手を叩いて、にやりと笑った。

「これは私の経営判断だ。お前にほめてもらういわれはない。だが、先走って勝手なマネをした事は、問題だぞ?」

「いやーははは、でも少し早とちりですよ。私は、袖の下を渡した

なんて一言も言っていないでしょう？

「ほう……金を使わずに話をつけたのか？」

「お金なら、当社の被った3千万があるでしょう。恩の着せ方つても営業のウデですよ。で、ね。社長？話が分かるついでに、ひとつお願いがあるんですが……」

「何だ？言ってみる」

明德は、にやりと笑って志波を促した。良い方に期待を裏切られ、かなりご機嫌になったようだ。

「今後、こういう事故や災害系のトラブルがあつたら、後始末はすべてウチの課に任せていただけませんかねえ」

志波は、下手に出るような物言いをしながら、大胆なことを言い出した。

本来、災害や事故の解決は総務の仕事である。営業が、損得勘定だけの対応でできる仕事ではないはずだ。しかし、それを聞いた明德は面白そうに笑った。

「こうした対応に、自信がある。と言いたいわけだな？ いいだろう。会社に損を与えない範囲でなら好きにするがいい」

「ありがとうございます。まあ、ご覧になっていて下さい」

志波は胸の前に手をやり、大げさにお辞儀をして、退出していった。

「気に入らねえな……」

会議を終え、副社長室にもどった後藤は、前田常務と二人でコーヒーを飲みながら話していた。

「あの、志波とかつて第3営業課長のことですか？」

「おうよ。別業界からの転職で中途入社だってえ割には、この業界の裏側を知りすぎてやがる」

「へらへらした態度のくせに、妙に切れすぎるのも問題ですね」

前田も、志波の一挙手一投足を思い出そうとするように、目を細めた。

「お嬢の会社への支援打ち切りを社長に進言したのも、アイツだって話じゃねえのか？」

後藤はいかにも気に入らないといった風情で顔をしかめ、コーヒを一気に飲み干した。

「それは聞いていませんが……社長は妙に彼を気に入っているようですね」

「アイツ……人間だよな？」

「ま、私の見る限りでは、妙な妖気は感じませんけどね」

「そうか……まあ、俺達は建前上サラリーマンだ。」

会社の決定権はすべて社長にある。ヤツが化け物だってんなら、オレ達にもなんとかしようもあるってもんだが、人間ならどうしようもねえ……………」

「彼が人間であつても、出来る限りの事はすべきですよ。私達は先代には、言葉に尽くせない恩義がありますからね」

「そう……………だつたな。俺達を創つた行者様が昇天なさってから千年ずっと、はぐれ鬼だった俺達を拾つて下さったのが、正平様だったな」

「お嬢の会社への処遇も含めて、正直、明德社長のやり方には、ついて行けない部分もありますが……………」

「なあ義覚……………それよりよ」

後藤は前田に向き直り、声のトーンを落としてひそひそ声で言った。「義覚」とは前田の真の名のようである。

「今回の火事、夜中だったのに怪我人が出たそうじゃねえか？
本人の希望で名前は公表されてないらしいが……………ソイツ、いったい何やってたんだろうな？」

「さあ？ なにか、中にいた子供を助けようとして大火傷を負ったとか……………」

「そもそも、夜中の学校に子供がいたつてのが不自然だろうがよ？
放火だつて割には、犯人も特定できかけりや、そもそも火元も分かってないらしいし……………いったい何が起こったんだろうな？」

後藤は、窓際に行くと市内の夜景を一望できる窓の外を眺めた。

「相変わらず立派な建物だな……………」

目の前にそびえているのは、県下有数の上場企業、八杜商事のビルだ。

市街中心地とはいえ、地方都市である。十階を越えるビルは、数えるほどしかない。

その中でも、この建物の豪壮さは群を抜いていた。

「そついや、今の社長が名を上げたのは、あのビル建設の受注からだったな」

このビルの受注までは、圓野組は、これほど大規模な建設工事の施工経験は無かった。

今の社長、つまり圓野明徳が経験豊富な技術者を次々に雇い入れ、様々な技術提案やコストダウン案……………さらに表裏の営業活動を駆使した結果、ぽつと出の圓野組が、並み居る中堅クラス以上の地場ゼネコンを出し抜いて受注したのだ。

「先代は、あのビルの建設自体にも反対しておりましたがね……………」

「そついえば、そうだったな。」

先代はずいぶん、ご立腹だった。なぜ、そんなに反対しておられたんだろうな？」

「分かりません。ただ……………位置が良くない……………そうおっしゃっていました」

「へえ……………位置が……………な」

後藤は鬼ではあるが、陰陽道や気の流れについて詳しいわけではない。つぶやいてはみたものの、先代圓野正平の意図までは、到底理解出来なかった。

「座間君!!」

翌朝、突然あおいが病室に飛び込んできた。走ってきたのか、息を切らせている。

午前の回診で、主治医と退院の日取りについて話していた座間は、驚いてあおいを見た。その姿を見て、座間はようやく、自分の携帯の電源を切つてある事を思い出した。

「どうしはったんですか、社長？」

「稲成さんと、七海ちゃんが……行方不明なの」

「はあ!? 何言つてはるんですか？」

二人とも、若い女性の姿はしていても、その正体は妖である。滅多な事で事件や事故に巻き込まれるはずはない。

「今朝、二人とも会社に出てこなくて……携帯に電話しても稲成さんは出ないし、七海ちゃんも昨夜から帰ってないって」

葉子は一人暮らしであるが、七海は家族と住んでいる。

七海の家族は、ここのとこ泊まり込みの仕事もあったので、そうした理由だろうと考えて、心配していなかったというのだ。だが二人とも、会社や家族へ何も言わずにいなくなるようなタイプではない。

「そんな………こうしちゃおれんわ……先生、オレ、今すぐ退院しますわー!!」

「無茶を言っちゃいかん。

今も話していただろう？ 何をする気が知らないが、退院は明日以降！ それも条件は、毎日の通院と自宅療養だと言ったはずだ。君は、昨日まで意識不明で、ほんの2日前まで生死の境をさまよっていたんだぞ？」

「でも、オレの回復力は先生も認めてくれたやないですか」

「たしかに、君は見た事もない早さで回復している。

しかし、皮膚が治っているからと言って、内臓に負担がないとは思えない。若いから分らないだけで、検査結果に出ないダメージもあるんだ。行方不明のご友人には気の毒だが、警察に任せてはどうかね？」

医師の言う事はもつともであった。

座間は烏天狗である以前に、人間でもある。見た目ほどには、体力も霊力も回復していないというのが事実であろう。

しかし、妖怪である七海や葉子が人間に後れを取る事は考えられない以上、相手が何者であれ、人外としか考えられなかった。そしてこのタイミングであれば、それはあの手強い火妖であるに違いない。

警察がそんな妖怪に太刀打ちできるはずもないし、それどころか、そもそも二人を見つけ出せるとも思えない。

「先生がなんと仰られようと……オレが行かなあかんです。ご迷惑はおかけしませんよって……お願いします」

座間は、真っ直ぐに担当医師を見て頭を下げた。

「そこまで言うならば、止める事は出来ないが……服薬を忘れない事と、休息を充分にとることを条件に退院を許可しよう。もちろん、毎日通院する事。

それでも、何かあったとしても責任はとれないからね」

「ありがとうございます」

座間とおいは、同時に深々と頭を下げた。

§ 9 行方不明

§ 9 行方不明

「三人は、あれからどうしはったんですか？」

「三人でファミレスに行つて……食事の後、すぐ別れたわ。少し日程的に余裕が出来たから、しばらくは徹夜作業もやめておこうつてことになったからね」

あおいと座間が話しているのは、トープスの社内である。応接セツトに、あおい、座間、いぶき、真菰の4人が揃つて座り、状況整理をしているのだ。

「七海ちゃんは電車通勤だから、会社の前までは私が送つてあげて……それからは、どうしたか分からないわ……」

一番可愛がつていた後輩の安否が分からないとあつて、いぶきの表情は暗い。

しかも、最後まで一緒にいたのが自分とあつては、相当責任も感じているのだろう。

「……七海ちゃんに、もしもの事があつたら、私……」

普段は気の強い姐御肌のいぶきも、今回ばかりは元気がない。

「社長、真菰専務、森主任、オレの考えを聞いて下さい。ただし、当たっているかどうかはわかりまへんけど……」

いきなり言い出した座間を、三人は驚いて見つめた。
座間も、こういう事態になってまで、隠し事は出来ないと決心したのだ。

「まず、今回の二人の失踪は、あの火妖のせいやと考えてええと、オレは思います。」

「どうして、そう言い切れるの？」

「じつは昨日、オレの病室を出て行く前に、稲成先輩がヤツと話し合いに行く、と言って出て行かれたんです」

「ええ?!」

「稲成先輩は、意識のないオレの記憶を術で読み取って、アイツの正体をつかんだと言うてはりました。その正体までは言わはりまへんでしたけど……放っておくワケにはいけない、と」

正確には、あおいが放っておかないだろう、と言っていたのだが、そのことは言わない方が良いでしょうに思った。

「稲成先輩は、アイツに会いに行かはって、何らかのトラブルに巻き込まれたんですやろ。」

伊園さんのことはよく分かりまへんけど……どちらにせよ、もう一回、貴田小学校へ行ってみなあかんのちゃいますか？」

じつと目を瞑って座間の話を聞いていた真菰専務が、ふっと目を開け、口を開いた。

「座間君。君の言う通りかも知れませんが……現場へ行く前に、少

し君の記憶とやらを話してくれませんか？」

座間は、自分の覚えている限りの事を話した。

葉団扇の最初の一撃で、火事が鎮火しなかった事。

白装束の少女が、自殺した生徒とそっくりであった事。

少女は屋上にいたわけではなく、階段を上ってきた事。

あおいの火気結界は、かなり効果を発揮した事。

しかし降魔の剣の一撃は、全く手応えがなかった事。

そのくせ、葉団扇での土気の放射は、一瞬であったが効果があった事。

自分の推測は極力省き、事実のみを細大漏らさず伝えたつもりであった。

「ふむ……で、そこへ伊園さんが駆けつけ、君たちを救い出した、というわけですね？」

「はい……その辺の記憶は、オレにはないんですが………」

「この情報だけで、稲成さんは相手の正体を理解した。逆にその辺がヒントになりそうですね」

「それなんです……オレの考え、言うてもええですか？」

「何よ？」

「まず……アイツは火妖やない。そう思うんですわ」

「はあ？なんでよ？」

「社長もケルピーと戦ったなら分かるでしょう？」

アイツのパワーはハンパやなかった。火気そのものを本体とする火妖が、ケルピーの強力な水気を食ろうたら、ひとたまりもなく消滅しますわ。ましてや伊園さんの水気もプラスされとるんですやろ？」

「なるほど……………」

「そやのに逃げただけ、いうのがすでに変なんですわ。つまり、火妖やなくて火を能く使っただけかも知れまへん。それと……………降魔の剣が効かない相手……………ちゅうのは、幻でなければ、剣と同属性の気を持つ者だけですやろ？ 降魔の剣は土気やない。大天狗様の神気がベースになってます。

「そしたらアイツは妖怪じゃなくて、神霊やちゅうことになるんと違いますやろか？」

「……………」

座間が話し終えると、その場を沈黙が支配した。
誰も……………特にあおいは、驚いて座間を見つめていた。いつもお気楽な雰囲気の間が、真剣に論理立てて推理するのも意外なら、誰が考えても筋が通っているように思える推理を展開したのも意外であつた。

「座間君、君の推理を私も支持します。

ただ、それだけではどうして稲成君が正体まで特定できたのか分かりません。また、社長の結界が効いた理由も謎です」

「現場に……………行ってみるしかないわね」

あおいは、誰に言うともなく呟いた。

貴田小学校は、全焼であった。

とはいえ、鉄筋コンクリートであるから建物自体は残っている。

火事から数日しか経っていないため、立ち入り禁止となっていたが、市役所の入堂部長にお願いし、被害状況の調査の名目で入らせてもらえるよう教育委員会に口をきいてもらったのだ。

農村整備部の入堂部長が、別の部署にまで働きかけてくれたのは、先日のケルピー騒動の事があったからだろう。

「……酷い状態ね」

あおいは、あらためて惨状を確認し、眉をひそめた。

建物に一步踏み込むと、合成樹脂の焼けた臭いが鼻を突く。床は消化剤や放水で、まだびしょ濡れである。真っ黒にすすけた壁は、熱でコンクリートが剥がれ落ち、鉄筋がむき出しになっている箇所もあって、火事のすごさを物語っていた。

「結局、無事だったのはここだけですか」

取り壊す事になっていた、屋上ビオトープだけが燃え残っているのが、あまりにも皮肉であった。

火事が思う存分燃やし尽くし、火気が散ってしまった今では、高温になる事もなくなったためか、メダカも元気いっぱい泳いでいる。

「稲成君は………ここに来ていませんね」

真菰専務が、ぽつりとつぶやく。

「どうして、そう言えるの？」

「もし稲成君ほどの妖狐が、正体を現して戦ったなら、一日やそこらで妖気は消えません。しかし、ここには妖気どころか火気すら大して残っていない」

「オレもそう思いますわ。」

あの時と思うたんやけど……アイツ、ここに巢食うとるわけやなさそうなんですわ」

「それは、どうしてよ？」

いぶきが怪訝そうな顔で聞く。

「いや、これはオレのカンでしかあらへんのですけど……」

「座間君、あんな状況でよく気づいたわね………でも、変なのよね。」

なーんか、さつきから座間君にしては出来すぎじゃない？ あなたに色んな確信めいたものを抱かせた、何かがあるんじゃないの？」

あおいは、ふたたび座間に不審の目を向けた。

「いやいや、何を言わはるんですか。そんな言いがかり………」

座間は必死でとぼけようとした。もちろん、葉子との約束もある。

しかし、それよりも葉子の言っていた事が気になるのだ。

『正体を知れば、社長はきっと放っておかない』

『おそらく、誰も太刀打ちできない』

あおいが、あの少女に挑めば、おそらくタダでは済まないのだ。葉子が体を張って止めようとしていたのは、その事態だ。皮肉な事に座間の推理は、葉子の言葉から確信を得ていたと言っている。しかし、あおいも引き下がる様子は全くない。

「言いがかりかどうかは、私が決めるわ。

何度も言わせないで。あんたが隠している事、洗いざらいしゃべりなさい！」

「社長、少し待って下さい。とにかく、今までの情報を整理しましょう」

つかつかと歩み寄って座間の胸ぐらをつかみ、問い詰めるあおいを、真菰専務が横から口を挟んで制した。

「あれが神霊であり、火妖ではないこと、それでも火気を能く使い、座間君を苦しめた事、稲成君が、一人でなんとかしようとしたことから考えると……………正体はおそらく、神使の狐ではないでしょうか？」

「神使？でも、それならどうして、人間をとり殺したり火事にしたりするの？」

「人間が、何か大きな粗相をしでかしたとすれば、辻褄が合います。

稻荷大明神は五穀豊穡の神で、御利益のある非常に穏やかな善神ですが、稲荷神社は全国に数万もあると言われていて、それらすべての社に、顕現しておられるわけではありません。

そうした社は、基本的に神使が守っていますが、神使は本尊とは違って、様々な性格、由来のものがいます。稲荷の社を粗末に扱ったせいで祟られたという話も、無いわけではありません。」

「それにしても、狐やったら稲成先輩にとってはお仲間ですよ？
なんで、話し合いが通じへんかったんやろ？」

「相手は神使、つまり善狐です。」

しかし、稲成君は稲荷大明神に仕えているわけではない妖狐です。正邪で言えば、稲成君の方がむしろ邪ですから、たと言いつ分が正しかろうと、相手が言う事を聞かなかった可能性はありますね。」

「じゃあでも、その神使のいる場所って、稲荷神社？ってことですよ？

それって、どこなんでしょうか？ それに、どうしてそんな離れた場所の神使が、小学校にまで来るんです？」

いぶきの言う通り、真菰専務の推理ではそれらの謎は解決しない。

「可能性として考えられるのは、この小学校がその神社から見て、南に当たっているんじゃないかってことね……………」

「南？」

「二十四方位で、火気は南に当たるのよ。」

ここを南とすれば、真っ直ぐ北には県下最大の河川、葛流川よ。つまり、二十四方位の水気が山から常に供給されてるわけ」

あおいは、落ちていた炭化した角材で床面に図を描き始めた。

「じゃあ…………東西は…………」

「東に大きな森、西には工場群があるわね。それが木気と金気の供給源と言えなくもないわ。火気は、べつに集めたわけじゃないのよ。ある場所で各方位から強い気を取り込もうとすると、陰陽のバランスが崩れて、自然に一カ所に特定の気が集まる、と考えたらどう？」

「だから、地域全体の気の流れが滞ってしまったというわけですか。しかしこれだけでは、その場所がどこかは分かりませんね……………」

真菰専務の言う通り、たしかに、川も森も工場群も広大である。小学校の位置からだけでは、神使の狐が住み着いている場所は分からない。

「それに…………市内にはかなりたくさんのお社がありますよ？ 小さな祠も合わせると、大変な数です」

「…………森主任、例の小学生…………富堂君から話を聞けないかしら？」

しばらく腕組みをして考え込んでいたあおいは、思いついたようにいぶきに聞いた。

「そりゃ…………連絡先は聞いてますし、座間君にお礼を言いたいかで、電話しても不自然ではないですけど」

「稲成さんと七海ちゃんが心配なの。一刻も早くその狐の居場所を探し出さなきゃ。今すぐ、電話して!」

あおいは真剣な顔で、いぶきに詰め寄る。

しかし、それを見た座間は、あわてて二人の間に割って入った。

「ちょ………ちょちょっちょい待って下さい!」

「何よ!？」

「社長……稲成さんがその神使に倒されたとして………そんな強力な神霊と、どうやって戦わはるつもりなんですか？」

たしかに、あおいの持つ術は齡四百年の妖狐である葉子のそれには、遠く及ばない。葉子が敵わなかった相手と、まともに戦える道理はなかった。

「だったら放っておけて言うの!？」

「そうは言つてまへん。

ただ、今の様子やったら、社長は何の対策も戦略もなしに、相手の居場所にすっ飛んでいきそうやったやないですか。」

「座間君の言う通りです。

ケルピーの時も、社長は一人でカタをつけようとされて、危うく食われるところだったそうではないですか。」

「………そりゃあ………そうだけど………」

「社長。約束して下さい。決して一人で先走らない事。それと、い

ざとなつたらご自分の命を一番に考える事です」

「……………分かつたわよ」

「では森主任、その小学生に連絡を。座間君は、次郎坊様……箕島教授に連絡を入れて下さい」

「箕島先生に？」

「残念ながら、私がヘタに動けば、稲荷大明神の不興を買って、却って面倒な事になりかねません。大天狗様なら、神霊への対処法をご存じかも知れませんからね」

§ 10 石の塔

§ 10 石の塔

二十分ほど後、富堂君は担任の佐倉井教諭とともに校庭に現れた。どうやら、命の恩人である座間に連絡を取ろうとしていたらしい。箕島教授は忙しいようで、後で連絡することであった。

「重傷とお聞きしたのに、もう退院されたのですか？」

大した怪我でなかったようですね。うちの児童を命がけで救出して下さい、本当にありがとうございました」

「座間さん、あの時は本当にありがとうございました」

口々に座間に火事からの救出の御礼を言う二人に、横からあおいが話しかけた。

「富堂君……じつはその火事の事で話があるの。」

例の牧村さん……だっけ？ 自殺したクラスメイトの女の子のこと、少しだけ聞きたいんだけど………」

それを聞いた富堂君は、急に表情を硬くして俯いた。

佐倉井教諭も、警戒した表情になる。

富堂君はともかくとして、佐倉井教諭は責任上、全くの部外者であるあおい達に、そうしたことを軽々しく話すわけにはいかない立場にある。警戒するのも無理もない事と言えた。

しかし、寸時俯いていた富堂君は、すぐに決心したように顔を上げ、おずおずと口を開いた。

座間の正体を知り、牧村さんの姿をした妖から命がけで救ってもらったことが、富堂君の迷いを振り切ったようだった。

「……ごめんなさい。牧村さんが死んだのも、火事が起きたのも……もともとは全部、僕が悪いんです」

「な……なんだって？」

それを聞いて、一番驚いた様子を見せたのは佐倉井教諭であった。

「先生、富堂君に話してもらっても、構いませんね？」

あおいに促されて、富堂君の話し始めたのは、次のような話だった。

昨年の二学期……校舎はエコスクールの改造工事の真っ最中。

校庭の隅には、小さな林があった。

林といっても、木の数は20本程度。とはいえ、古い大木は数本しかなく、狭い場所に下草や低木が密生していたため、ほとんど誰も踏み込まない場所であった。

そして、エコスクールの工事と耐震工事の準備のため、工事車両の通路等のスペース確保を理由に、伐採が決定したのであった。

「よし。全員揃ったな。今から、あの林の周りの掃除をするぞー」

佐倉井教諭は、大きな声で当時5年生だったクラス全員に指示を出した。

伐採も清掃も、そのまま業者に任せても良さそうなものだったが、外部の人に、あまり酷い状態で見せたくはない。との校長の意向だったのだ。えんじ色と白の体操服を着た三十人ほどの生徒達。その中に、牧村さんと富堂君もいた。

「あたしねー。もっとたくさんメダカを殖やして、ビオトープに放すの」

「バツカだなー、牧村あ。メダカなんてビオトープ池に放したら、いくらでも殖えるんだぞ？」

「ええ？そうなの？」

富堂君と牧村さんは、同じ2班であった。

2班は、林に踏み込んだ、真ん中あたりのゴミ拾いが担当だった。

「なんだこれ、すつげえ草だな。こんなの、適当にやって引き上げようぜ？」

「ダメだよ。富堂君。きちんと掃除しないと、工事の人達が困るよ」

二人は、家が近所でもあり仲が良かった。なんとなくお互いに意識しながらも、まだ距離感をつかめないでいる。そんな関係だった。

「あれえ、なんだこれ？お墓があるぜ？」

富堂君たちの班の一人が見つけたのは、小さな石積みだった。

かなり大きなヒサカキの茂みの中に、墓……というか、いくつかの石を組み合わせて作った、塔のようなものがある。高さは50センチもあつただろうか。

「おい、この石動くぜ？ 積んであるだけみたいだ」

2、3人の男子が、ふざけて石積みを崩し始めた。

「誰かが遊びで作ったのかな？ でも、けっこう古そうに見えるなあ……」

「みんな、やめなよぉ！！ もし、昔の人のお墓だったりしたらどうすんの！？」

「なんだ牧村あ、おまえ、怖いのかよ？」

「怖いわよ！！ お化けとか出てきたらどうすんのよ！！」

「バツカ。お化けなんかいるかよ」

男子達は牧村さんをからかってゲラゲラ笑う。

「いいから元に戻しなさいって！！」

牧村さんは、一度崩された石積みを丁寧に積み直し始めたところだ。

「なんだつまんねえの！ どうせ、工事で壊される場所じゃん」

そう言いながら、富堂君がぼいっと放った石が、石を積んでいた

牧村さんの指に当たってしまったのだ。

「あ、痛っつー!!」

投げられた石と、元の石積みには挟まれ、牧村さんの指からは血が流れ出した。石積みは再び崩れ、その上に牧村さんの血が滴る。

「ご……ごめん牧村!! 大丈夫か?」

「あーっ!! 富堂! なにすんのよ!! 美紀にあやまんなさいよ!!」

「あんた達の事、先生に言いつけてやる!」

同じ班の女子達が詰め寄り、富堂君は小さくなって謝り続けた。しかし、当の牧村さんは指を押さえ、しばらくじっとしゃがんでいたが、泣き出す事もなく、ふらつと立ち上がった。

「いーのよ……ありがとうあなた……おかげでやつと出れた……」

わけの分からないことを言いながら、牧村さんはうつろな目で口元だけをゆがめ、富堂君に不自然に笑いかけた。

指からは、かなりの量の血が滴っている。

牧村さんは、それを口に持っていくと、なんと長い舌を見せながら、べろりと舐め上げたのだ。

「おいしい……」

「その日からなんです。牧村さんの様子がおかしくなったのは……」

「今まで通り、普通でいる時もあるんです。でも、時々目がうつろになって、よく分からない事を言ってくる時があつて、僕たちは怖くなつてしまつたんです」

「まさか……それでお前達は、牧村さんをいじめ始めたのか？」

佐倉井教諭の言葉に、富堂君は無言でうなずいた。

「それに……… なんとというか、牧村さんに近づくと、すごく、犬臭かつたんです」

「犬臭い？」

「雨の日とかに濡れた犬をさわると、すごく手が臭くなるんですけど………」

「その臭いが？」

「いつも、牧村さんからしていました」

「そんな大事なこと、どうして先生に相談してくれなかったんだ！？」

佐倉井教諭は、強い調子で富堂君に詰め寄った。

「待つてください、先生。」

それは無理ですよ。そんな怪現象、大人に言っても信じてもらえ

ないって普通は思うでしょうし……怖かったのよね？」

「……………はい。」

秘密にしておかないと、僕たちも牧村さんのようになるんじゃないかって。最初にお墓を崩したのは、僕たちだったし……………怪我をさせたのも……………」

堪えきれなくなったのか、富堂君の目からは涙があふれ出した。

「牧村さんのこと……………なんとかしてあげようって……………お寺に……………相談した日に……………屋上から飛び降りたって……………」

あとは声にならず、しゃくりあげる富堂君の肩に、あおいはそつと手を置いた。

「だから牧村さんのために、どんなに叱られても、メダカの住むビオトープを守りたかったんだよね」

富堂君は泣きながら強くうなずき、あおいの胸に抱きついていった。

大きな泣き声が、周囲に響く。

「もう泣かないで。こんな事になったのは、不幸だったけど、あなただけがそんなに責任を感じなくてもいいのよ」

あおいは優しく囁きながら、小さな肩をぎゅっと抱きしめた。

§ 11 ヒンドウの女神

§ 11 ヒンドウの女神

「どうも、分からなくなりました……………」

佐倉井教諭と富堂君の二人を帰した後。

石の塔があつたという林の跡を歩きながら、真菰専務が呟いた。林の跡と言つても、今は切り株すら残っていない。赤土がむき出しになつた地面には、工事用車両のタイヤの跡が深く刻まれている。

「てつきり、稲荷神の社を壊したとか、そういうことだと思つたのですが…………塚に封じられていて、血を浴びて蘇るなんて、まるで食^グ屍鬼^{イル}です」

その時、まるで大きな雲が太陽を遮つたかのように、急に空が陰つた。突風が渦を巻いて校庭の砂を巻き上げ、視界が土色に変わり、誰もが一瞬目をつぶつた時。

「やあやあ、みなさん。ご無沙汰していますね。」

突風の中に飄然と姿を現したのは、よれよれのスーツ姿の箕島治郎教授であつた。

いきなりの登場に、座間はよほど驚いたのか口をぽかんと開けている。

「せ…………先生？さっき電話した時は、忙しいから後で連絡するて言うてはつたんちゃますの？」

「もちろんです。ですから、こうして後で来たでしょう。別に電話するとは申し上げてなかったはずですが？」

「昼過ぎから東京で講演やとか言うてはったのは、ええんですか？」

「大天狗の翼を舐めてはいけません。ここに来るにも30分とかかっ
つていませんよ」

「次郎坊殿、こんな所までご足労いただいて、申し訳ありません」

真菰専務が、丁寧に頭を下げて挨拶をする。

「ご無沙汰しております、蛟龍殿。なに、和泉御前からも頼まれま
してね。姪御殿がご心配なのでしょう」

「それで、先生？ 座間君の話から、何かお分かりになられたので
すか？」

あおいが、のんびりした二人の挨拶に焦れたように、箕島教授を
促す。

「座間君から電話で聞いた、あなた方の推理以上に分かった事は無
いのですが……あなた方が見落としているんじゃないか……と思う
点が一つあったのです。」

それを確認するために、わざわざここへ来たのですよ」

「見落としている事……ですか？」

「ええ、圓野君、ここの小学校はエコスクールと耐震の改装工事を

したのでしたね？」

「あ、はい。それで、業者がいい加減な施工をしていて、ビオトープの池が高温になっていたのがそもそもの始まりだったんです」

「それは……………どういった業者が、施工したのですか？」

「業者ですか？ それは……………」

そういえば、あおいはそんな事は考えた事もなかった。

専門家のアドバイスのないビオトープは、いい加減な施工が当たり前になってしまっているし、今更業者を捕まえても仕方がないからだ。それに業者に文句を言うのは発注者であって、ビオトープ管理士の役目ではない。

「私は、その神霊を呼び起こした事と火気の集中が、もしかすると意図的にされていたかも知れないのでは、と疑っています」

「そんな……………ただの建設業者に、そんな事が出来るわけありません」

「それは、人間を舐めすぎだと私は思いますね。

神霊を上手に祀って、御利益を得ている人間は数多くいますよ？
祟りを引き起こさせる事など、それ以上に簡単です」

「そんな……………でも……………」

「もちろん、無根拠にこんな事を言っているわけではありません。

物理的な発火点を越えるほどの火気の集中と、自殺した少女の霊魂を取り込み、更に次の犠牲者を欲しがるほどの祟り、というのはあまり例を見ません。

よほどの悪意か意図的なものがあつたと考えるのが普通です」

「……いったい、誰がそんなことを意図したとおっしゃるんですか？」

あおいの言葉を聞いて、箕島教授は少し怪訝そうな顔をした後、心を見透かすような澄んだ栗色の目で、まっすぐにあおいの眼をのぞき込んだ。

そして、安心したように目をそらすと、急に話題を変えた。

「その事より、まずこの神霊の正体を考えてみましょう」

「お分かりになるんですか？」

「正直、私としても推測にしかありませんが……これだけ状況証拠が揃っていれば、結論は導けるでしょう……まず狐、と呼ばれる人外の存在には、三種類あるのは知っていますか？」

「三？善狐と妖狐の二種類ではないのですか？」

いぶきが指を折りながら、聞き返す。あおいも座間も、怪訝そうに首をひねる。

「やはり、ご存じなかったですか……一つは妖狐、あるいは野狐と呼ばれる妖怪としての狐ですが、善狐には二種類、というか二系統あるのです」

少し考え込むようにしていた真菰が、はっと思い当たったように顔を上げた。

「それは、もしかすると伏見稲荷と豊川稲荷の事でしょうか？」

「その通りです。」

伏見稲荷は宇迦之御魂神つまり日本古来の豊穰の神を主祭神として祀っていますが、豊川稲荷は茶吉尼天を祀る寺院で、この二柱の神は由来が全く違います。

もちろん、明治の神仏分離政策までは伏見稲荷でも茶吉尼天を祀る愛染寺が、境内に置かれていたのですが、今では廃寺となっていますしね。それ以来、伏見稲荷を筆頭とする神道系の稲荷神社では茶吉尼天を祀っていません。

さて、茶吉尼天は真言密教における天女の姿の仏尊ですが、その源流はインドのダーキニーという女神です。ダーキニーはチベット仏教では高位の女神として重要な位置を占めますが………」

「ちよちよ……ちよい待って下さい先生。」

さつきから話が複雑な上に、明治やらインドやら、ぶっ飛びすぎですわ。すこおしかみ砕いて、オレの頭にも分かり易いように話してもらえませんか？」

座間は、箕島教授の説明を必死で聞き取ろうとしていたが、途中から全くついて行けなくなつて音をあげた。

「座間君。君の知識と思考力に合わせて話すのは大変なのですがね……」
「ま、平たく言えば、豊川稲荷系の茶吉尼天の本来の姿は、食屍鬼に近い悪鬼神で、その神使は本当は狐ではなく、ジャッカル……」
「古来日本では野干やかんと呼ばれるものであり、同じ狐という括りではあつても、本来の意味で狐ではありません。」
「つまり、普通の妖狐とは、まったく相容れない存在だということです。」

「悪鬼神ですって？そんなもの、どうして崇拝したりするんですか？」

そう言いついぶきは、全く理解できないといった表情である。

「現世利益の究極は、他者どころか己自身すら生け贄にしてでも幸福になりたいと願う、人間の強い欲望にあるからでしょう。

もちろん、豊川稲荷などの日本における茶吉尼天信仰が、すべて危険なものである、というわけではありません。本来は憑き物落としや、病氣平癒、開運招福の神として靈験あらたかな善神です。

それこそ、我々天狗の修法の一部にも習合していますよ。

飯縄の法は別名、茶吉尼天の法とも呼ばれるくらいですからね」

「じゃあ、どうして今回のような事態になったのです？」

「座間君。この神霊は自殺した少女の霊の姿をしていた、と言っていましたね？ ダーキニーは、ヒンドゥーの中では不慮の死を遂げた女性の霊魂であるとする考えがあります」

「つまり……自殺した少女の霊魂は、ダーキニーの依り代となっている……ということですか？」

「まさしくそうです。

重要なのは、あくまで蘇ったのは、悪鬼神ダーキニーの化身であり、眷属でもある野干であろうということです。仏としての茶吉尼天ではなく……ですね」

「塚に封じられるようなものでも、やはり神霊なのですか？」

いぶきは、納得がいかないといった顔だ。

「いえ、封じられていたのではなく、おそらく、密教の隠し社として祀られていた場所を、破壊したか何かしたのではないでしょうか。とはいえ、お膳立てが整いすぎています。

こんな状況で、この工事の施工業者が何も知らない、とは思えません。なぜなら……」

そこで言葉を切った箕島教授は、あおいに向き直った。

「なぜなら…… 圓野君、ここの工事をしていたのは、圓野組なのです」

「え……」

一瞬、あおいは箕島教授が何を言っているのか、理解できなかった。

まさか、人間が意図的に危険な祟りを引き起こしているなどとは、考えもしなかった。

それどころか、それをやっているのが、尊敬する祖父が創業し、今は父親が経営している会社かも知れないというのだ。

「箕島先生、どうやら今いるこの場所に、ダーキニーの塚があったようなのですが…… 子供達が掃除中にその塚を壊してしまい、少女が塚に血を浴びせてしまった、ということまで、先程分かったのです。

私は、意図的なものではなく偶然のような気がいたしますが……」

真菰専務が腕を組み、首を傾げて考え込むようにしながら言う。

「たしかに圓野組当代の社長、圓野明德はビジネスライクな事業家

です。

が、靈的なものを軽んじる事はあっても、それを逆用して利益を得るようなことは、やらないと思います」

「ふうむ……………しかし、圓野明德氏は僧籍も持つておられたはず。しかも、陰陽の世界に長けた圓野家の当代が、いくらなんでも、これほど強力な太古の鬼神を封じた塚を、見逃しますかね？」

「先生……………私、父の所へ行つて確認してみます」

「申し訳ありませんが、そうしてみてください。
実はここに来るまで、私は圓野君までも少し疑っていたのですよ。もつとも、あなたの反応を見て杞憂であつたと分かりましたがね。疑つたことは謝りますが……………それほどに密教の神靈は強力で、扱いが難しいものと、心得ておいて下さい」

「……………はい」

小さく返事をしたあおいの顔はこわばり、真っ青であつた。
あおいにとつてあまりに想定外であつたが、事実だとすれば、自分自身にも責任があると考えているのだろう。

座間はそのあおいの表情を見て、ようやく葉子の言いたかつたことがすべて理解できたような気がした。

相手は強力な神靈であり、簡単に齒の立つ相手ではない。

しかし意図的であろうとなかろうと、圓野組が絡んでいるとなれば、あおいはどんな無理をしても、一人でケリをつけようとするだろう。

そうなれば……………

（たぶん……オレ自身も見落としていた記憶の中に、工事看板かなにか……施工業者を特定できるものがあつたんやな……）

そう思うと、それに気づかなかつた自分の間抜けさ加減に無性に腹が立った。

（稻成先輩は、それにすぐ気づいて社長に知られんように、なんとか片付けようとしたんや。そやのに、オレは結局、最悪の結論を社長に知られてしもうた。

オレは……ほんまにアホや）

そう思うと、どっと疲れが出て地面に座り込んだ。気がつけば、体の節々が痛む。

火事で負つた火傷の、炎症の熱が上がってきているのだ。考えてみれば、朝から飲まず食わずで走り回り、薬も切れかけている。

「そういえば、座間君」

箕島教授が、座り込んだ座間の前に立った。

「あなた、ダーキニーと降魔の剣で戦つて、負けたそうですね？」

「いや……箕島先生。降魔の剣は神気の武器ですし、神霊には通じまへんやろ？」

「あなたは……阿呆ですか？」

「へ？」

「太郎坊がかなり怒っています。あなたは短期間とはいえ、月ノ輪

流継承者の元で修行をした烏天狗ですよ？ その程度にしか使えないなら、降魔の剣を返していただかなくてはなりません」

いつも笑っているような表情の箕島教授が、珍しく口をへの字に曲げ、

厳しい表情で座間に詰め寄る。

「み……箕島先生、座間君は、火事で重傷を負った直後なんです。許してやつてもらえませんか？」

あおいがあわててフォローするが、箕島教授の表情は変わらない。

「いいえ、その大火傷にしても、座間君が、きちんと降魔の剣を使いこなせていれば負うはずの無かった怪我です」

そう言って座間の前にしゃがむと、顔を近づけて目をのぞき込むようにした。

「太郎坊が呼んでいます。稽古をつけてやるから、来い。と。今のままでは、必ず命を落とす事になるとも言っています。私もそう思う。座間君、あなたに修行をやり直す気がありますか？」

「ちょっと待って下さい！！ 座間君は、昨日まで意識不明だったんですよ？ それに稲成さんも七海ちゃんもいない今、座間君までいなくなったら……」

あおいの声は、悲鳴に近かった。

その理由は、仕事の事だけではないのは明らかだった。

「圓野君。もし、今の状態で座間君がダーキニーと相対すれば、今

度は死にますよ?」

「……………箕島先生。オレ、行きますわ」

「座間君!？」

「社長……………オレは……………役立たずのまま終わりたいなんですわ。それに……………」

(あなたを、なにがなんでも守りたいから)

後に続けたかったその言葉は、敢えて呑み込んだ。

「……………それに、修行やいうても二回目やし、ぱぱっと仕上げて、すぐ帰ってきますって。そんな顔せんといて下さい」

そして、あおいに心配させないよう、できるだけ笑顔を作って見せた。だが、いつもの座間の脳天気な笑顔でない事は、誰の目にも明らかだった。

「それでは座間君。私につかまってください」

「え? もう……………行くんですか?」

あおいは、驚いて声を上げた。

「もちろんです。さつきも言いましたが、私は忙しいのです。しかし、座間君一人では、太郎坊のいる京都まで時間が掛かって仕方がありません。私が送って差し上げます」

「社長。さつきも言いましたやろ？　すぐ帰りますさかい、心配せんといてください」

箕島教授の右腕につかまるようにした座間は、もう一度あおいに、あの、いつもとは違う強ばった笑顔を見せた。

「座間君。社長の事は心配しないで、行って来なさい。あんたたちがいない間、私が命に代えても守るから」

そう言っいぶきの目は、すでに覚悟を決めているように見えた。とはいえ、相手の出方も分からない中、真菰専務といぶきの二人で、どこまでやれるのか。

「今日の講演が終わったら、私ももう一度こちらへ顔を出します。少なくとも、圓野組の当代の考えを知りたいですし、流れによっては、力をお貸しせねばならないかも知れませんからね」

「そう言っただけだと心強いです。ありがとうございます。先生」

あおいは、箕島教授に深く頭を下げた。

しかし、その言葉とは裏腹にあおいの顔色は真っ青なままで、その表情は、まるで雨に濡れた捨て犬のようであった。

「では」

その一言を残し、一瞬にして次郎坊と座間は視界から消えた。その後には、小さな土煙が舞っているだけだ。空を見上げてみても、影も形も見あたらない。

「社長。座間君なら大丈夫ですって」

いぶきのその言葉も耳に入らない様子で、あおいは呆然と佇んでいた。

§ 1 2 深山の怪

§ 1 2 深山の怪

「そろそろ、京都上空です。」

お山の場所は知っていますね？ 私は降りているヒマがないので、このまま行きますから、太郎坊によろしく伝えておいて下さい」

箕島教授は、こともなげに言い放った。

が、はるか雲の上のことである。京都どころか、下には雲海が広がるだけであつた。

「ええっ!？」

オレ、こんな高度から、降りた事ありまへんで？」

「この程度で何を言っているんです。それも修行です。さつさと手を放しなさい」

箕島教授はそう言うと、腰につかまる座間の手を軽く叩いた。

たいして強く叩いたとは見えず、実際に衝撃は大したことはなかったのだが、座間は思わず手を放した。

「これが、剣術で言う虚実の技術です。よく覚えてお……」

箕島教授の説明する声は、途中でかき消された。

慣性で、箕島教授と同じ方向に数秒間飛んでいた座間だったが、あつという間について行けなくなつて引き離されたのだ。座間は必死で飛んだが、次第に高度が保てなくなつて降下していった。

雲海を抜けると、眼下には座間にとっては懐かしい京都の町並みが広がっていた。

暮盤の目のように真っ直ぐな道。

ところどころに、木造の町並みや大きな建築物が見え、その周囲には、四角く区切られた大きな社寺林が広がる。

しかし、不自然に新しい京都駅や、展望台のあるホテルなどもあり、交通量は意外に多く、そこかしこで渋滞している。

日本有数の古都と言われている京都は、上空からは少しちぐはぐに見えた。

（たしか……………安宅山やったな……………もつと北や）

修行時代……………といっても、修行したのは2年間しかない。

大学卒業までの短期間に、烏天狗としての技や術を一通り覚えるため、箕島教授に連れられて、何度も訪れた地であった。

京都の北部と言えば、霊場や霊山の集中地帯でもあるが、嵯峨野などの有名な観光地もある。割と人が多いため、真っ昼間の飛行は目撃されやすい。

座間は、かなり高度を取り、なるべく本物の鳥に見えるよう、黒い着物を大きく広げ、翼に見せた。

（懐かしい山々やな……………太郎坊様の庵は……………もう少し先か）

そう思いながら飛んでいると、下方から甲高い若い女性の悲鳴が聞こえた。

「キヤーツ！！」

多少の事なら、放っておきたいところであつた。

早く修行をやり直して、あおいの元に帰りたいのだ。しかし、どうも普通の声ではない。

しかも、すでにかなり山深い場所である。登山家や修行者も滅多に近寄らない上に、そもそも道など無い領域だ。

（こんな場所で………いったい何なんや？）

周囲の山々を見渡しても、太郎坊の庵まではまだ幾分距離がある。しかし、とにかく一度降りてみることにした。とはいえ、声の聞こえた場所に降りて、その人間に目撃されては厄介だ。

いったん、少し離れた林に降りるしかない。座間は翼を半分たたみ、降下速度に重力を乗せた。

落葉の季節には早い、林の中は、腐りきっていない去年までの落ち葉が深く積もっており、

ふわりと座間が降り立つと、ふくらはぎまで埋まった。

すぐさま、持ち前の素早さで、女性の声が聞こえたあたりへ走る。太陽の届きにくい林の中は、低木や草はあまり生えておらず、意外に走りやすい。走り出すとすぐに、赤っぽい服が見えた。

どうやら、大きな木の根元に女性が座り込んでいるようだ。

「どうしたんやー!!」

声を掛けながら、全速力で駆けた。

「助けてえ!!」

女性の声が林中に響きわたる。

「な……何やアイツらは!？」

座間は、自分の目を疑った。座り込む女性の目の前、ほんの数m先に奇怪な生き物の群れがいたのだ。

人のように後足で立つノウサギ。

異様に大きなネズミらしきもの。

両前足のないクマ。

体毛のないイノシシ。

頭の半分無いシカ。

そういった、異様な獣たち数十頭の群れが半円状に若い女性を取り巻き、今まさに襲いかかろうとしていた。

「うおおおお!!」

座間は、獣たちを脅すように叫び声を上げ、腰のキーホルダーに手をやり、降魔の剣に氣を送り込んだ。

何も知らない一般人の目の前で、烏天狗に変化するわけにはいかないが、こうなると武器は必要である。小さな両刃の直剣は銀色に光り輝きながら、1m以上の長さになった。

奇怪な動物たちの群れとはいえ、まったく動じる様子もなく、座間の方へ向かって来ようとしている。

並みの野生動物であれば、この勢いとスピード、そして殺気を放って突っ込んでくる座間を見れば、

一も二もなく逃げ出すはずだ。

(なんちゅう不気味なヤツらや)

座間の背筋を寒いものが走る。

（これは、関わらん方が正解やろつな……）

脳が警戒信号を発している。

座間のもうひとつの本性である、野生のカラスの本能が、危険を察知したのだろう。だが、助けを求めている女性を放って逃げるわけにはいかない。座間は剣を左下段に構えたまま、異様な獣たちの群れに突っ込んでいった。

まず、真っ先に牙をむきだして襲いかかってきた前足のないクマを、左下から右上に向かって、振り上げ、逆袈裟斬りに腹から肩まで裂く。

クマはあっさりと倒れ、周囲にどす黒い血が飛んだ。
血の臭い、というよりも腐臭に近い臭いがあたりに立ちこめる。

そのまま振りかぶった剣で、今度は頭の半分無いシカの首を斬り落とした。邪魔者を蹴散らすように、群がる動物どもをはじき飛ばし、大木の幹に体をあずけてしゃがみこんでいる、女性の側へたどり着いた。

一方、動物たちは座間に気づくと、わらわらと近寄ってきた。

驚いた事に、たった今斬ったはずの二体の動物も、クマは、茶色いはらわたを引きずったまま、シカは首のないまま、ふらふらと立ち上がって、やってくる。

「何い？ 死なへんのか!？」

その不気味な姿に、さすがに座間も驚きを隠せない。

だが、のんびり驚いている場合ではなさそうだ。このまま包囲されてはまずいことになる。

「おい！！　しつかりせえ！！　逃げるで！！」

座間は、しゃがんだ女性を抱き上げると、その場から一気に跳躍した。深く積もった深山の落ち葉は、クッションとバネの役割を果たしてくれる。

谷側に向かって跳べば、普通の人間の跳躍力でも距離で一気に十数mは稼げるのだ。

当然座間は、並みの人間には不可能な距離まで、遠く、高く跳んだが、座間の腕にしがみついて目をつぶっている女性が、それに気づくとは思えなかった。

落ち葉のクッションが、二人分の重さを柔らかに受け止める。さらに、そのまま数度の跳躍を繰り返した座間は、一気に谷底まで降りた。

谷までの斜面に岩場が無く、ほとんど落ち葉に覆われていたのは僥倖であった。

谷底はまるで敷き詰めたような玉砂利の河原が広がり、その中央部には、消えそうなほど細い溪流が流れていた。

「このまま走るで！！」

「は……………はいっ！！」

女性を降ろした座間は、砂利の上を谷底を上流へ向かって走り出した。

手を引かれている女性は、つまづいて、たびたび転びそうになるが、いいタイミングで座間が腕を引っ張り、転ばせない。二人は、あっという間に数百mを駆け上ると、一息ついて後ろを振り返った。そう素早くはないのか、諦めたのか、どうやら、さっきの動物たちが追ってくる気配は無い。

「あ……あの、動物ゾンビは、いったい何なんでしょう?」

体をくの字に折って膝に手を当て、息を切らせながら、女性が座間に聞く。

「オレにも分からへん。しかし、動物ゾンビとは上手い言い方しよるな」

座間は息一つ切らず、鋭い目で、自分達が今走ってきた方角を見ていた。

「わ……私、友達とはぐれて……そしたら……」

「詳しい事は後で聞いわ。ヤツらが諦めたかどうか分からへんし、もたもたしとって日が暮れると厄介や。とりあえず、オレの師匠の庵まで行こう」

「師匠?」

「オレは修験者なんや。」

この奥にオレの師匠の住んどる家があるんやけど、そこまで行けば、少なくとも雨露はしのげる」

そう言いながら、降魔の剣を、先ほど剣と同時に大きくしておいた鞘に収めた。鞘に収めた剣は、そのまま錫杖のように杖や武器として使える。

「わわ……わかりました」

女性は剣を見て驚いたような目を向けたが、何も言わなかった。

細い川の流れる谷底を、さらに上流へ上っていくと、所々に大きな岩や淵があり、そのたびに迂回しながら、二人は上を目指した。しばらく行くと、傾斜が緩い場所に出た。

そこに太い丸太を三本並べ、植物の蔓で念入りに縛ってある橋が架かっている。

「ここや。ここから庵まで道があるんや」

座間はそう言うつと川から外れ、細い山道を歩き始めた。

「あの……私、大月姫子つていいいます。ヒメコつて呼んで下さい。あなた………名前は？」

「ああ……座間や」

「クラマさん……何も事情、聞かないんですね。何で私がこんなとこにいたのか？……とか、あの動物ゾンビのこととか………」

「話したかったら話せばええよ。あんな不気味なヤツらの事、思い出したないやる思うて聞かへんかっただけや」

「クラマさんは、いつもこの山の中に？」

「修行の時に来るだけや。いつもはフツーに下界でサラリーマンや」

「なんか………」

「なんや？」

「なんか、ク라마さん、あたしとお話ししたくなさそう」

「……………いや、そんなことあらへんよ」

そう言うつと、座間は改めてヒメコと名乗った女性を見た。

口調は幼げだが、見た目はどちらかというと大人っぽい。年齢は、25歳の座間とそう変わらないように見えた。

しかし、たしかによく見ると、こんな山奥まで来るような装備ではない。丈の長い赤いチエックのシャツ、短パンにレギンスといった服装は、少し前に流行ったアウトドア系の服装のようだ。

とはいえ、ファッション重視でとても機能的とは言えない。

履いている靴は革製のスニーカーであるし、肩から提げているリュックも大した物が入っているようには見えなかった。胸まである長い茶髪は、あちこち乱れたようになっていたが、これはこれで、見苦しくない。今風のセットなのかも知れなかった。

「よおまあ、そないな格好で、こんなとこまで来よったな」

「あー！！今頃になって、そんな事言いはるんですかあ？」

「今、気づいたんやからしゃあない。で？　なんで、こないなとこまで来たんや？」

「うちら、女三人で京都巡りしてたんです。貴船神社から鞍馬寺までの遊歩道を歩くつもりで来たんやけど、なかなか入り口が分かんなくって。」

そしたらヘンなヤツらに声掛けられて……………」

言いながら、イヤな事を思い出したのか、ヒメコは次第に声が小

さくなり、うつむいた。

「まあ、整備された遊歩道や思うてたら見つからんかも知れへんな。アレは、少し本格的なハイキングコースや。それでも、慣れれば子供でも行けるハズやけどな」

ヒメコの落ち込んだ様子を察して、座間はわざと明るく言い、敢えて話の焦点をずらした。

「そうなんですか？　で、そのヘンなヤツらに無理矢理車に乗せられてもうて……」

「なんやて？　そりや、犯罪やないか！　で、友達はどういしたんや？」

「トイレに行かせてとか言うて、途中でみんな逃げたんです。でも、そいつらウチの方だけしつっこく追ってきて……逃げる時に、一人キンタマ蹴っ飛ばしてやったから、怒ったみたい。山の中に逃げ込んで、まいたんやけど……道に迷ってもうて」

「『迷ってもうて』やあるかい。ここ、貴船から10km以上離れたとるで」

「えーっ！？　ウチ、そんなに走ってへんでえー！」

少しリラックスしたのか、ヒメコの言葉は露骨な関西弁になってきた。

「当たり前や。たぶん、ソイツらが車に乗せて、けっこう走り回ったんやろ」

「そんなに長くは乗ってへんかったんやけどなあ……あ、そうそう。で、ね。山道を歩いたら、イヤな臭いがして……」

「で、あの動物ゾンビが出たわけかい」

「あーん。もう！ 話、飛ばしすぎや、クラマさん！

そうやなくて、茂みがガサガサって鳴るから、のぞき込んだんやねん。そしたら……」

「動物ゾンビがいた。と」

「もう！

話聞く気あらへんの？ のぞき込んだらウサギがおって、何か食べとったんや。何やったと思う？」

「？ 動物ゾンビとちゃうかったんか？ ゾンビの食いもんは、死体が定番やろ」

それを聞いたヒメコは、ぷつと頬をふくらませると、何も言わずに先に立って歩き始めた。

「ちょい待てや。離れると危ないで！」

「クラマさんなんか好かん！」

ヒメコは振り向きもせずに、道の先へと歩き始めた。

座間は苦笑いをする、ぽりぽりとこめかみを掻いて、後を追った。太郎坊の庵への道は、険しくはないが単調である。

しかも、つづら折りの山道は、先が見通せないため、同じ所をグ

ルグル回っているような錯覚を覚える。二人とも、しばらく黙ったまま一本道を歩いた。

「あー！ もうー！！」

沈黙に耐えかねたかのように、ヒメコが叫んだ。

「だから、なんやねん？」

「疲れた。おぶって」

向こうを向いたまま急に立ち止まったヒメコは、ぶっきらぼうに言った。

「師匠の庵は、もうすぐそこや。もう少し辛抱してえや」

「いやや。もう歩かへん」

ヒメコは道に座り込んだ。

「置いてくで？」

「クラマさんて、ほんつまに女の子の扱い、知らへんのやねー！」

ヒメコは振り向くと、座間に向かって思いっきりあかんべーをして、また、さっさと歩き出した。

（女の子の扱い……か……）

座間が普段顔を合わせている女性陣は、あおいを含めて、いわゆ

る普通の女の子とは少し……いや、かなり違う。

どんな状況に置かれたとしても、間違っても、今のヒメコのような反応はしないだろう。

しかし、座間が今のヒメコ的心情を理解できないわけではなかった。座間も数年前までは、どこにでもいる普通の若者であったのだから。

（しゃあないなあ……せやけど、女の子らしい女の子に久しぶりに会った気がするわ）

座間にとって、拗ねたヒメコは不思議に新鮮だった。

こういう時は、とにかくきちんとコミュニケーションを取って、座間が自分に興味がないわけではないのだと、理解してもらう以外にない。

「ヒメコ」

「……………何なの？」

「あの動物ゾンビ、な。思い出すと、妙な特徴があるんや」

「特徴？」

「動物の種類、どんなんがいたか、覚えとるか？」

「シカとか、ウサギとか……………」

「そうや、それ以外には、クマ、ネズミ、イノシシ……ムササビやリスみたいななんも、おった」

「それがなんやのん？」

ヒメコの声は、まだ怒っているのか、素っ気ない。

「キツネやタヌキ、カラス、テン、イタチ、ヘビ、ガマ……この山には、他にも色んな生き物があるけどな。そういう、妖怪化しやすい動物がひとつも見当たらへんかった」

「え……？妖怪化？」

へんな事を言い出したと思ったのか、ヒメコはようやく振り向いて、座間の顔を見た。

「ああ、まあ、少し分かりにくいか。

ホラ、キツネやタヌキに化かされたとか、昔話とかにあるやる？」

「うん……聞いた事、あるかな」

「あれはまあ、年を経たり神さんの影響を受けたりして、動物が妖怪になる……まあ、普通やない力を持つようになるからや。つまり、化けタヌキ、化けギツネ、うわばみ……そういったものになる。

せやけど、化けウサギとか、化けシカとか、聞いた事あるか？」

「ない」

「まあ、まったくそういう事が無いわけちゃうけどな。

ああいう草食性の強い動物や、ネズミやリスみたいな寿命の短い動物、あと、クマみたいにもともと霊格が高い動物は、妖怪になりにくいんや」

「なんやの、それ？ なんやまるで、妖怪がほんまにおるみたいな言い方して」

「動物ゾンビがおったつちゅうのに、妖怪はおらんで思うんか？」

「そ……それは……」

「山で修行しとると、な。妖怪ぐらいは、普通に会う」

「いやや！脅かさんとしてよー！！」

ヒメコは身をすくめると、座間の側に駆け寄り、腕をぎゅっと握ってきた。

「べつに、脅かしとらん。

妖怪も動物も同じや。つきあい方さえ間違えへんかったら、何も怖い事なんかあらへんよ」

「ほんま？」

「ほんまや。

せやけど、さっきのヤツらは様子がおかしい。あんなん、見た事も聞いた事も無いし、対処法もわからへん。オレの師匠やったら、分かるやろとは思っけどな」

「ねえ……」

「なんや？ もうすぐやから、辛抱してくれや」

「違っんや。このニオイ……」

「!?!? なんやこの甘ったるい………死臭か!?!?」

座間は、腰の剣に手をやり、身構えた。

急にあたりの空気が変わった。漂い始めたその臭いは、熟し切った果物の甘い匂いに似ていたが、よく嗅ぐと、肉の腐臭に変わっていく。

「この臭いやねん……アイツら……おるの?」

「分からへん」

座間は短く答えて振り向くと、数m後方に下がり、軽く身を沈めて構えた。

そして居合いの要領で、一気に低木の茂みを薙ぎ払う。視界を邪魔していた茂みは、支えの枝を失い、自身の重みで沈んだ。

「あ……あほな………」

たしかに、何の気配もなかった。

何の物音も聞こえなかった。

しかし、茂みが消えて開けた視界に立っていたのは、はらわたを引きずったままの、あの前足のないクマだった。

それだけではない。

そのすぐ真後ろで、ふらふらと立ち上がったのは、先ほどより数を増した、動物ゾンビどもであった。

「ヒメコ!! 先に行け! 走るんや!!」

「イヤやー！ クラマはんはどうするん？！ それに……先つて言うたつて、どこ行けばええん！？」

「そこを曲がったら、すぐに庵があるんやー！ 見た目は古いけど、カギはある！ 中に入って、カギを掛けて閉じ籠もるんやー！」

「すぐ……すぐ来てやー！」

ヒメコの枯れ葉を踏む足音が遠ざかっていく。

座間は、前足のないクマと対峙しながら振り向かずになんか聞いていた。降魔の剣で斬ったところで、大して効果は無いのは分かっている。

座間は、葉団扇を大きくして、クマを思い切り扇いでみた。

もし、葉団扇と同じ土気、あるいは相剋の水気が火気の宿った化け物なら、いくらかでも効果があるはずだった。しかし、強風で少しよめいたものの、クマにはまったく怯む様子もない。

「やっぱ、あかんか……」

だが座間は、葉団扇をしまいかけて、おかしな事に気づいた。牙をむき、座間に襲いかかろうとするクマが、何度も空を噛む。べつに座間が避けたわけではない。

「コイツ……目え見えへんのか？」

よく見ると、欠損している部位は、目だけではない。片耳も千切れており、そこから頭蓋骨らしき白いモノが顔を出している。

その他の動物ゾンビどもも、五体満足なものは一体もなかった。

「ほんまに……何なんやコイツら！？」

座間は適当なところを見計らって、きびすを返して走り出した。
いまだ決め手は見つからない。だが、このまま持久戦になるなら、
太郎坊の庵に立て籠もった方が有利だ。

山道を急な角度で曲がり、数十m走ると、ぱつと開けた場所に出る。

そこには、よく手入れされた小さな畑があり、その奥には、茅葺きの小さな庵が建てられていた。

「ヒメコ！！ 無事か！？」

無事にたどり着いたなら、返事があるはずである。
しかし、庵の中からは何の応えもない。

「ヒメコ？！ ヒメコっつ！！」

「きゅひひひひひ！！」

返事の代わりに、奇怪なうなり声と共に庵の戸口が破られ、内側から巨大な牡鹿が飛び出した。

§ 1 3 親子対決

§ 1 3 親子対決

「お父さん……少し聞きたい事があるのよ」

座間が京都の山深くで、奇怪な獣たちと戦っていた頃。
あおいは圓野組の社長室で、父、明德と対峙していた。

モダンデザインのプレジデントチェアに腰かけた明德は、年季の入ったマホガニー製の机の向こうで、不機嫌そうに煙草をくゆらせている。

夏の強い日射しが傾き始め、部屋の中に射し込む時刻になってきていた。閉められたブラインド越しでさえ眩しく照り返し、逆光になった明德の表情は見えにくい。

「こちらも言いたい事がある。あおい……何故、先日の役員会を無断欠席した？」

「無断じゃないわ。

後藤副社長から、何も聞いていないの？」

「聞いているとも。

だが、あんな理由は理由にならん。一方的に相手を非難すれば、約束事を反故にしても良いというなら、どんな社会も成り立たんだろっ」

「だから、トープスへの支援は打ち切れればいい、と、そう言ったわ」

「だから、お前はまだまだ甘ちゃんだと言っただ。」

社員に通告もせず、感情にまかせて破滅的な方針を決めてどうする？　それで、誰かついてきてくれる者がいるとでも言うのか？」

「みんなには、後で了解を取ったわ。」

全員で頑張っっていくって決めたのよ……誰一人、欠ける事なくね……」

言いながら、あおいは行方不明の葉子と七海、そして、いつ終わるとも知らない修行に旅立った座間を思い出し、唇をかみしめた。

「破滅的な社員どもだな。呆れたものだ。」

まあ、だから利益もとれない会社に入社したりするワケか」

明德は鼻にしわを寄せ、煙を一気に吐き出すと、灰皿に煙草を乱暴に押しつけた。

「何とでも言えればいいわ。」

もう、あなたには関係のない話よ。そんな事よりお父さん、圓野組は貴田小学校のエコスクールの工事を請けているわね？」

「それがどうした？」

「伐採した敷地内の林に、ダーキニーの塚があったでしょう？」

「何だと？　ダーキニー？　何の事だ？」

「ヒンドウの悪鬼神、ダーキニーよ。」

野干、ジャッカル、何でもいいわ。あの小学校には、そういう神

霊を祀った塚があつたの。それを圓野組が黙っていたせいで、小学生が一人自殺し、校舎が全焼したのよ！」

「馬鹿な。伐採した林はそう古いものではないはずだぞ？
ダーキニーの塚だというなら、少なくとも明治5年の修験禁止令以前のものはずだろう。何かの間違いではないのか？」

明徳の反応を見て、あおいは心底ほつとした。
何者かの仕業だとしても、少なくとも父のやらせた事ではないらしい。

「箕島先生はそう思つてはいらっしゃらないわ。
圓野組が、いいえ、お父さんが塚のあることを知りながら、意図的に破壊したのだ、と考えておられるのよ。」

「信じるも信じないも勝手だが、少なくとも、私は知らん。
だが、ウチの社員が知らなかったかどうかまでは分からん」

「社員が知っていて、そんな危険な鬼神を意図的に解放したのなら、当然、社長であるお父さんにも責任があるわ」

「そうかも知れんが、それがどうした？
建設工事をやっておれば、塚も、祠も、古墳も、遺跡も腐るほど出る。」

「文化的に意義がありそうなら、発注者に報告はするが、邪法の祀られた塚など、いちいちそんなものに構っておつては、仕事にならんわ」

明徳は吐き捨てるように言った。

「人が一人、死んでいるのよ？」

「わしらも命がけで仕事をしておる！！ 予測不能の霊的な危険にまで気を配れるか！」

「そう……そういう考えなのね？」

「先代はどうだったか知らんがな。

私が社長を継いだ時、圓野組は利益などほとんど出ておらんかった。それも当然だ。

大きい仕事には手を出さず、小さい仕事も、地元業者に配慮して手を広げず、あまつさえ、わずかに受注した仕事もいちいち着工前に出向き、妖どもを使って生き物を避難させておつてはな」

その言い様に腹を立てたあおいは、思い切り机を両手で叩いて明德を睨みつけた。

「その何が悪いのよ！！

利益は出ていなくても、損はしていなかったんでしょ！？ いたずらに手を広げて、古参の社員をクビにして……会社が大きくなる事がそんなに大事！？」

「力のない小さな会社がいくら頑張っても、出来る事は知れておるのだ！

圓野組があつたからといって、この地域の自然破壊は止まったのか！？ 圓野組のおかげで、この地域の何が変わった！？

建設業は社会資本を整備し、国土を保全し、より多くの人々が安心して暮らせるようにするのが責務だ！！ それが、会社の利益となり、社員の生活の安定と幸福につながり、ひいては地域社会、国家への貢献となるのだ！

言いたい事があれば、自分の会社を、今の圓野組に負けない規模にしてから出直してこい！！」

「古参の社員をクビにした事は！？ 社員の幸福を目指すが、聞いて呆れるわ！！」

「先代の雇った化け物どもの事か？

工事で住みかを失った、大して力のない妖怪なんぞ雇い入れてどうする？ 結局、そんな連中は社員としても役に立たんから、お引き取り願っただけだ。

私の法力で滅してしまわんでも、ありがたく思っただけののだな」

「じゃあ……ダーキニーのことも、知らない、で済ませる気なのね？」

「知らんものは知らん！ わしは会社を守るので精一杯なのだ。余計な話を持ち込むな！ 用が済んだなら帰れ！！」

「言われなくても、帰るわよ！！」

あおいが、ドアを激しく閉めて立ち去った後、明德は頭を抱えてため息をついた。

売り言葉に買い言葉であった。あおいと話すと、いつもこうだ。本当はもっと穏やかに、自分の娘と接したいのだが……

（あおいめ。口ばかり達者になりおって、社会や経営の本質が、何も分かっておらん……）

明德は、大きく一つため息をついた。

しかし、そういえばあおいは、一つ気になる事を言っていた。

（ダーキニーの塚だと？ そんなものが、あの歴史の浅い小学校に存在するはずがない。それに、わしも現場へは行った事があるが……そんな気配はまるで感じなかったぞ？）

少し考え込んだ明徳は、受話器を取って内線番号を押した。

「後藤副社長を呼んでくれ」

「どうでしたか？」

社長室を出てエレベーターから降りたあおいを、真菰が出迎えた。

「話になんないわ。」

でも……箕島先生の言うような、意図的なものは無かったように思う。」

「私も、そうは思うのですが……」

「何？ 何か気になる事でもあるの？」

「たしかにおかしいのです。あの場所にダーキニーの塚があったとして……火気の集中が塚の南にあったせいだとすれば、もっと周辺で相応する水気や木気の集中が起こっても良さそうなものです。」

なにより、ダーキニー本体が、単純に塚から出てきた様子なのが妙です」

「言われてみればそうね……………」

「それに、稲成君や伊園君は、いったいどこへ行つたのです？ 少なくとも、塚のあった場所はダーキニーの本拠ではなかったのではないですか？」

「ダーキニーの性質や由来から、洗い直す必要がありそうね……………こんな時、稲成さんがいてくれたら……………」

「そうですね。」

彼女の知識と情報収集能力があれば、ダーキニーの本拠を見つけるのも簡単だったでしょうが……………」

蛟龍である真菰は、市内を流れる真菰川の主でもあるため、流域の大きな気の流れを読み、ある程度は操る事も出来る。

だが巨大すぎる力を持つため、小さな気の流れをキャッチする事は出来ない。

また山姫であるいぶきは、植物の生活反応や水気の流れには敏感だが、そうしたことに関係のない特定の神霊の存在は感じる事ができない。

「とはいえ、なんとかするしかありません。」

私はいったん自宅に戻ります。見込みは薄いですが、真菰川水系全体の情報を、私の血族や配下の妖どもに調べさせてみましょう」

「私は……………小玉鼠たちに頼んでみるわ」

あおいは、先日知り合ったばかりの小妖達の事を思い出した。

「名案ですね。」

個体数の多い彼等なら、情報量も多いでしょうし、なにより本来、野干やかんはネズミの天敵です。もしかすると、彼等の方が良い情報を持っているかも知れません」

「師匠……箕島先生のいらっしゃる時刻までに情報収集を終えて、真菰専務も、いったん会社に戻ってくださいね」

「了解しました」

§ 1 4 邪法の結末

§ 1 4 邪法の結末

「まさか……………ヒメコ!? どこや!」

庵から飛び出してきた巨大な鹿は、座間を威嚇するように前足で土を掻きながら、こちらへ角を向けている。あの巨体で庵の中にどうやって入り込んでいたのか?

ヒメコは無事か?

そしてこの緊急事態に、師匠の太郎坊はいったいどこなのか?

何にせよ、彼女に何かあったら、先に行かせた自分のミスだ。

その時、座間は気づいた。

牡鹿の枝分かれた巨大な角にまとわりついている、あれは……………

ヒメコの着ていた服の……………残骸。

「ヒメコっ!」

座間の血が沸騰した。

急に頭の中がクリアになり、目の前の敵に意識が集中していく。それまで頭のどこかに引っかかっていた、すべてが消え失せた。あおいの事。

ダーキニーの事。

葉子や七海の事。

太郎坊の用意しているであろう厳しい修行の事。

後ろに迫っているであろう、他の動物ゾンビの事も。

怒りのきつかけになったヒメコの事ですらも、座間の意識から消え失せた。

座間の周囲の景色が、やけにゆっくりになったように感じた。

その、スローモーションな世界の中で、座間はゆっくりと考えていた。

（そつや……忘れとつたわ。やまち？を殺したあの日……まわり中の気が、オレの味方になった気がした……それと同時に、相手の存在の中に気の流れが見えたんや……せやから素手でも、その気を破壊して倒せた……倒せるんや）

座間はあらためて牡鹿を見た。
半明白骨化した牡鹿……その存在そのものに、黒い影がまわりついている。

（コイツは屍体なんや。
屍体に、何か術を掛けたヤツがおる。その術で……死体をあやつとる何かが取り憑いとるんや）

黒い影は、完全に牡鹿の存在と重なっている。
しかし座間には、それを斬り分ける太刀筋がハッキリと見えた。
屍体は斬らない。
黒い影も斬らない。
この二つを斬り分けるだけだ。

構えは八相。
剣を担ぐように、斜めに振り上げた型だ。自然と、切腹の際の介錯と同じ構えになった。

スローモーションな世界の中。

一步、大きく踏み込むと、降魔の剣を右斜めから袈裟懸けに斬り降ろしながら、突進してくる牡鹿の脇を、すっと通り過ぎた。

ぐしゃ。

座間とすれ違い、数歩進んだ牡鹿は、前足を折って頽れた。その時には、完全な白骨と化している。

座間の数m後方に、乾いた音を立てて、白い骨が散らばった。

「ちん」

鞘に剣が収められた。

まさに流れる水の如き、自然な動作である。

「ヒメコっ!!」

叫んで庵の中へ入ると、奥の壁に寄りかかるように座り込んだヒメコがいた。

だが、目を瞑ったままで反応がない。

「大丈夫か!? ヒメコっ?」

「あ……… クラマさん?」

気を失っていたらしい。

ヒメコは目を覚ますと、怯えたように周囲を見渡した。どうやら、大きな怪我はないようだ。

ぎりぎりで牡鹿の突進を躲したのだろう。シャツの右袖が無くなっている。

座間は、ほっとして大きなため息をついた。

「もう大丈夫や。アイツらの倒し方、分かったさかいな」

「ほんま？ クラマさん、すごいなあ……………」

ヒメコは力無く微笑んだ。

妙に元気がない。どこか怪我をしているのかも知れない、と座間は思った。まったくの無事、というわけでもないようだ。

庵の周囲からは、下草を踏みしだき、茂みをかき分ける音が響いている。完全に動物ゾンビどもに囲まれたのである。

だが、もう座間に不安はなかった。

「ここで座って休んどるんやで？」

座間は、ヒメコの肩をぽんと軽く叩いて立ち上がった。

庵から外に出、暗い林に向かって歩を進める。

林の手前の開けた場所まで進むと、真っ先に近づいてきたのは、あの前足のないクマだった。

「……………成仏しいや」

一言呟くと、青眼の構えのままクマの方へ一歩。

踏み込むと同時に、抜き胴。

白骨化して頼れるクマを振り向くこともなく、次のゾンビに向かった。

両足で不気味に歩いてくるノウサギ。

振り抜いたままの右中段の構えを崩さず、返す刀で薙ぎ払う。

背後から突進してくる毛のないイノシシ。それを見もせず、わずかに身を躲して、胴体を両断するように振り下ろす。

大型犬ほどもあるネズミ。

飛びかかってくる喉元に、剣を差し出した。

どの動物ゾンビにも、黒い影が見え、目を凝らすと、その影を死体と切り離す太刀筋が自然と分かった。

どれくらい剣を振り続けていただろうか……随分長く戦っていたような気もするが、実はほんの数分の事だったのかも知れない。座間がはっと我に返ったとき、周囲には白骨の山が出来、動物ゾンビは一体もいなくなっていた。

「合格だ。やはりお前は、スジが良い」

背中から急に声を掛けられて、座間は驚いた。しかし、もちろんよく知った声である。

「ダーキニーごときに後れを取ったと聞いた時には、厳しく叱らねばと思ったが、くどくどと理屈を言うより、実戦で追い詰めた方が良いでしょうだな」

振り向くと、一抱えほどの平たい石に腰かけて微笑む、小柄な老人の姿があった。

長い髪も、あご髭も、来ている着物も、すべて真っ白である。

額に着けた、兜巾だけが黒かった。

「太……太郎坊様！　いつたい、どこに行きはったのかと……」

「私は、どこにも行つてはあらぬよ。ずっと、ここにおつたのだ」

「そんな……どこにもお姿は見えまへんでしたが？」

「位相をずらしていたのだ。陰界と現界の狭間から、ずっとお前を見ておつた」

「位相……そうやったんですか」

修業時代に聞いた事がある。

陰界と現界は、同じ空間を共有して重なり合うように存在している。しかし「位相」の違いによって、お互いに認識できないということらしい。

「位相」とはその世界共通の波動周期の事であり、妖怪は、この「位相」を変える事で両界を行き来するのだが、それを行うには強いエネルギーといくつかの条件を満たすことが必要であり、とても自由自在とはいかない。

たいていは、自分の住みかからしか行き来できなかったり、多くの仲間の力で無理にこじ開けるようにして位相を変えたりする。

だが、神霊や強力な妖怪は比較的自在に、しかも単独で位相を変えられると聞いたことがある。

しかし、「陰界と現界の狭間」というのは、座間も聞いた事がなかった。

「わしが見えるようになったのは、お前が多少進歩したせいだ。そやつらを斬れるようになっただろう？」

太郎坊は白骨を指すと、また優しく微笑んだ。

「まさか……これが修行やったんですか？」

「そうだ。

良いか座間よ。こやつらは依り代としての屍体に、本質となる靈魂が重なりて、ひとつの存在となっておった……だが、こやつらに限った事ではない。

妖怪も人間も、それ以外の生物も、また、石も、山も、川も、海も……

すべては依り代と、それをその存在たらしめておる本質によって成り立っておるのだ。

本質と依り代を切り離せば、生き物ならばただの肉。妖物ならば、当たり前モノや生き物に戻る。そして物体であれば、構造が破壊される。

つまり、何者であろうと倒せる」

「ほんなら……今の技があれば、どないな妖怪も倒せるっちゅうんですか？」

太郎坊は目を閉じ、首を静かに左右に振った。

「お前は、月ノ輪流の入り口にやっと立ったに過ぎん。極める事が出来れば、どんな妖怪も、生物も、神ですら斬れるかも知れん。だが、大きな存在や強力な妖怪になればなるほど、依り代と、それに重なっておる本質の結びつきは強固に、また複雑になる。

しかも本質たる魂も一つとは限らず、種類も多彩になる。もちろん、黙って斬られてくれるものばかりでもない」

「……あの奇怪な獣たちは、いったい何だったのです？」

「……………座間よ」

「はい」

「『反魂の法』というものを知っているか？」

「はい。たしか、西行法師が白骨を集め、薬草を塗り、植物の繊維でつないで蘇らせたものだ……………」

「そうだ。」

ただ、西行の術は不完全であつた。由来のはっきりしない白骨をかき集め、周囲の山野の気を宿らせて、新しい生命を作ろうとした。それゆえ、意思も記憶もないモノとなつて蘇つたのだ」

「なるほど」

「もし、完全な形で反魂を行えば、普通に生きている人間とまったく見分けの付かぬものとなるという。みなものもろなか源師仲が蘇らせた人間は、その後大臣にまでなつたそうだ」

「は……………はあ。しかし、伝説なんですよ？」

「たしかに伝説だ。」

しかし、死して本質の失せた屍体に、術によって本質としての気を再度宿らせる、と考えればどうじゃ？」

そこまで聞いて、座間はようやく気づいた。

「まさか、あの獣たちは、師匠がお創りになられたもの……なのですか？」

そうである、とすれば人が悪すぎる。

何の関係もないヒメコを驚かせ、こんな大変な思いをさせてしまった。もし、座間が通りかからなければ、ヒメコはどうなっていたか分からない。師匠のする事であるから、表だって文句は言えないが、あまりにいい加減だ。

座間は、少し眉根を寄せて不機嫌そうな表情をした。

「正直、お前の修行に使える、とは思ったがな。あれらは、私の作ったものではない」

「では………」

いったい誰が、と言いかけた座間を手を挙げて制した太郎坊の目から、涙があふれるのを見て、座間は息を呑んだ。

涙の理由がまったく分からないまま、黙って言葉を待つ。

「……座間よ」

「はい」

「西行の術が不完全だった理由は三つある。

ひとつ、屍体が複数の人間の寄せ集めだった事。

ふたつ、生前の魂を宿した依り代がなかった事。

みつつ、生命の核となるものがなかった事」

「……………」

「2年前の事だ。

大切な一人娘を、暴漢どもに殺された修験者がおった」

「え？」

座間は、怪訝そうに聞き返した。

突然、太郎坊の語り出した話は、何の関係も無さそうに思えたからだ。

「その修験者はこの二年間、苦勞して反魂の術を再現し、一人娘を生き返らせるために使ったのだ。術は成功し、娘は生前のままに蘇った」

「……………まさか」

「そうだ。

あの娘は、死人しひとなのだ」

「ヒメコが……………噓や」

そんなわけはない。

そう、座間は叫びたかった。

抱き上げた時には、たしかに鼓動を感じたし、手を引いた時のぬくもりも残っている。普通の人間と、何ら変わるところはなかったはずだ。

「反魂の術は、邪法だ。

生命の核となるべきものは、生きた素材である必要がある。その修験者は、自分自身の生き肝を使った。

また、どうやったのか、屍体に気を吹き込む反魂香までも再現したのだ」

「反魂香？」

「あの娘が体から発する香りの事だ。その香りが、山で死した獣どもを、不完全な形で蘇らせる」

座間は理解した。

あの動物ゾンビ達は、追ってきたわけではなかった。ヒメコのいる場所で、蘇ったのだ。

あの甘ったるい腐臭のような臭いは、動物ゾンビの臭いではなかった。ヒメコ自身から臭っていたのだ。

そういえば、庵の中にはシカの角や毛皮があった。

あの牡鹿は、庵に逃げ込んだヒメコの発する反魂香で、それが蘇ってしまったのだらう。

「娘を蘇らせた後、修験者は生き肝を与えたせいで死んだ。そして、蘇った娘は記憶を無くしたまま山野を彷徨い、獣の屍体を蘇らせてしまったのだ」

「そんな……………それは、ヒメコのせいやあらへんやないですか」

「その通りだ。」

しかし、このままでは理由も分からぬまま獣の屍体を呼び覚まし、それに怯えながら、死ぬ事も出来ず

永遠に山中を彷徨うことになるう。

あの娘の苦しみを止めてやるには、誰かがとどめを刺してやらねばならぬ」

「ヒメコに事情を話して、屍体のない場所に匿ってやればええんやないですか？」

「今の状況をあの娘が理解した瞬間、術は解ける。

そうなれば娘は白骨に戻るだろうが、魂はどこにも行けず、この世を永遠に彷徨うことになるだろう。

それに、この世に屍体のない場所などありはせんよ。今のところ人間が蘇っておらぬだけ、マシというものだ」

「そういえば、どうしてなんです？」

山中といえど、長い歴史においては、人の屍体もあって不思議ではない。キツネやタヌキなどの、妖怪化しやすい動物のゾンビがいなかった理由も不明なままだ。

「人もそうだが、キツネやタヌキなどの化けやすい連中は自我が強い。

それゆえ、意識が黄泉から呼び覚まされるのが遅いだけだ。クマのように殺される事も少ないから、恨みを吞んで死ぬ事も少ない。

……あの娘が蘇って、まだ半日。

反魂香が香り続ければ、次第に広い範囲で、古く、化け物じみた屍体も蘇ろう」

「じゃあ……どうすれば……」

「月ノ輪流の技で斬ってやるしかないのだ。見よ。」

いまだ反魂香は香っておるのに、獣の屍体は蘇らぬ。哀れな魂は、やつと今、輪廻の大流に還ったのだ……」

太郎坊の言う通り、死臭に似た甘い臭いは漂い続けている。しかし、累々と転がる白骨は二度と動き出す様子はなかった。

それにしても、夢中で気づかなかったが、獣の骨は百体近くもあるだろう。

半日でこれである。

反魂香を止めなくては、どうなることか。

「座間よ。」

つらいであろうから、無理に、とは言わぬ。だが……これを頼みたくて、お前を待っていたのだ。できれば、お前が斬ってやってくれぬか？」

「……………太郎坊様。」

それは、私の修行のためなのですか？」

「それもある。」

お前は心が優しすぎるゆえ、な。しかし……………それだけではない」

「わかりました」

これ以上は聞くまい。と、座間は心に決めた。

疑問はある。

何故、太郎坊は自分自身で始末をつけようとなしないのか？ ヒメコと太郎坊は、どういう関係なのか？ ヒメコを蘇らせた修験者と太郎坊は、どういう関係なのか？

しかし、成りたての烏天狗であった自分を導き、術や技を、惜しみなく授けてくれた太郎坊を信じられないのであれば、もう二度と太郎坊を師匠とは呼べないと思ったのだ。

「クラマさん。誰かと話しているの？」

「……………ヒメコ」

庵の中から、ヒメコがそつと顔を出した。

「……………大丈夫やった？」

「あ……………ああ、もう安心や。これ……………見いや、動物ゾンビどもは、全部成仏しよった」

「すごーい！！ クラマさんって、強いんやねえ」

ヒメコの屈託のない笑顔が、座間には痛かった。
本当の事を言わずに、斬らねばならないとすれば……………騙し討ちにするか、悪人として怖がらせた挙げ句、斬るしかない。

（もう、充分怖かったに違いないわ……………これ以上、怖がらせてどうするんや）

座間は、ヒメコを騙し討ちにする覚悟を決めた。
太郎坊は、石に座ったまま向こうを向いている。しかし、ヒメコには、その姿は見えていないようだ。

あらためて、ヒメコを見る。

さつきまでは見えなかった、ヒメコの本質が見える。

動物ゾンビ達と、まったく同じ黒い影が、ヒメコの存在そのものに重なり、まわりついて見えた。

「ヒメコ、中に入ろうや。」

疲れたやろうから、少し休むとええ。師匠もそのうち帰って来るやろうし……そうや、飯でも食おう」

大天狗といえども、依り代は人間であるから、太郎坊の庵は小さいが、生活感がある。

食料もある程度は貯蔵してあるはずだった。

「うん」

裏の土間に転がしてあった、芋や大根、玄米を使って、座間は雑炊を作った。

「クラマさんって何でも出来るんだねえ」

ヒメコは感心したように言う。

「修業時代に、師匠に何でもやらされたからなあ」

二人は囲炉裏に火をくべ、温かい夕食を食べた。

「あたしねえ、来年の春から、高校の先生になるんだよ」

「へ……へー、そうなんや。ヒメコが先生やなんて、なんか、ビツクリやな」

「ヘンかな？」

「いや、きっと、いい先生になれると思うで」

「ホンマ？」

「ああ、ヒメコは優しいからな。生徒達に好かれると思うわ」

「そうだといいな……
ね。」

クラマさんって、好きな人いるの？」

「ん……………おるよ」

座間の脳裏に、あおいの笑顔が蘇った。

「なあんだ、そつかあ。なんだか、運命の人に会えたような感じがしたのに。」

少し残念。」

「運命の人は、きっと他におるんやろう。未来で、必ずヒメコを待つてくれとるはずや」

「そつかなあ……………そうやとええな……………ね……………？今、何時？」

「ん……………まだ、7時くらいや」

「そつかあ。」

でも、なんや疲れたせいか、眠くなってきたてしもうたわ。寝ていい？」

「ああ。布団、敷いてやるわ」

座間は、押し入れから布団を二組出し、囲炉裏を挟んで、敷いた。それを見て、ヒメコはくすくすと笑った。

「隣り合わせでも、ええのに」

「あほ。」

嫁入り前の娘さんと、おかしいことになったらどないすんねん」

「うん。」

クラマさんの恋人に悪いもんね……」

「いや、そういう意味やない……」

言いかけて、座間は目を丸くした。

さつさと布団に潜り込んだヒメコは、もう目を閉じ、寝息を立て始めていたからだ。

座間は横になったヒメコを、もう一度、目を凝らして見てみた。

太郎坊の言った事が、間違いであってくれば……いや、そもそもそれが大嘘で、座間の眼力を試す罠であってくれてもいい。

そう何度も思った。

だが、ヒメコ存在と重なる黒いもやは、歴然と存在していた。それを切り離す太刀筋も、ハッキリと見える。

座間は剣を取り、柄に手を掛けた。

息を整え、覚悟を決める。

剣を抜こう、とした時。

手が、ガクガクとふるえた。

いや、ふるえというレベルではない。

どうしようもなく、勝手に手が動き、まるで自由がきかない。

自分の胸に、膝に、熱い滴りを感じて、初めて自分が泣いている事に気づいた。

剣が、抜けない。

前が、見えない。

覚悟は決めたはずだった。

それが、ヒメコのためにもなるはずなのだ。

これほどとは、思わなかった。

罪のない者を、斬る。ということ。

自分に信頼を寄せていてくれる者を、裏切る。ということ。

(ダメや……………斬れへん……………)

その時。

ふ、と、ヒメコが目を開けた。

そして、座間を見て、ふわりと笑った。

凶器に手を掛け、ふるえている座間を見て。

笑ったのだ。

座間は理解した。

ヒメコは、気づきかけている。

記憶が戻りかけているのか？

座間の様子を察したのか？

その時、座間は思い出した。庵の中で青い顔をしていたヒメコ…

…ヒメコは毛皮と角から、牡鹿が蘇るのを見たに違いない。

太郎坊の言葉が座間の脳裏によみがえる。

『今の状況をあの娘が理解した瞬間、術は解ける。そうなれば娘は白骨に戻るだろうが、魂はどこにも行けず、この世を永遠に彷徨うことになるだろう』

ヒメコの存在を覆う黒いもやが、勝手にヒメコの肉体から離れ始めた。

あれが離れきってしまえば、ヒメコは屍体に戻り、その魂は永遠に救われない。

（ダメや……………ヒメコ…………）

このまま放置すれば、ヒメコの魂は永遠に救われない。

「！！！」

自然に、体が動いた。

降魔の剣が一閃し……………ヒメコは再び目を閉じた。

そしてもう二度と、目を開ける事はなかった。

「うああああ！！！」

慟哭が、小さな庵に響き、太郎坊は外の石に腰かけたまま、澄み切った星空を見上げて滂沱の涙を流し続けていた。

§ 15 小玉鼠

§ 15 小玉鼠

いつの間にか月が中天に上り、長く^{こたま}訝^うしていた慟哭の聲が途絶えた。そして、壊れた引き戸がきしみ、庵の中から憔悴した様子の座間が歩み出てきた。

「……………師匠」

太郎坊は石に座したままである。

「すまなかつたな……………」

「ヒメコを殺した暴漢どもは……………どこにおるんですか？」

やりきれない悲しみの中、せめて憎しみをぶつける相手を探すように、座間は問いかけた。太郎坊はやつと振り向き、悲しげに笑った。

「とつくに私が始末した」

その言葉を聞いて、座間は死ぬほど驚いた。

太郎坊は、妖怪化したばかりの座間とは違う。

強力な神霊たる大天狗である。土地神にも等しい力を持ち、うかつに動けば、天と地を巡る気の流れを、大きく損ないかねない。

ゆえに、どのようなことがあると、決して世に出ず、世に働きかけず、地を守る事のみ生きる。

特に人の生き死には、絶対に関与しない。

太郎坊自身から、そう教わったはずだ。

「どうして……………」

「ヒメコ……………大月姫子はな、私の孫娘だ」

「！！！」

座間は驚き息を呑みながらも、心のどこかで、『やはり』と思っていた。

「反魂の術を使った姫子の父は、娘婿……………つまり義理の息子だ。姫子の母である私の娘は、早くに病で死んだゆえ、姫子自身は、私の事を知らなかったのだ」

「お子がおられたとは、知りまへんでした」

「お前も知るように、私も大天狗となつてから千年を生きておる。今の依り代の人格となつてからは、三百年ほどだが……………妻と出会つたのは、四十年ほど前のことだ。」

千年生きてきて……………ただ一度の恋であつた」

今は小さな老人の姿だが、もともと力ある神霊である。

姿を変えることなど造作もない。太郎坊は人間の男性として、山中で遭難していた一人の女性を助けた。そしてその女性と恋に落ち、大天狗である事を隠して、共に二十年暮らしたのだという。

「そのうちにこの体……………依り代のもので良いから子が欲しい、と思うってしまったのだ。」

そして娘が生まれ、出産の際に妻を失った。

さらにその娘を病で亡くし、今また、義理の息子と孫をも死なせてしまった。」

再び、太郎坊の頬を涙が濡らした。

「私はな、もう、生きるのに倦んだ」

「師匠……………」

「人の生死にに、神霊が関わってはならぬ理由が分かった気がするよ。」

人の人生は、あまりに理不尽で、辛い事が多すぎるのだ。そんな人生でも、終わりがあから生きていける。

永遠を生きる神霊には……………耐えられぬ」

「太郎坊……………様？」

座間は、目を凝らした。

太郎坊の影が、すうつと薄くなったように感じたのだ。

「義理の息子の暴走を止められず、姫子に、二度も死の苦しみを与えてしまったのは、私の落ち度だ。それに、私の殺した若者達も無法な暴漢どもとはいえ、親も兄弟もあつたらう。

その罪も償わねば、な」

「どういう……………事です？」

「私は、狭間の世界に行く」

「……………狭間？」

「陰界と現界の狭間は、生と死の狭間でもある。そこでもう一度、姫子の靈魂に会いたい。会って、話したい、と思う」

それで、最初から太郎坊は位相をずらしていたのだ。

そのせいで、自分自身でヒメコを斬ることが出来なかったのだろう。いや、そうでなくとも斬ることは出来なかったのかも知れないが。

「帰って……来はるんですよね？」

「分からぬ。

行った事がないので……………な。

分からぬが……帰って来たのでは、償いにはなるまいよ」

話しながら……太郎坊の影は、更に薄くなっていく

「座間よ……………」

まだまだお前は天狗としては未熟だが、見込みがある。私がおらぬでも、月ノ輪流を極められるだろう」

「し……師匠!!」

「よいか。何も恐れるな。

月ノ輪流を継ぐ者として、たとえ相手が何者であろうと、決して後れを取るなよ」

「師匠!!」

一度は乾いたはずの涙が、また座間の両目に溢れた。

「悲しむな。」

胸を張れ。

お前は為すべきことを為しただけだ。

そして姫子を救い、私も救ってくれた。私の誇るべき弟子だ」

太郎坊は握手を求めるように、すつと右手を差し出した。

座間は、太郎坊の手を握ろうと手を伸ばしたが、すでに実体を失っているのか、空をつかんだだけであった。

「次郎坊に…… よろしく言っておいてくれ」

最後に、にこり、と笑うと太郎坊の姿は消えた。

座間は、しばらく空を握ったまま座り込んでいた。

まさか、太郎坊とまで別れることになるうとは、思ってもいなかった。

心も、そして体も疲れ切っていた。

忘れていた火傷の跡が、じくじくと痛み始めている。だが、悲しみ続けるつもりも、休むつもりもなかった。たった今、師匠とヒメコのおかげでつかんだ技を持って、すぐにでも帰らねばならない。

あおいが待っている。

いや、あおいに……… 会いたい。

今、すぐに。

座間は無言で変化した。

ずっと立ち上がって月を見上げた。

漆黒の翼が、月光に映える。猛禽の瞳が、虚空を見据える。

鋭い爪のある両手で、葉団扇と剣を持ち、目を閉じた。

自分の中で、気が満ちていくのが分かる。もう、火傷も疲労も気にはならない。

師匠の事。

ヒメコの事。

あおいの事。

葉子や七海、いぶきや真菰達の事。

ダーキニーの事。

心に流れ来る様々な事象を、そのまま受け止め、憎しみや、怒りや、喜びを、すべて気を高めるきっかけにしていく。師匠から習った瞑想法だ。

十分に気が満ちたことを確認すると、座間は瞳を開いた。

そして、夜空に向かって一気に飛び立った。

「小玉鼠さん。いる？」

あおいは、池の畔のアシの茂みに向かって声を掛けた。

いぶきと共に、先日ケルピーと戦ったビオトープ池を訪れたのだ。まだ日暮れには時間があるが、すでに日は傾いている。

「オヒサシブリデス」

その返事は意外な事に、あおい達の頭の上から聞こえた。見上げると、池の畔に立つ大きなハンノキの枝に十数匹の小さなカヤネズミ達が、並んでこちらを見ている。

「あら？あなたたち木にも登るの？」

カヤネズミは本来、草地を住みかとするネズミだ。木に登るといふ話は、あまり聞いた事がない。

「イチオウ、妖怪デスカラ」

たしかにそうである。

見た目があまりにも普通のカヤネズミであるので、忘れてしまっていたが、妖怪小玉鼠は一定以上の妖力を持ち、人語を解するだけでなく、素早く木々を渡って移動し、悪い気を見つけては吸収して浄化する性質があった。

「ナニカ……ゴヨウデスカ？」

十数匹並んだ小玉鼠の中でも、一際目立つ大きな個体が声を発した。

以前見た、小玉鼠の頭領と思われる。

だがほんの2ヶ月しか経たないのに、あの時と比べると随分大きい。また、背中から頭にかけての体毛がとりわけ白っぽくなっているのは、老成してきたしるしのだろう。

「あの……最近、この町で変わった事……ないかな？」

「カワツタコト……デスカ？」

小玉鼠はくりつとした目をこちらに向け、首を傾げる仕草をした。

「うん。変わった事なら何でもいいんだけど……そうね……」

「妙に強力な妖怪を見た……とか、ヘンに気が集まっている場所がある……とか」

言いよどんで考え込んだあおいに代わって、いぶきが小玉鼠たちに問いかける。しかし、彼等は顔を見合わせるようにすると、申し訳なさそうに答えた。

「イエ、ココシバラクデ、カワツタコトハアリマセン」

「本当に、全然、変わった事はない？」

「ボクたちノ眷属ハ、マチジュウニイマス。

ドブネズミヤ、クマネズミモ仲間デスカラ、カワツタコトガアレバ、ワカルハズデス」

「ええっ！？ ドブネズミも、妖怪化しちゃってるの？」

ドブネズミの個体数は、カヤネズミの比ではない。

妖怪化したドブネズミがその気になれば、動物パニック映画もさながらの、人間への反乱も可能だろう。そんなことになったら、取り返しがつかないような気がした。

「イエ、カレラハ妖怪デハアリマセン。

ボクたちノ血族シカ、コダマネズミハ、イマセン。シカシ、ドブ
ネズミハ、下水や倉庫、クマネズミハ、ビルノ内部、ハツカネズミ
ハ、人家や農地ノ情報ヲ、クレマス」

「なるほど……それで、町中で分からない事はないってわけね」

だが、それはつまり、搜索が行き詰まった事を示していた。
あおいは、深いため息をついた。

「そんなに、落ち込まないで下さいよ」

いぶきは、あおいを慰めるように言った。

ため池ビオトープからの帰路。ビッグホーンの車内である。

あおいは、小玉鼠たちから有効な情報が得られなかったことで、
ふさぎ込んでいた。

「ネズミたちだって、完璧に情報を集めているとは限らないじゃないですか」

「でも、小玉鼠の頭領……相当自信持っていたわよ？　もしかするとダーキニーは、もう、この町にはいないのかも……」

そうであれば、葉子や七海の居所は、どうやって探したらいいの
だろうか？　もし、真菰専務の血族や配下の水妖達にも心当たりが
なければ、完全に行き詰まったことになる。

「おい、あおいよ」

その時、突然、ラジオのスイッチが入り、ケルピーの声が流れ出した。

「困っておるようじゃな。だが、どうも端で聞いておっても、おかしな事があるぞ?」

「え?ケルピー、あなた、何か分かるの?」

「何か分かるの、とはご挨拶じゃな。ワシもあちらでは、いささか名のある妖怪なのだがな?」

「じ……ごめんなさい。私………」

「べつに謝らんでも良い。

あおい。自分の乗馬になれ、と言ったのはお前じゃろ?　ワシは、とつくにお前達の仲間のつもりなんじゃがの」

そういえば、座間達を助けに走ってくれたのはケルピーだった。あの時、七海達を連れてきてくれなかったら、そして、火事の中に突っ込んでくれなかったら、座間達は間違いなく死んでいただろう。

「……ごめんなさい」

「謝らんでも良い、と言っに。

まあ、よいわ。

まずおかしいのは、遠く離れた山神殿が気づいた、気の流れの異常を小玉鼠どもは気づいていなかったという事じゃ」

「言われてみれば……………ヘンね」

「それと…………小玉鼠どもは、貴田小学校の火事の事は知っておったのか？」

「いえ……………聞かなかった。

あれだけの大きな火事ですもの。知っていたかも知れないけど…………何も言わなかったわ」

「つまり、あれほど異常な火事でも、ネズミどもには、普通の火事と見なされていたという事じゃ。

それは、普通の火事と見分けが付かなかったからではないのか？
何故なら、火気の集中していたのは屋上のみだったからじゃろう。
町全体の気の異常というのも、もしかすると屋上にしかなかったのかも知れん。

つまり……………」

「分かった！！

建物の中も、野山も、農地も……………すべてを行動圏にしているように見えても、ネズミたちの行動範囲外の部分があったのね。

そこでは、いくら異常が起きていても、ネズミたちには分からないんだわ！！」

「それが、屋上……………って事ですか」

「屋上がキーポイントですか……気づきませんでした。
私の配下の妖たちからも何の情報もなく、何か手の打ちようがないかと思案していたところでした」

真菰専務が、感心したように言う。

トープスの社内である。あおい達は、箕島教授の到着を待ちながら、情報を交換していた。

「市内の5階建て以上のビルの配置を、赤で塗ってみました」

パソコンのモニター上で、いぶきが説明を始めた。

「田舎町といえど、さすがに多い。これでは、よく分かりませんね」

「で、屋上緑化や屋上庭園など、屋上を有効利用している建物がコレです」

今度は、地図の上に緑の色が重なった。今度は雪国だけあって、かなり少ない。

しかし、それでも7〜8棟の建物が緑に塗られていて、絞り込めでもないし、何か法則も見いだせない。

「で……ここからビオトープ管理士会メンバーによる施工実績のビルを……消してみたのよ」

「これは……！！」

「残ったのは、3つのビル。
等間隔で、南北一直線になっているわ。しかも、その一つは貴田小学校なのよ。これは偶然ではないと思う」

「いったい、どういうことですか？」

真菰専務の疑問ももつともである。ビオトープ管理士の携わった仕事を消した意味が分からない。

「小玉鼠が情報を収集しきれなかったのは、単純に、ネズミが屋上へ行けなかったからよね？　つまり、屋上がほぼ生態的に隔離されている場所ってことになるわ」

「なるほど。」

ビオトープ管理士であれば、何を置いても、まずは、生態的回廊をつなぐ事を考えますね」

生態的回廊、ビオコリドーとも言う。

生き物が行き来するための、道の事である。人工のコンクリート構造物や、大型道路、三面護岸の川などは、生物がそれを利用して移動することも、横切することも困難である。

だから、空き地や路傍の緑地を残し、そこを伝って生物が行き来できるように配慮する。

それも難しい時には、植え込みやトンネル、場合によっては動物専用の橋まで架けて、生き物の行き来が出来るように設計するのだ。

「でも……いくら管理士だからって、5階建て以上の屋上なんかはどうやってコリドーをつなげられるんです？」

「以前、事例研究会で紹介していたわ。」

建物のすぐ脇に生えた高木を生かし、地際からツル植物を這わせて、さらに枝を、緑化したベランダまでつなげるの。その先は、またツル植物で屋上までコリドーを作るのよ」

「……よくまあ、そんな事を考えつきますね」

真菰専務は呆れた表情で言う。

「私が考えついた訳じゃないし、管理士のみんなが同じ方法をとるわけでもないわ。

でも、みんな流石ね。

どんなに無理そうでも、やるべき事はやってるってことね」

「でも……このダーキニーと関係があると思われる場所は、どうしてコリドーをつなげていないんでしょう?」

「生き物が行き来していると、

せっかく溜めた気をその生物が使って変質しまうかも知れないわ。それに、それで殖えた生物が出て行けば、気そのものも流出してしまっ……

何より外部との生物の連絡が無ければ、気の異常も見つかりにくいでしょう?

だから、わざとコリドーをつなげなかったと考えられるわね」

「一番南が貴田小学校、北が西北新聞本社ビル、真ん中は八杜商事本社ビルですね」

「八杜商事は、一番大きなビルよ。この三つのビルが関係しているとすれば……確証はないけど……探すならここからね」

ああいは、早速立ち上がった。

「社長。待って下さい。どこに行かれるのです?」

「八杜商事ビルよ。決まってるじゃない。」

「最初にお約束したはずです。一人で先走らない事。自分の身を第一に考える事」

「でも、稲成さんや七海ちゃんを助けなきゃ。行方不明になってから、もう、丸一日経とうとしているのよ？」

「あなたに万一の事があつては、何にもなりません！！」

真菰専務は、あおいの行く手をふさぐように立ち上がった。

しかし、あおいも引き下がろうとはしない。この二人が険悪な状態になるのは珍しい。

いぶきは、仲裁することもできず、ソファから立ち上がるタイミングを逃して、おろおろと二人の顔を見比べているだけだ。

「おい！！ お前たち！！ ラジオかテレビをつける！！」

その時、階下からケルピーの声が響いた。

あまり性能の良くないカーラジオからの声なので、まるで拡声器のように割れた声であったが、間違いなくそう聞こえた。

§ 16 西北新聞社

§ 16 西北新聞社

「何よこれ……………」

事務所に設置してある小型TVの電源を入れたあおいは、自分自身の目を疑った。

いぶきも、真菰専務も、信じられないものを見る目で画面を見つめている。

そこには………… 西北新聞本社ビルの周囲が、浸水していく様子が映し出されていた。

『えーこちら、西北新聞社前から中継です。

先ほど、急に葛柳川の水位が上昇し、堤防が決壊いたしました。局地的豪雨などは観測されておらず、上流のダム湖の水位の異常減少が見られることから、放水システムの故障という見方が強まっています』

局地的な現象であるせいか、アナウンサーは落ち着いてしゃべっている。

「西北新聞！？　これって、どういうことなのかしら？」

「おそらく………… 南の貴田小学校が火気であることから考えると、北にあたる西北新聞社は、水気を溜めていたのでしょう。それぞれに気を高め………… 中央に木気と土気を集めていく………… 本来それが

目的だったのかも知れません」

画面を食い入るように見ていたあおいは、思いがけないものを見つけて声を上げた。

「ちょっと待つて！！ 今の……………七海ちゃんじゃない?！」

水位が次第に上昇し、次々に避難していく社員達に混じって……人の流れに逆らい、建物に入っていたのは、たしかに七海のように見えた。

「でも……………なんだか、様子がおかしかった。ふらふらしているように見えたし、何より、一人だけどうして建物に?」

いぶきも、七海の姿に気づいたようだ。

「専務……………まだ、私を止める?」

真菰は、ふう、と大きなため息をついてあおいを見た。

「どうしても行かれるなら、私も行きましょう。

不幸中の幸い、というか、あれだけ水が氾濫していれば、私の動きも目立たないでしょうから」

「我が儘言つて、ごめんなさい」

「いえ。社長が従業員の身を心配するのは当然です。では……………この姿では意味がないので……………先に、現場へ向かいます」

そう言つと、真菰専務の背後に、黒い渦が現れた。

「あーっ！！　ずるい、専務だけ抜け駆け！！」

「抜け駆けではありません。こうしないと、本体で戦えないでしょう……」

声がフェードアウトしていき、

黒い渦に吞まれるように、真菰専務の姿が消えた。あおいは、くやしそうに頬をふくらませると、事務所を飛び出した。いぶきがそれに続く。駐車場へ行くまでもなく、玄関先にはエンジンを掛けたビッグホーン……ケルピーが待っていた。

「遅いぞ。早く乗れ」

あおい達が乗り込むのとはほぼ同時に、ビッグホーンはタイヤを滑らせる音を鳴らしながら発進した。

「うわ、ちょ……待って！！」

国道高架の斜路^{ランプ}を降りようとすると、警察が通行止めになっている。それを見たあおいが考える間もなく、ケルピーは勝手に動き出したのだ。あおいはブレーキを踏んだが、全く効く様子がない。

ケルピーは、普通の車ではあり得ないアクロバットで、中央分離帯の植え込みを飛び越え、反対車線の斜路、つまり登り口の方へ進

路を向けた。

そこから登ってくる車は無いため、警察も人員を割いていない。赤い円錐形のセーフティコーンをはね飛ばし、一気に斜路を降りる。しかし、斜路の途中から完全に水没している。水深は1 m以上あるだろう。

「わしは水妖だぞ。信じろ」

見る見る迫る水面に、悲鳴を上げるあおい達に向かって、自信に満ちた声で言うと、ケルピーは水中に飛び込んだ。

そしてタイヤを半分ほど出した状態で水面に浮かび、そのまま、前に進み始める。車内には全く浸水しないばかりか、呆れた事に、舗装道路を走るより、速い。

「あ……あなた、本当に水陸両用車になっちゃったのね……」

「そうなれ、と言ったのはお前だろうに」

ケルピーの声はこれまでにないほど得意げだ。その表情が見えないのが残念なくらいである。

「お見それしました」

あおいは、素直に実力を認めた。

見た目完全に普通の乗用車であるせいで、侮っていたのは事実である。

まるで四角い形をしたイルカの背に乗せられたように、あおい達は、あり得ない早さで西北新聞本社ビルに到着した。

西北新聞の周囲は、既に2 mほどの深さまで冠水しているようだ。

乗用車の屋根は完全に水没しており、二階の窓近くまで水位は上昇している。特に窪地、というわけでもないにも関わらず、この周囲にだけ水が集まっているのは、明らかに異常だ。

だが、ここに来てマスコミや警察、消防のボートやヘリが目立ち始めた。

水上を疾駆してきた乗用車に驚き、警察が拡声器で叫びながら、こちらに向かってきているし、中には、こちらにカメラを向けている記者らしき者もいる。

「これじゃあ……建物に入れないわね」

あおいが呟いたとき。

「ご心配なく」

水中から、聞き慣れた真菰の声がした。

そして、突然建物を中心に、水が渦を巻き始めた。普通のエンジン駆動である警察や消防のボートは、なすすべもなく流されていく。しかも、空からは大粒の雨が降り始め、雷鳴が轟いて、ヘリも撤退を余儀なくされた。

「今だ。窓から出て、飛び移れ」

ケルピーの指示は容赦がない。

あおい達は、二階の窓の下にある、狭いキャットウォークに足をかけ、窓を蹴破って侵入した。

部屋の中には人の気配はない。

しかし、廊下をバタバタと走る足音と、得からの人の声は聞こえ

てくる。新聞社ともなれば、この状況をスクープにするため、記者チームなどは残っているのだろう。

だが、この混乱の中、だっ広いビル内で見とがめられる心配は無さそうだった。

「エレベーターは使えそうにないわ。非常階段を探しましょう」

非常階段はすぐに見つかった。

鉄の防火扉が閉まっているが、問題はない。あおい達は、非常階段を一気に駆け上った。この建物は9階建てであるが、いぶきはもちろん、あおいも息一つ切らしていない。

「屋上庭園……ここね！」

鉄の扉を引き開けると、足元に水が流れ出してきた。

「何か………います!!」

警戒したいぶきが、山姫の本性を現して変化した。

後ろでまとめてあった髪をほどき、一度、二度と頭を振ると、髪の色が赤っぽく染まり、目の色も鳶色に変化した。着ていた作業服が、派手な色彩の和装に変わり、体も二回りほど大きくなる。

あおいはあおいで、懷から呪符をいくつか取りだし、簡易結界で体の周囲を守る用意を始めた。

あおいの髪が、ふわりとふくらみ、体の周囲に銀色の膜が出来たように見えた。

真菰の降らせている雨は、未だやむ様子はない。

屋上庭園は、土砂降りの雨が流れる先を失ったかのように、水深

20センチほどに浸水していた。下は浸水、前は雨。こうなると、周囲が水だらけで何も分からない。

しかし、屋上を覆い尽くす浅い水の中に、確かに何かがいる。水中をあり得ない速度で、太く長い生き物らしきものが、ぐねぐねと蠢いている。

「これだけ水があれば……負けないよっ!!」

水生木。

つまり、水気は木気を強化する。いぶきは、懷から取りだした細い木の枝を、水につけた。

小さな枝は瞬時にして、大きく育ち、木製の大槌に姿を変えた。柄や先端には、緑の葉が茂っている。いぶきは、それをグルグル振り回して目の前の水面に叩きつけた。大槌は、木製とは思えない固い金属音を立てて、屋上の床面に激しい衝撃を与えた。

水中を振動が伝わり、潜んでいたモノがたまらず水面に飛び出す。

それは、全長10mに及ぼうかという、蛇であった。

だが、その蛇の頭部に当たる場所には、人間の女性の上半身が付いている。

その顔は……

「な………七海ちゃん!」

「七海ちゃん!？」

ふたりは異口同音に叫んだ。それはたしかに、磯女の本性を現した、伊園七海であった。

§ 17 磯女・七海

§ 17 磯女・七海

磯女である七海は、人を愛したことも、愛された事もなかった。

いや、正確には少し違う。

人に愛されなかったり、裏切られたりして、海で死した女の念が、ウミヘビの一種を依り代として妖怪化したモノ。それが、磯女であったから、前世、というに変だが、彼女が『七海』という名の磯女として生ずる前には、愛し、愛される、感情に満ちた存在であったはずであった。

だが、自分が生ずる前の記憶など、七海にはない。

「また……………今日が終わる……………」

自殺の名所として名高いこの灯尋望岬に、磯女として存在するようになってから、かれこれ、三百年が経とうとしていた。

磯女は自殺者の怨念を集め、深夜一人で磯に来る不用心な男の血を吸う。それが磯女が存在理由でもある。

七海はなんの疑問も持たず、そうやって三百年生きてきたのだ。

いや、本当は生きてきた。というのとは違うのかも知れない。

最近、七海はそう思うようになっていた。

磯の生物たち……………魚も、カニも、エビも、サザエも、ヤドカリも

……みな、ふらふらと何の目的もなく泳いでいるように見えて、どれもが必ず、恋をして子孫を残し、次の世代へ変わっていく。

中には、卵や連れ合いを守るために、敵と戦って犠牲になり、死んでいくものもいた。

生きる。

ということは、こういう事なのではないか。

（私は、本当の命を持っていない。この小さな魚や、ヤドカリたちの方が、私なんかより、ずっと『生きて』いる）

七海は、そう思い始めていた。

（私は、恋をした事がない。

憎しみに満ちた、女達の情念は感じて、どうしてもそこまで男を憎むのかさえ、理解できない）

そんな七海が、ある時夢を見た。

男の夢である。

その男は、七海が悲しみに暮れ、困っていたとき、誰かに解決法を尋ねて助けてくれた。

正直、出会ったときは軽薄そうで、邪魔な人だと思っていたが、見た目で判断したことを、少し反省した。

七海は感謝の気持ち、ほんのりした恋心に変わるのを感じていた。

とても、幸せな夢だった。

「あ……………あれ？」

そこまで見て目覚めたとき、七海は自分が海の底にいるのを思い出して、心底驚いた。

そして、これまでにない感情を抱いていた。冷たい海底の横穴にいなから、胸が熱くなるのを感じたのだ。しかし、それと同時に、自分の境遇を呪わずにはいられなかった。

（私は醜い化け物なのに、どうして、あんな夢を見てしまったんだろう。）

私は一人なんだ。

これからずっと………）

寂しさと悲しさで、胸が張り裂けそうだったが、水中だから声は出ない。

涙も流れない。

だが七海は、自分のまわりの海水すべてが、七海自身の涙であるかのように感じていた。

次に眠った時、七海はまた夢を見た。

その夢の中で、七海は戦っていた。

あの男と共に。

相手は見た事のない化け物である。男とその仲間たちを守るため、七海は技と知識を駆使して戦った。しかし、仲間の中に数人いた女性を気遣う男に対して、七海は秘かな嫉妬心を抱いていた。

その嫉妬心が、大きな失敗につながった。

一人の女性が化け物にさらわれた時、男が飛び出したのを止められなかったのだ。本当なら自分が助けに行かねばならないのに、躊躇した。

そのせいで、男は化け物達に攻撃を受け、倒れてしまった。男は

大丈夫なのか。

心配で泣きそうになりながら走った。自分の危険も顧みず……。

そこまでで、また七海は目覚めた。

この前以上に、胸がドキドキしている。夢の男への恋心は、疑いようがなかった。

あの、一見優男のように見えながら、いざとなると行動力のある男。

身長は高く、他の人と比べて頭一つ大きかった。彫りの深い整った顔立ちは、少し日本人離れしていた。言葉もこのへんのものとは、少し違っていたように思ったが……………

その男の顔を思い浮かべるだけで、七海はフワフワした気持ちになるのを止められなかった。

その夢を繰り返し見始めてから、5年近くが経った。

「どうしよう……………」

七海は自分が、良くない状態である事を理解していた。

最初は、眠るのが楽しみになった。

夢で男に会えることを願って、早々に眠りにつく。

最近は、男が人間である自分の職場にやってきて、一緒に冗談を交わしながら、働くような夢まで見始めていた。

しかし、ここしばらくで夢を見る頻度が急に増え、七海は、磯女としての役割を果たせていない自分に気づいていた。

妖怪として、なんの疑いもなく存在していればよかったのだ。

確かに、磯女は哀しい、しかも邪悪な妖怪だ。だが、哀しいには哀しいなりに、邪悪は邪悪なりに存在意義がある。

魚が陸を歩けないように。

チョウが花の蜜以外を食べられないように。

それぞれの存在には、この世での役割がある。

磯女が、磯女としての役割を放棄すれば、消滅するしかない。すべての男に対する、謂われのない憎しみと、世を呪う思いこそが、磯女の存在意義であつたはずだ。

だが、七海の心に根付いてしまった恋の炎は、もう消えそうになつた。

（会つたこともない男に………恋？

でも……私はもう、磯女であり続けることに疲れた。相手に会つたこともない……こんなおかしい恋でも、抱いたまま消える事が出来るなら……それもいいかも知れないわ）

その時。

磯女としての、七海感覺到何かが引つかつた。

（防波堤に、男が一人で来ている）

そこは、最近出来た防波堤である。

何度か、釣り人の血を吸つた場所だ。だが、あの夢を見てから、人間を殺す事が出来なくなり、適当に血を吸って逃がしてしまつて

いた。

そうすると人間どもの間で噂になり、獲物が来にくくなる。そのせいでもう、数ヶ月、磯女としての仕事をしていなかったのだが……

（間抜けな人間もいたものね。でも……ちょうどいい。今日で最後にしようかな……）

七海は、磯女であることをやめ、明日消滅することに決めた。

最期に、防波堤に来ている男に説教でもしてやろう。

これまでも、一人で釣りに来る男に、ロクな奴はいなかった。趣味にかまけ、奥さんを泣かせ、子供も親もないがしろにし、さりとて仕事も中途半端。

血を吸いながら、人間の記憶をのぞくことが出来る七海は、何度も呆れたものだった。

「あの……すみません」

人間の女に化けた七海は、防波堤で釣り糸を垂れている男の後ろに近寄って、声を掛けた。

案の定、男はびくつとして振り返った。

「お魚、釣れましたか？」

七海は、にっこり微笑んで話しかけた。

大抵の男は、深夜、暗闇から突如現れた若い女に、恐怖の色を浮かべる。そうしたら、難癖をつけて魚や釣り具を取り上げる。

逃げ出すようなら追いかけて、蛇身の正体を現して締め上げ、血を吸い尽くすのが七海のパターンだった。

しかし、その男は違っていた。
少しも恐れる気配もなく、言葉を返してきたのだ。

「ああ、やっと来はった。もう、朝まで釣つとつたら、クーラーに
入り切らんとこやったわ」

まるで、七海を待っていたかのような言い草である。

言葉通り、その男のクーラーからは、大きなクロダイの尻尾が、
いくつもはみ出している。男は、すつと立ち上がって振り向いた。

背が高い。

人間に化けた七海の、頭二つ分は確実に。

一見、優男風の表情。

ゆるんだ口元は、常に微笑みをたたえているようだ。しかし、鋭
く澄んだ目は、強い意志を宿して見え……………

「なあ、磯女はん。悪いんやけど、もう、人の血イ吸うの、やめて
くれへんかな？」

「……………はい」

「え？ ええの？」

「はい。やめます」

七海は、男の顔をじつと見つめたまま言った。

まだ、信じられない。

夢のあの男が……………目の前にいる。これで、本当に明日消えても悔
いはない。

「ええええ！？ 何よそれえ？」

突然、背後の闇から声が上がった。

女の声だ。

現れたのは、青い作業服姿の若い女性であつた。手には、呪符を持っている。

「まあ、ええやないですか社長。ケンカせずに済むなら、それに越したことはないですよって」

「拍子抜けしたわね」

別の女の声がした。もう一人、闇から現れたのは和装の大柄な女だつた。

「変化するんじゃないかな」

「もう、結界は要らんみたいですねえ」

坊主頭の男も現れた。

「入堂部長が、凶悪な妖怪だとか言うから、私達だけじゃ手に余ると思つて来てもらったんでしょ？」

社長と呼ばれた女が、坊主頭の男に文句を言う。

男一人だと思っていたが、三人もの人間が闇に隠れていたのだ。どうやらあの坊主頭の男が張った結界に入っていると、妖怪には見えないらしい。

「でも、磯女さん。」

血を吸うのやめるって……これからどうするの？ 血を吸うのは、磯女としての存在意義でしょ？ それをやめちゃったら………」

「消滅……しますね。たぶん。」

「死ぬ………ってことよ？」

「いいんです。」

私が生きて三百年。磯女でいつづけることに、疲れました。それに……もう思い残すことはないし………」

七海は言いながら、ちらりと男の顔を見る。

思い残すこと………あるとしたら、この男と一度だけでも………そう思ったが、首を横に振って忘れようとする。

しょせん、人間と妖怪なのだ。どうなるものでもない。

しかし、海底へ帰ろうとする七海を引き留めたのは、夢の男だった。

「いやいや、待ちいな磯女はん。」

そんなん、後味が悪うてしゃあない。そや。磯女やめるんなら、ウチに来いへんか？ 社長、たしかCAD使いが一人、足らんで言うてはったけど………どうやる？」

「座間君、あんたまたウチに妖怪の社員を増やそうっての？」

あおいは、渋面を作って言う。

しかし、口元のほころびが、完全に拒否している訳ではないことを教えていた。

「ちゃんと、エサをやるのよ？ 散歩も、あんたの仕事」

「犬ちゃんいますがな。それに、そんな言い方は、磯女はんにも失礼でっせ？」

「そうね。ごめんごめん。で、磯女さん、あなた名前は？」

七海はあまりの急展開について行けず、口をポカンと開けて二人を見つめている。

「あの……………私、妖怪なんですけど……………それも邪悪な……………」

「知ってるわよ。」

ああ、なるほど、こちらの自己紹介がまだだったわね。この背の高いのが、座間典俱君。実は烏天狗なの。

こちらの女性は、森いぶきさん、山姫。

この人は社員じゃなくて、市の農村整備部長の入堂さんで、見越入道。

心配しなくても、仕事関係はほとんど妖怪よ。私は社長の圓野あおい。私だけ人間なの」

「は……………はあ」

「他にも二人、蛟竜と妖狐の社員がいるけど……………また、後で紹介するわ。」

で、勤務条件はね……………」

「あ……………あの、ちょっと、まだ私、働くとは……………」

手持ちのリュックから、ごそごそと、会社案内の書類を取り出そうとし始めたあおいを七海が制した。

「うちじゃ……イヤ？」

「いえ、そうじゃなくって。私、働いた事なんて無いし、何も出来ないと思います。」

それに、磯女をやめるって決めた瞬間から、もう私、いつ消えてもおかしくないはずなんです。いきなりそうになったら、ご迷惑だし………」

「その辺は心配しないで。」

この森さんはね、山神様の血を引いていて、妖怪でも人間でも、関係性や意味を少しだけ付け替える事が出来るのよ」

「意味？関係性？」

「うーん。まあ、平たく言えば『^{カルマ}業』ね。」

磯女さんの磯女としての業を、^{カルマ}その辺の蚊にでもくつつけちゃうの。そうすれば、血を吸わなくても消滅しないでいられるんじゃないかしら。

仕事だって、仕事の出来る人の業を磯女さんにくつつければOK」

「でも、その人は仕事が出来なくなっちゃうんじゃない………」

「だから、もう仕事してない人の業をもらうのよ。死んだ人なら大丈夫でしょ？」

戸籍とか、住まいは……入堂部長？お願いしたわよ」

「あおいちゃん……こんな妖怪まで社員にするってのかい？」

あきれたもんだな。でも、これで市民の安全が担保できるなら、仕方ないかなあ……副市長にでも掛け合ってみるよ」

まったく、呆れるほどの行動力であった。

なんと翌日から七海は、人間、伊園七海としての立場を得、トープスの社員として働くことになったのだ。

（なんか……夢みたい。でも、夢なら今度は覚めないで）

毎日夢に見たあの男、座間と机を並べ、和やかに会話しながら、人間として生きていけるのだ。

最近亡くなった、若い女性の関係性をくつつけてもらったおかげで、家族まで出来てしまった。邪悪な妖怪としてこの世に生じた自分が、ほんの数日前まで、海底の横穴で一人孤独に過ごしていた自分が、である。

これ以上の幸せは、望んではいけない。

この状態が、いつまでも続けばいい。

七海はそう思っていた。

あの日、座間の見舞い帰りに、暗闇から誘いかける不気味な声を聞くまでは。

§ 18 神霊憑依

§ 18 神霊憑依

「七海ちゃん！！ 私よ！！ 目を覚まして！」

いぶきが必死の声で叫ぶ。

しかし、七海は全く言葉が通じない様子である。今まで聞いたことのない、低い唸り声をあげながら、

あおい達に迫ってくる。

燃えるように真っ赤に光る目には、何も映っていないようだ。

「七海ちゃん、どうして？ いったい、どうなっちゃったのよ！！」

あおいは水浸しになった屋上で、なんとか、四方に水気を抑える結界を張ろうとしているが、足元を浸す水と風雨、そして長く伸びた七海の蛇身に阻まれて、なかなか呪符を張り切れない。

「社長！！ 逃げて下さい！！ 七海ちゃん、なんだか社長ばかり追いかけてます！！」

いぶきの言う通り、水に足を取られて、動きの鈍くなったあおいの行く手をふさぐように、まさに、獲物を狙う蛇のように鋭く動きながら、七海は執拗にあおいだけを追い詰めていく。

「七海ちゃん！！ こっちよ！！」

追われていることに気づいたあおいは呪符を張るのをやめ、敢え

て七海の動きを誘うようにしつつ、屋上の縁へと走った。

「何やってんですか社長!!」

あおいを追う七海の動きには容赦がない。いぶきは危険を感じて叫んだ。

「いいのよ!! このまま私が七海ちゃんの注意を引き付け続ければ、なんとか、時間を稼げるわ!!」

「でも、そんな事したって……」

「七海ちゃんがこうなった理由が、必ずここにあるはずよ!! 森主任は、何が何でもそれを探り出して、七海ちゃんを元に戻すのよ!!」

あおいは、膝近くに達した水をかき分けながら、七海の攻撃をかわるうじて避けている。

「わかりました!!」

いぶきは胸の前で印を組み、目を瞑ると、周囲の気の流れを読み始めた。

のんびりしているヒマはない。この荒れ狂う天候と、七海のかき乱す水気の中で、この屋上の異常さを感じ取らなくてはいけないのだ。

しかし、山姫であるいぶきは、水気と木気には敏感である。すぐにおかしな事に気づいた。

「社長!! あの築山、気の流れが変です!!」

いぶきが指したのは、箱庭状に作られた屋上緑化施設の中にある、小さな緑地であつた。

屋上緑化には珍しく盛り土がしてあるため、水没を免れていた。そこだけまるで、自然の草地のようになっている。

「たしかにおかしいわ！！　なんであんな所にウバユリが咲いているわけ！？」

ウバユリは大型のユリだが、さして花が美しくないため、庭園などに植えられることは少ない。しかも、根が深いので屋上緑化には向いていない。

なにより、日陰を好むウバユリがこんな場所で育つのは、異常と言えた。

「見て！！　石の塔がある！！」

ウバユリの数本生えた緑地の中心に、古びた小さな石の塔が見える。

「きゃあっつ！！」

その塚に駆け寄ろうとしたあおいは、七海の尻尾に足を掬われて転んだ。

派手に水飛沫が上がったが、怪我はない。次第に増えてきた水に、逆に助けられた形だ。しかし、立ち上がろうとするところへ、七海が迫ってきた。

あおいは水気を封じる土気の呪符を持って身構え、戦う覚悟を決めた。

その時、一際大きな雷鳴が轟き、二人の間に落雷した。
きなくさい臭いが、周囲に立ちこめる。

ほとんど七海に直撃した雷は、不思議なことに周囲に放電しながら、七海に巻き付くようにして、そのまま形を取り始めたのだ。

「危なかったですね」

足元から低い声がした。

土砂降りだった雨が、一瞬にして小雨に変わっている。ようやく視界が良くなり、周囲の様子が分かるようになってきた。

七海の体に巻き付いていたものは、鋭いかぎ爪の付いた、三本指の巨大な腕であった。

黄金色の鱗が雨に濡れて鈍く光っている。

その腕は、あたかも水中に巨大な龍が潜み、七海をつかみ上げているかのように見えた。

「真菰専務！！」

「少し市内の浸水エリアを増やして、警察やマスコミを遠ざけました。あとは、伊園さんを連れて帰るだけです」

つまり市内を水浸しにして、この場所が注目されないようにしたわけだ。真菰専務らしからぬ荒っぽい方法である。

だが、そんなことを言っている場合ではない。

「真菰専務！！ あの石塔が怪しいのよ！ アレ、何だか分かる？
！」

すると金色の龍のものと見える巨大な頭部、その更に一部が、せり上がるようにして水面上に顕れた。

この屋上を覆い尽くしている浅い水面に、陰界との境界面を作り出しているのだ。

真菰専務が、容易に動けない理由の一つが、これであった。全身を現すには、莫大な妖力と条件が必要な上、身じろぎするだけでも住みかである真菰川が氾濫してしまうのだ。

真菰は水面上に片眼だけ見せると、ぎろり、と石の塔を見た。

「さて……ここから見ただけでは、何とも言えませんが……ダーキニの事もありますから、迂闊に破壊したりしない方が良いでしょう。」

それよりも、呼びかけて伊園さんの意識を取り戻させませんか？」

「やってみる。七海ちゃん！！ 私よ！ 分かるよね！？」

「わ……………かる」

驚掴みにされたままの七海の目に、かすかに理性の光が戻ったように見えた。

「良かった。もう、帰りましょう！？」

あおいは、さらに深さを増した水をかき分けながら、両手を伸ばして、七海を抱き留めようと近づいていく。

「帰……………る……………？ わたし……………帰りたくない……………あの海の底は……………
……………もう……………いやああああ！！」

突然、暴れ出した七海は、かぎ爪の拘束を抜け出して、先ほどの石塔に向かった。

「な……………何を!？」

七海は蛇身の先端にある、人間の上半身部分を、石塔に叩きつけるようにぶつかっていった。小さな塔は木っ端微塵に吹き飛び、石で怪我をしたのか、血飛沫が飛んだ。

「七海ちゃん!!」

成り行きを見ていたいぶきが叫んだ。

深傷を負った七海は、いつそう激しく暴れ出した。頭を両手で抱えるようにしながら、蛇身はぐねぐねと周囲をのたうち、水をはね飛ばして荒れ狂う。

たいした水深ではないとはいえ、まるで津波のような勢いだ。

その様子に、いぶきも、あおいも、真菰のかぎ爪もつかつに手を出せない。しかし、そのうち急に水深が下がり始めた。

「これどうしたの!？ 水が引いてく!!」

あおいが叫んだ。

先ほど石塔のあったあたりに、周囲の水が渦を巻いて吸い込まれ始めたのだ。あれだけあった水が、数秒もせずに消えていく。

「ぐあっ!! これは……………ダメですね」

真菰の巨大な爪は、水面の消失によって存在を維持できなくなり、煙のようにかき消えていった。そして現れた時とは逆に、床面から上空に放電が起こり、あたりには再びきな臭い臭いが立ちこめた。

「真菰専務!!」

境界面が突然消失すれば、こちら側にあつた体の一部が大きく傷ついた可能性もある。状態によつては、しばらく人間体に戻れないかも知れなかった。

あおいは心配そうに、屋上の床面を見るが、陰界の様子は窺い知ることができない。

「わ……わたし……もどりたくない……うみのそこは……いや……」

七海の体が金色に輝き始めた。

頭を抱えてつぶやきながら、蛇身のまま光り輝いていく。

「これは……!!」

「何?! 何なの!!」

七海から発する光が、風のように周囲のものを吹き飛ばし始めた。この光には、質量があると思えない。このままでは、光の圧力であおい達も吹き飛ばされる……そう思った時。

轟っ

時ならぬ強風が吹き荒れた。

さっきまでの暴風雨の風とは、明らかに質が違う。植え込みの植物が飛ばされ、どこかで窓ガラスが割れる音がする。

あおいは腕で頭をかばい、目を瞑った。

目を開けた時、そこに立っていたのは、僧形に赤ら顔、しかし、特徴的な眉に笑ったような目とひよる長い手足……大天狗・次郎坊

の本性を現した、箕島治郎であつた。

「師匠!!」

「あなたたちは気が早すぎます。どうして、事務所で私を待たなかったのですか？」

「でも……………七海ちゃんが……………」

「彼女はあなたたちが刺激したから、こうなってしまったのではないのですか？」

これはおそらく神霊の憑依現象です。

神霊が憑依したという事は、神霊でないと太刀打ちできないという事です。たしかに私も神霊の端くれではありますが……………今や、私の力でも抑えきれるかどうかは分かりません」

次郎坊は葉団扇を大きくして、防御の姿勢を取る。すると、途端に光の圧力が和らいだ。

まるで傘で横なぐりの雨を防いでいるかのようなうた。

「この神霊はどうやら、サラスヴァティ……………弁財天のようですね。しかも……………復活させる際に、血を捧げてしまいましたか。サラスヴァティの暗黒面とでも言うべき、嫉妬と情念の面が顕れています」

次郎坊の言う通り、七海の顔は苦しそうに歪んでいた。

穏やかな学芸の女神の表情とは言い難い。

強い光が収まり、ようやく激しくのたうつのをやめた七海は、頭を抱えたまま、とぐろを巻き始めた。

「くらま……………さん……………わた……………しは……………くらまさんが……………」

すき」

「分かっているわ！！ 私も応援する！ 頑張ればいいじゃない！
！」

あおいは必死で声を掛けた。

「でも……わたしのおもいは……… ほんとは……わたしのものじゃ
……… なかった」

「何ですって！？」

あおいは驚愕の声を上げた。

「わたしのおもいが……にせものなら……わたしは……… うみに
……… かえらなくちゃ……… いけない」

七海の輝いていた体が、今度は次第に青黒く変色していく。

「おもいを……ほんものにするには……… おもいの……ほんとうのもち
ぬしを……… ころす……… しか………」

それまで、苦しみに歪んでいた表情が、見るも恐ろしい憎しみの
表情に変わっていく。

その憎しみのこもった目で七海が睨みつけたのは、あおい、ただ
一人であった。濁った青色の皮膚に覆われた七海の、つり上がった
目や牙の見える口元だけが、血を塗ったように真っ赤である。

「何……… 言ってるの？ 七海ちゃん！？」

あおいは、七海の言葉の意味が分からなかった。

鬼女の形相に変じた七海を前にしても、不思議と恐怖は感じていない。しかし、どう反応したらいいのか分からず、ただ立ちつくすしかなかった。

「逃げなさい！！ 何をぼーっとしているのですか！！」

呆然と立ちつくすあおいに、七海の尻尾が襲いかかったのだ。

次郎坊がそれをかばって、代わりに巻き付かれてしまった。尻尾から巻き付き、胴体まで引き寄せて締め上げるのに、数秒もかからない。

「し……師匠！！」

「大丈夫です！ かえって、都合が良い。こうすれ……ば！！」

次郎坊が気合いを入れると、七海がとぐろを巻いて締め付けるその内側に、巨大な銀色の剣が現れ、

巻き付いた蛇身を、ブツブツと断ち切っていく。

次郎坊が、巻き付かれた状態で降魔の剣に気を注ぎ込んだのだ。

大天狗の強力な気を最大級に注ぎ込まれた降魔の剣は、長さは3m以上、太さもそれに見合った巨大な長剣となっている。

「ぎゃああああ！！」

七海の絶叫が響き渡り、血飛沫が飛ぶ。

いくつかに寸断されてしまった蛇身が、それぞれ別の生き物のように蠢いた。

「七海ちゃん！！ 七海ちゃん！！ しっかりして！！」

師匠！！ やめてください！！ もう、七海ちゃんを傷つけないで！！」

「何を馬鹿なことを！！ こうなつては、手加減などすればこちらが死にます！！」

次郎坊は、巨大化したままの降魔の剣を真つ直ぐに突き出して、うずくまった七海にとどめを刺そうと飛びかかった。

七海の背中に降魔の剣が突き刺さる。と、見えた。

しかし、次の瞬間。降魔の剣は固い金属音を響かせ、屋上の床面にはじかれていた。

「何！？」

次郎坊は自分の目を疑った。一瞬にして、石塔のあった築山ごと、七海の姿がかき消えていたのだ。

「この術は……」

いぶきが大槌を携えて、身構える。

「関係性を移動させる術…………… 山神の眷属の技ですね」

次郎坊も剣を持ちやすいサイズに戻し、疲れ果てて座り込んだ。ああいを守るように、いぶきの隣に構えた。

「敵が他に…………… いるの？」

その時、上から声が降ってきた。

「さすが大天狗様だっぺ。もうぢつとで、大事な依り代を殺されるどころだ」

振り返ると、エレベーターの機械室の上に人影がある。だが、既に日が沈み、暗さが増しているため、顔は判別できない。

「あなた……？^{やまじ}ですネ？」

次郎坊はその人影に、まっすぐに剣を向けながら言う。
それを見て、人影はゲタゲタと笑いながら答えた。

「ああ、そうだっぺ。

邪魔っけが入ってどうすっぺかと思っただが。おめえらど戦わせだおがげで、逆にうまく神がかってくれた。礼を言うよ」

「まさか……ダーキニーの塚を、貴田小学校に転移させておいたのも……」

「もちろん、オレ様よ。

んだげんど、これ以上、おめえらに話すわけにはいがねえなあ。
まんだ、最後のシメが残っているがらな」

不敵に言つと、？^{やまじ}はまた下卑た声で笑った。

「山の妖の総元締めたる大天狗と、山神正統の血を引く山姫から、
たかが、はぐれ？^{やまじ}ごときが逃げられると思つてんの？」

いぶきは怒りに燃える目で、影を睨み据えている。
一見わずかに屈んだだけの姿勢に見えるが、脚に現界まで力を溜

めていた。変化したいぶきの脚力ならば、一跳びで？の元に達して攻撃を加えられるであろう。

「オレだけだったら、無理かもしれないなあ。だが、べづにオレ一人だと言った覚えもねえでずがね？」

「そういうことだ。さあ、行くぞ」

「の側に、すつともう一つの影が現れた。
やや小柄に見えるが、やはり顔は見えない。」

「へえ？今までコソコソ隠れてたってわけ？ 卑怯にもほどがあるわね！！」

「いったい、あんた何者よ！？」

あおいが挑発的な口調で言う。

「オレはコイツと違って口が軽くないんでね」

あおいの問いには一切答えず、もう一つの人影は出てきた時と同じように、すつと消えた。
「の影も同時に消える。」

後に残ったのは、すっかり水が引き、何もかもが破壊され尽くした屋上施設だけだった。

§ 19 天部神

§ 19 天部神

「しまった……逃げられたようです。空間の歪みが見えました。どうやら、あいつは観念空間を操れるタイプの妖のようですね」

次郎坊が、悔しそうに二つの影が消えたあたりを睨みながら言う。

「観念空間？って……何なんです？ 陰界に逃げ込んだんじゃないんですか？」

「陰界ではありません。」

しかしもちろん現界でもない。人の観念が作り出した世界。大乘仏教で言う八識のひとつですよ。」

「それは……どういう事なんですか？」

いぶきが不思議そうに聞く。

あおいも聞いたことのない概念だ。次郎坊の元で、妖怪と人間、そして神々の関係について3年間学んだはずであつたが、『観念空間』という言葉は初めて聞く。

「観念空間は、人間などの意識の働きによって作られると言われています。妄想や、空想、野望、信念、夢………そうした思いが強ければ強いほど、大きく、強い観念空間が形成されます。」

そして……その空間は逆に現界にも影響を及ぼすのです」

「それを……操る？」

あおいもいぶきも、もう一つ理解しきれていない様子だ。

「どこまで操れるのかは分かりませんがね。

観念空間は、宗教上の神霊のエネルギーの根源ともなっていますから、行き来できるだけでも、大したものですよ」

「次郎坊様。ヤツら……どこへ行つたのでしょうか？」

いぶきが大槌を元の小枝に戻しながら言う。

「どこにでも行けるでしょう。観念空間は、人間がいる限りどこにでもつながっていますからね」

「でも、この状況から考えれば、行き先は三つ目のビルしかないわ。すぐに行きましょう!!」

疲れ果てて座り込んでいたあおいが、すつくと立ち上がる。しかし、歩き出そうとしてすぐに二、三步よろめいた。

「大丈夫ですか、社長？」

いぶきがあおいを横から支える。

その時、急に鉄扉が開いて屋上に上がってきた人影があった。

「入堂部長! 豆田さんも!! どうしてここに？」

あおいが、驚いたような声で言った。やって来たのは農村整備部長の入堂と、その部下の豆田だったのだ。

「何言ってるの。あおいちゃん達も不用心だなあ……あんだけ派手にテレビに映ってたなら、ただの事故や災害じゃないって誰にでも分かるよ。」

「ええっ！？ テレビに映っちゃったの？」

「す……水面を走るビッグホーンから、社長さんと森主任が出てきた時にはビックリしました。あの……それと、葛柳川だけじゃなく、支流の真菰川まで決壊してしまつて……真菰さんは、どこなんですか？」

豆田がおどおどしながら言うが、真菰の姿は今はない。

「真菰専務は……たぶん、まだ陰界よ。」

さつき、現界との境界面を破壊されてしまったから……もしかすると大怪我をされているかも知れないわ」

「そりゃ弱つたなあ。」

早いとこ真菰川の水位を元に戻してもらわないと、一部住民に避難勧告しなきゃいけなくなっちゃうんだけど……」

入堂部長は、髪の毛一本もないつるりとした自分の頭を撫でながら、口をとがらせて思案顔だ。このF市は、災害が少ないことで有名な市だ。その実は、入堂や豆田のような市職員に紛れ込んだ妖たちが、守っているからなのだ。だから河川の氾濫など、ここ数十年は無かった大災害なのだ。

真菰川は市内の田園地帯を蛇行しながら、葛柳川につながっている小河川である。だから決壊したといっても、被害はまだ水田地帯だけのだろう。

だが、このまま水が引かなければ、住宅地にまで被害が及んでしまうに違いない。

「悪いけどそれどころじゃないのよ。」

ダーキニーとサラスヴァティが復活して……しかも怪しい連中が、更に気を溜めて何かしようとしているんだから」

「その通りです。あの？^{やまこ}の言葉から考えても、これだけで終わるはずはないと思います。おそらく、三柱目の天部神の復活を狙っているのではないでしょうが。」

いや、それこそが彼等の最終目的なのかも知れません」

次郎坊は顎に手を当て、考え込みながら呟くようにして言った。

「天部神？」

「荼吉尼天も、弁財天も、天部神なのです。」

一般的には単に仏法守護の神々とされていますが……実は天部神には、別の側面があるのです」

「別の側面とは……何ですか？」

「菩薩や如来、大神は、天の光を地上に伝える象徴のような神々です。」

ですから、常に人々の幸福を願い、遍く衆生を救おうとなさいます。しかし、そうすると人によって贖するわけにいきませんから、結局、現世利益を与えにくくなります」

「ええっ贖？御利益が贖なんですか？」

いぶきが驚いたように言う。

「もちろん鼻屑です。

受験一つとっても、誰かが合格すれば、別の誰かが泣くわけでしょう？ 金運も恋愛運もすべて同じではないですか」

「それは……………たしかに」

いぶきは納得してうなずいた。

「それに対して天部神は、直接的に御利益を与えることができる神々です。

しかしそうした神々は、基本的に『意志』と『力』は持っていて、『意識』がない。ですから誓願に見合った犠牲を払わなければ、何もいません。

つまりギブ・アンド・テイクですね。

逆に相応の犠牲を払えば、どんな相手に対しても、それなりの御利益を授けます」

「どんな相手でも……………って、さすがに悪人や私利私欲の願いは、聞き届けたりしないんでしょう？」

「とんでもない。

たとえ何者だろうと、どんな身勝手な願いだろうと、きちんと作法を踏んで、誓願に見合った犠牲を払いさえすれば聞き届けます。

大昔の話ではありますが、ライバルの失脚や呪殺までも成功させた例すらあります」

「本当ですか!？」

あおいもいぶきも、信じられないといった様子だ。

「彼等はダーキニーとサラスヴァティを、依り代を通じて顕現させました。

この二柱だけでも充分な力があるのに、三柱目の神ともなると、いったいどう対応したらいいか、私にも分かりません。

今、出来るのは、そうなる前に止めることだけですな」

だが、戦局はかなり悪化している。

敵は？と正体不明の妖一体。七海と葉子を入質に取られたようなものである上に、相手は力ある神霊二柱だ。しかも放っておけば、さらにもう一柱増えるかも知れないというわけだ。

こちらは、大天狗・次郎坊が最強と言えるが、さすがに天部神に對抗できるほどの力はない。

その上、身動きのとれない真菰、修行中の座間、疲労困憊のあおい…… かるうじて無傷と言えるのは、いぶきだけである。

「なんだか、とんでもない事になっちゃってるみたいだねえ…… ？市民の安全を守るためには…… やっぱり我々、市職員も協力しなきゃならないのかな？」

入堂部長は、話を聞いているうちに浸水被害どころではないと悟ったのか、覚悟を決めたように、参戦を申し出た。この男も、見た目はただの中年オヤジにしか見えないが、その正体は見越入道という、かなり強力な妖怪である。

「一緒に戦って下さるんですか？助かります」

あおいは丁寧な礼を言い、ぺこりと頭を下げた。

普段、仕事上のやりとりでは互いに悪態をつきあい、納得できないと、面と向かってすら禿げオヤジ呼ばわりするほどだが、だからこそ危機に陥った時には、無償で協力し合う。互いに強い信頼関係があるのだ。

「ええええっ！？ 部長！！ 私は、ただの化けダヌキですよ？ 神様相手とか、荷が重すぎますっ！！」

しかし、入堂の言葉を聞いた豆田は、目を丸くして震え上がり、自分の目の前でぶんぶんと手を振った。

その様子を見て、あおいは気の毒そうに言った。

「そうね。豆田さんはご無理なさらないで下さい。

稲成さんも、倒されてしまったくらいだし……ヘタをすると、稲成さんを依り代にした天部神と戦うことにも……」

「え？ ちょちょ……ちょっと待って下さい……葉子さんが？ 倒されたって……誰にです？」

「たぶん、ダーキニー……に。今、どうなっているかは分からないわ」

「そんな……」

豆田は、自分の片思いの相手が安否不明と知ってよほどショックだったのか、口をポカンと開けたまま立ちつくしている。その様子を見て、入堂部長は豆田の顔を少し心配そうにのぞき込んだ。そのまま顔をギリギリまで近づけるが、あまり反応がない。

「豆田君。君、いったん災害対策本部に戻ってよ。」

消防防災課長に言ってさ、やっぱし、避難勧告出しといて。悔しいだろうけどさ、豆狸では天部神に一矢も報いることは出来んだろ。あと、時間があつたら陰界におられる真菰専務に連絡を取ってみてよ。

君ほど妖力が小さければ、むしろ簡単に陰界へ行けるだろうからさ。

いいね？」

入堂部長にしては珍しく、優しい声で言うと

「……………はい」

半分上の空の表情のまま、豆田は小さな声で返事をした。

「あとは……………っと。

神霊クラスに少しでも立ち向かえる連中って言ったら、商工観光課の白井女史と、副市長の野槌さんくらいしか、思い浮かばないな。ま、携帯で連絡とってみるよ」

「入堂部長、ありがとうございます」

あおいは、入堂に更に深く頭を下げた。

この状況では、入堂を含め三人もの戦力プラスは、正直ありがたい。

「では、戦力の確認が出来たところで八杜商事ビルへ向かいますが

……………

圓野君。

君は、出来れば残って欲しいんですがね？」

「師匠！？ どうしてです？」

まさかそんなことを言われると思っていなかったあおいは、驚いて次郎坊を見つめた。

「君の術は、周囲の木火土金水の気を利用、増幅したものです。自ら気を発して戦う複数の妖怪同士の乱戦では、効果が薄い。

ましてや神霊相手には、力不足もいいところです」

「でも！！ 何かできることがあるかも知れません！！」

「いえ。確実に足を引つ張る可能性の方が高いです。

厳しい言い方かも知れませんが、人間の身で妖怪と並んで戦うのは、どだい無理なのです。これもあなたの身を案じて言っているのですよ？」

「それでも……七海ちゃんは私の大事な友達でもあります。稲成さんも、きつと助けを待っているんです。

一緒に……行かせて下さい…………… お願いです師匠！！」

あおいは次郎坊の前に跪いて、懇願した。

「ふうむ……………」

そう言い出すのではないかと思っていましたが……………どうしても行く、と言うのなら圓野君。これを貸してあげましょう」

そう言うつと次郎坊は、自分の背中に背負っていた袋から、黒い和弓と派手な装飾の矢筒を取り出し、あおいに手渡した。

「これ、弓……………ですか？」

「サラスヴァティの憑依した、あの磯女の嫉妬の念は、明らかにあなたへ向いています。」

先ほどはうまく逃げましたが、何の装備も無しに呪符だけを頼りに戦っても、

あつという間に殺されるだけでしょう。

その弓は……………」

次郎坊は矢筒から矢を一本取り出した。

「念の力で、矢に込めた気を打ち込めます。」

ほら、小さい文字ですが、矢尻に呪が書かれているでしょう?」

「はい」

「矢羽根の色が青は水気、赤は火気、緑は木気、黄色が金気で黒は土気です。あなたは、何があるうと前に出ず、最後方からこの矢で攻撃するのです。」

約束して下さい。

いいですか? 何があるうと、です」

「分かりました」

なんとか戦えることになったあおいは、ほっとした表情で弓矢を抱きしめた。

§ 20 野槌と白粉婆

§ 20 野槌と白粉婆

八杜商事ビルはまだ、明かりが煌々と灯っていた。
時刻は午後8時を回ろうとしている。

夕方から荒れ狂っていた風雨は、ようやく収まりかけていたが、それでも時折、思い出したように突風が吹き付けてくる。

しかし、すでに川からあふれた水は引き始めたようで、住宅の浸水被害も大したことはなさそうだ。

あおい達は、入堂部長たちの手引きで、なんとか人目に付かずに西北新聞社を離れることが出来た。

あおい、いぶき、入堂の四人でケルピーに乗り込み、いくつかの検問を入堂の顔でクリアして、ようやく玄関前に到着すると、そこにはすでに二人の女性が待っていた。

二人ともきちんとしたスーツ姿であり、50代を少し越えたくらいに見えた。

一人は異常なほど色白で細身。もう一人は大作りな顔立ちの優しげな女性だったが、一見ただけでは、二人とも普通の中年女性であり、上品で穏やかな物腰は、上流階級のご婦人といった雰囲気である。

いきなり彼女らが妖怪であると言われても、たぶん誰も信じないであろう。

「やあ、すみませんね、お二人とも。お忙しかったでしょうに」

入堂部長は、気さくに話しかけた。まるで、雑事をこなすために集まったかのようなのである。

今から神様と戦うとは、とても思えない。

「呼び出したのは君でしょう？」

しかも、相手はこの浸水災害の原因となれば、副市長の立場上、断れないですからね。それに、天部が二柱も顕現して、何をするか分からないとなれば、市民の安全の為に放っておけないじゃないの」

不機嫌そうにこちらを睨んだ、大作りな顔立ちの緑のスーツの女性の顔は、あおい達もよく知っていた。

副市長の野槌萱のづち かの乃である。

「でも、入堂君。

本当に、天部を呼び出したうつけ者がいるのですか？

許せんね」

真っ白なスーツをまとった女性は、商工課長の白井しらい仙子。

あおいとは直接の面識はないが、そのカリスマ性と辣腕は、市役所の外にまで知れ渡っている。彼女が妖怪である。ということは、あおいも入堂部長から聞いていた。

「商工課長として、このビルのオーナーには一通り事情を説明しておきましたの。

妖怪退治だと言ったら驚いてらっしゃいましたけどね。快くご協力いただけるということで、ビル自体を壊さない限りは、何をやってもお咎め無しですわ」

白井はそう言うと、クスクスと笑った。

実際には妖怪退治どころか、神様とのケンカなわけだが。

「じゃあ、このビルの方達は？」

「もちろん、全員帰宅してもらいましたわ。

明かりが付いているのは、人がいるように偽装して彼等の決行時間を遅らせる為ですよ」

さすが商工関係を業務としているだけあって、手回しが良い上に抜け目がない。

「じゃあ……行きましょうか」

そう言つと、白井は両手を広げて周囲に白い粉を振りまき始めた。粉はまるで煙のように舞い、周囲に漂っていく。

まだ強い風の吹きすさぶ屋外であるにも関わらず、その粉だけはずいぶん、吹き飛ばされる様子がない。化粧水のような芳香が漂い、たちまち視界がふさがれて、あつという間にまるで白いドームに入つたようになつた。

「な………何よこれ?!」

あおいが警戒して声を上げた。いぶきも身構えたが、入堂達は粉の正体を知っているのか、平然と笑っている。

「脂粉結界ですよ。」

あとは、野槌副市長がこの結界ごと呑み込んで、屋上まで連れて行ってくれるだけですわ」

言われてみれば、野槌の姿だけが見えない。

しばらくすると、白いドーム全体が動き出す感覚があり、その揺れが止まると同時に白い結界は薄れ始め、ほんの数秒で視界が戻った。

「ここは……………」

そこは、一見して地上の庭園と見まごう日本庭園であつた。

小さな池の畔には、カエデやサツキが植えられ、池の周囲には大きな擬岩を配し、ロックガーデン調にデザインされている。

一見して、計算された美しい日本庭園であると分かるが、なぜか池の畔には一抱えほどの丸い石が不自然に落ちていた。

「屋上です。敵はまだ来ていないようですね」

白井課長は、歌うように言いながら艶やかな仕草で上着を脱ぎ始めた。

妖怪の本性に変化するのだ。

見る見るうちに顔の皺と白髪が消え始め、脱いだスーツの上着がほどけるようにして、真っ白な羽衣状になっていく。舞い踊る白粉の中に姿を現したのは、美しい仙女・脂粉仙娘しふんせんじょうの姿だった。

脂粉仙娘という神霊は観音の化身とも言われ、強力な神霊系の妖怪である。

白井課長の本性である白粉婆おしろいばばは、多くの伝承で腰の曲がった老婆とされているが、それは白粉を売り歩く際のカムフラージュであり、本来の姿はこの仙女なのである。

「いえ。」

敵は観念空間を渡れるそうですから、いつでもやって来れるはず。今、姿が見えないのは…………最後の天部神召還の前に、邪魔者の私達を始末したいからじゃないかしらね」

野槌副市長も、不敵に笑うと変化を始めた。

草色のスーツの色が更に濃くなり、丈が長くなって足元にまとわりついていく。そのまま下半身を鱗が包みこむようにして、蛇身が形成されていった。

しかし蛇身といっても、磯女の七海ほど長くはない。長い髪も濃い眉も、大きな目も、すべてが美しい翡翠色に変わった。

彼女は野槌……口の大きな蛇と伝承されるが、そのルーツは草の女神・カヤノヒメであり、古さと強力さでは、大天狗にもひけを取らない。

変化した顔は、普通の人間よりは多少口が大きく見えるが、人間の姿をしていた時と比べて若々しく、美しいのは白井と同じである。

二柱の女神が並び立つと、神々しい光があたりを照らし始めた。

「早速来たようですよ」

次郎坊が指さした先には、うつすらと人影が浮かび上がろうとしていた。

あの、半透明の小さな人影は……

「あれが………ダーキニー？」

あどけない表情で現れた少女の姿をした霊に、初めて見るあおいはとまどいを隠せない。話には聞いていたものの、実際に見るととても凶悪な鬼神には思えないのだ。

「外見にだまされてはいけません。

ダーキニーは少女の靈魂に憑依していますから、物質としての実体がない。しかし死霊を喰らってエネルギーを得て、集めた火気を

操ります。見た目より相当厄介な敵ですよ」

「火気使いなら、私にお任せを」

白井課長の変化した脂粉仙娘^{しふんせんじょう}が、ふわつと前に出る。

半透明の少女は、その場でくると回転すると鬼女の形相に変化した。初めて見る白井の姿に、さすがに警戒したのか、いきなりかかつて来る様子は見せず、自分の周囲に火玉を飛ばし、火気で境界を張った。

「では、こちらは私ですか」

カヤノヒメは、ふいつと向きを変え、庭園の池の側に立った。

池の畔でカヤノヒメがふわりふわりと手招きすると、小さな池の水面が急に泡立ち、水面をまるで海藻のような黒い髪が覆い尽くしていく。

そして池の中心が、まるで下から持ち上げられるようにして、人型を形作り……………水中から青黒い肌の女怪が姿を現した。

§ 2 1 黒幕の正体

§ 2 1 黒幕の正体

「……………七海ちゃん！」

水中から姿を現した女怪は、七海であった。先ほど次郎坊に寸断された蛇身は元通りになっており、その姿は、更に醜怪に変貌を遂げていた。

毒々しい青と緑の鱗に覆われた体は油を塗ったように黒く光り、太さは二回りほど増している。そして、目や口は血のように濁った色で赤く縁取られ、下から睨め付けるようにカヤノヒメを見つめていた。

あまりの変貌ぶりに、いぶきが見るに堪えないといった様子で目をそらす。

「お二方が天部神を抑えている間に、我々は、さっき現れたあの二匹の妖どもを見つけ出し捕獲しましょう！」

次郎坊がいぶきとあおいを促す。

いつの間にか、身長3mほどの僧形の一つ目入道に変化した入堂部長も、それに従った。しかし、相手はこの世界でない観念空間に潜み、こちらを見ているはずである。

見えない相手をどうやって探し出したものか……あおいが考えていると、次郎坊がこともなげに言った。

「わざわざ連中を探す必要はありません。」

自分達の不都合になれば、出て来ざるを得ないでしょう。この屋上庭園にある石組みのどれかに、三柱目の天部神を呼ぶための石塔が紛れ込んでいるはずです。

私がなんとかそれを見つけ出しますから、いぶき君が元の場所に転移させてしまってください」

すると。

「そうだごどされちゃあ、困るんだよねえ。

出来れば、おめえらを片付けでがらゆつくり天部神さ呼び出したがっただけど、そうもいがねえか」

言葉と共に、黒い影が空中からすつと現れ、ロックガーデンの擬岩の上に降り立った。

聞き覚えのある声と強い訛りは、^{やまこ}？である。

顔は意外に凡庸な、40前後の人間であるが、その身体は^{やまこ}？らしい真っ黒な毛に覆われた巨体になっている。もうカムフラージュはやめた、ということらしい。

「出たわね！ あんた一匹くらい、私だけで片付けてやるわー！」

言うが早いか、いぶきが大槌を構えて跳躍した。

「待つて森さん、ダメよ！！ もう一匹がどこにいるか分からないわー！！」

ああいが叫んだ。

が、時既に遅く、振り上げた大槌が^{やまこ}？に届く寸前で、いぶきは横合いから何かの強い力で弾き飛ばされ、床面に叩きつけられた。

その様子を見て笑う？^{やまじ}の、下卑た声が響く。

「ぎやははは！！」

山神正統の山姫殿どやらも、情げねえなあ。頭に血いのぼったら、イノシシ並みかあ？」

「ぐ……あつつー！！」

そのまま転がり、さらにコンクリート製の柵壁に叩きつけられたいぶきが呻いた。

と、そのすぐ側に別な影が現れる。

「今、一番厄介なのは、あんたの能力だからな。とりあえず………封じさせてもらう」

「きゃあああつー！！」

いぶきの悲鳴が響き、その場で動かなくなった。

「森さんー！！」

あおいが駆け寄ろうとするが、次郎坊が手を伸ばしてそれを押しとどめた。

「もう、約束を忘れましたか？」

あなたは後衛に徹して下さい。いぶき君なら大丈夫。あの妖は山姫を一瞬で殺せるほど強力ではありません」

次郎坊は現れた影を睨みながら言う。

その影は？^{やまじ}と同様、40代くらいの人間の男の姿をしていた。や

はり、どちらかといえば平凡な顔つきである。

だが、伸び放題の髭と髪、薄汚れた白いＴシャツにボロボロの作業ズボン姿は、風呂に入るところか何日も着替えてすらいらない様子に見える。

だが、人間の姿でのイメージは、妖怪の本性とは基本的に無関係だ。一見しただけでは、何の妖怪が化けているのかは分からない。

「へえ。大天狗様は、オレの実力を見切ったって感じか？ それとも正体まで分かっちゃったか？ だがあんましオレを舐めない方がいいと思っぜ？」

「舐めてはいませんよ。」

確かにあなたの能力が、？の術と合わされば厄介でしょうね。しかし、単独では恐るるに足りません」

「何?!」

それを聞いた男の表情が凍る。

「うわあ！ なんだこれは!?!」

その時突然、？の^{やまじ}声が響き渡った。見ると、？は^{やまじ}巨大な手に掴まれている。驚いて見上げた？を見下ろすように、手の持ち主はどんなに巨大化していく。

見越入道、入堂の術である。

「くっ……バカが。あんなチンケな結界に捕まりやがって」

実際には、入堂部長は大きくなどってはいない。

結界内に取り込んだ相手の意識を掌握し、相対的に小さく感じさ

せていく術なのだ。こうなると、無限に小さく感じさせられるため、大抵の術は効かない。

「あなた達の負けです。二柱の天部神も召還できたのは暗黒面のみ。しかも、依り代の意識に縛られていては、あくまでその実力の一部しか発揮できないでしょう？　しかし、こちらの二柱の女神は、本来の強さは天部神には及ばないでしょうが、真の姿を見せていますからね。」

次郎坊の言う通り、脂粉仙娘しふんせんじょうもカヤノヒメも、少女の霊と後逸したダーキニーと、女怪となったサラスヴァティ・七海を圧倒している。

脂粉仙娘しふんせんじょうは、手の平から小さな白い玉を無数に出して、それをまるで鳥か虫を思い通りに飛ばしてでもいるかのように操り、ダーキニーの少女霊の発する火気をことごとく中和している。

白い玉は、土気結界に包まれた白粉の塊なのだ。

そして隙を見ては玉から白粉を噴出させ、ダーキニーの全身を白く塗り固めようとしているようだ。

半透明だったダーキニーは、白い粉で固められていくにつれ、青黒い天部神の暗黒面の実体を見せ始めている。しかも憎しみの表情を強めながら、攻撃を受けるたびに、次第に褐色の毛を生やした、肉食獣の姿に変身していく。

野干やかんと呼ばれる、野獣の本性だ。

カヤノヒメは、サラスヴァティの水気を一方的に受けているように見えた。

しかし、強い水流を浴びるたびに、体表面にびっしり生えた緑色の植物が翡翠色の輝きを増していく。水気は木気を育てていくのだ。しかも、全身の輝きが一定の強さに達すると、大きく口を開けて

強い光線を放ち、高熱でサラスヴァティを焼いた。体内で木気を変換して、火気に変えているのだろう。

サラスヴァティと化した七海は、蛇身をくねらせてそれに耐えている様子だ。

一撃一撃は、大して効いていなさそうに見えるが、次第に動きが鈍くなっているところを見ると、確実にダメージが蓄積している。いる。

「降伏しなさい。今ならまだ、命までは取りません」

見下ろすように睨みつける次郎坊に対して、それでも男の目は屈していない。

「幸福だと？ 命だとお？」

男は突然ゲラゲラと笑い出した。

「いいかあ？ オレ達の命なんかなあ、とつくに終わってるんだよ！ 唯一の生き場所、圓野組をクビになった時になあ！！」

ああいは、その声を聞いてはつとした。

「あなた、まさか……………金石さん？ 金石 猊さんじゃないの！？」

「……………オレのこと、覚えていらっしやいましたか、お嬢。

オレの正体が分かったのなら……………オレ達がこうしている理由もお分かりでしょう？」

「分からないわよ！ あなたは、猊……………人の悪夢を食べるだけの優しい妖怪だったじゃない！！」

こんな………こんな酷いことする人じゃなかったわ！」

あおいの脳裏に、金石の笑顔が蘇る。圓野組の社員だと言って、祖父・正平に紹介されたのは、あおいがまだ高校生の時だった。

過去の心的外傷トラウマから、悪夢を見続ける友人を救ってもらったのだ。

金石は笑顔を絶やさない、優しい男だった。

なぜいつも笑っているのか、と聞いたあおいに、人の心をよく知らなければ、人の心には入り込めないのだ、と語ってくれた。

獺……人の夢に入り込み、悪夢を食べる妖である。

人の夢は観念空間につながっている。いや、観念空間そのものと言ってもいい。

つまり獺である金石は、観念空間を行き来する能力を持っていたのだ。

「オレが……オレ達が、圓野組をクビになってからどんな思いでいたか、あんたには分からねえだろうよ……！」

「俺達って……じゃあまさか、あの？やまこは………小山さん？」

あおいには、？やまこの心当たりもあつた。

小山やまこ狸吉。

やはり圓野組古参の社員であつたが、父・明德によって解雇されたうちの一人だ。

よく現場での動きが鈍いと言われ、後藤副社長に怒鳴られていた。しかし、事務所に遊びに行ったあおいに、建築廃材を使った竹とんぼやコマなど、変わった玩具をよく作って遊んでくれた。

山林開発のせいで、縄張りが無くなったのだと言っていた。

それで仕返しをしようと、開発工事をした圓野組に忍び込み、逆に捕まったのだ。滅殺されるかと思いきや、逆に正平は、？に土下座をしたのだという。

自分の下調べが足りなかったと。

それが縁で？は、小山という名で圓野組の社員になった。

自分の住処を壊した、憎い土建業だったはず………なのに、いつの間にか自分が山林を壊す土建業に情熱を燃やしている。と、自嘲気味に語ってくれたことを思い出した。

「そうだ。

ヤツはあんたに正体がばれないように、わざわざお国言葉で話していたのさ。

オレ達は元々、人間のせいで住処を無くした妖だ。

先代の正平様は、そんなオレ達を雇い入れ、居場所と生きる意味を与えてくれた。だからあんたの親父にクビにされ、どこへでも行けと言われたって、もう妖怪としても生きられねえし、当然、人間としても生きられねえんだ！！」

金石は、暗い目であおいを睨みながら言った。

「だが、ある男に教えてもらったのさ。

一体ずつでは無能な化け物でも、能力を組み合わせればすごいことが出来るぞ………ってなあ！！」

「ほう………教えてもらった？ いったい、誰にです？」

次郎坊が鋭く目を光らせて迫った。
だが、金石は鼻で笑って答えた。

「ハッ！ 誰が教えるかよ！！」

いいか？ オレの観念空間を操る力じゃあ、自分がその空間に潜るだけだ。せいぜいもう一人を連れて行くくらいしかできねえ。あとは、離れた空間を投影して、モノの影をそこにあるように見せるだけだ。

逆に？^{やまじ}の関係性を操る力じゃあ、モノの意味しか転移できねえ。

だが、二つの能力を同時に一つのモノに使えば、影と意味……つまり、ほぼ完全に空間転移させられるんだよ！ そうやってな！
！……」

「……なるほど。どこかで見つけた天部神を祀った石塔を三つの山を象った、三つの場所に転移させた……というわけですか」

激昂し始めた金石の言葉を、次郎坊が引き継いだ。

「へ……さすが天狗様だ。ようやく気づいたようだな。そこまで気づいたなら、オレ達の最終目的も分かるだろう？」

「闇の別尊曼荼羅の完成……ですか？

だとしても、そんな古い修法が残っているわけがありません。ツメを誤れば、所願成就の代償として魂を取られますよ？」

「修法も知らねえで、こんな事に手を出すわけがないだろう！

『立川流真言』だよ。あんたも名前くらいは知っているんじゃないのか！？」

金石は次郎坊を馬鹿にしたように言った。

「立川流真言……天台、真言にとられず、実効性のある修法なら、仏教、神道、民間呪術まで混淆させ、さらにヒンドウの神々から

古代中国の神仙思想まで取り入れて発展した実践密教ですね。

しかし、あまりに突き詰めすぎた修法は髑髏崇拜や呪法へと進化し、結局は邪教と断定されて迫害され、闇に沈んだはずですが？」

「その通りだ。

だが、その儀式、修法のあらゆる奥義は、様々な寺社の秘伝として、形を変えながら伝承されていたんだ。オレはこの1年間、それを探り出し、一から学び……やつとここまで漕ぎ着けたんだ。

今、その成果を見せてやるぜ！！」

叫ぶが早いか、金石は変化を始めた。

すっと目を閉じ、次に開いた時には、瞳が銀色に染まっていた。上唇が鼻とつながって長く伸びていく。

口からは上向きの牙が二本、小さな象牙のように突き出す。

髪の毛は抜け落ち、茶色い剛毛がその下から生えてきた。

ほんの数秒で猿の姿に変わった金石は、口の中で何かを唱えながら、入堂の作った見越入道の結界へと飛んだ。

「むっ！？ しまった！！」

次郎坊が剣を構えて追いかけるが、入堂部長と一緒に斬ってしまいそうで、手が下せない。

猿の本性を顕した金石は、次郎坊の目の前でふいつと姿を消し、次に現れた時には、？を抱えていた。

一瞬にして易々と、入堂の結界の中から？を救い出したのだ。

ロックガーデンの大岩の一つの上に、本性を現した二体の妖が立った。

「う……すまねえ。油断しでいだけ」

「いいんだ小山。礼を言うのはこっちの方なんだから。
オレのために、生け贄になってくれて……すまないなあ……!!」

「な……何だと？」

獏は突然、^{やまこ}？の腹にその牙を突き立てた。

§ 2 2 大聖歡喜天

§ 2 2 大聖歡喜天

丸く突き出た腹に獾の牙を受けた？^{やまこ}は、驚いたような表情のまま、ぐらりと傾いた。

その腹からは大量の血が流れ出し、足元の岩を濡らしていく。獾は？（やまこをそのまま牙で持ち上げると、頭を左右に振るようにして、後方へ投げ捨てた。

「これで、生け贄はOKだ。

最後の天部神召還が成就するってわけだ。つまりお前らの勝率はゼロってことになるな。ひやははははは」

狂ったように笑いながら、獾の体が金色に輝き始めた。

天部神の憑依現象だ。

七海の時と同じである。物質的圧力のある光が、周囲の様々な物を吹き飛ばしていく。

ダーキニーもサラスヴァティも、それと戦っていた二柱の女神も、突然起きた光の洪水を呆気にとられて眺めている。

光に当たる面積が広いと、そのぶんダメージが大きい。大入道に変化していた入堂も、たまらず人型に戻って物陰に隠れた。

「ついに……あれを呼び出してしまったのですか……しかし、まだ戦う方法はあるはずです！」

次郎坊がまた葉団扇を広げて、光を防ぎながら言った。

「くつくつく……！ 大天狗様あ。

おめえ……意外に熱血なんだなあ。でもよ……これからどう
いう事になるが……分かっていいるはずだっぺ？」

腹から血を流して次郎坊の足元に転がった？^{やまこ}が、挑発的な口調で
言う。

「何ですって？」

ああいは、倒れたいぶきを抱き起こしながら、倒れ伏している？^{やまこ}
の顔を見た。

次郎坊は、固く口を引き結び、光の源を睨んでいるだけだ。

「そろそろ、効いてきだんじゃねえが？」

ああいの目を白目がちの濁った眼で見返しながら、？^{やまこ}はまた下卑
た笑いを浮かべた。

光が収まり始めた時、ああいは急に体に違和感を覚えた。

体の芯の方から、何か熱いものが込み上げてくる。生まれて初め
で覚える感覚だ。まるで夢の中に投げ込まれたようで、気を抜くと
その夢の底まで突き落とされてしまいそうになり、立っていられな
い。

「な……何よ。これ………」

見るとああいの腕の中のいぶきも、気を失ったまま脂汗を流して
身悶えしている。

どうやら、同じ感覚を感じているようだ。

そればかりか、脂粉仙娘とカヤノヒメまでも、それまで放つていた強い光を急に失い、顔に手を当ててよろめいた。

戦いの相手であるサラスヴァティとダーキニーまでもが、ぼうつとした表情で立ちつくしている。

「大天狗様！！　こりゃあ……………何が起きたってんですか！？」

入堂部長が物陰を伝いながら、次郎坊の元のにじり寄ってきた。彼の体にも、次郎坊の身体にも、何の変調も起きていない様子だ。

「やられました。三柱目の天部神というのは、大聖歡喜天……………ガネーシャだったのです」

光の奔流の中心にいる獺の姿は、まるで、その光そのものが形をなすようにして変わりつつあった。

上唇と一体になった獺の長い鼻は更に長く伸び、身体の半分くらいの長さになっていく。これでは獺というより象だ。

その身体は、まるで発酵したパン種がふくらむように、むくむくと巨大化していく。

ももとの妖怪・獺は獣と人の中間のような醜い体だったが、いつの間にか、艶やかでバランスのとれた美しい人身に変わっている。鼻の長く伸びた象頭の部分までが、毛のない人肌であるのが妙に妖しく、艶めかしい。

そして、いつの間にか粉雪のように天から降り始めた金粉が、羽衣のように虹色に輝く法衣と、金色の法具を形作り、ゆったりと大岩の上に座した獺から、神々しい波動が放たれ始めた。

「が……………ガネーシャ？　ってえと……………たしかあの、ゾウの頭した神様ってことですか？」

入堂部長が、目を丸くして聞く。

次郎坊は象頭の聖天に変わっていく獺を、睨み続けながら肯いた。

「ええ、そのガネーシャです。」

ヒンドウーでは破壊神シヴァの息子にしてシヴァ軍団の総帥。つまり、数ある天部の中でも最強クラスの神と言えるでしょう。

障碍しやうげを司る悪神から転じて、障碍を除くものとして祀られてきました。が……しかし、実はそれ以外にも女性に淫欲を起こさせ、支配する強い力も持つのです」

「女性につ？ それじゃあ、圓野社長や白井女史達のこの状態は……まさか、女性全員……私と次郎坊様以外は、誰も使い物にならないってわけですか？」

「どうやらそのようです。」

しかも、それだけではありません。三天合形といって、この三柱の神は起源を一つにするものとして

融合して祀られることがあります……つまり……」

「そうだ……茶吉尼天と弁財天、そして大聖歡喜天によって『三天合形曼荼羅』を完成させ、オレ達の願いを叶えるのさ……」

「やまちが横たわったまま呟く。

「まだそんなことを言っているのですか。あなたは、仲間の獺に裏切られたんですよ？」

「仕方ねえっぺ……お前らを生け贄に出来なかった以上、納得して血を捧げる生け贄が他に必要だったんだ……」

「では、あなたは最初から……死ぬ気だったのですか?!」

次郎坊は、驚いて聞き返した。

「それはアイツも……金石も同じさ。

オレもアイツも、これ以上長く生きようなんざ思っちゃいねえ。

三天合形曼荼羅を完成させて、圓野組に……いや、人間どもに――
泡吹かせられだらそれでよし。

それが、金石のヤツの願いなんだ。んだげんど、オレは………
違う」

ずるっ

と、体を引きずるようにして?……やまこ小山が立ち上がる。

「動かないで。出血がひどくなって……あなた死ぬわよ?」

そう言ったあおいの方を見て、小山は目を丸くした。

「お嬢……あんた、正気を失わないのか?」

いぶきだけでなく、強力な神霊である脂粉仙娘とカヤノヒメまでも、うずくまって行動不能に陥っているにも関わらず、人間であるあおいがまともにしゃべれるというのはどうということなのか?

「たしかにこの妙な波動……辛いけどね。正気を失うって何よ?
このくらい……っ!!」

座り込んでいたあおいが、ふらつきながら立ち上がった。しかし、
すぐによろめいて倒れそうになる。

それを横から次郎坊が支えた。

「無理をしてはいけません。あなたには経験のない感覚だけで、波動の影響がない、というわけではないのですから」

「なるほど……お嬢、あんたまだ……」

小山が下卑た表情でにやり、と笑った。

「なな……何よ！？どういうこと？」

「まあ、知る必要はねえべ。」

歳の割にやあ、おぼこいとは思ってたつけよ。そんなことより……オレはオレの目的を果たすだけだ」

そう言うと、小山は足を引きずりながら、大聖歓喜天・ガネーシヤと化しつつある金石が座している岩のある、ロックガーデンの方へ向かった。

しかし、そのままガネーシヤへ向かうかと思いきや、わずかに方向を変えた小山がたどり着いたのは、池の畔に転がる丸い石のころだった。

「よお！！ ガネーシヤ様！！」

神霊と合一してる最中でお忙しいだろうけどよ！ 約束通り、この石、元さ戻しでやつちゃくんねえか？！」

小山は、丸い石の前に跪いてガネーシヤに向かって叫んだ。

すると、目を閉じて法悦境を漂うような表情だったガネーシヤが、ふいつと片目を開け、めんどくさそうに右手を振った。そこから放たれた赤い光の矢が、丸い石に当たる。

光に包まれた石は、ゆつくりと形を変え始めた。

「稻成さん！！」

あおいが叫んだ。

石を包む光が消えた時、そこに横たわっていたのは、妖狐の本性を顕したままの葉子だったのだ。

「なるほど……殺生石……ですか」

次郎坊がつぶやく。

ダーキニーと死闘を繰り広げ、力尽きた葉子は、石となって身を守っていたのだ。

「葉子さん……」

こんな目さ遭わせちまって……すまねえ。んだげんど……こうでもしなげりゃ、オレの事なんか振り向いてくれながつただろ？」

小山は跪くと、気を失ったままの葉子を抱き起こした。

小山の出血はひどく、葉子の白装束が見る見る赤く染まっていく。

「ガネーシャ様！！」

最後の願いだ！！ 葉子さんの心を、オレさ向けでくれっ！！」

罪もない少女を犠牲にし、

関係のない小学校を火の海にし、

七海の気持ちをも利用して、町を水浸しにし、

ついには自分の血までも捧げて剣呑な神を呼び出し……そうまでして叶えたかった小山の願い……それは、稻成葉子の心を手に入れることだったのだ。

§ 2 3 犬神

§ 2 3 犬神

「な……………なんで……………」

まさか小山さん……………稲成さんのことが好きだったの？」

信じられなかった。

あおいが知る限りにおいて、二人にそんな雰囲気は全く感じられなかった。

しかも、そんなこと……………たった一人の女性の気持ちを手に入れる為だけに、これだけの事をやらかすなどは、あおいの想像を越えていたからだ。

「ずっとだ。」

ずっと、ずっと……………好きだった……………何度も告白して、何度も振られたよ。妖と夫婦になる気はない……………ってな。

でも、諦めきれなかったんだ」

それを聞いたあおいは、思わずため息をついた。

「ずっと」といつても、一体いつからなのか？ 葉子はもともとは、あおいの祖母きくもの屋敷に住み着いていた妖狐だったが、そういう縁から一時期、事務職として圓野組で働いていた事もあるらしい。

知り合つとしたら、その時か。

「でも……………あなたは？^{ちまい}なんでしょう？ 関係性を操^{さく}って、自分を好きにさせる事だって……………出来るんじゃないの？」

たしかに？の術であれば、恋愛感情を自分に向ける事など容易いはずだ。

「そんな簡単なモンじゃねえんだよ……」

たとえ相手がただの人間だったとしたって、そううまく恋愛感情だけをこちらさ向けっなんて事はできねえんだ。

こちらを信じて、全く無防備に任せでぐれりゃあ別だがな。

無理に関係性を変えようとすれば、ヘタすると、相手の周りの人間との関係性までくっついて来ちまうんだ。

しかも、葉子さんはオレより格上のお狐様だぞ？ 隙なんぞ見せてくれるわけねえべ」

無敵に見える？能力も、どうやら自由自在というわけにはいかないらしい。

それはそうなのだろう。

もし、いつでも無制限に他人の関係性を付け替える事が出来るなら、世界の王にだってなれる。今頃、世の中は？に支配されていてもおかしくはない。

「んだげんど、女性の淫欲を操る大聖歓喜天なら、女の心を誰かに向けるなんか朝飯前だっぺ。だから、オレは金石達に協力したんだ。さあ早く！！ ガネーシャ！！ 大聖歓喜天様っ！！」

急かすような小山の叫びに応じて、ガネーシャがふたたび右手をふるった。その手から放たれた青白い光の矢が、横たわる葉子に突き刺さるうとした、まさにその時。

「ぐがるうつっ！！」

突然。

獣の低い唸り声と共に、巨大な黒い影が飛び込んできて光の矢を弾いた。

「なな……なんだお前^めえっ!!」

「何？ あれって……犬神!？」

妖の名をああいが叫ぶ。その獣の姿は、たしかにああいの知っている犬神という妖怪に、よく似ていた。

だが、葉子を守るように立って、ガネーシャを睨むその獣は、ああいの知る犬神よりも、全体にごつい感じで、まるでクマとオオカミを足したような姿をしていた。

鋭い眼光。

長く伸びた鋭い牙。

棍棒のように太い尻尾。

顔のまわりに派手な黒い模様が入り、長いかぎ爪の生えた四本の足先も真っ黒だ。

体全体は灰褐色の毛皮に包まれ、それが鈍く金色の光を放っている。

微妙な形態の違いはあるが、たしかに全体の姿形は犬神といっていい。

しかし。

（違う……この妖からは、憎悪や飢餓の暗い波動が感じられない）

普通、犬神とは、犬を生き埋めにして断食させ、その首をはねて殺し、その怨霊に陰界に存在する邪悪な想念を憑依させて人間が創り出す、式神の一種だ。

だが、どうやらこの戦いに加わるためだけに、ビルの外壁をよじ登ってきたとしか思えないこの妖獣からは、そうした邪法で創り出された妖怪が身に纏う、暗い想念の波動がまったく感じられなかったのだ。

あおいは霊査能力の高い方ではないが、相手がこれだけ強力な妖気を発する妖怪であれば、そのくらいは分かる。

「犬神さん！！ 敵はそのガネーシャよ！！ 私が弓で援護するから、攻撃して！！ あいつが戸惑っているうちにたたみ掛けるわよ！！」

突然飛び込んできた見知らぬ犬神を、咄嗟に味方だと判断したあおいは連係攻撃をすることを決めた。どうあれ、このままでは勝てないのだ。この犬神を信じてみるしかない。

「ふむ。チャンス逃してはいけませんね」

次郎坊も降魔の剣を振りかざして飛ぶ。

あおいは弓に矢をつがえ、ガネーシャを狙った。

この矢には、相手に応じて木火土金水のうち、何らかの気を込められるはずだったが、ほぼ無敵の神とされるガネーシャの弱点など、あおいには分からない。

とりあえず、もっとも破壊力のある火気を込めた矢を使う。

『ふぁおおおん』

耳をつんざくような象の吠え声。

あおいの放った矢がガネーシャの額に突き刺さり、そこから炎が上がったのだ。間髪入れずに続けざまに数本撃ち込む。

「危ない！！ 下がっていて下さい！！」

次郎坊が、あおいを目がけてガネーシャの放ってきた光弾を、寸前で辛うじて弾く。

「何があるうと、前に出ないと約束したはずですよ！」

「す……すみませんっ！！ でも、稲成さんが……」

あおいは、弓を射かけながら倒れている葉子の側に行こうとしていたのだ。

葉子の倒れている場所は、ガネーシャのすぐそばだ。たしかにこのまま放っておいては、気を失ったまま戦いに巻き込まれてしまう。

「な……………何しやるっ！！」

あおいの後ろで？^{やまこ}が悲鳴を上げた。

巨大な犬神が、あおいに襲いかかるうとしていた？^{やまこ}の首根っこに噛みつき、容赦なく放り投げたのだ。

？^{やまこ}は、楽に数mは飛んで、屋上の反対側に設置されていた水タンクに激突した。

薄い金属製の水タンクは簡単に変形し、クッションのよう^{やまこ}に？の巨体を受け止めると、周囲に水をまき散らした。

？^{やまこ}は、タンクに頭を突っ込んだまま、失神したのか、そのまま動かなくなった。

それを見たガネーシャが、犬神を目がけて連続して光弾を発射した。それを軽々としたフットワークで避けた犬神は、ガネーシャを正面に見て四肢を踏ん張ると、大きく口を開けた。

「うるるおおおおおおおん！！」

魂に響くような、鋭い吠え声が轟いた。

その瞬間、ガネーシャは大きく身震いして動きを止めた。それは逆に、あおいも、次郎坊も、そして入堂も、それまでとても敵わないと萎えかけていた気持ちが一気に起こされるのを感じた。

犬の吠え声というものは、それだけで退魔効果があるという。それが犬神の声ともなれば、強い霊気の波動で、聖気を増幅させ邪気を抜く力となる。

ガネーシャの実相は神霊・大聖歡喜天といえども、今は、金石の恨みの念を取り込んだ、邪悪な暗黒神である。

魔を退かせる吠え声は、効果があったようだ。

それにしても、天部神の中でも最強クラスの大聖歡喜天を怯ませるとは、相当霊格の高い犬神であると言えた。

「心強い味方がやって来たものですね。私も負けてはいられません！！」

次郎坊がガネーシャの首に剣を叩きつけるように斬りつけた。

その背後から隙を見ては、あおいの矢が飛ぶ。

ガネーシャのピンク色の皮膚に、斬撃の跡が残り、立て続けに矢が突き刺さった。

犬神も背後から忍び寄って、首筋に牙を突き立てる。

ふたたび大入道に変化し直した入堂部長は、経文を読み、ガネーシャの周辺に法力結界を張り巡らせているようだ。

ガネーシャの負った矢傷からも首筋からも、噴出してきたのは血液ではなく、黒い光であった。

傷はゆっくりと再生しているようだが、攻撃数が再生力を明らか

に上回っている。ガネーシャが苦痛に身悶えるたびに、傷口から漏れる光線のような不気味な闇が辺りに満ちていく。

戦いは一見、あおい達が優勢かに見えた。
しかし。

『身の程知らずの愚か者どもめ!!』

ガネーシャと化した金石の声が響き渡ると、神霊憑依が始まった時からずっと続いていた威圧的な波動が、急に何倍にも力を増した。それを正面から浴びて一瞬立ちすくんだ犬神に、長い象鼻が襲いかかる。

「ダメっ!! 逃げて!!」

あおいが叫ぶ間もなく、犬神は横殴りに弾き飛ばされた。

「ぎゃんっ!!」

壁面に叩きつけられ、悲鳴を上げて動かなくなった犬神に、ガネーシャの手から、無数の青白い光の矢が放たれて突き刺さっていた。もうもうと上がる湯気のようなものが、犬神の姿を覆い隠していく。

「犬神さん!! あ……きゃあっ!!」

倒れ伏した犬神を助けようと、近寄っていったあおいが悲鳴を上げた。

正気を取り戻したサラスヴァティ……七海が、背後から長い尻尾を伸ばしてきていたのだ。しかし、あおいが首筋に寒いものを感じて辛うじて避けることが出来た。

振り向いたあおいは、女怪と化した七海を見てゾツとした。

ゴツゴツした肌。

ねじくれた角。

急に伸びた牙は唇を突き破り、そこから血が流れている。

先ほどよりも、さらに禍々しさを増したその姿には、もうどこにも七海の面影は見あたらない。

しかし、それでいてその目は嫉妬に燃え、まだあおいだけを睨んでいる。ここまで変化しても、なお執拗にあおいを追い詰めようとしているのだ。

「くっくっ！！　こ………これはいけませんね！！」

次郎坊も、苦戦していた。

サラスヴァティと同じように、急に力を取り戻したダーキニーと切り結んでいるのだ。妖少女はいまや、鬼女と呼ぶのもはばかられるほどの、禍々しく巨大な獣人の姿に変化していた。

赤茶色の獣毛に覆われた巨体。

両手に生えた長い爪。

尖った耳と、胸まで届く長い舌。

しかし、人間の残滓を残したかのように、幼い少女の顔立ちだけは何故かそのままだ。

その少女の顔が、相変わらず張り付いたような笑みを浮かべながら、降魔の剣の斬撃を前足ではじき、攻撃を仕掛けてくるのだ。

ダーキニーの力は、ガネーシャの加護を受けて格段に上昇しているようだ。

『よし………来い』

あおい達全員がダメージを受け、弱ってきたのを確認すると、ガネーシャはダーキニーとサラスヴァティに手を差し伸べた。

凶悪な姿の二人の女怪は、途端に、まるで少女のようなあどけない笑みを浮かべると、ガネーシャの左右の手を取った。そのまま、三つの影は黒と金色の光に包まれ、ひとつになっていく。

「三天合形……成ってしまいましたか……………」

傷ついた次郎坊が、降魔の剣を杖代わりにして立ち上がろうとしながら言う。

「ただでさえ……齒が立たなかったのに……………」

その時。

「う……すまぬ。やられたわ……………」

カヤノヒメが目を覚ました。

だが、美しい女神だった姿は人型でなくなり、まるで米俵のように太短い、巨大な口を持つ蛇の姿になってしまっている。

「やって……おくれたのう……………」

しわがれた声。

脂粉仙娘も白髪で腰の曲がった、老婆・白粉婆の姿になっていた。

「大丈夫ですか？ どうやら三天合形により、大聖歡喜天単体としての波動の影響は薄れたようですね」

「とはいえ、我々も力は使い果たしてしまった上に、歡喜天の呪が完全に解けたわけではないからの。」

女神の本性に立ち戻るのは難しいようじゃ。

しかも我らこの姿では、ろくに力が出せぬ……………」

悔しそくに白粉婆が言う。

「私も靈力を使い果たしました。さっきの犬神もガネーシャにやられてしまったようです。もう、我々に有効な戦力はない……………八方塞がり……………ですね」

次郎坊が、諦めたようにため息をついた。

「もう後は……………逃げを打つくらいしかいかも知れません。

しかし、ああなつては簡単に逃がしてくれるとも思えない……………圓野君。私達がなんとか血路を開きますから、君だけでも、ここから逃げなさい」

次郎坊、入堂、野槌、白粉婆の四人はそれぞれに、あおいを後ろに庇うようにして三天合形を成し遂げつつある、ガネーシャに向かって立った。

§ 2 4 三天合一

§ 2 4 三天合一

「そんなことはありませんっ！」

次郎坊の言葉を遮ってあおいが言う。

「まだ、座間君が帰ってきてない。

真菰専務も、戻っていない。

森さんも……稲成さんも目覚めていない。

……七海ちゃんだって……取り戻していない!!」

あおいは、自分自身に言い聞かせるように言いながら、ふらつく足を踏ん張って立ち上がり、変化しつつあるガネーシャを睨み据えた。

「私達は6人で一つの会社なんです。

彼等が帰ってきてくれれば、必ず何とかかります！ これまでだ

って、6人で力を合わせて、あらゆる困難……偏見や、理不尽と戦ってきたんです。

当社の理念は、勝手な理由で踏みにじられそうな命を、何が何でも守る事。^{ウチ}

相手が神様だろうと、悪魔だろうと、関係あるもんですか!!」

あおいは弓に矢をつがえ、三天合一を果たして形を取っていく、少し前までガネーシャだったものの頭部に狙いを定めた。

あおいがまさに矢を放とうとした、その時。

「よう言ってくれはった」

夜空から声が降ってきた。

「つまり、何があるうと株式会社トープスは不滅…… っちゅうことや」

「く…… 座間君くひまっ!!」

あおいが見上げると、夜の闇に溶け込むようにして、烏天狗姿の座間が羽ばたいている。すでにその右手には抜き身の降魔の剣が、左手には葉団扇が握られていた。

「あっしが仲間に入れてもらえてねえのは、少し、寂しいですがね」

そしてもう一人、屋上の縁に立つ黒い影。

「後藤副社長っ?!」

「お嬢。少し、下がっていてくだせえ。」

あっしも長いこと生きてますから、ああいう手合いとは、何度かやり合った事がありやすが…… 相手が何者だろうと、ケンカの常道は変わりやせん……」

そう言いながら、窮屈そうに着ていたスーツの上着を脱ぎ捨てた。

「ケンカは……」

座間は降魔の剣を青眼に構えて狙いを定めている。
後藤は合掌して気を溜めているようだ。

『先手必勝！！』

座間と後藤、二人の声が重なった。

宙を飛んだ後藤の右拳が、もやもやした形を取りかけていた、三天合形神の頭部に突き刺さる。さらに、後藤を捕まえようと伸ばしてくるその腕を、左掌から発した虹色の光弾で弾き飛ばした。そして間髪入れずに、座間の斬撃がその腕を斬り落とす。

力尽きたあおい達を守るように三天合形神の前に立ちはだかった後藤の姿は、朱色の肌を持つ巨大な赤鬼へと変化していた。

そして座間と後藤は、たたみ掛けるように攻撃を加えていった。

目にも止まらぬ座間の斬撃。

強烈な後藤の打撃と光弾。

並みの妖なら、一瞬にして消し飛びそうな連続攻撃である。

しかし、それでも黒い禍々しい光は衰えることなく、三柱の天部は一つの姿……三天合形神へと形を整えつつあった。

それはどうやら三面の神であるようだった。

正面に象頭人身のガネーシャ。

左面に人面獣身のダーキニー。

右面に人面蛇身のサラスヴァティ。

それだけならどこかで見たことのある、異教の神の姿といえるかも知れない。

しかし、その体表面には不規則に絡み合った鱗と体毛、そして人間のようないくく色の皮膚が入り乱れて、吐き気を催すような不気味な模様を形作っていた。

さらに、黒と金の入り混じった斑の体色。

長さも太さもまちまちの、数十本の手と足。

しかもその手足には、人の指や、獣爪や、蹄や鱗がでたらめに付いている。

そして、身に纏う禍々しい気配。

それは決して、神聖であるべきはずの神の姿ではあり得なかった。

「ここで味方が来るとは思いませんでした。

現世最強クラスの鬼に、月ノ輪流を極めた烏天狗ならば、しばらくはあの、三天合形神を食い止められるかも知れません……………」。

しかし、相手は天部神が三体合わさった存在です。まだまだ、戦力が足りませんね」

次郎坊があおいに向き直った。

「あなたがさつき仰った理念は、大変立派です。

しかし、このままではやはり、全員死ぬという未来を変える事は出来ません。あなたを信じて戦う彼等を……………いえ私達を、あなたも信じて下さい」

「師匠……………何をするおつもりなのですか？」

「私に、一つだけ策があるのです。

決して分の良い賭けではありませんが……………もし、あなたの言うようにトープスの6人が揃うことがあれば、逆転できる可能性です。ですから、あなたは、いぶきさんとあの妖狐……………稲成さんを起こしてください。そして、伊園さんを助け出し、真菰さんもここに呼び出すのです。

私は、その間に切り札の準備をします」

次郎坊はそう言うと、懷から取りだした汚い蓑を着込んだ。すると、一瞬にしてあおい達には、次郎坊の姿が見えなくなった。だが、決して姿を消したわけではなく、認識できなくなったただけなのだ。

これが『天狗の隠れ蓑』そう呼ばれる、伝説の道具である。周囲からの気の流れを完全に断つことで、その者の気配を感じられないようにし、周りからは見えなくても見えないようにする事が出来るのだ。しかし、周囲からの気を断つということは、妖怪や神霊にとっては息を止めている事に等しい。つまり、長く隠れ蓑を着続けていれば、大幅にエネルギーを消耗してしまうことになる。

「師匠！！ お気をつけて！」

あおいの言葉に、どこからともなく次郎坊の声が答える。

『この隠れ蓑のタイムリミットは十分ほどでしょう。準備にはそのくらいかかります。その間は姿を見せられませんから、自分の身は自分で守って下さい』

その時、屋上の隅から、ボリッボリッ。

と何かを嚙り食べるような音が聞こえた。

「何？ あの音は……」

あおいがそちらを見ると、先ほどガネーシャに手ひどくやられたはずの犬神が、ぶるつと体を震わせながら、再び立ち上がっていた。

「犬神さん！！ 無事だったのね！」

犬神は、あおいに軽く会釈するように頭を下げると、すっと移動して、横たわる葉子の側に立った。そして、気を失っている葉子の顔をじっと見つめ、その頬をぺろりと舐めた。

「……犬神さん？」

さつきも、まるで葉子を守るかのように現れた。

もしかして、葉子の知り合いなのだろうか？

が、あおいがそう思う間もなく、犬神は葉子に背を向けると、振り向きもせずに三天合形神へと飛びかかっていった。

その行動は不思議であったが、犬神のことばかり気にしているヒマはない。なんとか次郎坊が、切り札とやらを仕掛け終わるまでに、トープスの社員全員が揃わなくてはならないのだ。

「森主任！ 森さん！！ 稻成さん！！ 起きて！！」

あおいはいぶきと葉子の頬を叩いて目覚めさせようとした。

だが、一向に目覚める気配はない。

もしかすると、獏に何か術を掛けられているのかも知れない。考えてみれば、夢を食い、夢を操る妖怪が獏なのだ。目覚めさせないようにする術を心得ていてもおかしくはない。

だがあおいの使える術は、周囲の気を凝縮させたり、散らしたりして、まるで生き物のように操るだけであり、夢の世界、それも観念空間とかいう聞いたこともない概念を操る術に、対抗する術は持たない。

「いったい、どうしたら……」

「あおいちゃん。オレ達で何とかできねえかな？」

あおいが途方に暮れていると、入堂が一つ目大入道の姿のままやって来た。

「オレ達って……見越入道、野槌、白粉婆の能力を使うの？」

「オレも自信はないんだけどさ……例えばオレの結界術も、精神攻撃みたいなモンだし、一応坊主だから、邪気を祓うことも出来るからさ。」

野槌と白粉婆の霊力を上乗せして、いっぺん、二人の心に呼びかけてみるってのはどうだろう？」

「入堂。やってみるなら急いでくれんかの？」

あの三人の妖、今はええが、このままじゃとそう長くは保たんじやろう」

白粉婆の姿になり、しゃべり方まで老婆くさくなった白井課長が言う。

「いやでも、ちょっと待ってよ白井ちゃん。えーと……どうやってやったものか………」

入堂は印を結んだりほどこいたりしながら、術をかけあぐねている様子である。

「ふうむ……見たところ、これは自分自身の心の殻に閉じこめられているようですね。強い精神結界を張っているようなものですよ。」

野槌がいぶきの頭に手をかざしながら言った。

先程までは完全に太短いヘビ状になっていたが、それではさすがにイヤなのか、今はわずかに顔に鱗が残るだけで、ほぼ完全な人型に戻っている。

「ほら、頭の周囲に見えない壁が出来ているわ」

「なるほど、精神結界かの。」

結界なら、それ以上の力で破ればいいのじゃ。わしと野槌で、入堂の結界術が放つ気を集めて、この矢に込めてやろう。その矢尻で結界の壁を貫くように破ってみてはどうじゃ？」

「ううむ」

「まだ何かあるのか、入堂？」

「いや、そううまくいくかなあって思ってたね」

「かーっっ！！」

本っ当に面倒くさいヤツじゃな！ ごちゃごちゃ言わずに、やらんか！ 貴様も男じやろうが！！」

白粉婆の姿の白井は、人間型よりも言う事がキツイ。

尻込みする入堂の尻を蹴って叱りとばし、あおいの持つ矢を手にとると、念を凝らして握った。水気を込めていた青い矢は、すうつと矢羽根も矢尻も白くなった。

白粉婆の土気で中和され、ニュートラルな状態になったのだ。

「よ……よおし」

入堂は白粉婆と野槌に向けて、先ほど小山を翻弄した、得意の催

眠術をかけ始めた。白粉婆は、白粉をボーリングの玉くらいの大きな丸い形にして、そこで気を吸収しているようだ。そこに野槌も手を添える。

見る見るうちに、白かった玉が、不規則な虹色模様が変わった。あおいは先ほどの白い矢を、その玉に突き立てた。すると、一瞬にして、矢尻も矢羽根も玉と同じ不規則な虹色になった。

「と……とりあえず、うまくいったようだな」

よほど力を使ったのか、入堂は汗びっしょりだ。

「では……やりますっ!!」

あおいは、いぶきを包む精神結界に虹色の矢を突き立てた。

§ 25 黒幕の影

§ 25 黒幕の影

森いぶきは、夢の世界を彷徨っていた。

そこは、決して楽な世界ではなかった。
白い世界。

周囲には何も見えない。

足元にはねばつく泥のような白い闇がわだかまり、いぶきの足を絡め取る。進んでも進んでも、周囲は白い闇に包まれているのだ。それならば、立ち止まってしまえばよさそうなものだが、どうしても立ち止まることが出来ない。

（これは……夢だ）

いぶき自身も夢の世界だと認識していながら、目覚める事がどうしても出来ないのだ。

しかも、周囲すべてを包み込む白い闇は、光も影も輝きも形も音もなく、見つめ続けていると気が狂いそうになる。

そんな白い闇に、なにかの形が浮かび上がってきた。

目を凝らすと、それは一人の男……40歳前後の人間の姿であった。

それが金石であり、正体は、妖怪・獺であることが、気を失っていたはずのいぶきにも何故か分かった。もしかすると、術を仕掛けた金石の心が取り込まれ、術を掛けられたいぶきに見えているのかも知れなかった。

その夢の中で金石は、必死で頭を下げている。相手は……圓野明德だ。

『社長！お願いします。』

私は、ここを出されたら行くところがないのです。私の故郷は既になく、人間に交わりすぎた私は、完全な妖怪にも戻れません。

どんな仕事でもやりますから……お願いします！』

『馬鹿を言うな！』

そもそも、妖怪が人のふりをして住んでいる事自体がおかしいのだ。先代が何を言ったのか知らないが、お前には、獏という妖怪を存在させ続けるという役割があるだろうが。

人としての楽な生活を知ってしまったからでは、つらいかも知れんが、なんとか、妖怪に戻る事を考える。愚か者が！』

圓野組の社長、圓野明德である。

金石は、可哀想なくらい何度も頭を下げて頼み込んでいたが、明德は頑として受け付けない。

（妖怪が……人として生きること……）

それが正しいのかどうか、いぶきには分からなかった。

ただ、今のいぶきには人間としての生活以外は、考えられないのも事実だ。

（もし私が、社長にああいう風に言われたら……会社にいられなくなったら……？）

考えるだに、恐ろしい。

自分が、あおいにとって不必要な存在になってしまふことは、自分がこの世にとって不必要だと言われたに等しいと思う。

(でも……………)

一方でおそらく、明德の言っている事は正しい。

獏は夢の中に。

磯女は海に。

山姫は山にいたのが、本当であるし、もしかするとそこには、それぞれの大切な役割があるのではないか。

いぶきは、そうも思った。

すうつと二人の姿が白い闇に溶けて、見えなくなった。

次に浮かび上がったのは、金石ともう一人、いぶきは見た事のない、サラリーマン風の男だ。

どうやら、カウンターのようなところで酒を飲んでいるらしい。

『おやおやおや。』

社長も酷いことするよねえ。

今更妖怪に戻れ、なあって言われても、無理だよね。それに金石君みたいな優秀な社員をクビにするなんて、あの社長、どうかしてるよ。』

『オレだけじゃないんだ……小山も、矢間も、川瀬も、下里も……先代の時から一緒だった妖怪の社員は、ほとんど辞めさせられちまつたんだ』

『まったく、ひどいよねえ。』

ねえ金石君、このままで済ます気かい？ あの傲慢な社長に、我

々は鉄槌を降すべきじゃないのかねえ』

相手の男は、一見真剣に心配しているように見えるが、微妙に笑った口元が、決して本気ではないと示している。

だが、切羽詰まった金石には、それが分からない様子だ。

『オレは、今更人間に危害を加えようとは思わないよ。』

それに能力だって知れているし……社長は修行を積んだ密教僧でもあるだろ？ オレみたいな弱小妖怪なんかじゃ手も足も出ないだろうさ……』

『何、情けないこと言ってるんだろうねえ、金石君。君、そんなだからリストラされちゃうんだよ』

『な……何だっ！！』

男の言い草に頭に來たのか、金石が男の胸ぐらを掴んだ。

ざわつと髪が逆立ち、猥の本性が見えそうになっている。しかし、男はそれを知ってか知らずか、まったく動じないで言葉を続けた。

『僕を殴っても、なんにもならないと思うけどねえ……よく考えてみなさいよ？』

金石君。たしかに、君一人ではそれほど大きな事は出来ないかも知れませんが、辞めさせられた皆さん全員がが組めば、かなりな事が出来ますよ？』

『組む？』

『そう！』

君たちは同じ境遇の、言わば仲間じゃないのかねえ？ 一人一人

じゃあ弱くても、力を合わせればいいんだよ』

驚いたような顔の金石。

顔はへらへら笑いながらも、男の目は笑っていない。その目を見つめながら、金石の表情が真剣に変わっていった。

しかし、そこでまた、二人の姿が白い闇の中にフェードアウトしていく。

次に現れたのは、金石と同じくらいの年の、大柄な男。

気を失っていたいぶきは知らないが、^{やまこ}？の小山の姿であった。

『いいか、小山。』

お前の能力と、オレの能力を合わせて、あの社長に一泡吹かせるんだよ！』

『馬鹿な。天部神召還なんて、何を考えとるんだっぺ。』

そんななことしたら、圓野組だけじゃねえ。この国が……いや、世界が破滅するかも知れねえんだっぺ？』

『構わないさ。』

どうせ、オレ達はこのままじゃ野垂れ死ぬだけだ。最期に一花咲かせるってのも、別に悪かあないだろう？』

『……最期に……か。お前も、行き場がねえのはオレと同じだな。分かった。協力はする。んだげんど、オレの最期の望みは、お前とは違うんだ。それでもええんなら……』

『いいだろう。同盟成立………だな。仲間を紹介しよう。』

ほとんどが元同僚だから知っているだろうが、これまでに圓野明徳に排除された、そしてこの町で苦しんでいる妖怪達だ」

金石の後ろから現れたのは、10人ほどの男女であった。

30〜60歳くらいと、かなり年齢層に幅がある。だが、共通しているのはくたびれ果てたような外見だけで、それぞれに特徴のある衣装を纏っている。

話の流れからすると、全員が妖怪であるのだろうか、一見しただけでは、誰が何の妖怪なのかは分からない。

「……こんなに仲間がいたのか？」

「曼荼羅を作るんだから、オレ達二人じゃ足りんだろう？　だが力ギとなるのは、オレとお前の能力だ。

それと、この件の発案者は、この人だよ」

「な……なに……あんたは！」

最後にふらつと現れたのは、あのサラリーマン風の男だ。

「もちろん、お前も面識はあるだろう？」

この人にも野望があつてな。だが、この人はきちんと事が成るまでは、表には出ないと約束してくれた。うまくいけばオレ達は無敵だ。そうしたら先代の意志を継いで、新しい圓野組を始めるんだ」

得意そうな金石の姿は、また白い闇に吞まれていく。

（いけない……敵は二人だけじゃないんだ……早く……社長達に知らせなきゃ……）

だが、いつの間にか白い闇はいぶきの全身を絡め取り、身動き一つとれない。

（どう………したら………いいの？）

その時、どこからいぶきを呼ぶ声がした。

いや、したような気がした。だが、喉にまで白い闇が詰まっているようで、返事をしようにも、まったく声が出せない。

（ダメ………沈む………）

粘りつく白い、泥のような闇に、いぶきの意識が溶けようとした時。急に、ぐっと腕を掴まれた感覚があった。

そして急に耳元でハッキリと声がした。

「目覚めよいぶき！ これしきの術に屈してなんとする！

それでも、お前は我が眷属か！！」

「……………和泉……………御前」

それはたしかに、遠く離れた鷲田山中にいるはずの、山神であるいぶきの叔母、和泉御前の声であった。

ふと気がつくと、目の前の白い闇に真っ直ぐな切れ込みが入っている。

その向こうは、黒い闇だ。

しかしその向こうにこそ、帰るべき場所があることをいぶきは知っていた。

全身を絡め取っていた白い闇はもうない。体に満ちあふれる力を感じた。

いぶきは躊躇わず、その黒い世界に飛び込んでいった。

「……………りさん！！森さん！！目を覚まして！！」

「う……………うあ……………」

いぶきは、呻きながら覚醒した。

だが、すぐには意識がハッキリしない。かなりひどい頭痛がするのは、無理に金石の術を破ったせいだろうか。

「すみま……………せん。社長。もう……………大丈夫です」

いぶきの声は途切れ途切れであつたが、目には強い意思の光が宿っており、すでに金石の術は完全に無効化されたことを示していた。

「戻った！」

「おお！ では、次はあの妖狐の番じゃな」

顔をのぞき込むあおいとは別に、聞き慣れない声の持ち主達が色めき立っている。

「なにかやるなら……………は……………早くして下さい。敵は……………二人だけじゃない……………もっと、たくさんいます」

「え？ 森さん、何言っているの？！」

あおいが怪訝そうに聞き返した時、急に周囲が明るくなった。

「何なの、これは!？」

野槌が警戒して叫んだ。

これまでガネーシャが放ってきた金色の光とは違い、赤く揺らめく光は、まるでどこかで火事でも起きたかのようにであった。

「だらしねえなあ、小山あ。お前、やられちまったのかよ!？」

見ると、壊れた水タンクにめり込んだ小山を、奇怪な姿をした者が助け出している。

その様子を、屋上の柵上に大きな炎が煌々と灯って照らしているのだ。しかもその炎の中には、不気味な人の顔が浮かんでいる。

「呑めよ、小山。ヤカンヅル様の力水だぜえ!」

見ると、その男の顔にはヤカンの注ぎ口のような突起があり、その細長い口を小山に咥えさせて、何かを飲ませている様子だ。

「ぐ……うつ………すまねえ」

身震いしながら、毛むくじゃらの黒い^{やまこ}の姿となった小山が立ち上がる。

「最後のツメで馬鹿やって、しくじってんじゃねえよ。

他の連中は、とくに全員配置を終えてるんだぜ? お前もさっさと配置につけ」

「い……いや、それが、オレと対になつて配置されるはずの葉子さんが………」

「あの妖狐か？ 奪い返されちまったのかよ。仕方ねえなあ……」

「予定外の敵が……妙な犬神が出たんだよ！ そうでなきゃ……こんなへマするかよ」

「^{やまじ}は、ヤカンヅルに怒りの目を向けた。

「傷の方は簡単には治せねえが、力だけはもう元に戻っただろ？ さつさと奪い返して、配置につけよ」

涼しい顔で言い捨てるヤカンヅルは、ふわりと宙に浮かび、自分の周囲に顔の浮かぶ炎をはべらせながら、そのまま宙をすたすたと歩いて去っていく。

まるで、空中に見えない階段でもあるかのようだ。

「ま……待ちなさいよあんた！！ どこへ行く気？！」

ああいがかぶと、ヤカンヅルはこちらを見て不敵に微笑^{わい}った。

「おや？ お嬢じゃないですか。

私のこと、覚えてます？ 圓野組にいた矢間ですよ。

なあに、三天合形神だけじゃ曼荼羅は完成しないんでね。オレ達、リストラ組全員で完成させることにしたんですよ。それには、全員が神霊憑依しないとダメなもんでね。

こんな風に」

そう言いながら。

ぺろり。

と、顔の皮をむくと、青黒い肌と赤い目、口から上下に牙が生えた顔が現れた。

よく見ると、額には目が開き、手の数も六本に増えていて、先程まで化けていた人間の姿からは遠くかけ離れてしまっている。すでに神霊憑依しているのだ。

「てめえ矢間！！ その姿、悪魔に魂でも売っちまったのかよ！！」

その様子を戦いながら見ていたのか、後藤の声が響いた。戦鬼と化した後藤と、烏天狗・座間、そして犬神は、必死で三天合形神に立ち向かっているが、どうやら分が悪いようだ。

向こうはろくに防御などしていないにも関わらず、こちらの攻撃がまったく効いた様子がない。

逆に、素早く動いているこちらにも、相手の攻撃はほとんど命中してはいない。が、攻撃を加える際にカウンター気味に放たれる黒い光が、じわじわと体力を削っているようだ。

「これは副社長。ご無沙汰しています。

なにやらそちらはお忙しそうですね。しかし、我々も再就職活動で忙しいので、これにて失礼させていただきますよ？」

「再就職だとお？ ふざけやがって！！」

鬼と化した後藤が、巨大な象の鼻を両手で受け止めながら吼えた。

「お前ら、何を考えとんやつ！！ こんな事やつとつて、何か得でもするいうんか！！」

黒い光の攻撃を両手で弾きながら座間も叫ぶ。

「得？ まあ、再就職先が出来るのが一番の得かなあ……でも、まあそんなこと、これからくたばるあんた達には関係ないけどな」

「再就職……だと？　まさか、他の土木業者にそそのかされたのか！？」

「話はここまで……だっ！！」

青黒い怪物と化したヤカンヅルは、後藤めがけて口から炎を吐きかけた。

その炎を、座間の剣が受け止め、二つに切り裂く。だが、堪えきれずに二人ともはじけ飛んだ。

「じゃあな。ケケケケケ」

ふたたび空中を歩いて、ヤカンヅルが去っていく。

§ 2 6 妖狐覚醒

§ 2 6 妖狐覚醒

「きゃあっ！！ 稲成さん！！」

ああいの声が響いた。

復活した小山……？に、意識を失ったままの葉子がまた奪い返されてしまったのだ。

「へへ……やつど、オレの物さなるんだべ。葉子さん、葉子さん、ようこそあん」

完全に？の本性を顕し、顔までも醜い毛むくじらになった小山が、純白の衣をまとい、妖狐の正体を見せてもなお美しい葉子に、舌なめずりをせんばかりの表情で迫る姿は、赤々とした妖火に照らし出されて、なおいつそう妖しい雰囲気醸し出している。

「……この位置だな……」

？は葉子を抱いたまま、屋上の端にあった、小さな台状のコンクリートの上に立った。

「こここ来い！！神霊の気よ！来い！！」

言いながら、三天合形神へとその手を伸ばす。

次の瞬間。

何の前触れもなく、地から立ち上るような青い稲妻が？と葉子を

撃った。

「ひゃあはーっ！！ 来たあああ！！」

歡喜に満ちた表情で叫ぶ？の額からは、一本の巨大な角が生え始めていた。

稲妻に撃たれて変化の始まった？の肉体は膨れ上がりながら、見るうちにこれまでとは似ても似つかない姿に変貌していった。筋肉がもとの数倍に盛り上がり、黒かった剛毛は、真っ赤に変わっていく。

口からはみ出す鋭い牙。

額に開く第三の目。

頭からは、ねじくれた一本の角が生え、顔の皮膚は肥大化して醜くたるんでいく。

二本足で立ち上がった？は、ゴリラのように胸を打ち鳴らすと、歡喜とも悲しみともつかない叫び声を夜空に発した。

「敵が……増えちゃったわね………」

弓を手にしたあおいが呆然と呟く。

三天合形神だけでも手に余っていたのに、この上、？まで神靈憑依してしまつては、とても勝ち目はなさそうだ。

しかも、先ほど消えたヤカンヅルの言葉からして、他にも敵はいるようだ。

「葉子は！？ 葉子はどくなつたの？」

いぶきが言う。

見ると、稲妻を受けたはずの葉子には、何の変化も起きていない

ようだ。^{やまち}？は自分と葉子が対の天部神になるようなことを言っていたが、神霊憑依しなかったのだろうか？

怪物化した？^{やまち}も、おかしいと思ったのか腕の中の葉子に顔を近づけた。

その時。

「ぐぎゃあっ！！」

悲鳴が上がった。

^{やまち}？の背中に黒い影が飛びかかったのだ。

「犬神さん！！」

飛びかかったのは、先程まで三天合形神を座間達と共に攻めていた、犬神であった。

やはり葉子を救いに来たのだ。

しかし、三天合形神ほどではないにせよ、神霊憑依した？^{やまち}も強い。すぐに反撃に出て犬神を両手で追い回す。素早い犬神は攻撃は喰らわないが、犬神の攻撃もさほど効いた様子はない。

「私も……………行きます」

いぶきが立ち上がる。

「森さん、無理しちゃダメよ！」

あおいが心配そうに言う。

「いえ。このまんまじゃ、みんな勝てない。それに、これじゃ私、いいところ無しじゃないですか」

いぶきは、あおいの目をじっと見つめた。

鳶色の瞳の奥には、いきなりつかけて返り討ちにあった悔しさがにじみ、その失敗を払拭するために戦いたいという、強い意志が見て取れた。

「援護するわ」

「お願いします」

寸時見つめ合った二人は、短く言葉を交わすと素早く左右に散った。

あおいは？の正面に。

いぶきは後方に。

素早い犬神に気を取られている？は、二人の動きに気づいていない。

「和泉御前様……ほんのしばらくだけ、お力をお貸し下さい」

いぶきはそうつぶやくと、両手で印を組み口の中で何かを唱え始めた。

途端に、屋上に植えられていた植物たちに異変が起きた。

すべての植物が、あり得ない早さで成長し始めたのだ。

カエデも、サツキも、それ以外の木々も、シバやハナシヨウブまでもが、瞬く間に伸びて、いぶきのもとへ集まっていく。

それらは、いぶきの体にまとわりついていき……あつという間に、いぶきは草木の鎧を身につけていった。鎧は、筋肉のように膨らみ……現れたのは、本来のいぶきの身長を数倍したような、緑色の巨人であった。

神靈憑依した？と、ちょうど同じくらいの大きさだ。
手に持った大槌も、体に合わせて巨大化している。
それを振りかぶりたいぶきは、犬神を振りほどこうとしている？
の頭部に真横から一撃を加えた。

「ぐざいつー！」

悲鳴を上げて？がよろめく。

しかし、神靈憑依しているせいか、渾身の一撃でも倒れようとはしない。

「森さんっ！！下がって！！」

あおいは叫ぶと、火気を込めた矢を？に射かけた。

？の顔面から炎が上がる。しぶとい？もようやく動きを止め、両手で火矢を払っている。

「今よ！ 犬神さんっ！！ 稲成さんを！！」

膝を突いた？の足元から、犬神が葉子を救い出した。

これで、葉子を目覚めさせれば味方が増えるはずだ。しかも、葉子を組み込んだ別尊曼荼羅とやらは、少なくとも完成しないはずだ。

「やったぞ」

「早くこちらへ！！」

結界破りの矢を持って、入堂達が叫ぶ。

葉子の体を咥えた犬神が、電光のごとき速さで入堂の目の前に立った。

そして、そつと地面に降ろそうとしゃがんだ時。

「ごぼあっ!!」

犬神の口から、大量の血があふれ出した。葉子の体が、犬神の口から滑り落ちる。

「ど……どうしたんだ。こいつ？　おい、しっかりしろ!!」

「しっかりせよ！　犬神殿!!」

入堂達は口々に犬神を励ますが、気を失っている葉子の上に大きな頭を預けたまま、犬神は立ち上がれない。

？の血に染んだ葉子の白装束が、今また、犬神の血で染んでいく。そして犬神の目の光が急速に失われ、うつろになっていった。

「現れた時から最前線で戦い、一番傷ついていたからの。これは……助かるまい」

犬神の上に右手をかざして、野槌が言った。

「そんな……」

弓を持って駆け寄ってきたあおいも、言葉がない。その時、いぶきの声が上がった。

「社長!!　また？がそちらへ!!」

執念であろうか、

？は重傷を負って立ち上がれないまま、葉子に毛むくじゃらの手を

伸ばし、にじり寄ってくる。いぶきは座間たちの防ぎきれない三合形神の攻撃を、大槌でいなすので精一杯だ。

すると、すでに息絶えたかと思われていた犬神が、うつろな瞳のまま、突然すつくと立ち上がった。

そして振り向きざまに飛び上がると、最後の力を振り絞ったように？の喉笛に食らいつく。？は悲鳴を上げながら、胸元にぶら下がった犬神の体をめちやくちやに殴った。

その時あおいは、犬神の倒れていた場所に、一個の丸い物がある事に気づいた。

拾い上げると、血まみれのそれは……

「こ……………これって……………梨？」

テニスボール大の小さな梨である。

あおいには見覚えのある……………いや、忘れられない小さな梨。

「たんたんころりん様っ！？」

「……………うむ」

小さな梨に人の顔が浮かび上がり、聞き覚えのある優しい声が響いた。

「黙っていて、済まぬ。どうしても、あやつが知られたくない。と言うものだから、な」

「じゃあ……………じゃあ、あの犬神さんは……………」

「あの小さな体で……………残っていたほとんどの梨を食いおった。拙者が一年掛けて溜めた自然の気じゃ。」

犬族だからこそ、保っておるが……普通の小妖なら、消し飛んでおるだろう」

あおいは改めて犬神を見た。

何故、気づかなかったのか。

足だけが黒い。

顔に隈取りのような黒。

背中の灰褐色。

全体の姿は変わっていても、そんな特徴のあるイヌ科の獣は他にはいない。

「豆田さんっ！……！！」

あの時、烏天狗の座間ですら、たった一個の梨で金色の姿に変化し、凄まじい力を発揮したのだ。

十数個は残っていたはずのたんころりんの梨を、もともと手の平サイズの豆狸一体が食べたらどうなるというのか……。

あおいの叫びは届いたのかどうか分からない。

？の喉笛^{やちい}に食い込んだ牙を抜こうとせず、そのままボロ雑巾のようになつた犬神……豆田は、すでにぴくりとも動かない。

「馬鹿だねえ……………」

見つめるあおいの横に、ふらつと葉子が並んだ。

いつの間にか、入堂が葉子の精神結界を破つたのだろう。

「稲成さんっ！！ 豆田さんが！！ 豆田さんがっ！！」

叫ぶあおいには答えず、葉子は、ふらふらと歩き出した。

そしてそのまま、両腕を広げる？の懐深くへと、歩み寄っていった。

「おおお……おおつ……葉子さん……ついに……ついに……オレの物になっでくれるのが……」

「は、感に堪えない様子で、悦びの唸り声を発しながら、葉子を抱きしめた。

「そんな……稲成さん……？」

ああいが、絶望の嘆息を漏らす。

既に稲妻を浴びた葉子は、天部神の暗黒面に神霊憑依されてしまったのだろつか。？の腕の中の葉子は、まるで恋人に囁くように話し始めた。

「小山あ……あんたさ……そんなに、あたしのこと、好きだったんだ？」

「そ……そうだとも！ 以前、お前は妖怪と一緒にいる気はないと言っで、オレを振った。

だが見ろ、この体を。

神霊と合一して、オレは妖怪を越えたんだ。

今やお前と対になって、大聖歡喜天の別尊曼荼羅を構成する天部神様だ。

これなら、認めてくれるだろう？」

「あんた……あの時さあ……あたしの為なら、死ねる……ってそう言っただよねえ？」

そう、艶めかしく囁きながら葉子は？の両腕にそつと自分の手を滑らせた。

？は、葉子の手の感触に目を細めながら満足そうだ。

「おお……あの時の言葉を覚えていてくれたのか？」

そうとも。オレはお前のためなら、いつでも命を捨てられる……」

「でも………あんた、まだ生きてるよねえ？」

「な………何？」

「神霊だかなんだか知らないけどさあ……

依り代なんかのために、小さな女の子を死なせ……

七海ちゃんの純粋な女心につけ込んで、惑わせ……

強い者にすり寄って、自分の欲望の為に他人の心を操ろうとする

………

そのどこが………命がけなんだい？」

「葉子………おまえ………」

「気安く呼ぶんじゃ………ないよっ！！」

葉子は？の太い両腕に添えられた掌から、自身の体内にため込んだ火気を、一気に解き放った。

「うぎゃわあっ！！」

意思のある蛇のように？の両腕に巻き付いた青白い炎は、肩口まで登ると数mの火柱になった。

そしてそのまま顔を焼き尽くす。

「^{やま}？は思わず焼けた両手で顔を押さえて悶えた。両腕の炎が燃え移り、さらに顔面が燃え上がる。
葉子はいまだに？の喉笛にしっかりと噛みついたまま、ぐったりぶら下がっていた犬神姿の豆田を抱きかかえると、あおい達の元へ跳び退った。

「稲成さんっ！！」

あおいの歓声が上がる。

「このバカを頼むよ……………」

葉子は、抱きかかえた巨大な犬神の体を、あおいの前にそつと横たえた。

「^い……^いのアマあつー！！」

その時、上半身を焼かれて怒り狂った？が、^{やま}葉子の背中から襲いかかった。

炎で体毛をほとんど焼かれ、神霊憑依で変形した、異形の顎が^{あきこ}葉子に迫る。

しかしその攻撃は、葉子には届かなかった。

「^い……^いんな……バガな……………」

動きを止めた？の^{やま}体を、五本の尾があらゆる方向から貫いていたのだ。

葉子の五尾は金色に輝き、？の傷口からは^{やま}血ではなく、ガネーシヤと同じ黒い光が漏れている。

「ほんとに命を賭ける男つてのはねえ……

振り向いてもらえるかどうかなんか二の次で……

好きな相手を守るためだったら、二度と元に戻る保証なんか無くつても、どんな無茶してでも力を手に入れてさ……

勝てる可能性なんか関係なく、どんなでかい敵にでも立ち向かつ

て……

こうして最期の最期まであたしの側を離れない………

こういうヤツのことを言うんだよっつっ!!」

「^{やまじ}？に背を向けたまま葉子が叫ぶ。

そしてまるで、二度と^{やまじ}？の姿を見たくないとしてもいつかのように、後ろ向きのまま、五つの尾で^{やまじ}？を切り刻んでいく。

「^{やまじ}？は細切れの肉塊に姿を変え、びちゃびちゃと、濡れた汚らしい音を立てて転がった。

雪が溶けるように、変化が解けていった後には、何のものとも分らない茶色い毛に覆われた小さな肉塊が散乱しているだけであった。

§ 27 辰狐王

§ 27 辰狐王

「稲成さん……あなた、周囲の状況が分かってたの？」

「殺生石は、あたし達妖狐の休眠形態ですからね。外の様子が見えなくなるわけじゃない。何があったかは、全部……分かってますよ。あたしが勝手に先走ってしまって、ご迷惑をおかけしました」

葉子は、あおいに頭を下げた。

「いいえ。それも私を守るためだったんですよ？ この事件に圓野組が関係していることを、知らせないために……」

「相手がただの妖狐じゃなくダーキニーだと分かっていたれば、一人で行ったりはしなかったんですけどね……本当にすみませんでした……」

「でも……どうして一目であの犬神が豆田さんだって……私達も最初は気づかなかったのに……」

横たわる犬神……豆田の前に跪ひざまずいた葉子は、その顔を愛おしそうに撫でながら言った。

「最初にやって来た時から、あたしには分かっていたよ。こういう馬鹿なことするヤツは、コイツしかいないってね」

葉子の頬を涙が伝う。

犬神の意識は既に無く、かすかに笛のような呼吸音が聞こえるだけだ。

「あたしが、もっと早く目覚めてさえいれば……いえ、そもそもあんなヤツに負けさえしなければ、あんたをこんな目に遭わせなくても済んだのにね……」

「豆田君……あれほど怖がっていたのに……なんで……」

上司である入堂も、豆田がこのような行動に出るとは予想外だったのだろう。倒れ伏す犬神の傍らに、呆然と佇んでいる。

「入堂さん……申し訳ありませんが、この人を手当てしてやってくれませんか？」

葉子は入堂の前に正座すると、両手を突いて頭を下げた。

「私は、あの化け物を片付けなくちゃいけない。アレを退治しないことには、私達も助からないし……なにより、この人の頑張りが無駄になってしまいますから」

「わかった稲成さん。」

豆田君は私の大事な部下でもあるんだ。なんとか手当てしてみよう。ここにいる野槌と白粉婆も、気を分けてくれると思う。だが……助かる見込みは……」

「分かって……います。それでも……お願いします」

葉子はさらに重ねて頭を下げると、すっと立ち上がって三天合形

神へと顔を向けた。座間と後藤、いぶきの三人は、なんとか奮闘しているがますます分が悪い。

見ているうちにも、座間が斬りつけた降魔の剣を跳ね返され、背中から屋上の壁に叩きつけられた。さらに三天合形神の長い鼻が真っ直ぐに襲いかかる。

そこへ突然、真っ赤な炎が壁となつて立ちふさがり、座間を完全に覆い隠した。

「ふぁおおおおん！！」

長い鼻は目標を見失った上に、炎で焼かれてのたうった。巨象の雄叫びとよく似たあのガネーシャの声が再び訝する。

三天合形神は奇怪な形状の数本の手で、炎を消そうと足掻いた。しかし炎はまったく消える様子を見せず、上半身を火柱が包み込んだ。発する熱気が屋上全体を包むかのような威力の炎だ。

「へえ。ゾウの照り焼きつてのも、悪かぁないようだね！」

葉子は、挑発的な口調で叫ぶと三天合形神の前に立ちはだかった。

「すごい！！ 何よあの、葉子さんの炎の威力！！」

あおいは、初めて見る種類の炎に圧倒されて叫んだ。

「もしかして、葉子さん……神霊憑依できていたの？」

「あたしは、邪悪な妖狐だからねえ……神様の力を借りるなんて本意じゃないんだけどさ……連れ合いが犬神様になっちまったんなら、あたしも多少は格を上げないと、釣り合いがとれないってもんさ！！」

そう言つと、葉子は大きく息を吸い、全身から真つ赤な炎を吹き出した。燃え上がる炎が形を取っていき、元の葉子の二回りほど大きな姿に変わっていく。

全身を覆う、雪のように真つ白な毛並み。

鮮やかな朱色の混じった、金色のたてがみ。

背中からは、鮮やかな金色の羽が生えている。

手には、美しく輝く宝玉と錫杖。

憤怒の形相を刻んだ口元には鋭い牙が見えている。

だが、強い意志の光を宿したその瞳は、たしかに葉子のものだ。

「辰狐王……………」

野槌が、葉子の姿を呆然と見つめながら言った。

「しんこおう?」

あおいは初めて聞く神の名前だ。

それを聞いた白粉婆が、呆れたように教えてくれる。

「おぬし、辰狐王を知らぬのか?

それこそが茶吉尼天の本地じゃよ。じゃが、あそこにダーキニーが取り込まれているのに、こちらにも茶吉尼天が姿を現されるとはの……」

同じ神が、邪悪な暗黒面とその反対である聖なる面、その二つの姿を持って同じ場所に顕現しているのだ。

しかも皮肉なことに暗黒面が顕現しているのは、本来善狐たる茶吉尼の神使であり、聖なる面が顕現しているのは邪悪な妖狐であるはずの、葉子である。

長く生きてきた白粉婆も、このような状況に遭遇するのは初めてであつた。

その時、入堂の手の中で犬神の頭が動いた。

「ぶ……部長……」

「豆田君っ！！ 気がついたのか？」

「すみません……こんな……ご迷惑をおかけ……して」

巨大な犬神の口から、あの頼りなさげな豆田の声が漏れてくる。その声のか細さに、入堂は思わず涙ぐんだ。

「馬鹿を言つな。君がその姿で来てくれなかったら、我々は早々に敗北していたよ」

「そう言っていただけと……あの……葉子さん……は？」

「そつだ。ほら見えるか豆田君！ あの女神がそつだ。君が愛した女性だよ。^{ひと}君のおかげで蘇つたんだぞ？」

入堂は犬神の大きな頭を抱え上げると、辰狐王の姿となつた葉子の方へ向けた。

「ああ……見えます……やっぱり……ようこさんは……きれ……い……」

「豆田君？ 豆田君っ！！ しっかりしろ！！」

再び意識を失った犬神の体をゆすりながら、入堂は豆田の名を呼び続けた。

§ 28 七海救出

§ 28 七海救出

辰狐王となった葉子は、手に持った宝玉から真つ赤な光弾を放ちながら、錫杖で三面合形神へと打ちかかっていった。

だが、相手は三柱もの神が合一した超神である。これまでよりはかなり分が良く見えるが、形勢逆転とまではいかない。葉子の攻撃は効いているようだが、相手の攻撃も葉子に効いている。それどころか三天合形神の放つ光の流れ弾が、豆田を介抱している入堂達のすぐ近くまで飛んできた。床面のコンクリートが割れて、破片が飛び散る。

あおいは入堂の側へ駆け寄ると、弓を剣のようにふるって、なんとか光弾の直撃を防いだ。

その時。

またも三天合形神の腕に弾き飛ばされた座間が、あおいの側に転がってきた。続けて襲ってくる光弾を葉団扇で防ぎながら、座間はあおいに叫んだ。

「しゃ……社長……！　なんで……なんで伊園さんがアイツに合体しとるんですの！？」

「あ……！　……ごめん座間君。説明……！　してなかったわね。っていうか、理由は私達にも分かんないの。でも、たぶん？と獺が催眠術か何かで、七海ちゃんを唆したんだと思うんだけど……！」

「そんなんで済みますかいな……！　オレ、伊園さん相手に本気で戦えまへんで……！」

座間は降魔の剣を杖にして立ち上がりながら、あおいに食ってかった。

「で……でも、座間君？　どうしてアレに伊園さんが取り込まれて
いるって分かったの？」

あおいの疑問ももつともだ。今の三天合形神の姿は、七海の面影
どころか、見ただけでは原型が何だったのかさえ分からないほど変
容してしまっている。

「それが修行の成果ですんや。オレ、妖怪や生き物の本質やら、憑
依しとるあらゆるモノが見えるようになったんですわ」

「見えてるんなら、助け出せないの！？」

「いや……簡単には出来まへん。

ちよつと見ただけでも、あの化け物、何種類もの魂や靈魂、妖怪
なんかが融合してますんや。しかもああ激しく動かれとると、切り
離す太刀筋も見えまへんし……」

するとその時。

「動き……止めればいいのね！？」

葉子が戦いながら、耳ざとく聞きつけて座間に言う。

「え……？　そりゃまあ……止まったら、太刀筋は見えるかもしれ
まへんけど、切り離せるかどうかは……」

「まったく！！ 大の男が、そんな自信のないことでどうするっての！！ やるのかやらないのか、どっちなんだいつ！！」

「や……やります！」

女神の姿の葉子に厳しく叱咤され、座間は思わず姿勢を正して返事をした。

「よし。あたしに任せな。

いいかい？ 今から十五秒後に、でかいのを一発かます。そうしたら、たぶんヤツは数秒間は動きを止める。だから、その隙を利用して七海ちゃんを助け出すんだよ！？ いいね？」

そう言うた葉子は、座間の返事も聞かずに両手を前に出して、術の体勢に入った。背中に生えた金色の羽が急に黒く変色し始めた。それと同時に、周囲の温度が二、三度下がったように感じられる。どうやら、周囲の気を翼から吸収しているようだ。

手に持つ赤い宝珠は、胸の辺りでさらに輝きを増し、青白い色に変わって眩しいくらいに光り始めた。

三天合形神は警戒したのか、動きを止めた葉子に集中的に光弾の雨を降らせるが、葉子は無防備なまま全身に光弾をいくつも浴びながら、術の体勢を崩そうとはしない。

「え……ちょ……」

心の準備が、と言い掛けた座間はその言葉を呑み込んだ。目の前に立つ葉子の覚悟を見て、そんなことが言えるはずがない。

それに、後藤も、いぶきも、後方のあおい達も、長引く戦いで疲弊しきっている。何より、三天合形神に捕らえられた七海の魂は、苦痛に悲鳴を上げているように座間には見えているのだ。

（それに……こんな場面で弱音を吐いたら……もし負けて死んだとしても、師匠にも、ヒメコにも、あの世で顔向け出来へん！！）

そう思いながら剣を構えて、三天合形神を睨んでいると、あおいが座間のそばへやって来た。

「座間君……これ……」

あおいが手渡したのは、たんたんころりんの梨であった。べつとりと豆田の血が付いている上、たんたんころりんの顔が浮き出ている。その梨に浮かんだ顔が座間に話しかけた。

「座間殿。また拙者を食ってくれんか。

今がここ一番、やらねばならぬ時なのじゃろう？　ぜひとも拙者に手伝わしてくれ」

「たんたんころりん様。喜んで」

座間は迷わずに答えた。

あおいから受け取った梨を、丸ごと一口で頬張る。かみ砕くと、相変わらず甘さよりも酸っぱさの勝る果汁に、豆田の血の味も混じっていた。が、覚悟を決めて一気に飲み込む。

そして、黙って降魔の剣を青眼に構えると、気が満ちるのを待った。

ケルピーと戦った時と同じように、座間の身体の中から、力が満ちあふれてきた。梨に蓄えられた自然界の気が、はち切れそうなほど座間の体内に満ちてきているのだ。

ほどなくして座間の全身が、満ちた気によってあの時のように金色に輝き始めた。

たった一個であるのに、後から後からあふれ出すほどの気が満ちてくるのだ。よくもこんなものを十数個も……そう思いながら、豆田の覚悟と思いの深さを、座間はあらためて実感していた。

気を高めた座間は、三天合形神をあらためて見つめた。

正面に人肌をした片キバの象の顔。向かって右に牙をむく野干ジャッカルの顔。そして左にゴツゴツした鱗を持つ女怪の顔……それが変貌した七海だ。

その体表面は、モザイク状に鱗と獣毛と人肌に覆われ、四方八方に脈絡無く飛び出した、形状も大きさもまちまちな四肢が休みなく黒い光弾を放っている。

しかし、その実相を見つめると中心には矮小な人間の男の靈魂が見えてきた。その男から出た欲望の鎖が、二人の少女の心を縛り付けているのが見える。男の靈魂は大きな茶褐色の獣に憑依し、その後ろには、さらに大きな金色の象形をした神靈の影が見えた。

（コイツ……獾やと聞いたけど……依り代は獣でも、もともと
の本質は人間の靈なんやな。そやけど……どうする？）

七海を三天合形神から助け出すには、三柱の神を分離するだけではダメだ。

七海だけを切り離す必要がある。が、七海の磯女としての本質は、どうやら少女の心であるようだ。依り代であると聞いていたウミヘビの存在は、小さすぎるのかどこにも見えない。あくまで本質として浮かび上がっているのは、欲望の鎖に縛られた少女の心なのだ。

そしてその周りに何十、何百もの女性の怨念が渦巻いていて、しかもそこにからみつくように、様々な色あいの魂や記憶らしきものも見える。

（たぶん……あの不思議な色の記憶や魂は、人間として暮らし始めた、最近の記憶や関係性なんや。おそらく森先輩が伊園さんに付け加えた、家族や仕事の関係性……オレ達との記憶もそこにあるんやろ。

あの中から伊園さんの本質……少女の心だけを切り離すのは簡単や……せやけど……）

それはつまり、七海が磯女でなくなるだけでなく、伊園七海ですらなくなることを意味していた。だが、たくさんの女の怨念に縛られたまま存在し続けることが、果たして七海にとって幸せなのだろうか？

しかも怨念同士は絡み合い、七海の本質は複雑な様相を見せていた。

もし、切り離す太刀筋を見誤れば……七海は存在自体出来なくなってしまうかも知れない……決断の瞬間が迫る中、座間はまだ迷い続けていた。

後藤といぶきは、葉子が何かやろうとしていることに気づき、葉子の前に立ちはだかつて、黒い光弾を代わりに受け止め始めた。後藤は、筋肉の盛り上がった両腕を顔の前に出して防御している。

しかし、強靱な鬼の身体といえども神の力には敵わないのか、光弾の当たった部分から次第に黒く変色していく。大槌をふるって光弾を弾いているいぶきも、その身体を包む植物の鎧から破片が飛び散り、ところどころ燃え上がり始めた。

「いぶき！！ 後藤さん！！ 助かったわ！ あと、二秒したらそこから退いて！！」

葉子は叫ぶと同時に、ついに真っ白な光を放ち始めた宝珠を両手で捧げ持つと、真っ直ぐに三天合形神へと向けた。

次の瞬間、宝珠から音もなく白い炎の蛇が何本も放たれた。

その炎の蛇たちは、あたかも生きているかのように、あるものは地を這い、あるものは空中に弧を描き、またあるものは空中を蛇行しながら、高速で進んでいく。

放たれた瞬間は細い糸のように見えた蛇は、目標に達するまでに急激に太さを増していった。

周囲にまき散らす高熱の余韻が、それがただの炎の蛇ではなく、ほんの少し触れただけでも致命的なものだと教えている。蛇がその場へ達する寸前に、間一髪でいぶきと後藤は飛び退いた。

炎の蛇は三天合形神の元へ達すると、その顎で十数本の異形の手足に噛みつき、その動きを止めた。噛みついた場所から黒煙と赤い炎が上がり、異形の神はこの戦いで初めて、声にならない悲鳴を發した。

「今よ！！ 座間君！！」

暴れようとする三天合形神の動きを、炎の蛇を操って必死でねじ伏せながら、葉子が叫ぶ。おそらくは今の葉子の最強の術なのだろう。

だが、その威力を持ってしても、それほど長くは保たないと葉子は分かっているのだ。

「えいいつつ！！」

座間は、間髪入れずに降魔の剣を振るう。

そして剣を抜き放つその一瞬に、迷いを断ち切っていた。

（オレが助けたいのは、あの、伊園さんなんや）

座間の脳裏に、はにかんだように微笑む七海の顔が浮かぶ。

思えば、たしかに出会った頃から七海は、少女の純粹さと可憐さを持ち合わせていたのだと思う。しかし磯女であるその魂の中には、元々たくさんの女性の怨念もまた含まれていたはずだ。

もしかするとそのせいで、つらく、寂しい思いを続けてきたのかも知れない。

だが、少なくともトープスに来てからは寂しい思いはさせていないつもりだし、自分達が居る以上、これからそんな思いは絶対にさせない。言わば、怨念の主である女性達もまた、座間達の仲間であるのだと、そう思った。

邪悪な妖怪だった過去も、温かい仲間を手に入れた現在^{いま}も、それもちろん、すべてひっくりくるめて七海であるはずだ。

それが、自分達の仲間である伊園七海だからだ。

様々な魂や思念、感情、天部神の意思、霊力、物質化した肉体、その他何だか分からないものが複雑に入り組んだ、三天合形神を形作るモノ。

それと磯女である伊園七海の部分を、座間は正確に切り離れた。途端に三面のうちの一つ、青黒い鱗で覆われた女怪の顔が穏やかになり、見る見るうちに表面が滑らかになっていく。人間の女性の上半身が浮かび上がって来たかと思うと、下半身が蛇のままの七海が現れ、ゆっくりと下に落下した。

『ぐほおおおおん』

三天合形神は、地の底から響くような低い雄叫びを上げて揺らいだ。

天部神に限らず、神霊も妖怪も依り代がなくては現世に存在してはいられない。無理矢理に憑依を解かれたサラスヴァティが、他の二神と依り代を奪い合いし始めたのだろう。

「もう……いっちょう!!」

七海を左腕に抱き留めた座間は、片手で降魔の剣をもう一閃させた。

今度は右のダーキニーから、少女……牧村美紀の霊を分離するのだ。七海と違い、余計な憑依霊や過去の少ない少女を切り離すのは比較的簡単であった。

周囲からは、単に座間が虚空を薙ぎ払ったようにしか見えなかったが、座間の目には切り離された少女の霊が、白いもやのようにたなびきながら離れていくのが見えた。

『ぐぎ、いいいいいいいい』

絞り出すような悲鳴が響き渡る。

ダーキニーまでも依り代を失った三天合形神は、まるで折りたたむようにして突き出した四肢を自身の肉体にぶつけ始めた。

いくつもの鋭い爪が、青黒い皮膚を引き裂いて、自分の中に潜り込もうとしている。依り代を失った二柱が、残されたたった一つの依り代である獺に同時に憑依しようとしているのだ。

だが、窮屈そうに自身の内側へと逃げ込みながら、それでも三柱の神は現世から去るつもりは無いのだろう。もう三面でいることはできなくなり、獺の肉体に折り重なるようにして憑依し直していく天部神の姿が座間には見えた。

「七海ちゃん!! 七海ちゃん!!」

ああいは座間の腕から七海を受け取ると、必死で声を掛けた。

「あ……社長……?」

「良かった。七海ちゃん、元に戻ったのね」

「社長……私……」

「話は後よ。今は、アイツをやっつけなきゃ。動ける？」

泣き出しそうな表情の七海を制すると、あおいは下半身が蛇のま
まの七海を両腕でぎゅっと抱きしめて囁いた。

「……はい」

七海は小さな声で、しかし、はっきりとあおいに答えた。

§ 29 蛟竜（じゅうりゅう）の顕現

§ 29 蛟竜じゅうりゅうの顕現

「よし。じゃあ、あとは……真菰専務だけね」

その時、あおいのすぐ脇につむじ風が巻き起こり、次郎坊が透明な着物を脱ぎ捨てるようにしながら、ふわっと空中に現れた。

「どうですか……圓野君、社員は……全員集まりましたか？」

現れた次郎坊は相当消耗した様子で、片膝を付いて荒い息を吐いている。

あおいはすかさず次郎坊の肩を抱き、用意しておいた呪符から次郎坊のエネルギーとなる土気を注入しながら答えた。

「いえ……まだ真菰専務が……」

「それは困りましたね。切り札の準備は整いましたが、その起動にはあなた達、六人全員が揃うことが必要条件なのです。一人でも欠けていては切り札は使えません」

「しかし……真菰専務は、境界面の消失で大怪我をしたんです。現界に顕現するには、治癒のための時間が必要なのかも……今のところ連絡が取れないんです」

「そうであれば、我々は敗北するだけです」

「そんな……………」

あおいが次郎坊を介抱していると、葉子が悲鳴を上げた。

「うあっ!!」

数秒間と言いながら、三十秒以上も三天合形神の動きを止めていた炎の蛇が、ついに断ち切られたのだ。葉子は悔しそうに両手を振って炎の蛇を回収する。

炎の蛇は葉子の両腕にとぐるを巻き、生きた蛇のようにそこにわだかまった。

「まったく、愛想がないねえ。ここまでやってもダメージらしいダメージは見あたらないじゃないか」

葉子の言う通り、三天合形神は形態こそ変えたものの、禍々しい波動も、放つ光弾の威力も、衰えたようには見えない。それどころか、まるで融け合ったかのように、蛇の鱗と野干やかんの獣毛やキバ、象の鼻を併せ持った異形の獣へとさらに変化していく。

「これ以上、何に変わろうっていうの!?!」

いぶきが悔しそうに叫ぶ。

三天合形神はそれまでの座した姿ではなく、四つ足の獣の姿となつて、ゆっくりと歩き出した。そして赤鬼となった後藤のそばまで行くと、長い爪を生やした前足で、はたくようにして叩きつけた。

「ぐおっ!!」

両腕を十字に組んで受け止めた後藤の、踏ん張った両足の下で、

床のコンクリートが音を立てて割れた。

「くそおっ！！ この化け物っ！！」

座間が剣を振りかざして飛びかかるが、動きを取り戻した三天合形神をさらに斬ることは難しい。もう一方の前足で、また弾かれてしまった。

「ぐるるおおおおおんんんんん」

異形の獣と化した三天合形神の叫びが、闇に飴した。

「そういえば……豆田さんは、真菰専務に連絡を取ってくれたのかしら？」

あおいはここに来る前、入堂が豆田にしていた指示を思い出した。

「あおいちゃん。

コイツはね。たしかに、見た目は頼りなさそうなヤツだけど、俺の命令を遂行しなかったことは、これまで一度もないんだ。

大丈夫。真菰さんには、必ず連絡を取っているさ」

入堂は、ぐったりした犬神のそばに座り込み、額に汗を滲ませて全身の気を送り込みながら、あおいに答えた。

その時。

「おい、なんだあれ？ ネズミじゃないか？」

入堂が、屋上の縁を走る小さな生き物に気がついた。

「まさか……小玉鼠さん?!」

「アオイサン!! ココデシタカ!!」

見覚えのある白っぽい背中のカヤネズミが、屋上の縁から、ひよいと数mジャンプしてあおいの肩に乗った。

「ダメよ!! あなたたち、逃げて!!」

人間の悪運ですら吸いきれずに爆死してしまう小玉鼠が、こんな邪悪な気の吹き荒れる場面にいたら、一瞬にして消し飛んでしまうだろう。なにより、今は形勢が悪くなっている真っ最中なのだ。

「ダイジョウブデス。オーイ!! ココダ!!」

小玉鼠の頭領が下へ向かって叫ぶ。すると、周囲から何かをひっかくような音が巻き起こり、次第に近づいてきた。

そして数秒後、屋上の全周からネズミの大群が押し寄せてきたのだ。その様子は、さながら黒い津波のようであった。

「小玉鼠さん!! どうする気よ!!」

「ボクたちハ、運ンデ来タダケデス!! アナタノ家カラ!!」

よく見ると、無数のネズミたちは背中に何か背負うようにして走っている。どうやら、背に乗っているのは黒い生き物……アカハライモリのようなのだ。

「え? ええ? なんで?」

突然のことに、あおいは目を白黒させている。

そのうちにネズミ達は次々に屋上の池に飛び込み、イモリをそこに放し始めた。

だが、すべてのネズミがイモリを背負っていたわけではない。ネズミは数千匹もいるようだが、あおいの飼っているイモリは三百匹程度なのだ。

イモリを背負っていないネズミたちが協力して運んできたのは、なんと、キュウリと酒であった。池の畔にそれを積み上げると、小玉鼠の頭領がその前に座り再び叫んだ。

「ドウゾ！！ 準備八整イマシタ！！」

すると、池のほぼ中心あたりに、満月が、ぷかり、と浮かんだ。

いや、月ではない。月のように輝き、月のように蒼白く輝いてはいるが、月は岸に向かって動いたりはしない。そしてあおいは、これが何であるか分かっていた。

「お…… 大河童様！！」

するすると岸に泳ぎ着き、水面に姿を現したのは、身長80センチほどの河童だったのだ。

赤黒い肌にまん丸い大きな目。

嘴のように尖った口元。

忘れもしない20年前、あの美しい湧き水のある泉で、祖父・正平と一緒に会った河童の頭領であった。

「コノ姿デ顔ヲ合ワスノハ、久シブリジャナ。」

「この姿って…… まさか、私が飼っていたイモリたちは……！？」

「ワシ等ノ依リ代ナノジャ。黙ッテイテ、スマヌ」

「でで……でも……どういう事!? どうしてここに?」

「話八後ジャ。義二ヨツテ助太刀スルゾ。イイナ!! オマエ達!
!」

「オオウ!!」

池の水中から、大勢の河童の甲高い叫び声が響いた。

二十年前のあの夜のように……いや、あの夜よりももっとたくさん
の河童達が、もつとずつと素早く、次々と水中から飛び出して来た。
中には水中から魚のように跳ねて、陸上に着地するものもいる。
そして各々、激しい水流を発射したり、針のような体毛を飛ばし
たりして、四つ足獣と化した三天合形神へ攻撃を掛けていく。

「大河童様!! 退いて下さい!! お気持ちはありますが、
あの化け物はああ見えて、天部神のなれの果てです。河童達の力では……」

大河童はあおいの隣に立ち、悠然とその様子を眺めているが、あ
おいは心配であった。

「見クビツテクレルノウ、圓野組ノ三代目ヨ。」

我ラモ八百万ノ神々ノ端クレゾ。敵ウ相手ト、ソウデナイ相手ク
ライ八分カル。我ラハ直接戦イ二来タノデハナイ。見ヨ」

大河童の指さす先を見ると、水中から飛び出した河童達は攻撃し
ながら綺麗な円形に展開していく。

どうやら、攻撃は牽制に過ぎず、何か他の狙いがあるようだ。

「ふむ。これは援護が必要ですね。皆さん！！ 河童達の円を守ってください！！」

次郎坊は叫びながら、葉団扇を広げ防御の態勢を取る。座間もそれに倣って葉団扇を持って立ちふさがった。左右から二人の天狗に守られつつ、河童達は直径十mほどの円陣を作り出した。

「今ゾ！！ 水気ヲ放テ！！！」

飛び出した数百匹すべての河童たちが円形を完成させた瞬間、大河童が叫んだ。すると河童達は円の中心へ向けて、一斉に口から息を吐き出した。

いや、吐き出されたのは息だけではない。大きく息を吸い込んでから吐き出された半透明の気体のようなものは、明らかに周囲の大气と濃度が違う。屈折率の違うそれは、水蒸気と混ぜ合わされた水気の固まりであった。

吐き出された水気は地表に留まり、停滞して、まるで重さのないゼリーのように溜まり始めた。数百匹の河童から吐き出された透明な水気は床面を滑り、やがて一つにまとまって、大きな水たまりのようになっっていた。

水気は鏡のように周囲の景色を映し、まるで水そのもののように波紋を浮かべて揺らいた。

次の瞬間、波紋がゆっくりと渦を巻き始め、そこに黒い闇がわだかまり始めた。

「これって……陰界との境界面……？」

水気で作られた、直径十mの境界面が現れたのだ。つまり、これ

を通って陰界から現れるのは、水に関係のある妖物である。

『準備が出来たようですね。大河童様。感謝いたします』

エコーのかかったような声が境界面から響き渡った。この丁寧な男性の声……あおいが聞き間違えようはずがない。

「真菰……専務？」

黒い闇の渦から、まず金色の鼻面が、続けて巨大な牙の生えた口が現れた。二本の角と鬣たてがみの生えた頭部、三角形のヒレが生えた背中、紅がかった金色の鱗が生えた胴体……そして魚のような尻尾……。

真菰の正体である蛟竜じゅうりゅうが現世に顕現した。

これまで一度も全身を現したことの無いその真の姿は、長年ともに働いてきたあおいも、見るのは初めてであった。

「社長。遅くなって申し訳ありません」

体長十m以上はあろうかという巨大な竜が、空中に浮かびながら真菰と同じ声であおいに話しかけた。

「どうして……？ その姿のまま出てきたら……この地域の気が乱れるって……」

真菰はこれまで、決してその姿を完全には見せなかった。

それは、神霊にも等しいほど強大な妖力を持つ蛟竜じゅうりゅうが顕現することで、土地神や妖怪達をいたずらに警戒させ、地域の気の流れを大きく乱すことになるからだ。

そのことを、あおいは真菰から何度も聞いていた。

「ここまで大きく気が乱れてしまったのです。

今更、一体くらい神霊クラスが顕現したところで、大差はありません……それに……」

「それに？ ……何？」

ああいはその言葉に強い胸騒ぎを覚えた。後に続く言葉を聞きたくなかったが、確かめずにはいられない。

「いや、その話は後にしましょう。

私の身体もまだ完全ではありません。とにかく、すべてはヤツを片付けてからです」

そう言いながら、ひょいと持ち上げた右腕は、無惨に傷ついている。

先刻、西北新聞社の屋上でサラスヴァティと戦った時、急に境界面が喪失したことで傷ついたに違いない。

「真菰専務……」

「そんな顔をしないで下さい。これは、私の不注意から受けた傷です。

むしろ、私という部下のヘマで、伊園さんに与えなくてもいい苦痛を与えてしまったのですから、こういう時は叱りとばすのが上司ですよ？」

「……上司とか、部下とか、どうでもいいのよ。私は、誰も傷ついて欲しくなんか無いだけ……」

「しかし、この地域の人間達の営みも、小さな命も守りたい……で

しょう？

でも、この世に何の対価も支払わずに得られるものなどありません。あなたはいつも自分自身の命を掛けて戦いを挑みますが、私達も気持ちと同じなのですよ……。

そんなあなたを守る対価に、このくらいの怪我で済むならば安いものです」

真菰は、優しい目であおいを見つめながら言った。

「ごめんなさい……ありがとう」

§ 30 ドーマンセーマン

§ 30 ドーマンセーマン

「蛟竜殿^{いりゅうでん}。よくそのような状態で、現界にお戻りになりました。」

次郎坊が、真菰に丁寧に手を合わせて礼をした。蛟竜^{いりゅう}は、龍^{りゅう}に成る前の、修行段階の竜ではあるが、蛟竜^{いりゅう}になるまでに既に五百年を経過した竜族だ。

天狗の上位に位置する大天狗の次郎坊にとっても、敬意を払うべき相手なのだ。

「次郎坊殿。ドーマンセーマンの法陣を作られましたか。では、要所に配置されるのは、我々ですか？」

「さすがにお見通しですね。トープスの方々六人で、木火土金水、それぞれの頂点位置と中心に立ってください」

しかし、あおいは二人の話について行けない。

「ドーマンセーマンって……どこにそんなものがあるんですか？」

「ふむ。壊されぬよう、天狗の隠れ蓑の灰を撒いておきましたからね。あなたには全貌は見えないかも知れませんが、でも、よく目を凝らしてご覧なさい。あなた自身の座すべき場所だけは、見えるはずですよ」

「あつ！？　なんで太陽が……？」

あおいが目を凝らしてみると、数m離れた場所に、あたかもスポットライトを照らしたかのように、そこだけ日射しが差し込んで見えた。それどころか、そこには何故か柔らかそうな黄緑色の葉をした植物が一株、青紫の花を咲かせている。

「ミズアオイ……こんな場所に？」

「ほう、あなたには水葵^{みなぎ}が見えますか。ご心配なく、それは幻影です。そしてそこがあなたの位置です。」

「森君！ 稲成君！ 伊園君！ 座間君！ あなた達も用意しなさい！ 目を凝らせば、自分の居るべき位置が見えるはずです！」

真菰の声を聞いて、それぞれがあおいの周囲を見つめた。

「なるほど、あの赤い炎の鳥が見える場所が、あたしの場所ってわけね」

辰狐王の姿をした稲成葉子が、あおいの左後方に飛んだ。

「私には、ヒノキの苗木が見えるわ……七海ちゃん、あなたは？」

「泉が月の光を浴びて……そこにアユが泳いでいます」

森いぶきはあおいの正面に、七海は下半身が蛇のままあおいの右後方に立った。

「私はこの位置で良いようですね」

金色の竜の姿をした真菰は、その長い体を折りたたむようにしながら、あおいの左側に座している。

「ちょ……せ……せやけど……この状況じゃあ、手え止められまへんでえ!!」

その間、座間は魔獣の姿となった三天合形神を相手にしていた。素早い魔獣の動きをなんとか制してはいるものの、戦力が座間と後藤の二人だけになったため、相当分が悪い。

河童族も援護してくれてはいるが、水流や毛針はほとんど効いていないようだ。

「心配すんな烏天狗!!　しばらくの間くらいだったら、オレが一人で止めてやらあ!!」

後藤は体に力を込めるとさらに一回り大きくなり、後足で立ち上がった魔獣と正面から組み合った。

「お一人では無理でしょう!!　私も手伝います!!」

次郎坊が、動きの止まった魔獣に横合いから斬りつける。魔獣の傷口からは、また黒い光が漏れ、金属同士をこすり合わせたようなイヤな悲鳴が響いた。

「じゃあ……行きまっせ!!」

戦闘中に戦線を離れる後ろめたさを感じながら、座間は後ろを振り返った。

見るとあおいの右に当たる位置に、小さな風が渦を巻いて見える。小さいがつむじ風などではなく、濃い密度と力を秘めた竜巻である。

のが、離れていても分かった。

「見えた！！　そこか！！」

座間が位置に付くと、あおいの周りを囲む五人を結ぶように、光の円が現れた。さらに対角線の五人を結ぶ光の線が、五芒星を形作る。さらに、各頂点を左右に切るようにして銀色の光が格子状に広がる。

「ドーマンセーマン……これが……」

あおいは呟いた。ドーマンセーマンとは陰陽道に伝わる五芒星と九字結界の印のことだ。

「九字結界のドーマン印が邪悪な気の介入を防ぎ、五芒星のセーマン印が我々一人一人の気の特徴を増幅します！！　それぞれに気を高め、相生の気を送って下さい！！」

真菰は叫ぶと、お手本を見せるように目を閉じ、全身の気を振り絞った。すると、真菰から現れた光が、対角線上にいる七海へと伝わっていく。

「きやあっ！！」

強い光に撃たれた七海は悲鳴を上げた。しかし、すぐに立ち直り両手で印を組むと真菰から受け取った金気を自分の水気に変え、増幅して送り出す。

「来たわ！！」

いぶきに届いた水気は、いぶきの纏う樹木の鎧を光り輝かせ、透明な緑の光となって、葉子の元へ送られた。

「いくよっ!!」

葉子は緑の光を受け取ると、火気を高めてそれを燃やし尽くし、さらに強力な火気に変えて、座間へと放つ。

「うわっちちちち!!」

まともに火気を受け取った座間は一瞬炎に包まれたが、それがすぐに黒く艶やかな風の渦に変わり、座間の体に吸い込まれていった。

「専務!! 行きますよ!!」

座間の体内で増幅された土気は、また真菰の元へ還っていく。

五芒星^{ヤママン}を形作る五つの気の連鎖は、あおいを取り囲むようにして次第にその威力を増していつているようだ。

「これは……」

あおいは、自分の周囲に吹き荒れる五つの気の嵐に、為す術もなく佇んでいた。ここからどう展開したらいいのか、あおいには分からない。

しかし、数秒も経たないうちに変化は現れた。五つの気の流れは、次第にお互いに融け合い、あおいの頭上で渦を巻き始めたのだ。凄まじいエネルギーを感じるものの、あおいの周囲は九字結界印^{ドーマン}で守られているせいか、何の影響もない。

そして、頭上で一つになったエネルギーから、一筋の光が差し込み、あおいの体を照らした。

「な……何よこれ……」

光の粒子に包まれたあおいの姿は、別のものになり始めた。血で汚れた作業服は、真っ白で絹のようにふわりと柔らかい衣に変わり、赤い薄衣が重ねかけられていく。さらに額には金色の冠が生じ、体内から太陽と同じ性質の光が満ち始めた。その光が、手に持つ神弓にも満ちていくのが分かる。

「神霊憑依……社長まで？」

座間が目を丸くしてあおいを見つめた。そのあおいの姿は、五年前に山中で見た修行中の凜とした姿と重なり、輝くような美しさに見えた。

「なるほどねえ……こりゃ、惚れるわ」

いつの間にか座間の後ろに立った葉子がこっそり囁く。
すでにすべての気をあおいに吸収された五芒星印は消滅し、弓を手にしたあおい一人が魔獣と化した三天合形神の前に立つだけだ。

『師匠、後藤さん、もう大丈夫です。退いて下さい』

天上から響くように霞がかったあおいの声を聞き、魔獣姿の三天合形神の足を留めていた次郎坊と後藤は、さっと飛び退いた。

「ききゅけけけっ！！」

後藤の後を追おうとする鼻面を、あおいの弓が引っぱたいた為、不気味な金切り声を上げて、三天合形神がうずくまる。軽い一撃に

見えたが、魔獣の鼻面は醜くつぶれ、そこから膿のような黄色い液体が垂れている。

傷跡から黒い光が漏れないのは、依り代本体を攻撃できたからなのだろうか。魔獣の目に、初めて怯えの色が浮かんだ。しかし、すぐに怒りの表情をあらわにして、たった今自分を傷つけた相手へ、攻撃の矛先を向けた。

鋭い爪を振りかざして後足で立ち上がり、あおいに覆い被さるようにして襲いかかる。

『どこを狙っているの？』

あおいの声が、魔獣の背後から響いた。エコーがかかったような、優しい声である。

目標を見失って地面を掘っていた魔獣が振り向くと、あおいは魔獣から十mほど離れたロックガーデンの岩……三合形神になる前のガネーシャが座していた岩の上に片膝を立てて座っている。

『歪んだ欲望で召還された神々よ……もう、天へお還りなさい』

そう言って立ち上がるとあおいは、輝く弓に、いつの間にか金色になった矢を一本つがえて無造作に放った。

「じ」……が……」

額に金色の矢が突き立ち、魔獣はよろめいた。そして、そのまま屋上の端までふらふらと歩き、踏みとどまろうとしてこちらを向くと、その目の前に座間が立ちはだかった。

「待ちいな。天に還ってええのは神さんだけや。」

座間は腰をすつと落とすと、鞘に収めたままの降魔の剣に手を添え、居合いの要領で抜き放ちざまに三回振るった。かちん。と腰の辺りで音がした時には、剣は再び鞘に収まっている。

「ぎひひひひひ！！」

不快な声を絞り出すようにして天を仰いだ三天合形神から、巨大な存在が抜けていくのが感じられ、途端に魔獣の体がしばみ始めた。座間の剣が、三柱の神を依り代から切り離れたのだ。

何度攻撃を加えても倒れることの無かった魔獣は、風船から空気が抜けるようにどんどん萎んでいき、後に残ったものは、色も形もめちゃくちゃに握りつぶした新聞紙にそっくりな、醜く皺の寄った、上あごの長い一体の獣であった。

§ 3 1 親子

§ 3 1 親子

獺が元に戻ると同時に、あおいも女神の姿から作業服姿に戻っていった。たんたんころりんの気を受けて金色だった座間も普通の烏天狗姿に、葉子も辰狐王の姿からいつもの妖狐姿に戻り、いぶきはエネルギーを使い果たして、枯れ木のようになってしまった樹木の鎧を脱ぎ捨てた。

いつもの姿と違うのは、金色の竜の姿の真菰と下半身が蛇の七海だけとなった。それでも、はち切れるほど満ちていた気は静まり、表情も穏やかになっている。

「寝たふりすんなや、獺。いや、金石」

座間はしゃがんで、のぞき込むようにして獺に声を掛けた。ぐつたりとした獣姿の金石は、おどおどと目を開いた。怯えにの浮かんだ目は焦点が合わず、口元からよだれを垂らしている。

「へ……へへ…何でだ……何でお前ら諦めない？ 相手は……神様なんだぞ？」

「違うわ。相手は、最初から最後まであんた達。間違った手段で目的を達成しようとしたあんた達よ」

あおいが腕を組み、仁王立ちで獺を睨みつけながら言う。

「圓野組があんた達を切り捨てたのがきっかけなのは、悪かったわ。」

私からも謝っておく。だけど、あんた達がやったことは、絶対に許さない」

「そんなヤツに謝る必要など無い」

その時、屋上の入り口から重々しい声が響き、二人の男性が姿を現した。

「お父さん……前田常務……」

「くだらんしがらみが理由で、無能な社員をクビに出来ないのであれば、企業の存続などあり得んだろう。私は、経営者として当たり前判断をしたただけだ」

圓野明徳は、しょぼくれた猿とそれに対峙しているあおいに、冷徹な目を向けて言い放った。

「お父さん！！　あなたがそんな傲慢な態度だから、金石さんも小山さんも……他の元社員もこんな手段に出たんじゃない！！　企業はそれに関わる者を幸せにするのが存在意義でしょう？　いい加減にしてよ！！」

「相変わらず甘いな、あおい！！　前にも言ったが、企業は存続してナンボだ。敗者は何も言うことが出来んだ。私が何か間違ったことでも言っているか！？」

「待った！！」

突然、鋭い声があおいと明徳を制した。

「待つて……ください。お二人とも」

もう一度、丁寧言い直した声の主は前田常務であった。その横で後藤も、鬼の姿のまま腕を組み、ため息をついている。

「そのお嬢のおっしやる、他の元社員達……どうしてこの場に……三天合形神の援護に現れなかったとお思いですか？」

「そ……それは……曼荼羅の位置を守るためなんじゃないの？」

「曼荼羅の主神がいなくなつて、自分の位置だけ守っても仕方ないでしょう？　つまり……」

「前田！！　黙つていろと言つたぞ！！」

圓野明徳が前田の言葉を遮つて、怒りの声を上げる。

その時になつて、初めてあおいは父の姿が珍しく僧形であることに気づいた。しかも、衣はところどころ破れ、すり切れたり焦げたりしているように見える。

「お父さんその格好、まさか……父さんと前田常務が？」

「ふん。不甲斐ないお前らだけでは、うまくカタをつけられるかどうか不安だったのだな。案の定、全員がかりで金石と小山を相手にするだけで手一杯だったようだな」

その言葉を聞いて、またあおいの顔が怒りで紅潮する。

「社長……しばらく黙つていてもらえませんか？」

「む……ぐ………」

前田はこれ以上しゃべらせないように、明德を手で制した。明德は不満そうに口をへの字に結んで、向こうを向く。

「お嬢。社長は自分の不始末であるからと、最初から天部神すべてを相手にして差し違えるつもりだったのです。」

でも、お嬢達が予想より早くここに来て戦いを始めてしまったので、せめて他のすべての神霊憑依した連中がここに来ないようにと、私と後藤を連れて倒しに向かったのですよ」

「……お父さん、本当なの？」

あおいは、目を丸くして父の背中へ目を向けた。明德は眉根を寄せて、ばつが悪そうに向こうを向いたまま黙っている。

「しかも、最も強力な三天合形神と戦うことになるあなたを心配して、自分が不利になることを分かっていながら、後藤副社長だけをこちらへ寄越したのです。」

それだけではありません。ほら、出てきなさい」

前田に促されて、後ろからぞろぞろと屋上に現れたのは、あおいにとつても見覚えのある元社員達であった。ほとんどが人間の姿をしているが、角や舌、体毛など、部分的に本性を現してる者もいる。あのヤカンヅルの矢間も、恥ずかしそうに後ろの方に隠れて立っていた。

「社長は一人も殺しておられません。その機会は何度もありました
が、ね」

その時、元社員の一人が口を開いた。

「お嬢……我々が間違っていたんです。

社長は僕たちが妖怪として生きていく場所づくりのために、儲からない古民家再生事業や、失われた鎮守の森の創成までやってくださったのに……僕らは人間として生きていくことにしがみついてしまつて……」

「そうです。ですから、どうか社長を責めないでください」

元社員であつた妖怪達はひれ伏すように座り込み、口々に明德を擁護した。

「そんな……そんなこと、今更言われても……」

ああいは、まだ向こうを向いたままの父親に、もう一度目を向けた。

なるほど、地元の小さな業者もやらないような工事を請け負っていたという話も、古参の社員をクビにしたという理由も、そういう事であれば納得できる。

「何をふざけたことを言つておる。私は企業存続と発展のためにベストと思われる方法の一つずつ選択しただけだ。貴様等にあれこれ言われる筋合いはない!!」

向こうを向いたままの明德は耳まで真っ赤である。ああいは、苦笑するしかなかった。実の娘から見ても、呆れた不器用さである。

「彼等の言っているのは、本当よ。

眠らされていたときに、その獺のものらしい記憶を見たのよ。

明徳社長は、妖怪は妖怪らしく、あるべき姿に戻るべきだと、そう考えておられただけ。

それに、その人達を唆していた人が他にいるわ。普通の人間っぽかったけど……私は見たことのない人よ。あなた達、いったいあれは誰なの？」

いぶきが進み出て言う。

「はい……たしかにそういう人がいたのですが……私達のよく知る人間であつたはずなのに……何故か全員、記憶が判然としないのです」

先ほどから代表でしゃべっている青年風の男が、すまなそうに答えた。

言われてみれば、いぶきの記憶もその部分だけ雲がかかったようで、顔も年格好もよく思い出せない。

「くけ。けけけけ。夢を食えるって事は、記憶も食えるってことさ」

追い詰められ、下を向いて小さくなっていたはずの獏が、不気味な笑い声を上げた。

「今日のところは、やられちまったがな。あの人が付いていてくれる限り、何度でもやり直しはきくんだよ！！」ご苦労だったな！！」

獏はそう言い捨てると、突然ふいつと虚空に溶けた。

「しまった！！観念空間か！！」

次郎坊が悔しそうに叫んだ。

どうやら獏は隙を狙っていたらしく、あっさりとその場から逃げ出してしまったのだ。

観念空間を認識できる妖怪は、この場にはいない。ふいに襲われれば、弱った獏といえども強敵である。全員が戦闘態勢をとって身構えたが、しばらく経っても一向に姿を現さない。

「ふう……どうやら、逃げたみたいやな」

座間が、用心のために抜きはなっていた降魔の剣を鞘に収め、ため息をついた。

その時、白粉婆の声が響いた。

「妖狐殿！！ 犬神殿の容態が！！」

葉子が駆けつけると、犬神の体はもう末期の痙攣を始めていた。見開いた目はすでに何も映してはいないようだ。

「……………最期の別れじゃ。せめて看取ってやれい」

白粉婆がしんみりとした調子で葉子に言う。しかし、葉子は大きく頭を振って否定した。

「看取る？ 冗談じゃないよ。あたしはこの人に、まだ何もしてあげてないんだからね。今こそ、あたしの生涯を掛けた宝物を使う時さ」

「宝物？」

あおいが目を丸くして聞く。

「……あたしのお腹にはね。子供がいるんだ」

「ええっ！？ まさか……豆田さんの？！」

「あはは、違う違う。ずっと前に愛した人の子さ。そう……ずっと前に死んだ……あたしが生涯で唯一、本気で愛した男性ひとの、ね。まだ、あたしが妖狐になる前に……」

「でも……それじゃあどうして、まだお腹の中に？」

あおいの疑問もつともだ。そんなに昔の胎児がまだにお腹の中にいるなど、普通では考えられることではない。

「あたしが妖力で成長を止めているのさ。」

子宮内胎児死亡……ってヤツでね……発育の途中で心臓が止まっちゃったんだ。

だけど、出産はしなくちゃいけない……それが辛くてさ。泣いて過ごしてる間に、あの人まで事故で逝っちまった……」

言いながら思い出したのか、葉子の目に涙が溢れる。初めて知る葉子の過去に、周りで見守るあおい達は声も出ない。

「そんな時に、圓野の屋敷に住み着いていた、五尾の妖狐の魂魄に出会って言われたんだよ。死んだ胎児には魂が無い。肉体に憑依させてくれれば、魂を呼び戻す方法を教えてやるってね……」

「それで……自分から妖怪になったの？」

声を振り絞るようにしてあおいが言う。

「笑える話さ。胎児を生き返らせるためには、他の男に愛され、その男の魂を胎児に植え付けるしかないんだって。そんな事しても、生まれた子供は別の人間だ。しかも、あたしの勝手に、あたしを愛してくれた誰かを殺すことになる……」

「じゃあ……ずっと一人だったのは……」

「そんな真似できないって言ったら、妖狐は怒ったねえ……しばらくは人格の奪い合いさ、長いこと神経内科に入院したよ……で、あたしが勝った」

「葉子……」

つぶやくいぶきの目にも涙が浮かんでいた。

葉子はさらりと言つてのけているが、身の内に巣くった邪悪な妖狐とたった一人で戦うことが、どれほどの苦しみだったか……もともとは普通の人間として生まれ、わざと憑依させた山精と戦つて山神としての修行を積む、代々そういう一族に生まれたいぶきには、葉子のつらさが痛いほど分かった。

それでもいぶきには、同じ境遇にあつて信頼できる血族がいた。だから、精神を蝕まれる苦痛にも耐えることが出来たのだ。

しかし、おそらく葉子の場合は、家族も知り合いも、誰もが彼女の心が病んだとは思わなかっただろう。その苦しみと孤独は、想像もつかない。

「だから、あたしの連れ合いは人間じゃないとダメだったのさ。

あたしを受け入れて、今生を人として共に生き、それをまっとうしたら、自分の意志であたしの子供としてもう一度生まれ変わってくれる。そういう人を探していたんだ……まさか、妖怪があたしな

んかのために命を懸けてくれるなんて思いもしなかったから……ね」

「……豆田君の魂を稲成さんの胎内に移すのかい？」

一つ目入道の姿のままの入堂が、葉子に聞く。

「入堂さん……部下を奪うような事になってすみませんね。でも、あたしのために命を捨ててくれたこの人を、このまま死なせるわけにはいかないから……」

言いながら、葉子は犬神の頭部をしっかりと抱きしめ、自分の腹に押し当てた。

苦しそくに痙攣していた犬神はゆっくりと目を閉じ、眠るように安らかに息を引き取った。するとその体から小さな光の玉が生まれ、ゆっくりと葉子の腹部に吸い込まれていく。

魂の抜けた犬神の体は、大気に溶けていくかのように、小さな粒子となって周囲に拡散していった。後に残ったのは、大人の手の平ほどの大きさの、小さなタヌキの屍体であった。その体は戦闘の激しさを示すように血にまみれ、無数の傷が刻まれている。

「豆田さん……あんた、こんな小さい体で……」

そう言う座間の声も涙声だ。

「馬鹿だね。泣くんじやないよ。この人には、すぐまた会えるさ。あたしが妖力でお腹の子の成長を止めたのが五ヶ月目だったからね。あとほんの3ヶ月……すぐさ」

「でも、豆田さんがっかりしないかな。葉子さんと結婚したがつっていたのに、親子じゃ結婚できないし……」

あおいが場を和ませようとしたのか無理に明るく言うが、周囲の誰もがしんとしたまま答えない。まずいことを口にしたときづいたあおいは、耳まで真っ赤にして俯いた。

すると葉子が自分のお腹をさすりながら、くすくすと笑って答えた。

「あんたは優しい娘だねえ。

大丈夫。夫婦は別れることもあるけれど、親子の絆ってもんは永遠に切れないもんなんだよ？ この人も……きっと分かってくれるさ」

「妖狐殿。その豆狸の遺骸は、私に弔わせていただけませんか？」

次郎坊が、豆田の依り代だった小さなタヌキの屍体を指して言った。

「彼は、もともと四国の出だと聞きます。四国は妖狸の天下ですから妖狐殿の胎内で生まれ変わるとしたら、二度と故郷へ戻ることは出来ないでしょう。せめて、その遺骸だけでも、四国の土に還して差し上げたいと思うのです」

「ありがとうございます、次郎坊様。あたしは狐だから四国には行けないし、助かりますよ」

次郎坊は小さな豆狸の遺骸を受け取ると、衣が血で汚れるのも構わずに、無造作に、しかし優しく懷にしまった。

§ 3 2 昇竜

§ 3 2 昇竜

「さて、そろそろ私は行かなくては いけません……」

その様子を見つめていた真菰が、そつと言った。

「な…… になよ。真菰専務…… まるでこれでお別れみたいな言い方して……」

そう言いながらあおいは、先ほどのイヤな予感を思い出していた。真菰が言った『それに……』という言葉。その後についていた何を続けたかったのか……。

「社長。申し訳ありません。じつは、陰界からこちらへ戻るために必要な霊力は、龍王様からお借りしたのです。大河童様をお呼びできたのも龍王様のおかげ……」

「龍王様って…… まさか東海龍王？」

「ええ。そのための交換条件が、私が修行を終えて天へ登ることだったのです」

「天…… って…… 蛟竜じゅうりゅうはたしか、千年間地上で修行しなくちゃいけないでしょう？」

「そうです。でも、実はその千年はもう…… 五年前に終わっているのですよ」

「五年前？　って……それじゃあまさか……」

「はい。いまわの際の圓野正平殿に頼まれていたのですよ。あなたの仕事を手伝ってやって欲しい、とね。」

私の住処である真菰川は、十五年前に排水管工事の計画が持ち上がりましてね……正平殿が守って下さらなかったら、今頃は暗渠になっていたはずなのですよ。もしそうになっていたら、私は千年目を前にして、はぐれ竜になってエネルギーを使い果たし、消滅していたでしょう……」

「じゃあ、真菰専務がトープスにいて下さったのも、お爺ちゃんのおかげだったのね……」

ああいは、少し寂しそうに呟いた。自分は結構頑張っているつもりなのに、まるで釈迦の掌のように、どこへ行っても何をしても、正平の足跡が見える。自分はまだ何者でもないのだと、いつも思い知らされるような気がした。

「いいえ、勘違いしないで下さい。私があなたの傍に五年も居続けたのは、正平殿に恩があったから、というだけではありません。」

いつも小さな命を守ろうと戦っている、あなたの力になりたい。私が純粹にそう思ったからあなたの側にいたのですよ。」

「真菰専務……ありがとう」

「今度のことも……あなたの力になるためだから、東海龍王にお力をお借りしたのです。たとえそれが、あなたとの別れを意味するとしても……」

「でも……真菰専務を失って、これから私達はどうしたらいいの……？」

「どうもこうもありません。ほら、私などいなくても……あなたには、こんなにはたくさん仲間がいるじゃありませんか」

真菰に促されて振り向くと、あおいの後ろには、座間、葉子、いぶき、七海、次郎坊、父・明德と、前田、後藤……そして、入堂達、市役所のメンバー、さらに無数の小玉鼠達とその頭領、数百匹の河童達を従えた大河童が、あおいを見つめていた。

「娘を……今まで支えてくれて、本当にありがとうございました。まさか、昇天の年数を天界に誤魔化してまで娘を守っていてくださったとは知らず、色々と失礼いたしました」

圓野明德が進み出て、深々と真菰に頭を下げた。

「いいえ、私の方こそ感謝します。あなたが支援し続けてくれたからこそ、トープスはここまでやってこられたのです。社長……明德殿も、もう親子で意地を張るのはおやめくださいますね？」

「あ……うん……」

あおいは曖昧に返事をしながら、口をへんの字に曲げて横目で明德を見た。すると、同じようにこちらを横目で見ていた明德と目が合い、お互いにあわてて目を逸らす。

その様子を見て、蛟竜じょうりゅうの姿の真菰は体を揺すった。どうやら笑っているらしい。

「ま、いいでしょう。心配はせずに行くことにいたします。……そ

ろそろ迎えが来たようですからね」

真菰の頭上で、ごろごろと雷鳴が轟き始め、稲光が雲の形を浮かび上がらせている。

「なに、今生の別れというわけではありません。また、お会いすることも出来るでしょう。私が地上に顕現できる程度に力が付けば……それまでしばらくの間、さらばです」

そう言つと、真菰の体はゆつくりと宙に浮かび、天へと上り始めた。光の粒子が体の周囲を飛び、次第に影が薄くなつていく。

「え！？ もう……行くの？」

「申し訳ありません。名残は惜しいですが、こうして現界に竜形を維持しているのも、龍王様のお力なのです。そうそう、近いうちに私の」

真菰がそう言い掛けた途端。

蒼い稲妻が閃いたかと思うと、一瞬で真菰の姿はかき消すように無くなつていた。龍王の力も限界だったのかも知れない。

見上げると、遙か上空の雲に一筋の蒼い光が吸い込まれていくのが見えた。

「……………ん。じゃあ、みんな、帰ろっか！」

しばらくの間、真菰の消えた辺りをじつと見つめていたあおいは、くるつと振り向くと、さばさばした様子で皆に告げた。

真菰が去つた後には、たれ込めていた黒雲は跡形もなく消え去り、

群青色の空が顔を見せた。

真夏の朝は早い。時刻はまだ真夜中と言って良いはずだが、すでに夜は東の彼方から明け始めているのだ。

「そういえば、大河童様……皆さん、どうして私の家に？ それに、どうして来て下さったんです？」

ああい思い出したように聞く。

長年飼育していたイモリ達が、実は河童の依り代であつたことも驚きだが、ピンチにいきなり駆けつけてくれた理由も不明だ。

「ナアニ、ココへ来タノハ、圓野組ノ二代目……其方ノ父君カラ依
頼サレタカラジャ。蛟竜「ウリム」ドノヲ陰界カラ迎エル方法が必要ジャ、ト
ナ」

「お父さん！？ 私の飼っているイモリ達が、河童の依り代だつて知つてたの！？」

「ふ……ふん！ 毎日世話しておつて気づかんお前が鈍いのだ」

明德は憎まれ口をたたきながら、また耳まで真っ赤にしてそっぽを向いている。

「依り代ニサセテモラッタノハ、山沿イノ湧キ水ガ、ドンドン少ナクナツテキタセイジャ。」

眷属ガ、住メナクナッタノハ、アノ池ダケデハナイ。アノ場所ニ、コダワラス、我々ノ住メル良イ場所ヲ創ツテ欲シイ……。

他二モ、ツモル話モアルガ……今夜ハ、モウ帰ラセテモラオウカ」

大河童はそう言うと、屋上池の中に飛び込んでイモリの姿に戻った。

他の河童達も同様にイモリの姿に戻り、また小玉鼠たちに乗ってあおいの家へと帰っていった。

入堂と白井、野槌の三人は、事後処理のために市役所へ行くという。

圓野組の面々……明德と前田、後藤は、そのまま帰らずに、元社員達と共に現場の後片付けと修繕計画をすることになった。

「自分達のでかした事の後始末をしなくちゃなんのに、疲れたとか休むとか言っておれるか!!」

明德は苦々しげな口調で吐き捨てたが、前田も後藤も知らん顔で元社員達に指示を飛ばしている。どうやら、少なくともこの屋上の修繕工事に関しては、臨時にせよ元社員達を雇用するつもりのようなのだ。

「座間君、ちよつと来なさい」

後片付けの喧噪の中で、次郎坊が座間を呼び、二人で何か話し始めた。あおいも他の皆もその事に気づいてはいたが、仮にも親子である二人の会話を邪魔しようとする者はいなかった。

「太郎坊が逝くのを、あなたはちゃんと見届けましたか？」

「やっぱり、次郎坊様もご存じやったんですか？ ヒメコの……いや、太郎坊様のご家族のこと」

「ええ。こんな事件が起きなければ、私が太郎坊とその孫娘に引導を渡すはずでした」

「いまさらかも知れまへんけど……他に方法は無かったんですやらか？」

「人の生死に関わってしまった以上、太郎坊は遅かれ早かれ、自身にケリをつけていたでしょう。あなたは、何も気に病む必要はありませんよ。むしろ……あなたのおかげで……」

「そんなふうに……割り切れるもんやないです」

座間は次郎坊の言葉を遮るように呟くと、少しうつむき加減のまま横を向いた。次郎坊は少し困ったような顔をしたが、ふと、思い出したように口を開いた。

「……時に座間君？ その孫娘……姫子さんといましたか。その女性の遺体は、きちんと埋葬してきてくれましたか？」

「あ……いや。急いでいたんで、庵の中にそのままですわ」

「む。それはいけませんね。あそこは滅多に人は来ませんが、絶対に入り込めないわけではないですし、野犬やクマが遺体を食い散らかしても困ります。明日にでも行って、埋葬してきてもらえませんか？」

「あ、はい。オレが行かへんと誰も分からへんでしょうし……今すぐでも」

そう言って、黒い翼を広げて飛び立とうとするのを、次郎坊が制止した。

「待ちなさい。あなたも傷つき、疲れているでしょう？ 慌てなくとも、明日で構いません。それと、一人では大変でしょう。圓野君を手伝いに連れて行きなさい」

「いやいや。屍体の埋葬を上司を手伝わせるなんて、そんなのマズイですわ」

「圓野君は、あなたの上司である前に私の弟子です。私の兄弟である太郎坊のお孫さんの埋葬を手伝うのもおかしくはありませんよ。私が行くべきなのでしょうが、どうしても行けないのでその代理と申っていました構いません。

良いですね？ 二人で行くのですよ？」

一通り話し終えると、次郎坊は豆狸を埋葬するためと称して、一足先にさらに青みを増し始めた夜空へと飛び立って行った。事の顛末の報告も兼ねて、四国妖狸の雄・刑部狸きょうぶだぬきのところへ行くとのことであつた。

ざつと後片付けを終えたトープスの面々が駐車場へ戻ると、ケルピー[〃]ビッグホーンが焦れた様子でクラクションを鳴らした。

そしてあおい達が乗り込むなり、色々な質問を矢継ぎ早に投げってくる。最後の戦いに参加できなかったのがよほど残念であつたらしい。

くたびれ果てたあおい達にとっては、経過説明するのも一仕事だったが、ケルピーもまた大きな役割を果たしてくれた仲間であるから、無視するわけにはいかない。

ぐつたりと後部座席に沈み込んだ社員達に代わって、渋々ながらあおいが相手をした。

「そうかそうか。それにしても良かったのう七海殿。わしはもう、

お主に会えぬかと思うたぞ」

速度に関係なく、エンジン音が不規則に揺れる。どうやらケルピ
ーが笑っているらしい。

「……ごめんなさい」

後部座席の真ん中から、七海の小さな声がする。

「何を謝る。悪いのはそのヤマコ？　とかいう連中だろう。お主は
何も……」

「違う！　違うんです！！」

突然、七海が大きな声を上げて否定した。両手で顔を覆っている。

「あれは……あれが私の本性です。今の姿の方が嘘なんです……そ
れに……社長を殺そうとしたことも……」

「何言ってるの。そんなこともう……」

「ダメです！！　やっぱり私、言わなくちゃいけない。

あの、小山^{やまこ}ついていう？　に言われたんです。私の座間さんへの思い
は、私のものじゃない………本当は社長のものだったんだって！
！」

「えーと……七海ちゃん、まだアイツらの催眠が解けてない？」

あおいは助手席から後ろを振り向くと、泣き出しそうな七海をき
よんとした目で見つめて目をしばたかせた。

「うっん……社長。たぶんそれ、本当だと思う。」

七海の隣でその肩を抱きながら、いぶきがしんみりした口調で言った。

「初めて出会った時……七海ちゃん、いきなり座間君に一目惚れしちゃったみたいだったから、変だとは思ったのよね……それで、山姫の目で見てもたら……七海ちゃんのものじゃない関係性がくっついていたのよ。悪いものでも無さそうだったし、その時はあまり気にもしなかったんだけど……」

「だって、おかしいじゃない？ 私はそれまで七海ちゃんに会ったこともなかったし、座間君のことだって……どうして私が知らないうちに、私の思いが七海ちゃんのものになったりするの？ そんなの……」

「ありえない」と言おうとしたが、あおいの脳裏に何かが引つかかった。自分は、何かを忘れている。何か、とても大事な記憶を無くしている。それは……

「座間……君……？　そういえば座間君って……丁大学にいなかった？」

あおいの言葉を聞いて、運転席の座間が露骨にしまった、という顔をする。

「社長……まさか、思い出したのはたんですか？」

「そうよ……あの、ハシボソガラスの子……箕島先生に飼いを聞

いてくれたのって、座間君よ。私、なんで今まで忘れて……」

「社長……もう、ええんです。そんなこと、別に思い出さんでも……」

座間が言おうとすると、それを遮るようにしていぶきが声を上げた。

「座間君！！ あなた、七海ちゃんを三天合形神から助け出すとき、関係性を斬り離しちゃったんじゃない？」

「へ？ オレは伊園さんが伊園さんであり、磯女であるっていう本質を残して……」

「社長！！ ちょっと顔、見せて！！」

いぶきが後部座席から身を乗り出して、あおいの顔をのぞき込んだ。

「あっちゃー……七海ちゃんにくつついていた関係性……社長に戻ってます」

「え？ え？ え？」

あおいはそう言われても、何が何だか分からない。泣き出しそうだった七海も、泣くことも忘れてきよんとしている。

「OK。OK。あたしが話を整理するわね」

それまで、黙って面白そうに会話を見ていた葉子が話し始めた。

「社長。あなたは忘れていたんだろうけど、学生時代に座間君と会ったワケね？ で、その時の座間君との関係性を、？に奪^{やまし}われていた、と」

「うゝ……どうやら、そうらしいわ」

「座間君、あなたはそれを知っていて、隠していた。OK？」

「うゝうゝ……すんまへん。社長……」

「七海ちゃん、あなたは一種の被害者よ。この無頓着で脳天気な二人の関係性を、？にく^{やまし}つつけられちゃって、それで座間君を好きになっちゃった、というわけ」

「……………はい。だから、私の思いは本物じゃ……………」

「ふふふ、あんたもバツカね！」

恋のきっかけなんてどうでもいいの。ぶっちゃけて言えば、恋愛なんて勘違いの集積なんだから。それとも何？ 社長に関係性とかが戻^{かえ}っちゃった今はもう、座間君のこと何とも思っていないってわけ？」

「そそ……そんなこと……ありません」

七海は真っ赤になって俯いた。そして、ちらつと座間の顔を見て、さらに赤くした顔を両手で覆う。

「七海ちゃん……稲成さんの言う通り、私の関係性なんて、きつとただのきっかけに過ぎないわ。だから本物も二セモノもない。あな

たの思いはあなたのものよ。

私は、失っていた記憶が戻って嬉しいけど……座間君のことが好きかどうかは、まだ私には分からない。でもハッキリ言えるのは、七海ちゃん。私にあなたが必要なのよ。」

あおいは七海に、素直に自分の気持ちを伝えた。

「社長……ありがとうございます……でも、私、このまま会社に置いていただいていいんでしょうか？ 社長のお父様が仰ったように、妖怪は妖怪の本分を全うしなくちゃいけないんじゃない……」

「それって伊園さんが、また、たくさん女の怨念を溜め込んで、海に来た男を殺し続けるって事？ 冗談はやめてよ。」

「……伊園さん」

座間が前を向いたまま、話しかけた。

「オレ、伊園さんを三天合形神から切り離すとき、女達の怨念も見えたんや。それも、伊園さんから切り離そうと思ったら、切り離せたんやと思う」

「ええっ？ 何やってんのよ座間君。切り離してあげれば良かったんじゃない……」

それを聞いたあおいが、驚いて座間を見つめた。

「いや。せやけど、もともと女達の怨念の集まった磯女が、伊園さんやったはずやから……せやから、怨念の女達もひつくるめて、伊園さんそのものなんやないかと……オレは思うたんですわ。」

聞いていた七海は、はっとしたように口に手を当てた。今度こそ、大きな目から涙がぼろぼろとこぼれている。

「座間さん……私、あなたを好きになって良かった……」

「え？　なんで……」

「私、私の中の女達の怨念を、ずっと疎ましく思っていました。それさえ無ければ、明るい、普通の女の子になれるんじゃないかって思っていた。

でも違っただんです。私……間違っていました。

私は磯女をやめるんじゃなく、磯女として生きるのでもなく、一人の私として生きて、女達の怨念と一緒に幸せをつかむことを考えるべきだったんです。」

すると、それを聞いていた葉子が、くすくすと笑った。

「バツカねー。七海ちゃん。

幸せをつかむってあなた、私達と出会って今まで、ずっと不幸だったの？」

それを聞いた七海は、涙で濡れた顔を上げ、くしゃくしゃに笑いながらかぶりを振って、隣に座る葉子に抱きついた。

「いいえ！！　私、これまでも、今も、とっても幸せです」

§ 3 3 志波

§ 3 3 志波

あおい達が帰りの途についていた頃。

獺……金石は、市内のとある料亭の前に姿を現した。深夜をとうに回っているというのに、その店の二階の座敷には明かりが灯り、楽しげな男女の声が聞こえてくる。

金石は、ボロボロの作業服を来た人間の姿に戻り、よろよろと料亭の階段を上って障子戸を引き開けた。

「おやおやあ？ これはこれは金石君じゃないですか。

どうしたんですその格好？ そろそろ三天合形神の別尊曼荼羅が完成した頃かと思っていたのに」

とぼけた顔で上座に座り、OL風の女性を三人ほどはべらせていたのは、圓野組の第三営業課長の志波であつた。下座の方には、スーツをラフに着こなした男達が数名控えている。金石もよく知る第三営業課の課員達だ。

「し……志波さん申し訳ない。圓野明徳と、お嬢に邪魔されました」

「何言ってるんですか、そんなの想定内でしょう？」

私が教えて差し上げた、ガネーシャ、ダーキニー、サラスヴァテイの石塔と依り代の作り方で無敵の天部神が顕現すれば、その辺の妖怪や人間はおろか、土地神クラスでも敵じゃないはずですよ？」

「そ……それが……強力な大天狗やら、鬼やら、犬神やら……果ては河童が竜族まで引っ張って来やがって……」

「ふうむ。どうもご苦労なさったようですねえ……春場^{はるば}くん、金石^{かねいし}君^{クン}にお酒をついで差し上げて」

「はい。課長」

につこりと微笑んで志波の側から立ち上がったのは、大人の雰囲気^{きせき}を身にまとった、目の大きな美しい女性だ。年の頃は二十代後半くらいというところか。

白い酒徳利から優雅な仕草で、へたり込んでいる金石に日本酒をつぐ。

「あ……ああ……すいません」

酒をつがれた金石は、恐縮した様子でぐいと一気に酒杯を煽^{はた}った。

「さ、もう一杯どうぞ」

春場は、さらに酒を勧めた。

「ところで金石君、せっかく君自身が依り代になって降臨^{きやうりん}させた、ガネーシャはどうしたんです？　今は見えないようですが」

そう言いながら、酒を口に持っていく眼鏡の奥で、志波の目が妖しく光った。

「い……いや、あの、その、烏天狗のヤツが、剣で切り離しちまうて……」

その途端、座の全員がざわつとどよめいた。

「ガネーシャ殿を依り代から切り離したと？」

「信じられせんわ」

「烏天狗如きが？」

「いや、さすがに迦楼羅ガルーダの本地と言つべきかもな」

金石の記憶では、たしか、第三営業課には妖怪は一匹もいなかったはずなのに、ざわざわとさざめきながら彼等が口にする言葉は、とてもただの人間のものとは思えず、金石は目を丸くした。

「あ……あんた達……たしかに、人間だよな？」

「ん？ ……そんなこと一度も言つた覚えはないですが」

志波の言葉を聞いて、金石の顔に恐怖の色が浮かんた。

自分は妖怪であるから、人間である志波ごとき、利用するだけ利用して出し抜けると思つていたのだ。

それがどうやら人間でないらしいばかりか、その正体の片鱗も見えないのだ。しかも、どうやら……人間でないのは、志波一人だけではない様子だ。

「あらあら、金石さんたら何だか怯えちゃって。可愛いわねえ」

春場は寄り添うように密着して金石の横に座ると、豊かな胸に金石の顔を押しつけた。

「う……うわ」

絶世の美女と言っている春場の胸に顔を埋めながら、しかし金石の不安は頂点に達していた。強引に金石の頭を引き寄せたこの女の腕力、とても人間の力とは思えない。

「あら、ずるいわ春場ちゃん。あたしにもやらせてよ」

志波の側から、もう一人の美女が立ち上がった。

「おい。狩衣君まで金石君のところへ行っちゃうの？ これじゃあ、僕が寂しいじゃないかあ」

志波が子供のように口を尖らせて、美女達を呼ぶ。

「大丈夫ですわ志波様。すぐ、終わります」

「志波……？ しば……って、ま、まさか！？」

狩衣が課長、とは呼ばずに志波様と呼んだ声の響きから、金石はあることに気づいて総毛立った。「しば」の「ば」ではなく、「し」にアクセントを置いた発音……たしか、ヒンドウの主神の石柱の名が……

「あんた……シ……シヴァ……ひ……ひいっ！……！」

悲鳴を上げる金石の姿が、春場の胸元からふいつと消える。観念空間へ逃げ込んだのだ。

「あらっ？ 逃げちゃった」

「もおう！！　だから、あたしにやらせてって言ったのに！！」

二人の美女がきよろきよろと辺りを探す。相変わらず艶やかな仕草だが、いつの間にか二人とも額にもう一つの目が開き、その瞳孔が金色に輝いている。

「いないわあ！？　なにやってんのよ。奴等に知られたらどうすんのよ」

狩衣が春場を金色の瞳孔で睨みつけた。凄まじい怒りの形相が浮かび、六本の腕がスーツを破って伸びた。さらに、その下からのぞく抜けるように白い肌は、青黒く染まっていくな。

「困ったお嬢さん達だなあ……羽沼君、はぬまちょっと捕まえてきてよ」

ニヤニヤ笑いを崩さないまま、志波が下座に座る男達の中の一人を指名する。

「はっ！　かしこまりました」

間髪入れずに返事をして立ち上がったのは、短い髪を金髪に染めた若い男だった。整った顔立ちだが、人間離れた鋭い眼光は、まるで獣のそれである。

志波の前にすっと歩み出て、片膝を付いて丁寧に一礼すると、立ち上がりながら、やはりふいつと虚空に消えた。

「た……助けて！！　助けてくれッ！！」

真っ青な顔をした金石が、再び何もない空間から姿を現したのは、ほんの数秒後だった。

服装こそ変わっていないものの、消える前は完全な人間体だったのに、今は顔や手足に焦げ茶色の剛毛を生やした半獣の姿になっている。そして、その首根っこをひつつかんでいるのは、金色の体毛をした、巨大な猿であった。顔には隈取りのような模様が浮かび、杖のように長い棒を携えている。

見た目はまったく変わってしまっているが、その物腰と鋭い獣のようなまなざしから判断して、それが、たった今虚空に姿を消した、羽沼であることは疑いようがなかった。

「もおう……金石さんたら、逃げちゃダメでしょお？」

怯えてうずくまる金石に、三面六臂の異形の姿を現した狩衣がすり寄る。

「お願いします。助けて下さい。もう一度、もう一度だけチャンスをッ……！」

「どうしますシヴァ様？」

羽沼が感情のこもらない声で志波に聞く。

「ん〜。ガネーシャは僕の息子だからね〜。

もし、憑依したまま帰ってきてくれたら、ここの末席にくらい座らせてあげられたんだけど……そいつはもう、いないや」

「そんなッ！！ たす」

醜い獣の顔で大きな口を開け、助命の言葉を言い掛けたまま、獏の動きが止まった。その額から、奇妙な角が……真つ赤な針のようなものが突き出している。

狩衣の舌が長く伸び、後頭部から金石を貫いたのだ。じゅるじゅると音を立てて、脳漿をすすする音が響く。舌をストローのように丸めて、脳をすすっているのだ。

「あーっ！！ 狩衣さん狡いつ！！ 私も脳味噌が好きなのに！！」

春場が、ふくれ顔で狩り衣を睨んだ。

「もう食べちゃった。心臓あげるから、我慢してよ」

「もおっ！！ 仕方ないわねえ」

二人の美女はまるでケーキでも奪い合うような口調でじゃれ合いながら、口を真つ赤に染めて金石の遺体に食らいついていく。下座の男達は、その様子を、よだれを垂らさんばかりの表情で眺めていた。

「おいおい君たち、他の連中にも分けてあげなさいよ？」

笑いながら酒杯を掲げる志波の額にも、金色の第三の目が輝いていた。

「さて、次の手はどう打とうかなあ……」

志波は楽しげにへらへらと笑いながら、隣に一人残った美女の膝を枕にして、寝ころんだ。

§ 3 4 サボテンの花

§ 3 4 サボテンの花

「はあい。はいはい」

朝。

チャイムの音で目覚めたあおいは、寝ぼけ顔で玄関先へ向かった。

「もう……お母さんか、みくりが出てくれりゃいいじゃない……」

寝癖の付いた頭をぽりぽりと掻きながら、ぶつくさ言いつつ階段を下りて来ると……

「す……すんまへん。オレです」

ドア越しに、聞き慣れた座間の声が聞こえる。

「なあに？ こんな朝早く」

「えっと……さすがに、もう早くもないはずなんやけど……」

「げ。何よこれ、もう12時過ぎ!？」

玄関ホールに掛けられた柱時計を見て、あおいは目をむいた。どつりで、妹も母もないはずだ。父、明德はいつの間に帰ってきたのか知らないが、寝室から大きないびきが聞こえる。

結局、くたびれ果てて明け方近くにベッドに入ったあおいは、すっかり陽が昇ったことにも気づかなかつたらしい。

「まあ今日は土曜やし、それはええんですけど……ちょっと社長につき合っていただきたい場所があるんですわ」

「へ？ どこへ？」

「いやまあ、準備が出来るまでそのAコープの駐車場で待ってます。話はお会いしてからしますわ」

三十分後、あおいは身支度を調べて二百mほど離れた、近所のスーパーの駐車場へ向かった。

いつもなら休みであろうと作業服っぽい色褪せたジーンズと男っぽいTシャツが定番なのだが、今日はなんとなく白のブラウスにしてみた。その下には飾り気のないすみれ色のスカートをはいしたが、あおいにはスカート姿自体が珍しい。

出がけに被った麦わら帽子は、野球帽だの菅傘だのを好むあおいが、唯一持っている若い女の子らしい帽子だ。

「う……お……」

小走りで駐車場へやってきたあおいを見るなり、座間は変な声を上げた。

あおいの私服は何度も見たが、こんな女性らしい服装は初めてだ。普段のもつさりした格好との大きすぎるギャップは、元々あおいに好意を抱いている座間にとっては、殺人的な衝撃であった。

「な……なによその顔。どーせ、似合わないって言いたいんでしょ？」

あおいは少し赤くなりながら言う。

「い……いやその。よう……似合つてはります」

座間が思わず素直な気持ちを口にすると、あおいは熟れたトマトのように真っ赤になつて口を尖らせた。

「お……お世辞言つても、何にも出ないわよ。そ……それにしても、あつついわねー。」

確かに暑い。

真夏の駐車場である。昼間の太陽の強烈な照り返しで、周囲の景色がゆらめくほど陽炎が立っていた。しかし、あおいの顔に噴き出てきた汗は、暑さのせいばかりではないようだった。

そんな中で二人は、何となく会話の糸口を無くして、そのまま数十秒見つめ合っていた。

二人のすぐ脇を、三人の幼児を連れた主婦が怪訝そうに眺めながら通り過ぎていく。その目を気にして、次に口を開いたのはあおいであった。

「え……えーと。その、つき合つて欲しいとこつてどこ？」

「あ！　そうやった。そういうたら社長、その格好じゃあちよつと……」

座間は、自分の本来の用事を思い出して残念そうにため息をついた。

「……………そんな怒らんといて下さいよ」

ビッグホーン「ケルピーを運転しながら、座間が言う。もう、十回以上謝っているが、あおいは一言も口をきいてくれないのだ。

助手席で窓の外を眺めながら、むすつとしているあおいの服装は、いつもの作業服に戻っていた。

次郎坊から言われて、太郎坊の庵へヒメコの遺体を埋葬に向かうことになったわけだが、せっかくのおめかしを、たったの数分で着替えることになったあおいはへそを曲げているというわけだ。

二人を乗せたケルピーは、京都に向かう高速道路を疾駆していた。旧型のビッグホーンとは思えない巡航速度を保っているが、警察無線も傍受しているのか、覆面パトカーがいるとすつと速度を落とし、いなくなるとまた速度を上げるといった事を繰り返しながら、軽快に走り続けている。

軽く抜き去られたスポーツタイプの乗用車が、必死で追いつがってくるがケルピーは相手にもしていない様子で、どんどん引き離していく。

「くつくつく。手を焼いておるようじゃな」

カーラジオから、ケルピーのしわがれ声が流れた。

「ケルピーはん………そんな面白がらんといてや」

「べつに面白がってはおらぬよ。少し、アドバイスをしてやろうと思うたまでじゃ。」

女は理屈で分かっておつても、感情で納得せねば言うことを聞か
ん。こういう時は、あれじゃよ」

ケルピーはそう言うと、勝手にウィンカーを出してサービスエリ
アに入ってしまった。こうなると、ハンドルもブレーキも効かない。
というか、そもそも運転の必要すらないわけだが。

「おいおい、何するんや？」

「見よ。ここのサービスエリアには、例の沖縄のアイスクリーム店
が来店しておるのだ」

「例の……ってあんたヨーロッパの妖怪で、オーストラリア経由で
日本に来たんちゃうんか？　なんで、そんな事知ってるんや」

「ま、長く生きておると色々とな」

「……………あたし、シークアーサーとマンゴのダブル」

向こうを向いたまま、あおいがぶすつとした声で告げる。

「わしは、ブルーウェーブとサトウキビな」

「………あんたも食べるんか………っていうか、どうやって……？」

「持っただけに乗り込んでくれれば、味は分かる」

「………なんや、ケルピーに上手くハメられた気いするなあ………」

座間は渋々ながら、一人、車を降りてアイスを買うに行く。

「ケルピー……ありがとう」

「うむ？ なんじゃ、あおい。今日は妙に素直じゃな」

ケルピーのとぼけたような声が、カーラジオから流れる。

「私が意地を張ってたから、仲直りのきっかけを作ってくれたんでしょ？」

「ふふ。まあ、わしもダテに年をとってはおらぬからな。わしと同じ水妖の七海殿をまた快く受け入れてくれた、お主の懐の深さへの礼ととってももらってもいい」

「うん……本当にありがとう」

「こ……こないな道、車で来たの初めてやで!!」

座間は、必死でハンドルを握りながら叫んだ。

「車ではない。わしはケルピーじゃと言っておろうが」

得意そうにしゃべりながら、ビッグホーン「ケルピー」の進んでいる道は、本来は乗用車どころか、モトクロスバイクでも相当のテクニクのある者でなければ通れないような、狭く荒れた道であった。

京都北部山中の太郎坊の庵へ向かう道……座間達が人間の姿で行き来するときには、徒歩で通る道だ。

林道にビッグホーンを止めて、歩こうとした座間に最初に文句を言ったのはケルピーであった。

「また、わしを置いていくのか？ 目的地が奥の方なら、わしに乗っていけば良いではないか」

道中の道の悪さを知っている座間は、いくらケルピーでも無理だと力説した。しかし、今度はそれを聞いていたあおいが難色を示し始めた。

「あたし、そんなものすごい道、歩くのイヤよ」

それで座間は渋々、ビッグホーン＝ケルピーに乗って庵までの山道に行くことに同意したのであった。

勧めなくなったらその場で乗り捨てていく、との約束であったが、大木の根や尖った岩石がむき出しになった道とも言えないような場所を、ケルピーは平気でひよいひよいと乗り越えていく。さすがにスピードは人が歩く程度だが、それもケルピー曰く、中に乗っているあおい達が怪我をしないように気を遣っているせいだとのことだ。

「う……さ……さすがに酔ったわ……座間君、あとどれくらいなの？」

「す……すんまへん。もうすぐ着きますわ」

座間の言葉が終わるか終わらないかのうちに、暗い林が切れて真夏の日射しが車内に差し込んだ。少し開けた場所に出たのだ。目の前に、トウモロコシやナスビといった夏野菜が植わった小さな畑が

見え、その向こうに一見作業小屋のようなものが建っている。
太郎坊の庵であった。

「ここ……ですわ」

座間の表情は暗い。自分の師匠があゝの世に旅立った場所であり、また自らの手で罪無き命を天へ還した場所でもあるのだ。それも、昨日の今日である。できれば、しばらく近寄りたくない場所であるに違いなかった。

（なんで……次郎坊様は、座間君にこんなつらい仕事をさせようとするのかしら？）

庵の周囲には、まだ山のように白骨が散乱している。

「これが……動物ゾンビたちの？」

「そうですわ」

座間は、動物たちの白骨の散らばる中にある、大きな石に向かつてしゃがみ、手を合わせた。

ここに来るまでの道中、座間から、ヒメコの身に起こったこと、そして太郎坊のことを聞いていたあおいは、座間の背中を哀しげな瞳で見つめた。

何も言われなくとも、あおいにもその場所が、太郎坊が虚空へと消えた場所であることが分かった。

「師匠……太郎坊様はいつも人の生死に関わるものではない、と言っておられましたんや。なんでそないな事を言わはるのか、オレは分からへんかった。」

せやけど今なら分かります。ご自分が誰よりも深く、人の生死に関わってしまいはったから、オレに同じ思いはさせたなかったんや……」

「座間君は妖怪に…… 烏天狗になってまだ…… 五年ほど？」

「ええ…… そうなりますわな」

「人の生死に関わりたくないって、思う？」

あおいは向こうを向いたまま答える座間の背中を、じっと見つめたまま聞いた。どんな表情をしているかは分からないが…… もしかすると泣いているのではないかと思った。

「オレ、妖怪になる前は、人の生死なんて考えたこともありまへんでした。妖怪になってみて、初めて命の儚さに気づいたのかも知れまへん……」。

せやけど、自分が生死と関係ない立場やとも思ってたまへん。妖怪やからいうて、べつに不死身っちゅうわけやないですから…… 死んだら、それまでですわ」

「座間君……」

あおいの脳裏に、変化が解けた豆田の小さな遺体が浮かんだ。

「せやけど、限りある命でも、その魂や思い…… 価値観ちゅうんですか？ そいうもんは、ちゃんと受け継がれていくんやないかと、オレは思います。」

豆田さんの命が稲成さんの子供に宿ったように、太郎坊様の思いや技、知識、価値観…… それは全部、オレの中で生きとるんやと思

います」

「そもそも妖怪は人間の思いが形になったものよ。妖怪そのものが生きていくことはつまり、人間の思いを受け継いでいくことなんだと思うわ」

「そうかも知れまへんけど……もうこの世にいない者の思いを受け継ぎながら生き続けるのは、やっぱり寂しいんじゃないか……そう思いますわ。」

「なんや……荒野を一人でさすらうような……せやから、太郎坊様は温もりを求めたんやろうし、自分であの世に旅立つたんですやろな」

「それは……人間だつて同じよ。」

「愛した人と一緒に、死にたいときに死ねるなんてこと、滅多にあるもんじゃないわ。だからといって後を追って死んだからって、相手が喜ぶとは私には思えない」

「……………はい」

「たかだか二十五年しか生きていない私が、太郎坊様の苦しみを分かるとは言わない。」

「でもね。もし生きていくのが荒野をさすらうことだとしても、荒野にだって花は咲くじゃない。悪いことばかりじゃ、ないわよ」

それを聞いた座間は、背を向けたままくすくすと笑った。

「そうですな。それに、荒野にしか咲かへん花もありましたわ。」

「荒野にしか咲かない花？」

「サボテンの花ですね。

トゲだらけで愛想悪いし見た目は地味やけど、どんな風にも日照りにも耐え、自分は荒野に一人立つとるくせに、花を咲かせて荒野の生き物たちに蜜や果実を与えようとする……そういう花ですね」

「あ、そうか………で、なんであんたは笑ってるわけ？」

「サボテンの花は、自分が綺麗やっちゅうことには、気づかへんもんやなあと思うて」

そう言っただけで立ち上がり、振り向いた座間はにっこり微笑んだ。だが、その目に涙が残っていたかどうかは、あおいと身長差と逆光であおいには見えなかった。

「それってどういう意味？」

とまどっているあおいを無視して、座間はすたすと庵の入り口へ向かった。

「中に……ヒメコの遺体があるはずですよって……」

そう言いながら、座間が鹿のゾンビに壊された木戸を、思い切り引き開けた。

強い日射しの下から、暗い庵の中に入ると、しばらくは何も見えない。しかし、烏天狗である座間は、いち早く目を慣らしたようで、すたすと中に入っていた。

あおいも、見えないながらも座間の後についていく。しばらくして目が慣れてくると、囲炉裏の側に布団が敷かれ、そこに誰かが横たわっているのが見えるようになった。

座間は、その横に跪いて合掌している。

一年で一番暑い季節である。

土間の広い庵の中は、意外にひんやりはしているものの、何の処置も無しにほぼ一日近く放置された遺体は、相当腐敗が進んでいるものと、あおいも覚悟していた。

だが、カビのような饅えた臭いはするものの、腐敗臭らしき臭いはしない。

「社長……思ったより変わってなさそうなんで、オレ、抱いて外に出ますわ」

ひどい状態だったら、住む者のいなくなった庵ごと、火葬にするつもりでいたのだ。

座間はヒメコの遺体をすつと抱き上げた。

「どうするの？」

「外に埋葬する……と、死体遺棄になるんですやるか？」

「難しいわね。戸籍上は二年前に亡くなっている人なんですよ？」

「せやけど、人間は人間ですやん」

「綺麗な人ね。それにしても死後硬直もしていないみたいだし、なんか頬に赤みまで……」

そこまで言ったあおいは、ふと気がついて首元に手をやった。

「座間君！！ このひと……脈がある！！」

「え!？」

「いいから!! 布団に戻して!!」

「どういうことなんや? 生きとるんやったら、なんで目が覚めへんのですやる?」

座間はたしかにヒメコの魂を、肉体から切り離したはずだ。

「私にも分かんないわよ。でも、魂が宿っているかどうか、座間君になら見えるんじゃないの?」

「あ、そうやった。見てみますわ」

座間はこの修行の成果ともいえる目を凝らして、ヒメコの姿をもう一度見た。

しかし魂が宿っているようには見えない。

「やっぱり魂は……見えまへん。ほんまに、脈、感じはったんですか?」

「もっとよく見て!! それに抱き上げたんなら、体温くらい感じたでしょ?」

「そつえば……」

わずかに温もりを感じた気もしたのだが、この暑さであるから気温と大差はない。どうも自信を持てない様子だ。

「だから、もう一度!! 必死で見て!!」

言われるままに、座間は必死で目を凝らした。

すると……糸のように細い気の流れが、ヒメコの頭から、虚空へとつながっているのがようやく見えた。

「めちやめちや細い気の流れが見えますわ。ヒメコの頭から出てますんやけど……」

「それきつと、魂の緒だわ。分かった。引き戻すわよ」

「え！？ 引き戻すて……そんなことしても……」

座間は迷った。

魂の緒は、肉体と靈魂を結ぶへその緒のようなものだと思っていた。これが切れない限り、完全には死んでいないのだと。

もし、いわゆる魂の緒がつながっているのなら、ヒメコを生き返らせることは可能なかも知れない。しかし、そもそもヒメコを黄泉に還さなくてはならなかったのは、本人の意志に関わらず、ゾンビ化した屍体を蘇らせてしまうからである。

このまま生き返らせても、また座間が自分の手で黄泉へ送り返すことになるのではないか？ 悲しい思いを繰り返さなくてはならないのではないか？ そう思うと座間は、動けなかった。

「何してるのよ座間君。」

こういう時は、後先考えちゃダメよ。助かる命があるなら助ける。助けた命には、最後まで責任を持つ覚悟をする。それだけよ」

「わ……わかりました」

「じゃあ、周囲の気を集めてヒメコさんの肉体に注ぐわよ」

あおいは懷から呪符を取り出し、サインペンですらすらと文字を書いて、ヒメコの額に貼り付けた。そして、口の中でなにか唱えながら、手印を組んだ。

すると、ヒメコの顔にうつすら差していた赤みが、増したように感じられた。だが、しばらく経つても、それ以上変化はない。

「ダメだわ。自然界の気だけじゃ少なすぎるんだ。なにか、気を高める方法を使わないと……………あ、そうか!!」

何か気づいたあおいは、さらに懷から呪符を何枚か取り出して、すらすらと文字を書き始めた。

「ど……………どうしはるんですか？」

「師匠のやった方法を使うのよ。黙って見てて」

そう言つと、あおいはヒメコの周囲に五枚の呪符を置いていった。ちょうど、ヒメコの額の呪符を中心として、円を描くように等間隔に……………。

そして、印を組んで一つ一つの呪符に気を込めていった。

「コダメ!!」

あおいのかけ声と同時に、ヒメコの左側にある呪符が緑色の光を帯びた。

「カグツチ!!」

今度は右側で赤い光が上がる。

「イシガミ!!」 「ミカツチ!!」 「ミツチ!!」

それぞれ、左の足元、頭部、右の足元……と、黒、金、青の光が呪符に宿り、その光は五芒星を描いて相生の流れを作り、周囲の気を集めて増幅し始めた。

あおいの気のみだけを利用しているせいか、五芒星の流れはトープスの社員達で作り上げたものよりはずいぶん小さい。しかし、今度はさつきとは比べものにならないくらい凄まじい力を発しているのが、外からでも分かる。

その流れは、三天合形神を倒したあの時のように一つの大きな渦となり、庵の天井を突き破らんばかりの竜巻となって室内を荒れ狂い始めた。

「社長!! こらやばい!!」

座間は、五芒星の前で印を組み念じ続けるあおいの体を、後ろから抱きしめるようにしてその場から離れさせた。座間の黒い翼と葉団扇が、あおいを荒れ狂う気の嵐から守っている。

「この気の流れ、普通やない!! 止めた方がええんちゃいますか!?!」

しかし、そこまでくるともう五芒星は形を失い、竜巻状の気の渦が中心にいるヒメコに注がれ始めた。

「こらあ……神霊憑依やないか……」

座間の目に、魂の緒を伝って巨大な神霊がヒメコの肉体に降りてくるのが見えた。

「え？ 神霊！？ そんなの呼んでないわよ！！」

「せやけどこれ……別の世界からでつかい神霊が降りてきよりますわ」

「じゃ……ヒメコさんの魂じゃ……」

あおいが言い掛けたその時、気の渦の力が急に増した。

「周りの気だけじゃなく、別世界からの気の力が加わってるんだわ！！」

「逃げましょう！！」

座間が叫ぶ間もなく、ヒメコから発する気の力で、あおいも座間も吹き飛ばされ、戸口を破って先ほどの石の近くの地面に叩きつけられた。

「うあっ！！」

「座間君！！ 大丈夫！？」

咄嗟にあおいを庇うようにして抱き留めた座間は、あおいの体に押されて地面に激突して呻いた。

「大丈夫……でもないですわ……社長は？」

「ありがと……私も大丈夫よ」

振り向いたあおいと目が合って、座間は顔を赤くした。その様子を見て、あおいも慌てて目を逸らし、立ち上がった。

「どう……なつたのかしら？」

あおいは、暗い庵の中をのぞき込むようにして背伸びしたが、数m離れたここからでは、中は窺い知れない。だが、庵の屋根の一部に丸い穴が開き、先ほどの気の渦が屋根を突き破るほどの威力だったことを物語っていた。

「オレ……ちょい見てきますわ」

「き……気をつけてね」

「分かってます………うわっ!!」

座間は声を上げて後ろに飛んだ。いや、吹き飛ばされたといった方が良いかも知れない。

恐る恐る戸口に立った瞬間、中から何かが飛び出してきた。座間に体当たりしたのだ。そのまま数mも飛ばされて、地面に倒れた座間に、あおいが駆け寄る。

「座間君!!」

「む………ぐぐ」

「座間……君？」

何かが、いや何者かが座間に覆い被さっている。

「クラマさん！！　クラマさん！！」

女の声であつた。座間に覆い被さって何度も口づけしているのは、女性なのだ。

あおいの髪が怒りに逆立つた。

しかしいったいどうなつたのか？　後ろ姿を一見しただけでも、この女性は修験の法衣姿……頭に頭巾とぎん、篠懸すずかけを着込み、括り袴くくりはかまをはき、結袈裟ゆいげんを掛け、尻には鹿皮の引敷ひっしき、白手甲きはん、脚絆きゃはんをつけ、草鞋わらじをはき……山伏の、ほぼ正式な修行の際の正装にしか見えない。

ただ、黒か柿色であることが多い篠懸すずかけと頭巾とぎんが、綺麗なピンク色であり、ただそれだけのことでなんと艶めかしい服装になつてしまっている。

「やっぱり……やっぱりクラマさんが、うちの運命の人やつたんや！！」

つぶやきながら、座間の胸に顔を埋めているのは、山伏姿のヒメコであつた。

その時。

「パーン！！」

乾いた音が響き渡り、座間の顔に赤い手形が浮かび上がった。振り抜いた姿勢のまま、あおいが無表情に座間を睨みつける。顔が真っ青であつた。座間もどんな表情をして良いか分からず、胸にヒメコを抱き留めたまま凝固している。

「いやいや。予想通り、うまくいったようですね。」

横合いから急に聞き慣れた声をかけられて、あおいも座間もびく

つとして振り向いた。ヒメコもさすがに恥ずかしそうに立ち上がる。

「師匠……予想通りってどういうことですか？」

突然現れて、面白そうにこちらを眺めている次郎坊にまで、あおいは怒りの目を向けた。言い回しにもトゲが感じられる。

しかし当の次郎坊は、あおいの怒りなど意に介する様子もないほど上機嫌だ。

「姫子君は大天狗・太郎坊の依り代となる素質のある者だったのです。そうしてなんとか蘇ってくれることを太郎坊自身も望んでいた。しかし、私は神霊ですから人の生死に関わることは出来ません。圓野君が来れば、必ず姫子君の魂を引き戻してくれると思っていますよ。」

「せやけど……オレは確かに、ヒメコの魂を肉体から切り離しましたんやけど……」

「もちろんです。しかし、太郎坊自身が姫子さんを追って黄泉へ行つたでしょう？そこで大天狗としての力を受け渡すことで、姫子さんを現世に返すのが最終目的だったのです」

「じゃあ……姫子さんは自分の力で、あの世から帰って来たんですか？」

「いいえ。関連ある肉体に魂の緒を結びつけたのは姫子さん自身ですがね。」

黄泉で神霊の力を得たとしても、それだけでは蘇ることは出来ません。現世で誰かが姫子さんの肉体に神霊を降臨させるだけの術式を施して、初めて可能だったことです。

姫子さん、この圓野君があなたを現世に引き戻してくれたのですよ」

「あ……ほんまですか？ えろっ、おおきに。あの、うち、大月姫子ていいいます」

「圓野…… あおいです。座間君の…… 上司です」

「ほんまですか？ それはクラマさんがいつもお世話になって…… てこれじゃまるでうち、嫁はんみたいやね」

二人は、今更のようにお互いに挨拶をしあつた。怒りに青ざめていたあおいの顔にも、赤みが戻ってきている。

「せ…… せやけど次郎坊様も師匠も、人が悪すぎますわ。ヒメコを蘇らせる手段があるんやったら、なんでオレに一言、言うといてくれへんのですか？」

「確率は針の穴を通すほど低かったからですよ。」

まず、座間君がきれいに姫子さんの魂を切り離して黄泉に送らねばならず、太郎坊が黄泉へ行つて姫子君に会えなくてはならず、しかも、そこで大天狗の気を受け渡すことが可能かどうかも分からない。さらに、私が何も教えずとも圓野君が神霊降臨させられなくてはいいけませんでした」

「せやけど、オレに秘密にする理由はないんちやいますか？」

「もし、先に座間君に蘇りの可能性を教えていたら、魂を切り離すのに手加減していたかも知れません。そうすると、あの世に捨ててくるはずの反魂香が現世に残ってしまいますからね」

「そういえば！！ あの臭い、しまへんな」

そう言つて、ヒメコの頭の辺りをくんくんと嗅ぐ座間を、あおいが鬼のような表情で睨んだ。ヒメコはヒメコで、また座間に抱きつきそうな雰囲気である。

「反魂香は魂から発する臭いなのです。それを断ち切るには、いったん黄泉へ行くしかないですよ。

さて姫子さん、いや太郎坊殿、あなたはこれからどうしますか？ 本来なら、この庵で大天狗として暮らすことになるのですが……」

「次郎坊様、そないなこと急に言われても、ヒメコには分からのちやいますか？」

「うんクラマさん。うち、あの世で全部お爺ちゃんに聞いたんや。あ、聞いたつていうのとは、ちよい違うんやけど……情報が全部、心に入ってくる感じかな。

ほやから、全部分かつてるんや。次郎坊様のことも、うちが太郎坊になつたいうことも。

それに、知らへんかった私自身の生い立ちのことや、なんで死んでもうたかとか、今はもう死んでから二年後やっちゅうことも、もう人間としての戸籍があらへんつてことも……」

ヒメコは少し寂しそうに俯いた。両親も祖父もいなくなったヒメコには、同時に身よりもないことになるのだ。

「……F市に来なさいよ」

あおいが、ぼつりと言つた。

「太郎坊様の後継だからって言っても、見た感じまだ、天狗としての力も生活も出来なさそうだし、しばらく人間として生活する気なら、戸籍と住む場所くらい、用意できると思う」

天部神騒動で入堂部長も忙しいかも知れないが、今回の事件と無関係というわけでもないのだから、そのくらいのことはやってくれるであろう。いぶきの能力と合わせれば、就職も難しくはないはずだ。

「ほんまに？ ええんですか？」

「ええ……知り合いだってもう座間君しかいないんでしょ？」

座間君の住む町なら、安心できるんじゃないかしら。じゃあ、もう行きましょうか」

「え？ ちょい待ってや社長。ここの後始末とか、いろいろまだ……」

「それは、座間君がひとりでやんなさい。あたし達はもう帰る」

冷たい口調で言い捨てると、あおいはヒメコの手を引いてさっさとビッグホーンに押し込み、発進してしまった。

「やれやれ……何百年生きてきても、女の気持ちというのは難しいですね」

座間と共に置いてきぼりを喰らった次郎坊が、腕を組んで苦笑いしている。

すっかり傾いた夏の日射しが、山道を去っていくビッグホーンの

屋根に反射して眩しく見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5477w/>

妖怪ビオトープ管理士 圓野あおい2「人魚ビオトープ」

2011年12月10日16時48分発行